
桜文論叢

第100巻 2019年9月

日本大学法学部
創設130周年記念号

日本大学法学部

Nihon University
College of Law

日本大学法学部
創設130周年記念号

刊 行 の 辞

明治22（1889）年10月4日、学祖山田顕義伯爵によって日本大学の原点である日本法律学校が創立されました。それ以来130年の歳月を経て、令和元年（2019）10月、日本大学法学部が創設130周年という記念すべき年を迎えられましたことは、法学部教職員一同にとってこのうえない喜びであります。

今日、少子高齢化が進む中、18歳人口の大幅な減少が予想され、また文部科学省による入学定員超過率及び定員充足率の引き下げとその管理の厳格化等により、本学のみならず私立大学を取り巻く環境は非常に厳しいものとなっております。そのような状況の下、我々法学部の教職員一同は、法学部の長い歴史と伝統を誇りに、一丸となって教育、研究及び学部運営に取り組んでいかなければなりません。長い歴史と伝統に安住することなく、法学部をさらに発展させるために「社会において魅力ある学部」「社会の注目を集める学部」を目指して精一杯努力していかなければなりません。

130周年記念事業としては、令和元年10月4日に大学本部が主催する日本大学創立130周年記念式典・祝賀会が開催されます。また、法学部では創設130周年を記念して政経研究所主催のシンポジウム、法学部校友会の後援による日本大学管弦楽団の特別演奏会、法学部所蔵のコレクションの展示会等が開催されます。

大学にとって学生の教育は最も重要な職務であります。教育と研究は一体のものであり、研究活動も教員にとって重要な職務の1つです。そこで、この記念すべき年に、法学部では創設130周年記念事業の一環として、教育と並んで大学の大きな使命である研究に関して、法学部の機関誌である『日本法学』『政経研究』そして『桜文論叢』を法学部創設130周年記念号として刊行することにしました。法学部創設120周年の際には、記念事業として特別な『日本大学法学部創設120周年記念論文集』全3巻を刊行しましたが、今回は『記念論文集』という特別なものではなく、学部に所属する専任教員の研究水準を端的

に表している法学部機関誌を記念号という形式で刊行することにより、私たちの日常的な研究活動の一端を公表することにしました。日本大学法学部は、他の同僚大学の法学部とは異なり、法律学科に加えて政治経済学科、新聞学科、経営法学科、公共政策学科の5学科を擁しており、この5学科で展開されている専門科目を担当する専任教員の研究領域は多種多様です。それに加えて総合科目・外国語科目を担当する充実したスタッフにも恵まれています。この法学部創設130周年記念号には、様々な分野の研究者を擁している法学部の誇るべき特質が反映されていると言えます。

この130周年記念号の企画から刊行に至るまで、必ずしも十分な時間が確保されていた訳ではありません。そのような中で、この記念号に多数の多角的な研究論文をお寄せいただきました。玉稿をお寄せいただいた先生方に対し心よりお礼を申し上げます。また、窮屈な日程の中で、予定された期日通りに刊行して下さった機関誌編集委員会の委員の皆様のご努力に心より感謝の意を表します。さらに、決して潤沢とは言えない財政状態の中で、機関誌編集委員会を支えてくれた事務局の皆さんにも厚くお礼を申し上げます。

この記念号は、法学部創設130周年を慶賀するのに相応しい論文集となりました。この130周年記念号に寄せられた論稿が、それぞれの学界に裨益することを祈念して、刊行の辞といたします。

日本大学法学部長 小 田 司

目次

目 次

刊行の辞

時間的展望と精神的健康

—— 過去, 現在, 未来から立ち現れる「現在の拡がり」 —— …… 和田 万紀 …… 1

ホイトマン “Song of Myself” 32番の

間テクスト的考察 …… 諸坂 成利 …… 23

青年期における競争心と完全主義に関する研究 …… 種ヶ嶋尚志

北村 勝朗 …… 55

イルゼ・アイヒンガー 『鏡物語』・『ベビー・
チャンドラー』における「生まれ出る」こと

—— ハンナ・アーレント『アウグスティヌスの愛の概念』における
「創造者」Creatorと「被造者」creaturaから見た解釈の試み —— …… 真道 杉 …… 73

ドイツのラジオ放送における音楽番組への

第二次世界大戦勃発の影響 …… 佐藤 英 …… 95

フォイエルバッハのルター論

—— 初期から中期へ, その思想的転回の意味 —— …… 川本 隆 …… 123

言語学的方法論

—— 中国语言学基础理论音等论在今后语言教学研究中的作用 —— …… 萬 清華 …… 149

短時間高強度運動が腹部内臓組織に与える影響

—— 12分間全力走前後の血中逸脱酵素およびクレアチニンの変化の検討 —— …… 深田喜八郎 …… 191

鴨長明『無名抄』第二十七話の再検討

—— 勝劣の真実と長明の執筆態度 —— …… 茅原 雅之 …… 226

時間的展望と精神的健康

—— 過去，現在，未来から立ち現れる「現在の拡がり」 ——

和田 万 紀

心理学における時間研究は多岐にわたる。例えば発達心理学や認知心理学をはじめ、体内時計など生理心理学においても重要なテーマとなっている。しかし、「時間」という概念、用語、定義などに複数の立場があり、「時間を対象とする研究においては、必ずしも同一の対象として時間研究がなされているとはいえない現状がある」とも指摘されている（調枝，1996）。

私たちは物理的時間以外に、個人としての過去，現在，未来を意識し、それらの一連の時間のなかに自己の存在を意識することができる。その一方で、過去，現在，未来として時間の区切りをつけることによってこそ、その中に時間の流れを感じるという「時間の流れない時間的展望というパラドックス（白井，2007, p.210）」も存在する。

本研究では、主観的な過去，現在，未来という時間の流れを、現在との関連性で位置づけてとらえて、時間的展望（Time Perspective）（Frank, 1939; Lewin, 1942 / 末永俊郎訳1954）とする。時間的展望は、どのような構造や内容を持つのかという認知的側面だけではなく、時間的展望によって自己の有り様や感情、動機づけなどが影響を受けるという側面も持つ。これは、時間的展望の機能的側面ともいえよう。

本研究は、時間的展望の認知的側面と機能的側面を考慮して、それらの機能が精神的健康をどのように維持するのかについて、2000年以降最近の日本の研

究を検討し、今後の展望を行う¹。

1 時間的展望とは

時間的展望の定義は何か。

Frank (1939) は、時間的展望を、心理学的未来や過去を現在に関連づける事態であると定義づけた。そして個人の中の時間として、過去、現在、未来を区切り、それらを個別に扱うのではなく、一連の連鎖、連続性を設定して、相互関連性を検討することの重要性を述べている。また Lewin (1942 / 末永俊郎訳, 1954) は、時間的展望は「特定の時点における個人の心理学的過去、および未来についての見解の総体」と定義している (都筑・白井, 2007)。彼は、個人の生活空間 (Life Space) とは、単にその人が現在と思うものだけではなく、過去や未来まで時間的に拡張される部分までも含む、とする。個人の行動や感情、モラル (志気) は、その人の過去や現在、未来の総体としての時間的展望に依存している。例えば長期に失業状態にあると、絶望的な未来展望が現在のモラルを低下させることがあるように、個人の過去や未来は現在に影響を与え、その現在が過去を位置づけ、未来へつないでいる、とする。従って、過去、現在、未来に対するどの様な時間的展望を持つのかは、現在の個人の行動、態度、感情に影響して、それによって過去を定置して未来へと影響する、という (白井, 2018)。

この定義によると、時間的展望は、その内容や構造といった認知的側面だけではなく、感情や行動に影響するという点で、機能も持つといえるのである。

この点について、奥田 (2001) は、白井 (1996) の時間的展望の定義は、①狭義の時間的展望 (Time Perspective) (拡がり, 密度, 構造化, 現実性, 優勢性), ②時間的態度 (Time Attitude), ③時間的指向性 (Time Orientation), ④広義の時間的知覚 (Time Perception), となり、認知的側面が重視されている。

1 2019年4月20日現在, CiNii Articles において「時間的展望」をキーワードとして検索を行った結果, 490件の日本の研究についての文献が検索された。

また、都筑（1999）の定義は、①認知的側面（広がり 密度、一貫性、方向、内容）、②感情的、態度的側面（時間的関連性、方向性、個人的時間的展望、時間的態度、感情的意味）、となり、感情や動機づけの機能的側面が導入された定義である。

一方、勝俣（1995）は時間的展望を「時間の流れ、接続の中におけるある時点での、個人ないし集団・社会の過去展望、現在展望及び未来展望の有機的関連の総体である」と定義する（p.313）。また未来展望だけではなく、過去展望、現在展望をそれぞれ重視している。

過去展望は、「すでに経験した過去の出来事や状態に対する現在からみた個人ないし集団・社会の認知様式であり、時間的空間における過去の定位／指向性（肯定的、否定的出来事や存在に対する注意の傾向）、広がり、内容の明細度、重要度（過去、現在、未来の時間的次元における過去の重要さの程度）及び感情調（過去を想起することに伴う快—不快などの感情の様態）の統合であり、フィードバック機構を含む」と定義した。

過去展望は、ポジティブフィードバック「目標値との誤差の肯定」と、ネガティブフィードバック「目標値との誤差の修正」が必要であり、仮に否定的な過去であっても、肯定的にフィードバックすることが重要である、という。

一方、現在は、過去のフィードバックを受けるとともに、未来へのフィードフォワードも行い、時間的展望の認知機能が統合される。

未来へのフィードフォワードは、行動に先行する事前の情報処理過程であり、目標設定機能を含むものである、という。そこには、予期や期待、計画性などが関連して、未来への指向性（未来への出来事や存在についての注意の傾向）、重要度（過去、現在、未来の時間的次元での未来の重要度の認知）、感情調（未来を想起することに伴う感情）の統合、となる。

そこで奥田（2001, p.341-342）は、時間的展望研究の課題として、①過去、現在、未来において、未来展望に重点がおかれ、過去展望が軽視されているこ

と²、②過去は経験であるが、未来は未経験であり予期的であることから、これを同次元に位置づけることへの疑問、③過去、現在、未来の関連性と統合性の検討の必要性、④他者の視点を取り入れた時間的展望の検討、⑤個人の発達過程における時間的展望の構築過程と組織化の検討、などを指摘している。

2 時間的展望の測定

時間的展望はどの様に測定されるのか。

質問紙による測定法として、白井(1994)は、希望、目標志向性、充実感、過去受容の4次元から構成される時間的展望体験尺度を開発した。また Zimbardo & Boyd(1999)は、時間的展望研究における概念の混乱を指摘して、独自の時間的展望尺度を開発している(下島・佐藤・越智, 2012)。

勝俣・上田(1973)は、臨床心理学的アセスメントツールとして、時間的展望テスト(Time Perspective Test:TPT)を開発した。それは、反応段階(関心事の列挙)、質問段階(反応の説明)、時間的定位分類段階(反応の過去、現在、未来への分類と時間的広がり、現在からの時間的長さ判断)、評定段階(感情、重要度、未来の達成可能性)の4段階から構成されている。このTPTを用いることで、自殺未遂を繰り返す大学生の時間的展望研究(勝俣, 1990)や、うつ病患者の時間的展望研究(渡辺・佐久間, 2014)などが行われている。

他にも、自分に生じると思われる出来事の詳細な自由記述や、将来の目標や希望の内容分析、出来事への主観的態度、書き手と受け手の1人2役として手紙のやり取りをする、など多くの技法が提案されている(都筑, 1999, p.10-15)。

Cottle(1967, 1976)は、空間的時間概念の測定法としてのサークルテスト、

2 石川(2014)は過去展望を重視して、過去のとらえ方を、過去軽視、葛藤、統合、とらわれ、の4群にわけて、大学生を対象とした目標意識の差を検討した。その結果、過去を統合的にとらえる群が将来へ希望が高く、目標を持っていることを示した。

石川茜恵(2014)青年期における過去のとらえ方タイプから見た目標意識の特徴:時間的展望における過去・現在・未来の関連 発達心理学研究 25, 2, 142-150.

直線的時間概念であるラインテスト、体験目録法などを提唱している。その中でサークルテストは、時間的展望を、過去、現在、未来を示す3つの円を自由に描画するものである。そこに描画された3つの円は、過去、現在、未来を個別にとらえるだけでなく、一連の時間として包括的にとらえられたものであり、時間的展望の知覚的空間表象を意味する、という。この方法は、投影的方法といえる。

サークルテストに描画された過去、現在、未来を示す3つの円は、その描画の特徴から、円の大きさによる時間的優位性 (Temporal Dominance)、円の重なりによる時間的関連性 (Temporal Relatedness)、円の大きさの順番による時間的发展性 (Temporal Development) を指標にして、時間的展望の特徴を点数化する。

まず時間的優位性は、描画された3つの円の中で最も大きい円が示す時制によって、過去優位性 (Past Dominance)、現在優位性 (Present Dominance)、未来優位性 (Future Dominance) に分けられる。

時間的関連性は、過去、現在、未来を表す円の位置関係について、3つの円のうち2つの円の位置関係によって得点化され、時間の統合性を示す。その採点は、相互に完全に離れている場合は0点、1か所で接する場合は2点、部分的に重なる場合は4点、一方が他方の内部に含まれる場合は6点とする。そしてこれらの関係を次の3つに分類する。

それは、① Temporal Atomicity (原子型、3円がいずれも全く接触せず、または内包されていない) (0点)、② Temporal Continuity (交わり、円の一部が接触するか、重なり交わっている) (2点から12点)、③ Temporal Integration (結合) (6点から18点) となる。

時間的发展性は、過去、現在、未来を表す3円の大きさを比較することによって決定する。過去が最も小さく、現在、未来へと大きくなる場合を未来志向性、過去が最も大きく、現在、未来へと小さくなる場合を過去志向性とする。それ以外はその他と分類する。

サークルテストの結果は、上記の3次元を得点化して時間的展望とする。し

図1 サークルテストの分類例：未来優位性・未来志向

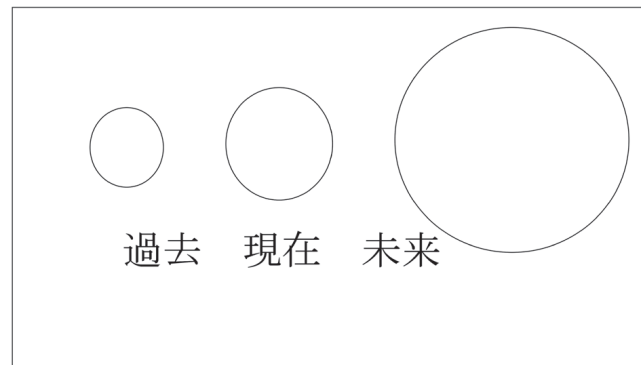
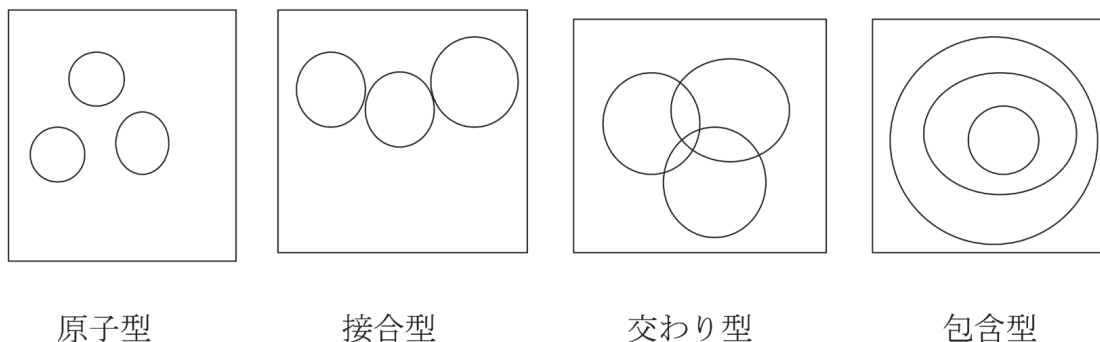


図2 サークルテストの分類例：時間的関連性



しかしサークルテストには、利点と問題点がある。

サークルテストは、言語を使用せず、過去、現在、未来を表す3つの円を描画するだけであり、比較的簡単に実施可能である。そして時間的展望の持つ認知的側面と感情や態度などの多くの情報を得ることができる。また、時間的展望の3つの時制の構造と関連性を、知覚的に表現できることは利点といえよう。

しかし、すでに Cottle (1976) も指摘するように、描画された円の空間的表現から何が明らかにされるのか、またその描画にどのような意味が付されているか、円の重なりや繋がりの有無による得点化によって、時間的展望の質的側面のどのような情報が得られるのか、などの多くの問題点がある (五十嵐, 1990)。

それらを踏まえたうえで、サークルテストは、知覚的に自分の現状を過去と未来との関係として位置づけることや、過去を振り返り未来の自分を想定することができる点などから、職業選択、進路指導における面接導入（白井, 1999, 2001）や、うつ病患者のサークルテストによる時間的展望の測定による支援（山崎, 2009）、自殺予防教育への応用（藤野・和田, 2018）など、多くの応用可能性が示されている。

3 時間的展望と自己

エリクソン（Erikson, 1956; Erikson, 1959/小此木啓吾訳, 1973）は、青年期の重要な発達課題として、時間的展望と自我同一性形成を位置づけている。自我同一性の形成は、斉一性、連続性の達成程度とその過程に焦点があてられ、自己の時間的、空間的なまとまりが重要とされる。そして青年期を対象として、自我同一性の確立と時間的展望との関係についての研究が多くなされてきた³（都筑・白井, 2007）。

都筑（1996）は、男子大学生を対象としてサークルテストを実施した結果、自我同一性が確立されると、過去、現在、未来の円の重なりが大きく、時間的関連性、統合性が大であったという。そして、渡辺・赤嶺（1996）は、自我同一性達成地位の中で積極的モラトリアム地位にあると時間的統合が未熟であり、過去優位的傾向が認められること、また自我同一性達成地位が拡散であると、時間的統合が低いことを示している。

石井（2018）は、自我同一性の確立過程と時間的展望の関連を検討した。そ

3 溝上・中間・畑野（2016）は、従来の自我同一性形成の過程では、抽象的、一般的な自己の時間的空間的まとまり（秩序）が問題とされている、という。しかし、自己形成を「自己を主体的に個性的に形作る行為」と定義して（p.148）、個別的水準から自己形成をとらえると、抽象的、一般的な時間的展望に影響しない自己形成活動も存在する、という立場をとっている。

溝上慎一・中間玲子・畑野快（2016）青年期における自己形成活動が時間的展望を介してアイデンティティ形成へ及ぼす影響 発達心理学研究 27, 2, 148-157.

して未来の自己像の有り方が自我同一性の確立に重要であり、否定的な未来展望は自我同一性形成に寄与しないこと、肯定的な現在展望は自己効力感を高めて充実感が高くなること、過去や未来と関連する現在に肯定的展望を持ち、過去や未来とは独立させて現在を否定的にとらえないことが、自我同一性の確立に重要である (p.126)、と述べている。

和田 (2013) は、大学3年生、4年生を対象として、自我同一性達成地位と自分の過去、現在、未来のイメージ評定との関連性を検討した。その結果、自我同一性達成地位による過去、現在、未来のそれぞれの時間のイメージ評定に差があると報告している。また、現在と過去のイメージには男女差が認められ、女性が男性よりも、現在のイメージをより明るく、重要で、大きいと評定して、さらに未来のイメージがより暖かく、明るいと評定している。

さらに和田 (2013) は、自我同一性達成地位が確立されると、現在や未来に肯定的なイメージを持つこと、女性が男性よりも将来の目標達成のために現在の達成行動、具体的には大学生として生活や学業を実行している可能性を指摘している。これは、時間的展望が現在の動機づけと行動に影響することを示している。特に自我同一性が確立して、確たる未来を描くことができることが、現在の動機づけや行動変化を促す。それは時間的展望におけるポジティブフィードフォワードの機能として、現在の動機と行動を変化させることが確認された。

時間的展望の機能に関して、時間の流れの中に位置づけられる自己の諸側面が、現在の動機づけや行動を制御する機能も検討されている。

例えば、Cross & Markus (1991) は、将来の可能性としての可能自己 (Possible selves) において、かくありたい自己、なりたくない自己、そのようになるだろう自己、という3側面が、現在の動機づけと行動に与える影響を検討している。また杉山 (1995) は、現在自己、理想自己、予想自己として、現在と未来の時間的態度の規定要因としての自己概念をとらえようとした。そして、理想自己と予想自己との不一致が、現在の時間的態度と関連しており、理想自己と予想自己、及び理想自己と現在自己との不一致が、未来の時間的態度と関連することを示している (p.287)。

4 未来展望と不適應

エリクソン（1959／小此木啓吾訳，1973）によると，自我同一性の形成は，過去から未来へと向かう自己の時間的まとまりと，その構造に焦点を当てている。そして日本の青年は，サークルテストによる時間的優位性において未来の割合が最も高く（例，日瀧，2008：都築，1999：白井，1989），過去を大きく描く場合は少ないこと，また時間的関連性においては，統合性が高いことが示されている（白井，1989，1996）。

一方奥田（2013）は，時間的展望体験尺度（白井，1994）やサークルテストを用いたバブル崩壊後の1990年代以降2010年代の日本の青年を対象とした時間的展望の時代的変遷を検討した。その結果，1984年には未来優位性が6割ほどであったが，2003年には4割程度，そして2012年には1.5割ほどに減少していることを指摘している。その一方で現在優位性は，2割程度から4割程度へと変化していた。

これについて，「従前の日本社会と比較して，この間の日本社会の不安定さ，不確かさなどに影響を受けた結果である」としている。つまり「それまでの社会は青年にとって，過去や現在が満足でなかったとしても未来に希望を持つことが可能である社会であったことに対して，それ以降の社会においては，青年が目標志向性や希望などを持つことが困難になったことを示すのではないか（p.7）」と指摘するのである。時間的展望は，個人だけではなく，その時代背景や社会，文化によって大きく影響されることが明らかにされた⁴。

それでは未来展望は，精神的健康にどの様に関連するのか。

五十嵐（1990）は，未来志向性の強さが，必ずしも現在の精神的健康に肯定

4 都築（1982）においてすでに指摘されているように，未来志向的文化の中では未来が現在に影響を与える，という。しかし未来に肯定的展望を持ってない場合や，未来が不確定であいまいな場合には，現在に与える影響が肯定的になるとは限らないことを意味することになるだろう。

都築学（1982）時間的展望に関する文献的展望 教育心理学研究，30，73-86.

的な関係を示すとは限らず、逆に、未来を表す円が大きく描かれることが、不安の大きさを投影しているのではないかという。また白井(1989)は、過去、現在、未来の3つ時間を表す円を分離して描くとき、それは時間を包括できないという時間知覚ではなく、むしろ分離して時間をとらえる自我の能動的営みを反映しているのではないか、という。つまり、サークルテストに現れる3つの円の描画に表現される時間的展望について、自我機能の視点から質的分析の必要性を指摘しているのである。

さて日瀧・斎藤(2007)、日瀧(2008)は、時間的展望と精神的健康度との関連性を検討した。その結果、高校生と大学生は、肯定的な未来展望を持つと精神的健康が高いことを確認した。しかし、高校生の時間的展望について、未来に対してのみ肯定的な態度を示す者は精神的健康度が低かったが、大学生は低くはなかった。また高校生の場合、サークルテストで未来優位性を示しても、それが未来への肯定的認識を示すことではなく、逆に未来への不安感や不眠、社会的活動障害を示した。大学生は、未来優位性が高いと精神的健康度が高く、高校生とは結果が一致しなかった。

この様な未来優位性と精神的健康度の関係について、高校生と大学生では異なる結果が得られたことについて、「大学生は時間の統合の可否が精神的健康と関連しており、高校生から大学生への発達的特徴を示している」と指摘した(p.15-16)。

さらに、時間的関連性が強く、時間的統合性が高いことが、精神的健康に必ずしも肯定的であるとは限らないことが示唆されている(佐藤・岡本・杉村, 2012)。

渡部・佐久間(2014)は、中年期のうつ病患者が退院するまで、時間的展望の経緯をTPTによって検討した。その結果うつ病患者は、退院する際には診断基準による抑うつ気分、無価値観などは改善が認められた。しかし健常者と比較すると、時間的展望において、ネガティブな過去をもつ現在指向であり、未来展望の欠如があり、目標や計画がみられなかった。そこでうつ病患者の支援においては、過去には肯定的フィードバックシステム、未来には肯定的

フィードフォワードシステムを構築できるような支援の必要性を指摘した。時間的展望という指標は、うつ病患者の理解技法として有効であり、時間的展望の機能を利用して、精神的健康を回復する際の支援指標となることが示された。

それでは、精神的健康は、時間的展望と関連するどのような要因が影響するのだろうか。

齋藤・井上（2015）は、自分に生じる出来事の原因が自分の内部または外部の要因のどちらにあるのかという「統制の所在」と、時間的展望と抑うつの関連性を検討した。その結果、統制の所在と抑うつは、内的統制が高いと抑うつは低下するが、外的統制が高いと抑うつが高まり、時間的展望に影響して、過去と未来への影響が大きいことを明らかにした。抑うつ傾向が高い場合、内的統制か外的統制かを明らかにして、内的統制を高めるような介入が成功すると抑うつ傾向が改善されることが示唆された。

また宮本（2013）は、母親の自己決定欲求と現実の自己決定感とのずれが、現在の充実感に影響して、育児不安に影響したことを示した。特に専業主婦型は、自己決定感は育児の自信を高め、過去の受容、将来の目標と希望を高める重要な感覚であった。しかし再就職希望型は、自己決定感が高いと閉塞感、疲労感を高めて、将来への目標や希望が、現在の働きたいという欲求と育児との葛藤を高めた。一方、過去の受容が育児不安を低減した。就業継続型は、自己決定感が高くなると、現在の充実感、将来の目標と希望を高め、育児不安を低減したが、育児からの離反願望を高めることも示された。育児は自分と子供との時間的展望の融合を余儀なくされる。その際に、自己決定感という要因を介在させることで、時間的展望を通じた充実感を高めることによって、育児不安を含む精神的健康の低下を防ぐ可能性を示唆している。

時間的展望と精神的健康に影響する諸要因を特定して、それらの要因間の関係を明らかにすることで、臨床場面等への適用が十分に期待できる。

5 未来の有限性

エリクソン（1959／小此木啓吾訳，1973）は，中年期の中心課題として，自我の統合対絶望の危機解決をあげている。そこで岡本（1990）は，中年期での死の受容について，死の受容と自我同一性の再構築という観点から，精神的健康との関連性を検討した。

中年期は，自分の身体的衰えや社会的環境などの変化を迎え，それまでの自己の在り方の一貫性が崩れるて，中年期の危機を体験する。それは自分の死と未来の有限性を意識させる。

岡本（1990）は，老年期以前の心理社会的課題の達成と，それを支える自我の強さが，この危機を乗り越えて新たな自我同一性の再体制化を可能にする要因ととらえた。この中年期の危機を解決して，自我同一性の再体制化を確立することが，精神的充足感の獲得と死の受容の達成となる，という。

日潟・岡本（2008）は，中年期の時間的展望と精神的健康について，40歳代から60歳代の年齢別による検討を行った。その結果，40歳代は過去の受容が精神的健康に影響し，精神的健康度の高いものは，過去のネガティブな体験をとらえなおし，過去を土台として受容していることが示唆された。しかし同時に，過去に固執することは精神的健康を害することも示している。

日潟（2011）は，50歳代で自分の死の受け入れが，過去へのとらわれや後悔からの解放に重要となり，時間的展望形成に影響すること，60歳代では死に対する否定的態度が未来の否定的態度と関連すること，を示した。また日潟（2012）は，サークルテストによる中年期の時間的展望の特徴として，現在の円を最も大きく描き，その場合精神的健康度が高いこと，また過去と現在，現在と未来の円を重ねて描くことなどを明らかにした。

中年期以降は過去の時間が長くなるが，物理的時間感覚だけではなく，現在や未来に空間的な広がりを感じることができること，時間的関連性と連続性が意識でき，そこに自己の再形成が生じること，などが精神的健康に影響するという。

中年期の時間的展望は，未来の目標の変化やその質的变化を生じさせるもの

として、過去から未来への時間の中での現在の自己再形成の視点が重要であると指摘している（日潟, 2012, p.9）。

石井（2013）は、青年期に、人生の有限性の認識として自分の死について考えることが、現在を充実させて、過去の受容を促し、未来への目標や希望をもつことを示唆している。そして、自分の死を終点とした時間的展望についての青年期を対象とした研究が少なく、未来に重点がおかれることは、未来への偏重である、という（石井, 2016, p.86）。

一方、過去の想起が未来展望へと関連する（日潟・斎藤, 2007）ことや、過去の回想がアイデンティティ形成と関連しながら、将来の進路選択に影響する（白井, 2001）ように、過去展望や未来の有限性を含めた時間的展望について、中年期だけではなく青年期にも必要である、と述べている（石井, 2016, p.87）。

未来の有限性は自分の死を意識させ、死の受容という課題をもたらす。それは「現在」の価値観や判断に影響する⁵と同時に、精神的健康にも影響する。未来の有限性という点から、時間的展望と精神的健康の検討が必要である。

6 「現在の拡がり」とは

白井（2001）は、過去の回想が未来の構想や現在の行動に影響するという視点から、青年期の進路選択において回想の効果を示している。回想は、過去の自己確認と、現在の自己を肯定的に意味づける働きから、自己肯定感を高める。そして過去から未来を構想し、その未来が現在を方向づける過程を、時間的展望の再編成過程とした。その自己探求活動と自己変容について、その事実と理由を当人に確認する、という変容確認法を提唱した。

5 死の不可避性の認識から生じる存在論的恐怖に関する存在脅威管理理論（Terror Management Theory）によると、死すべき運命の顕現化が生じると心的防衛として、自尊感情と文化的世界観に対する信頼を強化して不安や脅威に対する不安関連行動を低下させる、と予測する（脇本, 2012）。

脇本竜太郎（2012）. 存在脅威管理理論の基礎 存在脅威管理理論への誘い—一人は死の運命にいかに向かうのか— 第1章, 1-11. サイエンス社

野村（2002）は、老年期において生の有限性を意識するとき、自我同一性再構成において「自分を語ること」が有効であるという。そこで、65歳以上の男女に対して、抽象的な性格特性語を手掛かり語として、その語を過去に経験した具体的な出来事で例証するという想起課題を施行した。そして発話を、特定性、情報性、関連性から評定して、自我同一性達成度との関連性を検討した。その結果、高齢者の「自己語り」の構造的特質と自我同一性の達成度との関連性を見出している。

奥田（2004）は、「自分を語ること」が時間的展望と精神的健康に与える効果において、記憶と予期の概念の重要性を指摘している。記憶はそれによって過去を思い出し、また予期は未来の出来事を想像することになる。しかし、過去の出来事を思い出すだけでなく、それらを選択して配列し直すことで、「過去として構造化すること」が重要であるという。また未来も、目標などを位置づけて構造化することで、はじめて未来となる。つまり過去も未来も、「能動的に作り出して、意味を与えること」が重要であり、それは「物語る」という行為として可能になる、という。

物語とは、「今」という時間に対する気づきによって、記憶から得られた出来事を時系列的に配列して、関連するものを選択するなどの構造化をすることである。「今」を気づくことこそ、過去が過去化され、未来は未来化され、それが「時間化」されて時間的展望へとつながる、という。

下島（2008）は、自伝的記憶を、人が人生の中で経験した様々な出来事に関する記憶の総体、と定義する。自伝的記憶は、過去を対象とした個々のエピソードを重視することで、過去と現在の自己の一貫性を保持する機能を持つ。しかし、過去と現在を分離する必要がある、これを「過去の過去化」とよぶ。逆に、過去を過去化することで、一貫した自己の保持となり、過去、現在、未来が立ち現れる。つまり、現在の自己が「語り」によって過去を意味づけると同時に、現在の自己によって意味づけられた過去が、逆に現在の自己を意味づける。そしてその現在の自己によって意味づけられた自伝的エピソードの想起が、過去の過去化に成功することによって、過去、現在、未来として現れる。

さらに、未来の自己エピソードを具体的に想像することで、未来を未来化することも可能になる。つまり過去の過去化と未来の未来化によって、「現在の拡がり」が存在することになる、という。

しかし山口（1996）が指摘するように、老年期においては、「現在」の不適応や低い満足度、低い精神的健康度が回想傾向を高くして、回想が問題解決や防衛として機能することを指摘する。例えば喪失感が回想を活性化させる一方で、喪失体験に対処できずに喪失体験の回想にとらわれると、逆に主観的幸福感が低くなると指摘している（山口、1996、p.171）。

回想は、佐藤（2008）によると、個別の出来事だけではなく、その背景や歴史的事実、出来事から引き出される人生観や、過去と現在の比較による自己観なども語られる。時間を包括的に、また流れとしてとらえるだけではなく、過去を過去化でき、未来を未来化できること、そしてそれによって「現在の拡がり」が立ち現れるのであれば、それは「今」の気づきとなり、「現在をよく生きる」ことにつながるのではないか。

7 時間的展望と精神的健康：今後の課題

本論は、時間的展望と精神的健康に関して、主に2000年以降の日本の研究をもとに検討を行った。その結果、今後の課題として次の点が検討される必要があるだろう。

(1) 現在の拡がりと揺らぎの中にある自己

勝俣（1990）は、自殺を繰り返す大学生に時間的展望テストを実施した。そして、「過去、現在、未来の時間的次元を一応のくぎりを持ちながら、連続性をもったものとして建設的に認知するものではない、くぎりのない現在、に固着しており、未来展望をまったく欠いている」と結論している。

特に不適応的自己における時間的展望の特徴として、①過去、現在、未来展望が統合されていない、②過去の修正が必要な否定的な認知を優先し、また、

未来の目標においても否定的認知が優先する場合、時間の停滞から不適応行動や身体症状を伴う、③過去展望の修正も未来展望の予期も弱く、瞬時的現在展望のみに制限されると、刹那的な生活となり、非社会的、反社会的行動の不適応行動を伴いやすい、などを指摘した。

高栖・和田（2015）、和田・高栖・須永（2015）、高栖・須永・和田（2017）は、看護職の挫折体験で看護師としての未来展望を描くことが困難になり辞職したとき、その挫折の意味づけを行うことで、再度看護職に復職して自信をもつ過程を検討した。

その結果、挫折による辞職意図で自己否定感が高まり、現状の自己による適応に困難さを示した。さらに辞職すると、統制の所在が内的で、挫折を強く自分の責任としていた。しかし、未来展望を挫折によって断たれても、その挫折を同化と調節を通した意味づけが可能になると、新たな可能性や自己成長感が強くなり、復職が成功した。

管沼（2017）は、挫折認知によって精神的健康が害される場合にも、時間的展望を媒介することで、自己肯定感と人生満足度に影響することを明らかにしている。挫折の意味づけの過程で過去展望を行い、自己成長と自信獲得ができることで、未来展望の再構築とつながり、精神的健康の回復につながるといえる。

下島（2008）は、時間、空間的場の変化に応じて、変化しながら安定へと向かう自己という主観的側面がある、という（p.17）。揺らぎの中にある自己の在り様が、現在の拡がりの中で確たる自己へと変化する過程のなかで、時間的展望と精神的健康を考えることが必要である。

(2) 時間的展望という行為

勝俣（1990）は、自殺を繰り返す大学生に時間的展望テストを実施した。そして、「過去、現在、未来の時間的次元を一応のくぎりを持ちながら、連続性をもったものとして建設的に認知するものではない、くぎりのない現在、に固着しており、未来展望をまったく欠いている」と結論している。特に不適応的

自己における時間的展望の特徴として、①過去、現在、未来展望が統合されていない、②過去の修正が必要な否定的な認知を優先し、また、未来の目標においても否定的認知が優先する場合、時間の停滞から不適応行動や身体症状を伴う、③過去展望の修正も未来展望の予期も弱く、瞬時的現在展望のみに制限されると、刹那的な生活となり、非社会的、反社会的行動の不適応行動を伴いやすい、などを指摘した。

Antonovsky (1987 / 山崎・吉井監訳, 2001) は、過去を受け入れて肯定できると、現在に「生きる意味」⁶を見いだして、未来に希望を持つことができるという。そしてこのような時間的展望を考慮しながら、ストレス耐性尺度 (Sense of Coherence : SOC) を考案した。

それは、将来のことを予測できる感覚である把握可能性 (Comprehensibility)、ストレスを処理できる感覚である処理可能観 (Manageability)、困難を克服し、生きることができるという有意味感 (Meaningfulness) の3要因から精神的健康度を測る尺度である。

藤野・和田 (2018) は、サークルテストによって描画される時間的展望と SOC 尺度によるストレス耐性、自尊感情、そして自殺念慮の有無について、大学生を対象として関連性を検討した。

6 都筑 (1984) は「時間的展望」と PIL (Purpose in Life Test) で測られた「生きがい感」について検討した。そして時間的展望と生きがい感の間には正の相関があり、未来志向的な青年は肯定的な自己像を持ち、生きがい感を強く感じていること、過去志向的な青年は否定的な自己像を持ち、生きがい感が低いことを明らかにした。熊野 (2002) は、生きがいを感じるのは、充足感や達成感を感じられる肯定的状況の時であるが、生きがいが問題になるのは、苦痛や苦難を強いられる極限状況においてである、とする。そして、生きがいを感じる肯定的状況と否定的状況と、過去、現在、未来という時間的展望の2次元から、生きがい形成の価値モデルを提唱した (熊野, 2005)。

熊野道子 (2002). 過去・現在・未来における生きがい—女子大生を例として. 甲子園大学紀要人間文化学部編, 6, c, 41-52.

熊野道子 (2005) 生きがいを決めるのは過去の体験か未来の予期か? 健康心理学研究, 18, 1, 12-23.

都筑学 (1984). 青年の時間的展望の研究 大垣女子短期大学研究紀要, 19, 57-65.

その結果、①自殺念が有ると、過去志向性、過去優位性を示すが、自殺念慮が無いと、未来優位性、未来志向性の傾向が強い、②未来志向性、現在優位性を示すと、自尊感情が高く、ストレス耐性が高い、③時間的統合性が高いと、自尊感情が高く、ストレス耐性が高い、などを明らかにした。そして、自殺念慮の有無とサークルテストに描画された時間的展望の特徴から、サークルテストを利用した自殺予防教育を主張している。

時間的展望という行為自体が精神的健康に与える効果については、研究例が少ない。特にサークルテストの投影法的長所を用いて、教育、臨床場面への適用とその効果の検討が課題となる。

(3) 他者の存在

未来の有限性と自分の死の意識という視点から、時間的展望と精神的健康を考える研究例はまだ少ない（例 本郷・岡本・池田，2015）。その中で、Lang, France, Williams, Humphris, & Wells (2013) は、頭頸部癌患者の心理的特徴についてまとめている。

頭頸部癌患者は、発声や摂食などに困難をもたらし、外形の変化を余儀なくされる場合がある。それは、基本的な生理的欲求さえも自らの力で満足することが困難な状況となり、統制感や自己決定感を低下させる。また、外見の変化はそれまでの自己との一貫性を断絶する重要な要因である。それによって、新たな自己の再体制化が必至となる。また、癌の再発やその待機状態にあるという不確定性により、未来の有限性が自分の死を意識させる。そのことによって、無力感や鬱を誘発し、精神的健康へ与える影響が大きい。

年齢によるものではなく、事故や病気の結果、未来の有限性や不確定性を常に意識させられるとき、他者の存在は、新たな自己、または自己の同一性再体制化に重要な要因となるであろう。未来の有限性と他者の存在から、自己の再体制化と精神的健康を検討する必要がある。

時間的展望と精神的健康は、自己の有り様に大きく影響する。その自己は、

揺らぎと安定を往復する。その時、時間が一連の流れであると同時に、時間の区切りの中に、時間の流れを感じることで(白井, 2008), 現在の拡がり立ち現れ、今をよりよく生きる自己の存在となりうるのではないだろうか。

引用文献

- Antonovsky, A. (1987). *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. Jossey-Bass Publishers, San Francisco / 山崎順彦・吉井清子監訳 (2001). 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム— 有信堂高文社
- Cottle, J. T. (1967). The Circles Test: An Investigation of Perceptions of Temporal Relatedness and Dominance. *Journal of Projective Technique & Personality Assessment*, 31, 58-71.
- Cottle, J. T. (1976). *Perceiving Time*. New York: John Wiley & Sons.
- Cross, S., & Markus, H. (1991). Possible selves across the life span. *Human Development*, 34, 4, 230-255.
- Erikson, E. H. (1956). The problem of ego identity. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 4, 1, 56-121.
- Erikson, E. H. (1959). *Psychological Issues: Identity and the life cycle*. New York: W.W.Norton.: 小此木啓吾 (訳) (1973) 自我同一性—アイデンティティーとライフ・サイクル— 誠信書房
- 日潟淳子 (2012). サークル・テストによる中年期の時間的展望の検討 カウンセリング研究, 45, 1, 1-10.
- 日潟淳子 (2011). 中年期の時間的展望と死に対する意識の関連 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 4, 2, 123-128.
- 日潟淳子 (2008) 高校生と大学生におけるサークル・テストによる時間的展望の検討—時間的態度と精神的健康との関連から— 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1, 2, 11-16.
- 日潟淳子・岡本裕子 (2008) 中年期の時間的展望と精神的健康: 40歳代, 50歳代, 60歳代の年齢別による検討 発達心理学研究, 19, 2, 144-156.
- 日潟淳子・齊藤誠一 (2007) 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18, 2, 109-119.
- 本郷光・岡本祐子・池田龍也 (2015) 青年期における死の不安と精神的健康の関連—死の不安への対処方略に焦点を当てて— 広島大学心理学研究, 15, 109-128.
- Frank, L. K. (1939) Time perspective. *Journal of Social Philosophy*, 4, 293-312.
- 藤野美香・和田万紀 (2018) 精神疾患簡易構造化面接法 (M.I.N.I.) による自殺の危険度とサークル・テストにおける時間的発展性 (志向性)・優位性との関係について 日本応用心理学会第85回大会発表論文集, 85.

- 五十嵐敦 (1990) 青年期の時間的展望—Cottle's Circles Test の検討と分析— カウンセリング研究, 23, 2, 133-141.
- 石井僚 (2013) 青年期において死について考えることが時間的態度に及ぼす影響 教育心理学研究, 61, 229-238.
- 石井僚 (2016) 青年期発達と時間的展望—時間的展望研究の動向と課題—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 63, 83-91.
- 石井僚 (2018) 青年の時間的展望とアイデンティティ形成過程の5側面との関連 心理学研究, 89, 2, 119-129.
- 勝俣暎史 (1990) 自殺未遂をくり返す女子大学生の時間的展望テスト (TPT) 所見 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 39, 319-334.
- 勝俣暎史 (1995) 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 44, 307-318.
- 勝俣暎史・上田一博 (1973) 時間的展望テスト (TPT) に関する研究—TPT の構想と適用例-1— 熊本大学教育学部紀要 人文科学, 22, 155-162.
- Lang, H., France, E., Williams, B., Humphris, G., & Wells, M. (2013) The psychological experience of living with head and neck cancer: A systematic review and meta-synthesis. *Psycho-Oncology*, 22, 2648-2663.
- Lewin, K. (1942) Time perspective and morale. In G. Watson (Ed.). *Civilian Morale. Second year book of the Society of the Psychological Study of Social Issues*. Boston; Houghton Mifflin. 末永俊郎 (訳). (1954). 社会的葛藤の解決—グループ・ダイナミックス論文集— 東京創元社
- 宮本純子 (2013) 乳幼児を持つ母親の自己決定感が時間的展望と育児不安に及ぼす影響 心理学研究 84, 2, 176-182.
- 野村晴夫 (2002) 高齢者の自己語りと自我同一性との関連—語りの構造的整合・一貫性に着目して— 教育心理学研究, 50, 355-366.
- 岡本祐子 (1990) 高齢者の死の受容と自我同一性に関する研究 広島中央女子短期大学紀要, 27, 5-12.
- 奥田雄一郎 (2001) 時間的展望研究における課題とその可能性—近年の実証的・理論的研究のレビューにもとづいて— 中央大学大学院研究年報, 31, 333-346.
- 奥田雄一郎 (2004) 時間のはじまり, 物語のはじまり—時間的展望の発生とナラティブの発生に関する実験的検討— 中央大学大学院研究年報, 34, 175-185.
- 奥田雄一郎 (2013) 大学生の時間的展望の時代的変遷—若者は未来を描けなくなったのか?— 共栄学園前橋国際大学論集, 13, 1-12
- 齋藤貴彦・井上忠典 (2015) 時間的展望と抑うつ傾向の関係について—統制の所在との関連性から— 東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 75-82.
- 佐藤浩一 (2008) 自伝的記憶の機能 / 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編) (2008). 自伝的記憶の心理学 北大路書房 第5章, 60-75.
- 佐藤祐樹・岡本祐子・杉村和美 (2012) 時間的連関性と時間的展望体験が抑うつに及

- ほす影響 広島大学心理学研究, 12, 61-70.
- 下島裕美 (2008) 自伝的記憶と時間的展望 心理学評論, 51, 1, 8-19.
- 調枝孝治 (1996) 現代のアウグスティヌス 心理的時間の研究は不良設定問題／松田文子・調枝孝治・甲村和三・神功英夫・山崎勝之・平伸二 (編) (1996). 心理的時間—その広くて深いなぞ— 北大路書房, 序章, 第1節, 2-26.
- 白井利明 (1989) 現代青年の時間的展望の構造 (2) —サークル・テストとライン・テストの結果から— 大阪教育大学紀要第IV部門, 38, 2, 183-196.
- 白井利明 (1994) 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 1, 54-60.
- 白井利明 (1995) 時間的展望と動機づけ—未来が行動を動機づけるのか— 心理学評論, 38, 2, 184-213.
- 白井利明 (1996) 時間的展望とは何か?—概念と測定—／松田文子・調枝孝治・甲村和三・神功英夫・山崎勝之・平伸二 (編) (1996). 心理的時間—その広くて深いなぞ— 北大路書房, 第7章, 第1節, 380-394.
- 白井利明 (1999) 生活指導の心理学 勁草書房
- 白井利明 (2001) 青年の進路選択に及ぼす回想の効果—変容確認法の開発に関する研究 (1) — 大阪教育大学紀要第IV部門, 49, 2, 133-157.
- 白井利明 (2007) 時間的展望研究の今後の発展方向 都筑・白井編 (2007). 時間的展望研究ハンドブック ナカニシヤ出版 終章, 207-214.
- 白井利明 (2008) 自己と時間—時間はなぜ流れるのか— 心理学評論, 51, 1, 64-75.
- 白井利明 (2018) クルト・レヴィンにとって時間的展望とは何か—ダイナミック・システム・アプローチとしての生活空間論— 大阪教育大学紀要 (総合教育科学), 66, 75-94.
- 管沼慎一郎 (2017) 諦めること一般に関する認知と時間的展望, 自己肯定感, 人生満足度との関連 東京大学大学院教育学研究科紀要, 57, 197-206.
- 杉山成 (1995) 時間次元における諸自己像の関連から見た時間的展望 心理学研究, 66, 4, 283-287.
- 高栖朝子・和田万紀 (2015) 看護職の挫折体験の意味づけが自己変容に与える影響 日本応用心理学会第82回大会発表論文集 13
- 高栖朝子・須永範明・和田万紀 (2017) 看護の挫折体験の意味づけと自己変容を通じた適応様式 応用心理学研究, 42, 3, 259-260.
- 都筑学 (1999) 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部
- 都筑学・白井利明 (2007) 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版
- 山口智子 (1996) 高齢者の回想: 主観的幸福感・時間的展望との関連 名古屋大学教育學部紀要, 教育心理学科 43, 163-173.
- 和田万紀 (2013) 自我同一性達成地位と性差が大学への適応に与える影響—大学3, 4年生を対象として— 野々村・安藤・和田・壽福・小野・岡部 (著) キャリアガイダンス義務化に伴う大学のキャリア教育の展望 (下) 第8章 桜文論叢, 85, 171-183.
- 和田万紀・高栖朝子・須永範明 (2015) 看護職の挫折体験の意味づけと自己変容一意

- 味づけ, 統制感, 自己変容の関連性— 日本応用心理学会第82回大会発表論文集, 14.
- 渡辺純子・佐久間伸一 (2014) うつ病患者の時間的展望: 中年期のうつ病患者の時間的展望テスト (TPP) 所見 国際医療福祉大学学会誌, 19, 2, 31-40.
- 渡辺恵子・赤嶺純子 (1996) 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望— 学年差・性差の検討— 日本女子大学人間研究, 32, 25-35.
- 山崎理央 (2009) 抑うつ傾向と時間的展望との関連についての検討 福山大学人間文化学部紀要, 9, 87-97.
- Zimbardo, P., & Boyd, J. (1999) Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

謝辞

本論文作成にあたり, 日本大学大学院総合社会情報研究科の大学院生との討議が, 大変示唆に富むものでした。ここに記して, 感謝をいたします。

稲葉隆氏, 木原圭子氏, 品川智昭氏, 長谷部恵美氏, 山内敏夫氏, 藤野美香氏, 加藤勢津子氏, 別所めぐみ氏, 高栖朝子氏, 三浦恵美子氏, 田中彰氏

ホイットマン “Song of Myself” 32番の 間テクスト的考察

諸 坂 成 利

Notre veillée est plus endormie que le dormi, notre sagesse, moins sage que la folie.¹
Montaigne (*Essais*, XII)

I Text:

I think I could turn and live with animals, they are so placid and self-contain'd,
I stand and look at them long and long. 685

They do not sweat and whine about their condition,
They do not lie awake in the dark and weep for their sins,
They do not make me sick discussing their duty to God,
Not one is dissatisfied, not one is demented with the mania of owning things,
Not one kneels to another, nor to his kind that lived thousands of years ago, 690
Not one is respectable or unhappy over the whole earth.

So they show their relations to me and I accept them,
They bring me tokens of myself, they evince them plainly in their possession.

I wonder where they get those tokens,
Did I pass that way huge times ago and negligently drop them? 695

Myself moving forward then and now and forever,
 Gathering and showing more always and with velocity,
 Infinite and omnigenous, and the like of these among them,
 Not too exclusive toward the reachers of my remembrancers,
 Picking out here one that I love, and now go with him on brotherly terms. 700

A gigantic beauty of a stallion, fresh and responsive to my caresses,
 Head high in the forehead, wide between the ears,
 Limbs glossy and supple, tail dusting the ground,
 Eyes full of sparkling wickedness, ears finely cut, flexibly moving.

His nostrils dilate as my heels embrace him, 705
 His well-built limbs tremble with pleasure as we race around and return.

I but use you a minute, then I resign you, stallion,
 Why do I need your paces when I myself out-gallop them?
 Even as I stand or sit passing faster than you.²

II 本稿の目的, 32番の位置づけ, そして Bertrand Russell の *The Conquest of Happiness* との比較について, 684-691行

本稿の目的は, 一般に, その名のみ有名で難解な, 《わからない詩人》(“Song of Myself” の作品構造についてでさえ, Carl F. Strauch, Roy Harvey Pearce, James E. Miller, Jr., Harold Bloom らの研究者によって説が分かれるのみならず³, その内容に関してはほぼシュールレアリスムと言って良い部分もあり, 読者によってその解釈はまちまちであり, ホイットマンの真意には通常辿り着けない, という一般的理解において) と考えられているウォルト・ホイットマン (1819-1892) テキストに対して, 比較文学で言うところの l'explication de texte の方法により, 間テキスト的

析をすることで、“Song of Myself”32番におけるホイットマンの真意を可能な範囲で合理的に明らかにすることである（もちろん対象がホイットマンであるから、それが可能なのはテキストの一部に限定される。行で示せば、686-691, 701-706などである）。この l'explication de texte とは、フランス派の比較文学の、いわば王道的手法であり、ジャック・デリダによるカフカの「掟の門前」の分析⁴などがその典型としてあるが、これはテキストを深く読み込んで分析してゆく、掘り下げていくと、いわば表層とは別の鉦脈にぶつかり（そこで《比較》という作業が生じる）、さらに掘り下げるとまた別の鉦脈に、というように、諸テキストがレファレンスとして召喚され、またその各々のテキストが別のテキストを呼び寄せるといふ、理論的にはひとつのテキストがすべての文学に通ずるかもしれないと思わせるような、実は極めてホイットマン的な方法論でもある。

ホイットマンの代表作 *Leaves of Grass*（『草の葉』、初版1855年）は、世界文学に対して巨大な影響力を持った作品であり、19世紀後半から20世紀にかけて、ヨーロッパ、アメリカ、ラテンアメリカ、そして日本にも大きな影響を与えた。多少その評価についてここで述べれば、アメリカではエマソン、ソローが直ちに *Leaves of Grass* を評価したし、1868年にはドイツの詩人フェルディナント・フライリヒラートがドイツ語訳を発表した。また同年イギリスではウィリアム・マイケル・ロセッティの力により、『ウォルト・ホイットマン詩集』（*Poems of Walt Whitman*）が刊行された。また後に述べるバートランド・ラッセルの1930年の著作『幸福論』（*The Conquest of Happiness*）にホイットマンが引用されているのは有名であり、また彼の友人であったレイフ・ヴォーン＝ウィリアムズの *The Sea Symphony*（1903年に作曲が開始され1910年に完成）もその歌詞はホイットマンから採られている（つまりラッセルの周辺では当時、ホイットマン・ブームがあったことは確実である。また、ホイットマンの詩から作られた楽曲は、ヨーロッパ、イギリス、アメリカにおいて相当数存在する⁵）。また、1950年代60年代のビート・ジェネレーション、アレン・ギンズバーグやジャック・ケルアック、あるいはアドリエンヌ・リッチやゲーリー・スナイダーなどにもホイットマンが影響を与えたことはよく知られている。また我が国においても、ホイッ

トマンは、夏目漱石によって初めて紹介され、それ以降、有島武郎、武者小路実篤、あるいは白樺派に大きな影響を与えているが、ここで特筆したいのが、アルゼンチンの、20世紀を代表する作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスへの影響である。

It was also in Geneva that I first met Walt Whitman, through a German translation by Johannes Schlaf (“Als ich in Alabama meinen Morgengang machte” — “As I have walk’d in Alabama my morning walk”). Of course, I was struck by the absurdity of reading an American poet in German, so I ordered a copy of “Leaves of Grass” from London. I remember it still — bound in green. For a time, I thought of Whitman not only as a great poet but as the only poet. In fact, I thought that all poets the world over had been merely leading up to Whitman until 1855, and that not to imitate him was a proof of ignorance. This feeling had already come over me with Carlyle’s prose, which is now unbearable to me, and with the poetry of Swinburne. These were phases I went through. Later on, I was to go through similar experiences of being overwhelmed by some particular writer.⁶

これはボルヘスが、スペイン語ではなく英語で発表した自伝からの引用であるが、ここでのボルヘスのホイットマン崇拝は並大抵のものではない。ホイットマンを「唯一の」詩人と見做しているのである。ボルヘスは後にもホイットマンを模倣するような詩を書いているが、ホイットマンに《なる》ことを若いボルヘスは目標としたのであった。ボルヘスの周辺のウルトラリスモ等、当時の文学仲間にも、このホイットマンの影響は波及したと考えられる。後に世界的文学者となるボルヘスの青年期にホイットマンの存在があることは見逃せない。またボルヘスは、70歳になった時に、*Leaves of Grass* を自らスペイン語に翻訳し出版している⁷。ボルヘスはホイットマンを、青年期から晩年に至る

まで生涯忘れられなかったのだと考えられる。以上のことから、ホイットマンがマイナーではなく大詩人であり、その研究はアメリカ文学研究においても重要なことが理解されるだろう。なお、ボルヘスのホイットマンの影響については、本稿の最後の方で再び取り上げることになる。

そのホイットマンの *Leaves of Grass* の中核となるテクストが、この“Song of Myself”，「私自身の歌」なのであるが、今回扱うこの32番が“Song of Myself”の中核的テクストであり、それ自体が有名であるというわけでは必ずしもない。冒頭の1番に比べれば印象も薄く、読み飛ばされる可能性の高いテクストでもある。32番に限定して研究が特にされているというわけでもなく、限定的な先行研究はないと言っていい⁸。おそらく唯一32番が問題となると言えば、ラッセルの『幸福論』との関連においてであろうが、その研究もほとんどないと言ってよいのである。

この“Song of Myself”は、1855年の初版ではタイトルは付されていなかったが、翌年の第2版では“Poem of Walt Whitman, An American”となり、1860年の第3版では、大文字で“WALT WHITMAN”となり、第7版、1881年に現在の“Song of Myself”となった。⁹このようにタイトルの変遷はあるが、ホイットマンが表現しようとしていた本質、構造主義的に言えば《構造》structure とは何かと言えば、それは、《ホイットマン》としか言いようのない、あるいは《ホイットマン》と言えば通用してしまうある個性であり、ホイットマン自身のこと、ホイットマンから見れば《私》であり、《私》の不思議の発見、全宇宙に匹敵する《私》の発見の喜びであった。それは“Song of Myself”の冒頭、“I celebrate myself, …”にすべて表現されていると言ってよいのであるが、この点については後述する。

さて、今回の32番であるが、これはバートランド・ラッセルの『幸福論』に、エピグラフ的に引用され、その箇所は、684行から691行である。まず冒頭に“I think I could turn and live with animals,”とあるが、岩波文庫訳では、「ぼくは方向を転じて動物たちといっしょに暮らすこともできそうだ¹⁰」と訳されて

いる。またラッセルの『幸福論』、安藤貞雄の訳によると、「ぼくは道を転じて、動物たちとともに暮らせるような気がする¹¹」となっている。両者とも「方向」や「道」を転じるなどと訳しているが、具体的に転じる状況が見えてこない。「方向」や「道」などという言葉は、文脈なしにいきなり使われても抽象的な表現にならざるを得ず、具体的には何を言っているのかわからない。イメージがわからないのである。ここでの問題は、turnをどう訳すか、どういう意味・状況として捉えるかなのであるが、斎藤秀三郎の『熟語本位英和中辞典』には、「人に尻を向ける」という訳があり（尻ではなく背でも同じであるが）、また *OALD: Oxford Advanced Learner's Dictionary* には “to move your body or part of your body so as to face or start moving in a different direction” とあり、この turn はまさにそういった意味であろうと考えられる。つまり、これまで「私」は人間社会に生きており、人間に囲まれ、人間に向いて生きてきたが、今は人間に背を向け、動物の方を向いて、動物と共に生きられそうだ、というのがホイットマンの真意であろう。「方向を転じて」も「道を転じて」も turn の訳としては間違っていないかもしれないが、何から方向を転ずるのか、道とは何か、何がここで具体的に起こっているのかの説明を既訳に求めることはできないだろう。ホイットマンの翻訳にはこういったことが多々あり、それ故に l'explication de texte が、立ち止まって、考え、テキストを味読し、正しい解釈を発見することが、すべての場合に必要になってくるのである。

人間社会から方向を転じて、動物たちとの暮らしに向かう、とは、現実的に、例えばペットと暮らす、犬や猫を飼ってこれらと暮らす、ということの意味していない。ここは、テキストによれば、人間の、ある仕方での《不幸》から、穏やかで自足している動物の《幸福》に向かうことであり、その《幸福》を眺めることである。動物は、あくせくしない、悲観的にもならない、罪も義務も感じない、不満も所有欲もなく、他者や父祖を拜むこともないものの謂として抽象的に用いられているのであり、具体的な、現実的な何かの動物を、たとえ後に意味することになるとしても、ここでは意味していない。もちろん動物にもある感情があることはここでも否定されてはいないが、ホイットマンの《動

物》は、ある《幸福》の象徴として描かれており、ラッセルが注目し、自著のエピグラフとして選択した理由も、この点に注目したからであろう。そしてラッセルの『幸福論』の冒頭は、この《動物》で始まるのである。そして後に明らかになることであるが、ラッセルは、ホイトマンの本質をよく理解して、エピグラフとしてこの32番を引用している。

Animals are happy so long as they have health and enough to eat. Human beings, one feels, ought to be, but they are not, at least in a great majority of cases.¹²

ここでは人間は、健康で食べるものがあったとしても不幸である可能性が示唆されている。ここから少しラッセルの文脈を追えば、次に動物が登場するのは次の箇所である。ここは人間もまた動物であり、動物は象徴としては幸福であるが、生存競争もある程度はすることになる。以下には幸福と富との関係も示唆されている。

The human animal, like others, is adapted to a certain amount of struggle for life, and when by means of great wealth homo sapiens can gratify all his whims without effort, the mere absence of effort from his life removes an essential ingredient of happiness.¹³

さらに『幸福論』に登場する動物を追っていくと、次の引用にも動物が観察できる。これは「退屈」との関係で動物が考えられているが、これはラッセルが、対象である動物に《なる》行為を通じて、すなわちラッセルの相互主体的な判断によって書かれている。つまり「動物は退屈しない」という判断、あるいは想像である。これも我々は、いわゆる動物ではないので原理的には、そして正確には判断はできない性質のものであるが、動物の身になって、相互主体的に、想像力を働かせて考えればそう思われるということである。科学的でな

いことがすべて間違っていると判断することは間違っている。相互主体性, intersubjectivity が正しいことも充分にあり得ることである, とラッセルはスピノザ的に, ベルグソンの, 小林秀雄的に, そしてホイトマン的に考えていると推察できる。

Animals in captivity, it is true, become listless, pace up and down, and yawn, but in a state of nature I do not believe that they experience anything analogous to boredom. Most of the time they are on the lookout for enemies, or food, or both; sometimes they are mating, sometimes they are trying to keep warm. But even when they are unhappy, I do not think that they are bored.¹⁴

しかし「退屈」とは人間にとっては, 実は重要な要素である。以下の引用はラッセルの重要な人生論であり芸術論でもある。人間は, 退屈を容認するのみならず, 退屈には偉大な作用がある, というよりも, 退屈さ, 静かな生活, 何もない生活の中に偉大さがあるのである。これはある仕方で, ホイトマンにも通ずるものがある。

All great books contain boring portions, and all great lives have contained uninteresting stretches. ... All the best novels contain boring passages. A novel which sparkles from the first page to the last is pretty sure not to be a great book. Nor have the lives of most great men been exciting except at a few great moments. ... Altogether it will be found that a quiet life is characteristic of great men, and that their pleasures have not been of the sort that would look exciting to the outward eye.¹⁵

そしてラッセルは, 『幸福論』において重要な《大地》論へと進んでいく。この《大地》こそは《動物》の, そしてホイトマン的なものの変奏であり,

『幸福論』の根幹をなすものである。科学者でもあるラッセルは、こういった《大地》Earth というような文学的な表現は避けたかったようであり、この点については別の表現が見出せなかったようであるが、《大地》のかわりに類似的に《宇宙》と表現することも可能であったのではないかと考えられる。しかしそれでは《動物》との連想が失われるため、やはり《大地》こそが、この場合にふさわしい表現であったことが、これによって確認できるのである。ちなみに同じ理由から、次のEarthは「地球」ではなく、やはり「大地」と訳すべきであることも確認できる。ラッセルは後に「宇宙」(universe)という言葉も使っているが、これは《大地》の変奏である。

I do not like mystical language, and yet I hardly know how to express what I mean without employing phrases that sound poetic rather than scientific. Whatever we may wish to think, we are creatures of Earth; our life is part of the life of the Earth, and we draw our nourishment from it just as the plants and animals do.¹⁶

この“our life is part of the life of the Earth”という部分は、ラッセルの文章でありながら極めてホイットマン的な意味であり、その意味で重要である、と同時に、これはラッセルが、ホイットマンから学んだもの、ホイットマンからの重要な影響であるとも考えられる箇所である。なぜならホイットマンの思想、世界の見方、あるいは“Song of Myself”の主題が、正にこの認識、すなわち宇宙の、大地の一部としての《私》だからである。これは“Song of Myself”の冒頭“I celebrate myself, ...”を読めばわかるのであるが、これについては後述する。

そしてラッセルの《大地》論は、次の引用で、極めて核心的な表現に近づいていく。

One of the worst features of nervous fatigue is that it acts as a sort of

screen between a man and the outside world. Impressions reach him, as it were, muffled and muted; ... All this is at bottom a penalty for having lost that contact with Earth of which we spoke in the preceding chapter.¹⁷

間テクスト的に、ここから3つのテクストをレファレンスとして呼び出すことが可能となる。まず引用の“a sort of screen between a man and the outside world”であるが、この「スクリーン」は、『莊子』外篇天地第十二にでてくる「機心」と要は同じことである。

子貢が南方の楚に行き、晋に戻ってきたが、途中、漢水の南を通りかかったとき、ふと見ると、ひとりの老人が畑を作っているところで、地下道を掘って井戸に入り、甕かめを抱えあげては、井戸水を汲み出して畑に注いでいた。あくせくからだを動かしているのだが、効果は少ない。それを見た子貢は「機械があつたら、一日に百畦も水がかげられますよ。わずかな力で効果があがる。やってみる気がありませんか。」といった。畑を作っていた老人は、子貢をふりあおいだ。「どうするのかね。」「木に穴をあけて機械を作り、後部は重く前部は軽いようにする。そうすると、ものを引くように水が汲めますし、湯が溢あふれるように早くできます。その機械をはねつるべといいます。」老人はむっと顔色を変えたが、笑って言った。「先生から聞いた話だが、機械を持てば、機械によるしごとが必ず出てくるし、機械を用いるしごとが出てくると、機械に捉われる心が必ず起きる。機械に捉われる心が胸中にわだかまると、純白の度が薄くなり、純白の度が薄くなると、精神が定まらない。精神の定まらぬところには、道は宿らない。わしは知らないわけではない。恥ずかしくて作れないのじゃ。」子貢はすっかり恥じ入り、うつむいて黙ってしまった。¹⁸

「機械に捉われる心」とは原文では《機心》と表現されている。「梘の原理」を応用したと思われる「はねつるべ」といった単純な機械でさえ、この老人はその製作や使用を拒否する。それは、機械を使用すると精神が不安定になるという理由からである。それは精神と現実世界との間に「スクリーン」が生じ、

「純白の度が薄くなり」白が白に見えなくなるからである。もちろん、これも《動物》論、そしてホイットマンのテキストと無関係ではなく、要は《機心》がないこと、対象の直接性、あるいは直接性の保障が《動物》であり《ホイットマン》であるということになる。

この「スクリーン」は、中島敦にとっては《文字》であり、次の中島敦「文字禍」からの引用では「薄被」と表現されているものである。

獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた獵師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無かった昔、ピル・ナピシュテムの洪水以前には、喜びも智慧もみんな直接に人間の中にはいつて来た。今は、文字の薄被をかぶった喜びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物憶えが悪くなった。之も文字の精の悪戯である。人々は、最早、書きとめて置かなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るようになって、人間の皮膚が弱く醜くなった。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜くなった。文字が普及して、人々の頭は、最早、働かなくなったのである。¹⁹

ホイットマン、あるいはラッセルに即して、この「薄被」、あるいは「スクリーン」を考えれば、直観と想像力で《私》を《大地》の、《宇宙》の一部と実感できた瞬間に、この「スクリーン」は消えることになるし、《文字》をもたない《動物》にはそもそもこの「スクリーン」は存在しないという解釈を、ホイットマンもラッセルも認めるだろう。「スクリーン」が存在しないことが、ラッセルにとって、そしてまた中島敦にとっても《幸福》なのである。そしてこの『莊子』的解釈によって、「スクリーン」があるということは、ラッセルのこの引用にもあるように《大地》との接触を失うことになり（...having lost that contact with Earth...），この箇所はドストエフスキイの『罪と罰』の次の箇所を想起させることになる（他にもドストエフスキイといえば『悪霊』の冒頭近くにホイットマンを彷彿させる箇所がある²⁰）。これは作品のクライマックスである

と同時に、ラッセルの述べる penalty のひとつの形でもあるだろう。

とうとう彼は、自分が今どこにいるかさえ覚えなくて、そこを離れた。が、広場のまん中まで行った時、とつぜん彼の内部にある衝動が起った。ある感じが一時に彼を領して、身心の全幅をとらえつくした。／彼は急にソーニャの言葉を思い出したのである。「四つ辻へ行って、みんなにおじぎをして、地面へ接吻なさい。だって、あなたは大地に対しても罪を犯しなすったんですもの。そして、大きな声で世間のみんなに、『私は人殺しです!』とおっしゃい。」この言葉を思い出すと、彼は全身をわなわなとふるわせ始めた。この日ごろ、殊にこの四五時間の、出口もないような悩ましさと不安は、すっかり彼を圧倒しつくしたので、彼はこの新しい、充実した渾然たる感情の可能性へ飛びこんでいった。それは一種の発作のように、突如として彼を襲い、彼の心の中で一つの火花をなして燃え上り、たちまち火焰の如く彼の全幅をつかんだのである。そのせつな、彼の内部にあるいっさいが解きほぐれて、涙がはらはらとほとぼしり出た。彼は立っていたままその場を動かさず、地面へどうと打ち倒れた……／彼は広場のまん中に膝を突いて、土のおもてに頭をかがめ、歓喜と幸福を感じながら、その汚ない土に接吻した。²¹

この「歓喜と幸福」は、《大地》との接触によってもたらされたものである。そしてホイットマンの turn は、この主人公ラスコーリニコフの turn でもあるだろう。なぜラスコーリニコフが罪を犯したのかと言えば、それは、図式的に言えば「スクリーン」のせいであり、《大地》との接触が奪われ、心が分裂（「ラスコーリニコフ」の意味は「引き裂かれた者」だと言われている。便宜上ローマ字表記にするが、これはロシア語の raskol から作られた言葉で、その意味は「分裂、分割、分離」などである）したからである。そしてなぜその精神的分裂が生じたのかと言えば、それは「機心」のせいである。《近代》というものがこの「スクリーン」の原因であり、それは人間を、ある仕方で本来の姿である《動物》から引き離すもの、人間を《幸福》から遠ざけるものである。そこでホイットマン的な《動物》が要請された、というのが19世紀的な文脈というものであろう。こ

の文脈は、ここでは論及しないが、ボードレールによっても、ハーマン・メルヴィルによっても確認できるだろう。

このドストエフスキイの引用が、また、逆に想起させるのがラッセルの『幸福論』のエンディングである。『幸福論』は次の引用をもって終わるが、そこでは不幸は分裂であり、幸福は、おのれを「宇宙の市民」だと感じることだ、とはっきり述べられている。生命の大きな流れとおのれが結合していること、これがホイットマンの影響でなくして何であろう。ラッセルの『幸福論』は、ホイットマンのエピグラフで始まり、ホイットマンのテーマで終わるのである。

All unhappiness depends upon some kind of disintegration or lack of integration; there is disintegration within the self through lack of coordination between the conscious and the unconscious mind; there is lack of integration between the self and society, where the two are not knit together by the force of objective interests and affections. The happy man is the man who does not suffer from either of these failures of unity, whose personality is neither divided against itself nor pitted against the world. Such a man feels himself a citizen of the universe, enjoying freely the spectacle that it offers and the joys that it affords, untroubled by the thought of death because he feels himself not really separate from those who will come after him. It is in such profound instinctive union with the stream of life that the greatest joy is to be found.²²

この「宇宙の市民」“a citizen of the universe”とは、我が国で言えば慈雲尊者の思想そのものであるが²³、これはホイットマンの思想そのものでもあり、この点についてはすでに論文を書き、明らかにしたことである。ラッセルにおいては、以上の引用からも分かるように、《動物》それ自体に対する考察はそれほど深まっているとは言えない。デカルトの動物＝機械論に論及したり、その他幾多もある動物論などは引用されていない。それはなぜかと言え、ラッ

セルの関心は動物そのものではなく、その背後にある《宇宙》や《大地》にあるからである。それはホイットマンにおいても同様であろう。しかしこれについてのさらなる論究は後述することにして、先にこの《動物》についての考察をさらに深めることにする。いずれにせよ、ラッセルがホイットマンをいかに深く読み解いていたかは、この“a citizen of the universe”から明らかであろう。

Ⅲ 《動物》、あるいはコミュニケーション不可能性としての《詩人》、692-8

692行以下は、“So they show their relations to me and I accept them, / They bring me tokens of myself, they evince them plainly in their possession.”となっており、この箇所は、岩波文庫訳では、「こうして彼らはぼくとの因縁浅からぬことを示してくれ僕も彼らを素直に受け入れる、彼らはぼくにぼく自身の形見を届けてくれ、それが紛れもなく彼らの持ち物であることを示してくれる²⁴」と訳されているが、一般読者にはこれは意味不明の箇所ではないだろうか。ホイットマンが「わからない詩人」と評価されるゆえんもこういった言葉遣いにあると言えよう。ここでの“they”はもちろん「動物（たち）」を意味している。動物たちは私に対する彼らの諸関係を示し、それを私は受け入れるのである。そして動物たちは私に、私の記念物、形見（「私」はすでに死んでいるのであろうか?）、しるしを持ってくる。そして動物たちは、その記念物、形見、しるしが、彼らの所有物であることをはっきりと示す、というのである。これはどういうことか。

おそらくこれは、動物に向かい合う人間である私が、人間であるがゆえに、普段は忘却しているが、動物的特徴を“token”として所持していることを意味しているのではないだろうか。“token”とは、*Century Dictionary*によれば、“A memorial of friendship; something by which the friendship of affection of another person is to be kept in mind; a keepsake; a souvenir; a love-gift”という意味であるが、この意味では動物と「私」との間に、ある種の友情、ある種

の愛情、親密さがあることになる。“token”とは、「私」が知り、動物たちも知っているある何か、ということになる。ここでまず考えられることは、「私」とは、一般的な人間ではなく、何かをもった特殊な人間、つまりテキストの語り手である《ウォルト・ホイットマン》であるということである。まずこの文学的事実こそは忘れてはならないだろう（Stefanie Heineによれば、人間圏と非人間圏がホイットマンにおいては相互依存的であるという。“... Whitman insists that human and non-human spheres are interdependent, involved in mutual exchange, and constantly intermingling.”²⁵《動物》と《私》が相互依存的であることは、正にこの32番のテキストが教えるところである）。テキストの先は“I wonder where they get those tokens, / Did I pass that way huge times ago and negligently drop them?”となっており、すなわち動物はどこでその“token”を手に入れたのかという疑問が示されている。しかしこの疑問に答えることは、形式論理的には容易ではないだろうか。つまりラッセルの文脈で言うところの《大地》である。動物は《大地》と接触しているがゆえに《幸福》なのであり、その《大地》との接触が失われれば、ラッセルの言うように、またドストエフスキが『罪と罰』の中で示したように、人間は分裂し、《機心》が生じ、精神が不安定になり、不幸になる。人間は本来《動物》であり、《大地》と接触して生きてきたのであるが、いつの間にか、近代化とともに、この直接性を失ってしまった（これを失わせたのが、プラトンによれば《文字》、莊子によれば《機械》となる）。“token”とは《大地》との接触によって得られた何かのしるし、《大地》を思い出させてくれるものであり、“Did I pass that way huge times ago and negligently drop them?”とは、人間が（ホイットマンではなく）それを失ってしまったことを、ホイットマンが人間に成り代わって表現したものに他ならない、と一応考えることができるだろう。

しかしテキストは、一般的な人間を眼中に置くことなく、次のスタンザでは「私」＝《ホイットマン》の図式が回復され、人間ではありえない、《ホイットマン》の永遠性、無限性が語られることになる。²⁶“Myself moving forward then and now and forever, / Gathering and showing more always and with

velocity, / Infinite and omnigenous, and the like of these among them,”つまり《ホイットマン》は永遠に前進する。これは《ホイットマン》が通常の間人ではなく、ある種の精神性、魂のようなものであることを示している。そう解釈しなければ、この詩句は理解を超えてしまうだろう。つまり《ホイットマン》は、肉体を、物質性を超越して、宇宙を彷徨する存在なのであり、おそらくそれは死をも超越し、宇宙から消滅することのない存在なのである（魂の無限性、不死についてプラトンは『パイドロス』の中で語っている。考え得る諸理由から、ホイットマンはこれを読んでいたのではないかと筆者は推測している）。

ホイットマンの思想によれば、死んでも魂はなくなる。これは一般的には理解しがたい説であるかもしれない。死ねば肉体も滅びるし、死んだ人にはもう会うことが出来ない、ゆえに消滅したのだと考えるのが一般人の一般的な考え方かもしれない。ところが《ホイットマン》は、論理的根拠もなく、直観的に魂が不滅であることを悟るのである。論理的、合理的ではないために、そして説明もないために、詩人の言葉は一般人には「わからない」、詩人の思想は一般人には「わからない」、詩人の世界は一般人から隔離され、それは《動物》のように扱われるのである。

この点については、萩原朔太郎の、大正4年5月の文章、「言はねばならない事」を参照したいと考える。

私は子供のときからよくかういふ事を考へるくせがある。自分が若しある何等かの重大なる神罰を蒙るとか、又は気味の悪い魔術にかかるとかして……お伽話にあるやうに……私の肉体が人間以外の動物に変形した場合の生活はどうであるかと。

たとへば私が人気のない寂しい森を散歩して居る中に、突然 Fairy といふやうなものが現れて私といふ人間を一疋の犬に変形してしまふ。

私は尻尾をひきずりながら主人の家、ではない私自身の家に帰つてくる。私はいきなり懐かしい母の姿を見つけてこの恐ろしい事件の顛末を訴へようと試みる。併し、母は一疋の見知らぬ犬としか私を認めてくれない。私がいろいろな仕方で、尻尾をふつたり、吠えたり、嘗めたりするにもかかはらず母には少しも犬の意志が通じない。そのう

へ私が悲鳴をあげて泣き叫ぶにもかかはらず、種々な迫害を加へた上、私を庭の外へ追ひ出してしまふ。

世の中にこんな取り返しのつかない悲惨な出来事があろうか。犬の意志が人間に通じないと云ふことは驚くべき神の悪戯である。

而して、もちろん、詩人としての私は魔術にかかった犬である。²⁷

「犬の意志が人間に通じない」という、あたりまえのことが、朔太郎によって「驚くべき神の悪戯である」と言われると、そこにあるディスコミュニケーションの深淵が、詩の、そして文学の極意が垣間見られるような気がする（この深淵があるにもかかわらず、人が《文学》を享受し感動するのは、後に述べる超越的な《神の狂気》があるからであるとも考えられる）。詩人と一般人との間で言葉の交通が滞りなく行われるのであれば、そこに《文学》はない（情報伝達のために使われる言葉は《文学》にはなり得ない）。《ホイットマン》の把握していた直観が、言葉によって理解可能であれば、そこに《詩》はない。そして文学研究、ホイットマン研究が正統的なものであれば、その理解不可能な部分を、研究者は自らの直観と想像力によって理解するのが本当であろう。詩人とは《動物》である。それは朔太郎が書いているとおりである。そしてこの《動物》は中島敦が「山月記」で描いたものでもある。「山月記」というタイトルは、ある英訳によれば“Tiger Poet”と訳されているが、これは正に虎になった詩人の物語である。しかし、朔太郎の言い分を中島敦に従って解釈すれば、詩人とはそもそも動物、すなわち《虎》だということになるのである。詩人は常人とコミュニケーションが出来ない。詩人は直観、あるいは直感と想像力で対象を把握するが、常人にはこれが出来ない。このコミュニケーションの不可能性は、ある仕方で恐怖であるが、「山月記」の李徴の感じる恐怖は独特であり、それは分裂自体に存在する恐怖であり、ステイブンソンの『ジキル博士とハイド氏』にも比較可能なものである。

ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還って来る。そういう時には、かつての

日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることもできる。その人間の心で、虎としての己の残虐な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい。しかし、その、人間にかえる数時間も、日を経るに従って次第に短くなって行く。今迄は、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひょいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐しいことだ。²⁸

この最後の部分は『莊子』の有名な「胡蝶の夢」の変奏であるが、李徴のこの「動物か人間か」の問いに対しては、李徴は次のように考えている。

己の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるのだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ²⁹。

つまり李徴は、動物になりたくはなく、スピノザ的に、人間のままでいたいと願っている。しかし《動物》であることの、つまり、分裂していない状態のラッセル的《幸福》にも気づいている。この点が、中島敦の複雑なところでもあり、またこの迷いにはある魅力がある。またこの箇所は、ラッセルの『幸福論』の、ある仕方での反論にもなっていて興味深い。すなわち、精神の分裂にも、ある種の人間的な救いがあるのではないかという可能性である。動物になり幸福になってしまうことへの恐れ、分裂がない状態を「恐しく感じ」る感性の指摘である。《動物》になりきってしまうことが、本当に《幸福》なのかと言えば、当然疑問が生じるのではないか。分裂状態が動物的幸福よりもより良い場合もあるのではないか。理解者がいないということ、コミュニケーションが出来ないということも、見方を変えれば、それはそれで良いことである場合もあるのではないか。そして、万人にわかるように詩を書かなかったホイットマンは、そのように考えていたのではないか。しかし李徴はその地点には達していない。次の李徴の苦しみは、十分に同情できる性質のものであるが、現実の、作品発表の機会に生前恵まれていたとは言えない中島敦の、苦悩とも重な

る部分があると考えられる。

たとえば、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったとした所で、どういう手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。（中略）天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持ちを分ってくれる者はいない。³⁰

ホイトマンであれば、分かってくれる者がいなくても嘆きはしないだろう。分かってくれない者とも、どこかで必ず通じ、分かり合えていると楽観するのがホイトマンである。分かる者も素晴らしいし、分からない者も素晴らしい、とホイトマンであれば言うであろう。しかし李徴にはそういった連帯感、あるいは全体、宇宙とのつながりといったものが見えていない。李徴はあるエコノミー、ある円環の中に閉じ込められており、そこから《外出》することができない。李徴は作品が発表できないこと、作品を書けなくなりつつあることに恐怖し、嘆くのであるが、その李徴の作品とは、

格調高雅，章趣卓逸，一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。（中略）しかし、このままでは第一流の作品となるには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか。³¹

と作中で評されているのである。これまで、ラッセル、ホイトマン、ドストエフスキイ、朔太郎と、《動物》、《大地》、あるいは《宇宙》をめぐって思考してきたが、その文脈から考えれば、中島敦論において大問題となっているこの「（非常に微妙な点に於て）欠ける所」とは、虎と人との分裂、《動物》と人間との分裂、そしてそこから派生する《不幸》にあるのではないか。第一流の、人を真に感動させるものは、人間を感動によって《ひとつ》にさせるものなのではないか。Ⅱ章の最後の引用でラッセルの言っていた integration である。ちょうど『罪と罰』のラスコーリニコフが、広場の真ん中で我を忘れて大地に

接吻するシーンを読んだ読者が感動する、その理由が、ラスコーリニコフが心身ともに《ひとつ》になっているからであるように、そのような全的なもの、integration が、李徴に欠けているからではないだろうか。李徴は虎と人とに分裂している。第一流のものは、ホイトマンのように、みな忘我の境地から、後述する《神の狂気》から創作されているのではないか。それは《幸福》とも《大地》とも《動物》とも結びついている。李徴の作品は、知的で、技巧的で、レトリックに満ちているが、それは所詮《正気》のなせるわざに過ぎず、神の《狂気》によって作られた作品には及ばないのではないか。人は《大地》から離れて生きられない。ホイトマンの詩が世界に大きな影響を与えたのも、ホイトマンが《ひとつ》に《なる》こと、Stefanie Heine の言い方を借りれば《他者》に《なる》こと（John Keats の有名な Chameleon Poet をここで想起し、中島敦の「かめれおん日記」についても想起してほしい）、《すべて》に《なる》こと、³²そして《動物》に turn することが、人に感動を与えたからに他ならない。ラッセル、ドストエフスキイ、朔太郎、中島敦等との間テクスト的分析から、そのようなことが明らかになるのではないだろうか。

IV 合理性の追求、696-709行目の解釈について

さて、ここから読者は、ホイトマンのわからなさ（誤解のないようにここで私見を挟むが、詩は、そして文学・芸術は、そもそも《わかる—わからない》の次元で評価されるべき性質のものではない。それは心で感ずるもの、味わうものであり、頭で理解するものではない。ホイトマンの詩が《難解》だというのは、そもそも当たらないことなのである。そのことをふまえた上で、筆者は、文学研究者としては、詩がわからなければ文学はわからないし、したがって研究もあり得ない、と考えている）に更に直面することになる。このスタンザから《私》＝《ホイトマン》は、永遠に前進し続け（どこを？）、そして《私》は infinite 「無限」であり、omnigenous 「あらゆる種類の、すべての発生する」ものであり（《私》は宇宙そのものなのか？）《私》の形見が欲しい人を拒否せず、一匹の、おそらく馬を選択し、兄

弟のように睦まじくともに進む、というのがこの696-700行の内容である。これをどう解釈すれば、ある合理性に到達するのか。あるいは合理性などそもそも（詩であるから）追求しなくてもいいのだろうか（《私》を「法界虚空蔵菩薩」のような存在であると考えれば、合理的な説明が可能となるだろう。菩薩であれば、infiniteであり、omnigenousであることは充分にあり得る。エマソンと東洋思想については多くの研究がなされているが、ホイットマンについてもこのテーマは大変興味深いものとなり得るだろう。ホイットマンは仏画、仏像、仏教説話に触れたのではないだろうか。この点に関して筆者は肯定的ではないが、32番の想像力は、極めて仏教的であるという解釈はあり得るだろう。ちなみに、東寺にある唐代9世紀につくられたとされる「法界虚空蔵菩薩」像は馬に乗っている）。

ホイットマンの詩は音にそれほど依存するものではないし、ホイットマンは詩に音楽を求めた詩人でもない。またシュールレアリスティックなイメージを追求した詩人でも当然ない。やはりホイットマンの場合、何か表現したいものが確固としてあり、ある種の合理的解釈を待っている、と考えられる。それは散文的にホイットマンに表現できなかつたものであるが、ホイットマンは創作中に何を書いているのかわからずとも、「何かがうまくいっている」とは感じていたはずであり、これを考究することによってある種の具体的な（現実的ではないにせよ）イメージに到達することは可能であるように思われる。

つまりひとつの解釈は、やはり《私》は人間の肉体をそなえた人ではなく、ひとつの精神、ひとつの魂のようなものになっていると解釈することである。すなわち《私》の魂は、過去、現在、未来に存在し、失われることはない、そしてその魂は、精神的に時空を超越し、ある精神的領域を開拓し、そこである（おそらく《大地》からの）収穫を得る（gathering）。そしてそれらを人々に披露する（showing）のである。これらは現実に起こるのではなく、想像界の出来事である。そしてこの《私》という精神は、人が、形見、つまり《私》を思い出す種、《私》の換喩、《私》の属性の何かが欲しいと言ってきた場合には断らずにこれを与えるのである。

701行目から704行目は、それ以前のテキストに比べて具体的であり、リアリ

スティックな馬の描写と言っていいほど難解な問題はないと考える。その次の705行目の“as my heels embrace him,” というのも、馬にまたがって、両脚で馬を締める描写と考えられ、その時馬は“His nostrils dilate”となるわけで、自然な描写と考えられる（このように、難解な箇所と自然な、受け入れやすい、分かりやすい箇所が交互に来るのはホイットマンのひとつの特徴でもある。それはストラヴィンスキイの音楽、ナボコフの文学にも似ている）。次の706行目も同様である。しかし、最後のスタンザ、707行目から709行目の3行は、通常的思考では理解不可能な世界が展開されている。すなわち、“Why do I need your paces when I myself out-gallop them?” 「ぼく自身のほうが速いのにどうして君の歩みがぼくに要ろう³³」。これはどう考えても不思議ではないだろうか、と一見思える。なぜ《私》の方が out-gallop them, つまり馬の歩調よりも速いのであろうか（『パイドロス』246Aには翼の生えた馬、翼の生えた馭者の話があり、やはりホイットマンはこれを読んで、そのイメージで32番を書いたのではないかと考えられる。もちろんこれも仮説であるが、253Dには魂の第二の部分は馬であり、第三の部分は馭者であるとあり、馬も馭者も魂の変奏としてあり、32番のイメージとも一致する）。やはり《私》とは魂ではないのか。《私》の魂は、視界の届く限り遠く、先にすでに行ってしまうっており、馬の gallop がそれに追いついていない、おそらくそのように考える以外に、この謎を解くことはできないのではないか。そして極め付きが最後の一行である。“Even as I stand or sit passing faster than you.” 「立っていようが坐っていようがそれでもぼくは君より速く進んでいる。³⁴」ここで“stand or sit”の場所は特定されていない。これは、どこであっても、「立っていようが坐っていようが」という意味であると考えられる。立っていても、座っていても、《私》は馬よりも速いとは、足を使わずに移動できるということであり、やはり《私》は肉体を持った人間ではなく、肉体を超越した魂なのではないか。《私》 = 《ホイットマン》とは《魂》の謂なのではないか、と考えられる。そのように考えない限り、合理的にこの詩を解釈はできないだろうし、ある種の感動も得られないであろう。では、その《魂》とは何か。それを知るためには、“Song of Myself”の冒頭に立ち返り、この詩の

前提，《私》とは何かをあらためて考える必要があるだろう。

V “I celebrate myself”について，《私》とは何か。

“Song of Myself”の冒頭は，“I celebrate myself”という有名な詩句で始まる。「私は私を祝福する」という、ある仕方での大胆さをもったこの詩句は、様々な解釈可能であるが、筆者はこの点についてはすでに、この点に限定したものではないが論文を発表している。³⁵ “Song of Myself”は次の有名な書き出しで始まる。

I celebrate myself, and sing myself,
 And what I assume you shall assume,
 For every atom belonging to me as good belongs to you.

I loafe and invite my soul,
 I lean and loafe at my ease observing a spear of summer grass.

このあらましを述べれば、「私は私を祝福する。私が仮定したことを必ず君もそうだろうと思う。それは私の原子のひとつひとつが君にも属しているから。私は悠然と彷徨い、私の魂を招き、夏草の穂先を眺める」ということであるが、これはやはり今回の32番に似ている、というよりも、ホイットマンの発想の根源がここに示されており、32番もその変奏であるということなのであろう。ここでの《君》を32番の《動物》と考えれば、32番の《私》と《彼ら》が共有している token（原子のことだろうか？）とも重なってくる。また《私》の招魂、《私》が魂であることも共通している。そして32番で《動物》を眺め、それと対峙するように、ここでは草を眺めている点も、共に自然に属するものであることを考慮すれば、共通している、自我と自然の対峙という点で共通している、と言える。またここに登場する原子であるが、ホイットマンは古代ギリシャ・

ローマの、イオニア学派のアナクサゴラスや、イドニア学派のデモクリトスや、共和政ローマ期のルクレティウスといった哲学者たちの原子論と共に、19世紀の、当時としては最新の原子論にも関心があったようで、その研究もあるが³⁶、筆者の考えによれば、ホイットマンは《私》、おのれを宇宙の中の一原子と考えており、そしてそれが魂であり自由に彷徨する存在であり、同時にそれを宇宙と同等の価値があるものとして考えている、ということなのである。

なぜホイットマンが「私を祝福する」と言ったのか、その真意、“what I assume”の意味するところについては、筆者はいくつかの論文ですでに明らかにしてきたが³⁷、おそらく《私》は宇宙の中にある一原子であるが、《私》が宇宙の外に放り出されることにでもなれば、この宇宙を織りなしている構成物のひとつを失うことになり、それによって全宇宙は崩壊してしまう、分かりやすく言えば、宇宙というジグソーパズルのひとつのピースが《私》なのであって、それが失われれば宇宙は完成しない、ということは、この《私》は宇宙にとってかけがえのない、宇宙と同等といってもいい価値のある存在であるということになる。であるから、《私》は《私》を祝福するとなるのである。同様に、《君》も、君自身のことを（メタテキスト、あるいはメタフィクション的に、この“Song of Myself”を読むことによって、ということをもホイットマンが意図したかどうかは不明であるが）この認識を得て祝福するようになる、私の原子は君の原子でもあるのだから（これは19世紀の科学論の反映であるかもしれないが、私の吐き出す息を構成する原子が、君に吸われて君の一部になる、というような流動性、交換というものを想定してもいいだろう。ホイットマンの認識によれば、すべては繋がっており、平等で、民主主義的だということになる。またこの《息》は、物質的であると同時に精神的な存在でもある³⁸）、というのがこの冒頭で書かれていることである。

いずれにせよ、ホイットマンの《私》とは、そういった一原子、宇宙の中を自由に彷徨する魂なのであって、この前提がなければ、次のような詩句はあり得ないことになるだろう。“Salut au Monde!”の5番からの引用である。

I see the tracks of the railroads of the earth,

I see them in Great Britain, I see them in Europe,
I see them in Asia and in Africa.

I see the electric telegraphs of the earth,
I see the filaments of the news of the wars, deaths, losses, gains, passions,
of my race.

I see the long river-stripes of the earth,
I see the Amazon and the Paraguay,
I see the four great rivers of China, the Amour, the Yellow River, the
Yiang-tse, and the Pearl,

“I see....”つまり「私は見る」で行が始まるこれらのテキストは、ホイットマンの典型的スタイルでカタログ・スタイルと言われることもあるが、なぜこのような神の視点が可能なのかと言え、詩人が想像で見たと思ったものをそのまま“I see....”と書くからで、実際にホイットマンがその地を訪れて「見る」のではないことは明らかである。しかし、テキストとして、このように書かれることには強い文学的効果がもちろんある。ひとつには英語の頭韻、あるいはセンテンスの冒頭に同じフレーズを繰り返すことの持つ力強さ（キング牧師の演説などその好例であろう。同様の力をホイットマンの詩も所持している）の表現であるが、私が強調したいのは、このディスクールのもたらす超越性、および宇宙性である。

《動物》の精神よりも《私》＝《ホイットマン》の精神は、自由に、光の速度であるかのように、すばやく宇宙のどこにでも移動できる。想像力が及ぶ限り、それは瞬時である。思えば、思っただけで、瞬時にそこに移動できる。そこにいる。ホイットマンはそのようなことを考えたはずである。その影響を受けたのが先に言及したボルヘスであり、彼の短編「エル・アレフ」³⁹には、ホイットマンのように《私》が見たもののカタログが登場する。ボルヘスのア

レフとは、直径2、3センチの球体で、その中に全宇宙が封じ込められており、見る角度によって宇宙のすべてが見られるというもので、ホイットマンが宇宙の内部にいて、どこにでも移動するのは逆に、ボルヘスは宇宙を外から眺め、その内部に入り込んで、あらゆる視点から見るという発想でこれを書いたのであった。しかし根本的には同じことである。現実にはすべてを見るようなことがもしあれば、それは狂気へ、発狂へと通ずる可能性があるだろう。しかしそれはもうひとつの、芸術的狂気、プラトンの《神の狂気》へも通ずる可能性を秘めている。

VI 結論、合理性の限界、そして《^{テイア・マーニア}神の狂気》について

我が国の慈雲尊者にもある、この宇宙の中の、宇宙を構成するかけがえのない《私》という認識は、ラッセルの『幸福論』の最後の「宇宙の市民」“a citizen of the universe”とも当然結びつくものである。人は宇宙というジグソーパズルのひとつのピースであると認識するとき、そのかけがえのなさを意識するとともに、《私》が不滅であること、肉体はなくなっても《私》であるところのこの精神、魂は、ジグソーパズルのひとつのピースであるがゆえに、宇宙にとどまり続けることを悟るのではないか。だからホイットマンは“Myself moving forward then and now and forever,”と書いたのである。《私》は不滅の靈魂であり、自由に宇宙を彷徨し、ゆえに馬よりも速く、立っていても座っていても馬よりも速く移動できるし、瞬時にしてアフリカにもアジアにも行けるということになる。これがホイットマンの視点の本質であり構造である。

本稿は研究論文であるので、人文科学として論理や合理を追求することは当然であるが、しかし文学は科学ではなく、文学作品の場合、そして殊に詩の場合、そして殊にホイットマンの場合、作品を合理のみで解釈することは不可能である。なぜならテキスト自体がそれを拒絶しているからである。文学研究の

研究対象は文学であって、一般にすべての文学研究は、それが書誌学や文献学といったジャンルではなく真に《文学》を、文学的感動をあつかう文学研究であるならば、ジョージ・スタイナーが述べたように、というよりも現実にほとんどの文学研究がそうであるように、研究の結論は推論で終わるのが自然である。文学研究は問うことによって対象に迫り、問うことを先鋭化することによって対象に詰め寄り、最後は推論で終わるものである（その推論はしたがって単なる憶測ではなく、科学的結論に近いものになる）。文学研究は常に、中島敦の先の言葉を使えば、文学的感動にかかわる「非常に微妙な点」をあつかうのである。もし合理によってすべての結論が出てしまうのであれば、それはむしろ文学的には価値がないということになるだろう。《文学》は情報伝達のみで終わるのではなく（たとえ《文学》がコミュニケーションの一形態だとしても）、また技巧、レトリックにその本質があるのでもない。

もしひとが、技巧だけで立派な詩人になれるものと信じて、ムウサの神々の授ける狂気にあずかることなしに、詩作の門に至るならば、その人は、自分が不完全な詩人に終わるばかりでなく、正気のなせる彼の詩も、狂気の人々の詩の前には、光をうしなって消え去ってしまう。⁴⁰

これはプラトンの『パイドロス』からの引用であるが、これは文学・芸術論においては定説と言っていい見解である。アリストテレス、ダ・ヴィンチ、デカルト、モンテーニュなど多くの人々が同様の見解を述べている。⁴¹ここで言う「正気」は論文の論理・合理である。「神々の授ける狂気」とは、作家、芸術家などにある仕方で《神》が憑依し、その人の能力をはるかに超えたものが制作されてしまうことを一般には意味するのであろう。しかしこれは「非常に微妙な点」でもある。

中島敦の文脈で言えば、李徴の作品が「非常に微妙な点」において第一級品ではないかもしれないと判断される理由は、繰り返すが、李徴が「神の狂気」ではなく、技巧やレトリック、そして「人の狂気」の水準にとどまっているか

らではないか。ホイットマンには、まずこれがない。ホイットマンの《狂気》は読者に伝染し、読者を陶酔させる。ホイットマンは《すべて》を見るポーズ、ジェスチャーをするが、それは発狂に至るのではなく、すべてを超越して《宇宙》に、《大地》に至るがゆえに、完全に《幸福》であり、「人の狂気」を持っていない。その詩は見方を変えれば論理で判断できる性質のものではなく、芸術の本道である神の《狂気》に支えられていると考えられる。「宇宙の中の《私》」までは知識として、知的に、合理として、実感はなくとも理性で理解可能であるが、例えば、先程、一応の解釈を与えはしたものの、“Did I pass that way huge times ago and negligently drop them?”の真の意味とは何であろうか。《大地》と結びつく token というのも、換喩的に《私》を意味するのであろうが、内容的に「これ」とは言えず、合理的には説明のできないものである。そのようなものを維持しつつ、ホイットマン“Song of Myself” 32番は、人を捉えて離さないある魅力を持っている。ラッセルもこれに不思議な魅力を感じたのでエピグラフに使用したのであろう。32番をめぐって、《幸福》、《大地》、《動物》、《宇宙》（これらはラッセルの、ホイットマン解釈のためのタームでもある）、そして《私》について思考してきたが、これらはすべてホイットマンの中で結びついており、合理的に、あるいは形式論理的に解釈できる部分について、そしてこれらのタームの関係性については本稿で明らかにできたと考える。これまで見てきたことから結論的に言えることは、ホイットマンには、多くの優れた芸術家や作家に見られる《神の狂気》が確かにある、詩人ホイットマンの意識を超えて、それは確かにテキストの中に息づいている、ただ分からないだけではなく、そこには生きた、ある種の高揚感、幸福感がある、そして筆者はそこに、おそらくボルヘスと同様に無限の魅力を感じている、ということである。テキストの本質は、ラッセルが『幸福論』の中で述べた《大地》、《宇宙》、《幸福》にある。《神の狂気》に導かれ、《ホイットマン》＝《魂》は彷徨する。それは《幸福》の、ある姿でもある。そして《智慧》の始原へ、アレフのように、究極の直観と想像力によって《他者》に、《すべて》に《なる》源へと向かっていく。最後にそれを示すホイットマンの作品、“Passage to

India”（後に E. M. フォースターは、このタイトルを借用し有名な小説を書く⁴²）から引用して、本稿を終えることにする。“I celebrate myself”とあわせて、こういった詩句が知識としてではなく実感としてわかるようになれば、ホイットマンは難解でも何でもなく、美しい、幸福な、わかりやすい詩人に変貌するのである。これこそ《動物》を、screenのない世界を、直接性の世界を、きわめて雄弁に語っている、と言えるだろう。

O soul, repressless, I with thee and thou with me,
 Thy circumnavigation of the world begin,
 Of man, the voyage of his mind's return,
 To reason's early paradise,
 Back, back to wisdom's birth, to innocent intuitions,
 Again with fair creation.⁴³

——ウォルト・ホイットマン生誕200周年の年に——

- 1 Michel de Montaigne, *Essais de Michel de Montaigne*, Livre second, édition présentée, établie et annotée par Emmanuel Naya, Éditions Gallimard, 2009, 347
- 2 Walt Whitman, *Leaves of Grass and Other Writings*, ed. By Michael Moon, W. W. Norton & Co., 2002, 52-3
- 3 田中礼, 「“Song of Myself”——その思想と表現」, 『ホイットマン研究論叢』第32巻, 日本ホイットマン協会, 2016年, 16
- 4 Jacque Derrida, «PRÉJUGÉ, devant la loi», in J. Derrida, V. Descombes, G. Kortian, P. Lacoue-Labarthe, J.-F. Lyotard, J.-L. Nancy, *La faculté de juger*, colloque de cerisy, Les éditions de minuit, 1985, 87-139
- 5 ホイットマンと音楽については, *Walt Whitman and Modern Music: War, Desire, and Trials of Nationhood*, ed., by Lawrence Kramer, Garland Publishing, Inc., 2000 という論文集が出版されている。この本はCD付きで, Marc Blitzstein が1925年から1928年にかけて作曲したホイットマンの詩による曲などを聴くことが出来る。
- 6 これは, 1970年9月19日の New Yorker に英語で発表された, ボルヘスの “Autobiographical Notes” からの引用であるが, これについては, 諸坂「ボルヘスとホイットマン」, 『ホイットマン研究論叢』第24巻, 日本ホイットマン協会, 2008年

でも引用しており、詳細については、そしてボルヘスとホイットマンの関係についてはこちらを参照のこと。

- 7 Jorge Luis Borges, *Hojas de hierba*, Buenos Aires: Juárez Editor, Selección, traducción y prólogo de J. L. Borges; estudio crítico de Guillermo Nolasco Juárez; grabados de Antonio Berni, 1969
- 8 32番に限定するものではないが、故・本間俊一先生は、「『草の葉』における動物のイメージ」(『足利工業大学研究集録』第17号, 1991年, 239-244)において32番に言及され、筆者が後に述べる token についても、筆者とは見解が異なるが言及されている。「動物」についても筆者とはアプローチが異なっているが、ひとつの先駆的な研究として指摘しておきたい。先生は“Song of Myself”に登場する様々な動物をあげられ、分類・考察をされている。
- 9 田中, 1
- 10 ウォルト・ホイットマン, 杉木喬, 鍋島能弘, 酒本雅之訳『草の葉 上』, 岩波文庫, 岩波書店, 1977年, 165
- 11 バートランド・ラッセル, 安藤貞雄訳『幸福論』, 岩波文庫, 岩波書店, 2017年, 6
- 12 Bertrand Russell, *The Conquest of Happiness*, Intro. By Daniel C. Dennett, Liveright Publishing Corporation, A Division of W. W. Norton & Co., 2013, 21
- 13 Russell, 34
- 14 Russell, 57
- 15 Russell, 62-3
- 16 Russell, 64-5
- 17 Russell, 77-8
- 18 市川安司, 遠藤哲夫, 『莊子(下)』, 新釈漢文大系, 第8巻, 明治書院, 昭和42年, 381-2
- 19 中島敦, 『中島敦全集1』, 筑摩書房, 2001年, 33, 但し, 以下, この全集からの引用については, 現代風に表記を改めた。
- 20 「なにかの草をむしっては, その汁を吸う。(中略)自分は体じゅうに生の過剰を感じずるあまり, 忘却のすべを求めてきたが, いまこの草の汁にそれを見いだした」(ドストエフスキー, 江川卓訳『悪霊』, 上巻, 新潮文庫, 新潮社, 平成18年, 13)という箇所「草」と「生の過剰」にはホイットマン, あるいはインターテキストとしての『草の葉』の影響が考えられる。また『悪霊』第二部でキリーロフは, 「木の葉はすばらしい。すべてがすばらしい」(ドストエフスキー, 451)と述べ, 「人間が不幸なのは, 自分が幸福であることを知らないから, それだけです。これがいっさい, いっさいなんです。(中略)赤ん坊の頭をぐちゃぐちゃに叩きつぶす者がいても, やっぱりすばらしい。叩きつぶさない者も, やっぱりすばらしい。すべてがすばらしい, すべてがです」(451-2)と述べているが, これはホイットマンそのものであり, そのエコーが濃厚に感じられる箇所である。ホイットマンとの対比を考えなければ, ここは謎の, 実存主義的文学と断じられる可能性があるが, ホイットマンをレファ

レンスとして呼び出せば、例えば“The Sleepers”という有名な詩と対比すれば、キリーロフは難解なものではない。このように一国文学の領域においては謎であるものも、インターテキストを参照すれば容易に理解できることがあり、このキリーロフの例はその好例である。またこの万物斉同のこの感覚は、他にもポオの「アッシャー家の崩壊」、そしてパリに生きた版画家の長谷川潔の体験を例に挙げることができる。長谷川は49歳のときに楡の木から話しかけられる体験をし、それからあらゆるものに生命があることを悟ったというのが、これも極めてホイットマン的であるということができる。

- 21 ドストエフスキイ，米川正夫訳『決定版ロシア文学全集1 罪と罰』，日本メールオーダー，1972年，513-4
- 22 Russell, 222-3
- 23 これについては，諸坂「“The Sleepers”について——文学研究，そしてホイットマンと仏教，特に華嚴経の「一即多」から——」，『ホイットマン研究論叢』第29巻，日本ホイットマン協会，2013年，1-13を参照のこと。
- 24 ホイットマン，166
- 25 Stefanie Heine, “Circulating Multitudes: From Antiquity to Cell Theory,” in *Walt Whitman Quarterly Review*, vol.35, Nos.3/4 (Winter/Spring 2018), 220
- 26 この点についてはHeineも指摘している。“As has often been pointed out in Whitman studies, the speaker of “Song of Myself” shares two essential traits with the collection the poem is part of: mutability and limitlessness.” (Heine, 219)
- 27 萩原朔太郎，『萩原朔太郎』，「ちくま日本文学全集」，筑摩書房，1991年，これについては，諸坂，『中島敦「古譚」講義』，彩流社，2009年，145-7を参照のこと。
- 28 中島，25
- 29 中島，25
- 30 中島，28
- 31 中島，26
- 32 “... the speaker weaves his “Song of Myself” by becoming others, other, all.” (219)
- 33 ホイットマン，167
- 34 ホイットマン，167
- 35 諸坂，「ホイットマンにおける Prudence——日本ホイットマン協会創立50周年を記念して——」，『ホイットマン研究論叢』，第31巻，日本ホイットマン協会，2015年，1-13
- 36 David Sollenberger, ““The Central Urge in Every Atom”: Whitman’s Atomism and Schelling’s *Naturphilosophie*,” in *Walt Whitman Quarterly Review*, vol.36, Nos.2/3 (Fall 2018/ Winter 2019)
- 37 諸坂「“The Sleepers”について——文学研究，そしてホイットマンと仏教，特に華嚴経の「一即多」から——」，『ホイットマン研究論叢』第29巻，日本ホイットマン協会，2013年，1-13，および，諸坂「ホイットマンにおける Prudence——日本ホ

- イトマン協会創立50周年を記念して——」, 『ホイトマン研究論叢』 第31巻, 日本ホイトマン協会, 2015年, 1-13
- 38 Heine, 221-3
- 39 Jorge Luis Borges, *Obras completas 1*, Emecé Editores, 2010, 658-669
- 40 プラトン, 藤沢令夫訳, 『パイドロス』, 岩波文庫, 岩波書店, 2003年, 55
- 41 掛下栄一郎, 『神の狂気的美を求めて ヒエロニムス・ボッスの旅』, 成文堂, 1992年, 2-3
- 42 この点については, 本間俊一「E. M. フォースターとホイトマン——二つのインド——」, 『ホイトマン研究論叢』, 第14号, 平成10年, 13-24を参照のこと。
- 43 Whitman, 351

青年期における競争心と完全主義に関する研究

種ヶ嶋 尚 志
北 村 勝 朗

I 問題と目的

競争することの弊害を訴えられることがある。その象徴的なエピソードとして、小学校の運動会において、徒競走の着順を付けずにゴールするといった学校がかつてあったようである（参院文教科学委員会議事録，2001）。順位をつけないといった背景には、平等主義的発想をもとにした過度な競争主義や成果主義を抑制する意味が含まれていることが考えられ、それは不適切な劣等感を助長することや、競争から落ちこぼれた際意欲を失ってしまうこと、さらには格差を生んでしまう懸念等が挙げられるからであろう。しかしながら、競争することにより、高い動機づけに繋がることや、競争に負けることで「次はなんとかして勝ってやる」「負けたからこそ努力できた」といった向上心を促進させる影響も競争にはある。

このように一口に競争といっても、競争にはメリット、デメリットがあり、競争の心理的構造を理解することは、スポーツや勉強への取り組み方や、一般社会での仕事における競争や成果主義雰囲気の中においても、健全で適応的な競争意識を取り入れることが可能となろう。

競争の心理的な側面を現す概念に「競争心」がある。競争心は競争を志向する意識であるが、太田（2001）は競争心を二つの行動意図を表した概念に分類

をした。一つ目は手段型競争心といい、別の目的のために競争を利用する意識を指しているものである。二つ目は目的型競争心といい、他者に勝ることが目標となる競争意識を指した分類である。この分類により、他者に勝りたいといった対人的な動機とともに、自己目標の達成や自身の成長というような個人的な動機の存在を見出している。自己目標の達成といった個人的目標は競争を志向するということよりも、競争を目標達成のために手段として志向する意識であり、このような意識も競争心に包含されているのである。また、ライバルが競争心に与える影響に関してまとめた研究（太田, 2003）では、ライバルと競争することにより、意欲面や行動面で肯定的促進が見られている場合は手段型競争心が影響し、過剰な競争心によって認知面や行動面で否定的促進が見られている場合は目標型競争心が影響していることを明らかにした。

競争への志向性および行動の意図の多面的側面が明らかになる中で、太田（2010）は競争心を「手段型競争心」、「社会的承認」、「過競争心」、「負けず嫌い」、「競争回避」の5つの下位尺度より構成される多面的競争心尺度を作成した。これまで過剰な競争心の側面に注目が集まりがちであったが、この尺度を利用することによって、競争の肯定的な側面と否定的な側面の双方の測定が可能となった。これまでの競争心研究においては、特に手段型競争心への知見が少なかったため、手段型競争心と様々な心理的要因との関係性や影響（例えば感情、パーソナリティ）について今後明らかにされることが期待されている。それによって適応的な競争意識を理解することに繋がるものと考えられている。

競争心の心理的要因を明らかにする認知面の一つに完全主義がある。完全主義は抑うつや、不安、強迫性症状、自己への攻撃性といった精神的不健康との関連性として注目されている（伊藤, 2004）。完全主義は過度に完全性を求め、物事が完全でなければならない、ミスは許されないなど過度に完全を追及する傾向であり、不適応と関連する個人特性である。また、完全主義に含まれるすべての要素が不適応に繋がるわけではなく、完全主義は適応的な側面と不適応的な側面に分類される（桜井・大谷, 1997）。例えば、青年期のアイデンティティ形成と完全主義の適応面と不適応面について検討した種ヶ嶋ら（2012）の研究で

は、高目標設定といった高い目標にこだわる完全主義がアイデンティティ確立を促進的にし、失敗過敏といった失敗に対する恐れや繊細さの完全主義がアイデンティティ確立を抑制的にしていることを明らかにしている。

このように完全主義が適応感や不適応感との関連性が指摘されているものの、競争心と完全主義との関連性について言及した研究は筆者の知るところ見当たらない。競争心の多面的側面の手段型競争心や目標型競争心へ完全主義の関わりを明らかにすることにより、競争環境下において完全主義的認知傾向を有することによる、抑うつ状態や不安状態といった不適応に陥った場合の認知行動療法的カウンセリング支援策を取ることを可能にする。例えば、環境下での不適応状態の一因が完全主義的認知であるならば、その環境下での特徴的な認知の不適応面を適応的な認知へ認知行動療法的カウンセリングによって修正することを可能にするのである。また、不適応だけに焦点化するだけでなく、適応的でより前向きな競争意識をもった認知面も明らかに出来るものと考えられる。

そこで本研究は青年期の競争心と完全主義の関連、また完全主義が競争心に及ぼす影響について検討することを目的とした。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者：首都圏の大学に通う学生369名（男性名225名，女性144名），平均年齢：19.57歳（SD = 0.79），有効回答率87.8%
2. 調査期間：2019年 5 月
3. 調査内容：以下の調査を実施した。
 - (1) フェイスシート：性別，年齢，生活満足度，目標の有無，大事な場面での実力発揮度，生活形態の有無を調査した。
 - (2) 多面的競争心尺度：太田（2010）が作成した5因子（手段型競争心，負けず嫌い，社会的承認，過競争心，競争回避）21項目から構成されている質問紙を用いた。本尺度は競争への志向性および行動の意図を多面的に測定していることが特徴的であり，各項目の得点化は「全くあてはまらない」1点から「非常に当てはまる」5点の5件法で回答した。

- (3) 自己志向的完全主義尺度：桜井・大谷（1997）が Frost et al（1990）の完全主義尺度を参考に作成した。完全主義を自己の枠組みで多次元にとらえる尺度 MSPS（Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale）を用いた。4 因子（PS：高目標設定，CM：失敗過敏，DP：完全性欲求，D：行動疑念）20 項目から構成され，各項目の得点化は「全くあてはまらない」1 点から「非常に当てはまる」6 点の 6 件法で回答した。

4. 倫理的配慮

調査協力者に対して口頭にて本調査目的について説明し，調査票の中においても文章にて同様の内容を提示した。調査は匿名で実施され結果は統計的に処理し，個人が特定されることは一切ない等，個人情報の保護についても説明し，個人情報に関する取扱いについての同意を示すチェック項目を設けた。また，本調査は個人の意思を尊重し答えたくない項目は無回答で提出して構わないことも記した。

5. 手続き：上記 3 調査内容のものを集団形式にて実施し，個人情報の取扱いに同意がなかったものや，調査項目に未回答や無回答の項目がある場合，また回答の信頼性が乏しいものは調査対象から除外した。

6. 結果の処理：本研究における分析は，統計ソフト SPSS Statistics 22 によって行ない，各検定の有意水準は 5 % 未満に設定した。

Ⅲ 結果

1. 基本統計量と内的整合性

表 1 に各尺度の基本統計量と内的整合性（Cronbach の α 係数）を示した。競争心関する質問項目について，手段型競争心 $\alpha = .88$ ，負けず嫌い $\alpha = .82$ ，社会的承認 $\alpha = .76$ ，過競争心 $\alpha = .73$ ，競争回避 $\alpha = .83$ であった。完全主義に関する質問項目では，高目標設定 $\alpha = .76$ ，失敗過敏 $\alpha = .72$ ，完全欲求 $\alpha = .72$ ，行動疑念 $\alpha = .69$ であった。両尺度とも比較的高い α 係数が得られており，統計的に安定していることが認められた。

表 1 基本統計量と内的整合性

| | <i>N</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | α |
|---------------------|----------|----------|-----------|----------|
| 多面的競争心 | | | | |
| 手段型競争心 | 348 | 27.22 | 5.12 | .88 |
| 負けず嫌い | 348 | 16.35 | 3.36 | .82 |
| 社会的承認 | 348 | 11.15 | 2.67 | .76 |
| 過競争心 | 348 | 10.02 | 3.46 | .73 |
| 競争回避 | 348 | 8.51 | 3.04 | .83 |
| 自己志向的完全主義 | | | | |
| 高目標設定 ^{a)} | 348 | 20.20 | 4.25 | .73 |
| 失敗過敏 ^{b)} | 348 | 16.81 | 4.65 | .70 |
| 完全欲求 ^{c)} | 348 | 20.39 | 4.63 | .82 |
| 行動疑念 ^{d)} | 348 | 21.56 | 4.43 | .69 |

a) 自己に高い目標を課す完全主義 b) 自己のミスを許さない完全主義
 c) 完全でありたい欲求 d) 自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向

2. 調査対象者の属性と競争心の検討

(1) 日常生活満足度と競争心との検討

対象者の日常的な生活における満足度と競争心との関連を明らかにするために、「現在の生活に満足していますか?」という質問項目を設定し、「とても不満である」から「とても満足している」までの5件法で回答を求めた。満足度をとても満足、やや満足と評価した対象者を“満足群”(N=184)とし、とても不満、やや不満と評価した対象者は“不満群”(N=54)として、多面的競争心の下位尺度、手段型競争心、負けず嫌い、社会的承認、過競争心、競争回避の各得点について満足度別のt検定を行った(表2)。その結果、「手段型競争心」($t(236)=4.23, p<.01$)「負けず嫌い」($t(236)=2.67, p<.01$)「競争回避」($t(236)=-2.71, p<.01$)において有意差が認められ、日常生活満足度が高い方が低い方よりも、手段型競争心や負けず嫌いの得点が高く、競争回避の得点が低い結果が得られた。

(2) 目標志向性と競争心との検討

目標を持っているか?といった目標志向性の有無と競争心との関連を明

表2 日常生活満足度と競争心

| | | 満足度 | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>t</i> 値 |
|--------|------------|------------|----------|-----------|------------|
| 手段型競争心 | 満足 (N=184) | | 28.53 | 5.03 | 4.23** |
| | 不満 (N=54) | | 25.19 | 5.37 | |
| 多面的競争心 | 負けず嫌い | 満足 (N=184) | 16.96 | 4.03 | 2.67* |
| | | 不満 (N=54) | 15.56 | 3.20 | |
| 社会的承認 | 満足 (N=184) | | 11.36 | 2.64 | 1.10(n.s) |
| | 不満 (N=54) | | 10.91 | 2.80 | |
| 過競争心 | 満足 (N=184) | | 10.26 | 3.67 | .32(n.s) |
| | 不満 (N=54) | | 10.07 | 3.51 | |
| 競争回避 | 満足 (N=184) | | 8.27 | 3.22 | -2.71* |
| | 不満 (N=54) | | 9.59 | 2.96 | |

* $p < .05$, ** $p < .01$

らかにするために、対象者に対して「現在あなたに目標はありますか？」という質問項目を設定し、“目標がある”と評価した対象者を“目標あり群”(N=258)とし、“目標がない”と評価した対象者は“目標なし群”(N=90)とした。そして多面的競争心の下位尺度得点について目標志向性のt検定を行った(表3)。その結果、「手段型競争心」($t(346)=3.84$, $p < .01$)「競争回避」($t(188.72)=-2.21$, $p < .05$)において有意差が認められ、目標志向性がある方がない方よりも、手段型競争心の得点が高く、競争回避の得点が低い結果が得られた。

(3) 実力発揮度と競争心との検討

大事な場面で本来通りの力が発揮できるか?といった実力発揮度と競争心との関連を明らかにするために、「あなたが試合や試験、面接といった大事な場面で実力発揮できますか?」という質問項目を設定し、“実力発揮できる”と評価した対象者を“実力発揮群”(N=129)とし、“実力発揮できない”と評価した対象者は“実力不発揮群”(N=81)とした。そして、多面的競争心の下位尺度得点について実力発揮度別のt検定を行った(表4)。その結果、「手段型競争心」($t(208)=3.37$, $p < .01$)「競争回避」($t(208)$

表3 目標志向性と競争心

| | | 満足度 | M | SD | t 値 |
|--------|--------------|--------------|-------|------|-----------|
| 手段型競争心 | 目標なし (N=90) | | 25.47 | 5.33 | 3.84** |
| | 目標あり (N=258) | | 27.83 | 4.91 | |
| 多面的競争心 | 負けず嫌い | 目標なし (N=90) | 16.10 | 3.62 | .83 (n.s) |
| | | 目標あり (N=258) | 16.44 | 3.27 | |
| 社会的承認 | 目標なし (N=90) | | 11.03 | 2.82 | .49 (n.s) |
| | 目標あり (N=258) | | 11.19 | 2.63 | |
| 過競争心 | 目標なし (N=90) | | 9.77 | 3.40 | .80 (n.s) |
| | 目標あり (N=258) | | 10.10 | 3.49 | |
| 競争回避 | 目標なし (N=90) | | 9.07 | 2.59 | -2.21* |
| | 目標あり (N=258) | | 8.32 | 3.17 | |

* $p < .05$, ** $p < .01$

表4 実力発揮度と競争心

| | | 実力発揮度 | M | SD | t 値 |
|--------|--------------|--------------|-------|------|-------------------|
| 手段型競争心 | 実力不発揮 (N=81) | | 25.99 | 5.04 | 3.37** |
| | 実力発揮 (N=129) | | 28.42 | 5.11 | |
| 多面的競争心 | 負けず嫌い | 実力不発揮 (N=81) | 16.98 | 3.19 | .61 (n.s) |
| | | 実力発揮 (N=129) | 16.71 | 3.10 | |
| 社会的承認 | 実力不発揮 (N=81) | | 11.28 | 2.84 | .53 (n.s) |
| | 実力発揮 (N=129) | | 11.49 | 2.62 | |
| 過競争心 | 実力不発揮 (N=81) | | 9.59 | 3.36 | 1.91 [†] |
| | 実力発揮 (N=129) | | 10.57 | 3.74 | |
| 競争回避 | 実力不発揮 (N=81) | | 9.46 | 3.17 | -3.07** |
| | 実力発揮 (N=129) | | 8.12 | 3.04 | |

[†] $.05 < p < .10$, ** $p < .01$

=-3.07, $p < .01$) において有意差, 「過競争心」($t(208)=1.91$, $.05 < p < .10$) に有意傾向が認められた。実力発揮群と不発揮群を比較した場合, 実力発揮群の方が手段型競争心や過競争心の得点は高く, 競争回避の得点は低い結果が得られた。

3. 競争心と完全主義との検討

(1) 競争心と完全主義の相関

競争心と完全主義との相関を表5に示す。「手段型競争心」は高目標設定、完全欲求、行動疑念において.13 ($p<.05$) - .49 ($p<.01$) までの有意な正の相関が認められた。「負けず嫌い」は完全主義の全ての下位尺度と.15 ($p<.01$) - .46 ($p<.01$) までの有意な正の相関が認められた。「社会的承認」も完全主義の全ての下位尺度と.19 ($p<.01$) - .33 ($p<.01$) までの有意な正の相関が認められた。「過競争心」は行動疑念を除き.18 ($p<.01$) - .32 ($p<.01$) までの有意な正の相関が認められた。「競争回避」は失敗過敏と行動疑念において.20 ($p<.01$) - .32 ($p<.01$) までの有意な正の相関が認められた。

(2) 完全主義傾向における競争心の比較

各完全主義得点について、 $M \pm 1SD$ を基準に完全主義傾向が高い順から、高完全主義群（以下高群）、中完全主義群（以下中群）、低完全主義群（以下低群）と3群に分類した。そして、競争心の下位尺度得点を従属変数として1要因の分散分析を行い、有意差が認められる場合はTukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行った（表6-9）。

i) 高目標設定（PS）と競争心

手段型競争心 ($F(2,345) = 33.10, p<.01$), 負けず嫌い ($F(2,345) = 28.59,$

表5 競争心と完全主義の相互相関

| | | 自己志向的完全主義 | | | |
|----------------------------|--------|-----------|-------|-------|-------|
| | | 高目標設定 | 失敗過敏 | 完全欲求 | 行動疑念 |
| 多 面 的 競 争 心 | 手段型競争心 | .49** | .01 | .36** | .13* |
| | 負けず嫌い | .40** | .27** | .46** | .15** |
| | 社会的承認 | .33** | .19** | .31** | .19** |
| | 過競争心 | .32** | .31** | .18** | .03 |
| | 競争回避 | -.09 | .32** | .01 | .20** |

* $p<.05$, ** $p<.01$

$p < .01$), 社会的承認 ($F(2,345) = 17.40, p < .01$), 過競争心 ($F(2,345) = 14.52, p < .01$) において有意差が認められた(表6)。多重比較の結果, PS 高群は手段型競争心, 社会的承認, 過競争心の何れにおいても中群・低群よりも有意に高い得点を示していた。PS 低群の負けず嫌い得点はPS 高群・中群よりも有意に低い得点を示していた。また, 競争回避は有意差が認められなかった。

ii) 失敗過敏 (CM) と競争心

負けず嫌い ($F(2,345) = 10.70, p < .01$), 社会的承認 ($F(2,345) = 5.40, p < .01$), 過競争心 ($F(2,345) = 11.29, p < .01$), 競争回避 ($F(2,345) = 16.95, p < .01$), において有意差が認められた(表7)。多重比較の結果, CM 高群は負けず嫌い, 社会的承認, 過競争心, 競争回避の何れにおいても中

表6 高目標設定完全主義 (PS) 3群間の競争心

| | LP ^{a)} (N=46) | | MP ^{b)} (N=274) | | HP ^{c)} (N=55) | | F 値 | 多重比較 |
|--------|-------------------------|------|--------------------------|------|-------------------------|------|---------|-----------|
| | M | SD | M | SD | M | SD | | |
| 手段型競争心 | 24.00 | 6.05 | 26.89 | 4.63 | 31.40 | 3.67 | 33.10** | LP<MP<HP |
| 負けず嫌い | 13.24 | 4.35 | 16.65 | 2.87 | 17.64 | 3.03 | 28.59** | LP<MP, HP |
| 社会的承認 | 9.48 | 3.41 | 11.17 | 2.40 | 12.49 | 2.42 | 17.40** | LP<MP<HP |
| 過競争心 | 8.04 | 3.31 | 10.02 | 3.36 | 11.64 | 3.27 | 14.52** | LP<MP<HP |
| 競争回避 | 8.98 | 3.30 | 8.50 | 2.88 | 8.20 | 3.51 | .83 | — |

a) LP ; PS 低得点群 b) MP ; PS 中得点群 c) HP ; PS 高得点群 * $p < .05$, ** $p < .01$

表7 失敗過敏完全主義 (CM) 3群間の競争心

| | LP ^{a)} (N=59) | | MP ^{b)} (N=236) | | HP ^{c)} (N=53) | | F 値 | 多重比較 |
|--------|-------------------------|------|--------------------------|------|-------------------------|------|---------|-----------|
| | M | SD | M | SD | M | SD | | |
| 手段型競争心 | 27.53 | 5.68 | 26.95 | 5.07 | 28.06 | 4.67 | 1.13 | — |
| 負けず嫌い | 14.92 | 3.87 | 16.39 | 3.07 | 17.77 | 3.42 | 10.70** | LP<MP<HP |
| 社会的承認 | 10.49 | 3.22 | 11.10 | 2.57 | 12.11 | 2.19 | 5.40** | LP, MP<HP |
| 過競争心 | 8.41 | 3.58 | 10.11 | 3.28 | 11.40 | 3.50 | 11.29** | LP<MP<HP |
| 競争回避 | 7.10 | 3.70 | 8.47 | 2.64 | 10.30 | 3.08 | 16.95** | LP<MP<HP |

a) LP ; CM 低得点群 b) MP ; CM 中得点群 c) HP ; CM 高得点群 * $p < .05$, ** $p < .01$

群・低群よりも有意に高い得点を示していた。また、手段型競争心は有意差が認められなかった。

iii) 完全欲求 (DP) と競争心

手段型競争心 ($F(2,345) = 13.82, p < .01$), 負けず嫌い ($F(2,345) = 37.08, p < .01$), 社会的承認 ($F(2,345) = 11.53, p < .01$), 過競争心 ($F(2,345) = 4.94, p < .01$) において有意差が認められた (表 8)。多重比較の結果, DP 高群は手段型競争心, 負けず嫌い, 社会的承認の何れにおいても中群・低群よりも有意に高い得点を示していた。DP 低群の過競争心得点は PS 高群・中群よりも有意に低い得点を示していた。また, 競争回避は有意差が認められなかった。

表 8 完全なる欲求完全主義 (DP) 3群間の競争心

| | LP ^{a)} (N=53) | | MP ^{b)} (N=228) | | HP ^{c)} (N=67) | | F 値 | 多重比較 |
|--------|-------------------------|------|--------------------------|------|-------------------------|------|---------|-----------|
| | M | SD | M | SD | M | SD | | |
| 手段型競争心 | 24.74 | 6.33 | 27.13 | 4.75 | 29.49 | 4.30 | 13.82** | LP<MP<HP |
| 負けず嫌い | 13.45 | 4.10 | 16.46 | 2.87 | 18.27 | 2.72 | 37.08** | LP<MP<HP |
| 社会的承認 | 9.89 | 3.15 | 11.14 | 2.43 | 12.18 | 2.67 | 11.53** | LP<MP<HP |
| 過競争心 | 8.72 | 3.35 | 10.15 | 3.48 | 10.60 | 3.29 | 4.94** | LP<MP, HP |
| 競争回避 | 8.68 | 3.48 | 8.35 | 2.87 | 8.96 | 3.25 | 1.13 | — |

a) LP ; DP 低得点群 b) MP ; DP 中得点群 c) HP ; DP 高得点群 * $p < .05$, ** $p < .01$

表 9 行動疑念完全主義 (D) 3群間の競争心

| | LP ^{a)} (N=73) | | MP ^{b)} (N=205) | | HP ^{c)} (N=70) | | F 値 | 多重比較 |
|--------|-------------------------|------|--------------------------|------|-------------------------|------|--------|-----------|
| | M | SD | M | SD | M | SD | | |
| 手段型競争心 | 26.53 | 4.99 | 27.05 | 5.17 | 28.43 | 5.00 | 2.74 | — |
| 負けず嫌い | 15.62 | 3.15 | 16.28 | 3.10 | 17.34 | 4.07 | 4.94** | LP<HP |
| 社会的承認 | 10.73 | 2.65 | 11.02 | 2.68 | 11.97 | 2.55 | 4.53* | LP, MP<HP |
| 過競争心 | 9.62 | 3.44 | 10.16 | 3.28 | 10.03 | 4.01 | .65 | — |
| 競争回避 | 7.82 | 2.96 | 8.52 | 2.86 | 9.23 | 3.50 | 3.88** | LP<HP |

a) LP ; D 低得点群 b) MP ; D 中得点群 c) HP ; D 高得点群 * $p < .05$, ** $p < .01$

iv) 行動疑念 (D) と競争心

負けず嫌い (F(2,345) = 4.94, p<.01), 社会的承認 (F(2,345) = 4.53, p<.05), 競争回避 (F(2,345) = 3.88, p<.01) において有意差が認められた (表9)。多重比較の結果, D 高群は負けず嫌い, 社会的承認, 競争回避において, 低群よりも有意に高い得点を示していた。また, 手段型競争心, 過競争心については有意差が認められなかった。

(3) 競争心を規定する完全主義の検討

完全主義が競争心に与える影響について検討するために競争心を目的変数に PS, CM, DP, D を説明変数に重回帰分析 (強制投入法) を行った。その結果を表10に示す。4 変数による重決定係数 (R^2) はいずれの場合も有意であった。手段型競争心では PS が最も強く影響し (標準偏回帰係数 (以下 β) = .44), CM ($\beta = -.17$), DP ($\beta = .14$) がそれに続いた (図1)。負

表10 標準偏回帰係数 (従属変数: 競争心)

| | | 自己志向的完全主義 | | | | R^2 |
|----------------------------|--------|-----------|-------------------|--------------------|--------------------|-------|
| | | 高目標設定 | 失敗過敏 | 完全欲求 | 行動疑念 | |
| 多 面 的 競 争 心 | 手段型競争心 | .44** | -.17** | .14* | .05 ^{ns} | .27** |
| | 負けず嫌い | .20** | .13* | .31** | -.06 ^{ns} | .25** |
| | 社会的承認 | .22** | .06 ^{ns} | .13 ^{ns} | -.08 ^{ns} | .14** |
| | 過競争心 | .32** | .32** | -.08 ^{ns} | -.13* | .18** |
| | 競争回避 | -.15* | .34** | -.08 ^{ns} | .12* | .15** |

*p<.05, **p<.01 R^2 重決定係数

注) 表中の数値は標準偏回帰係数 (β)

図1 手段型競争心に影響する完全主義要因

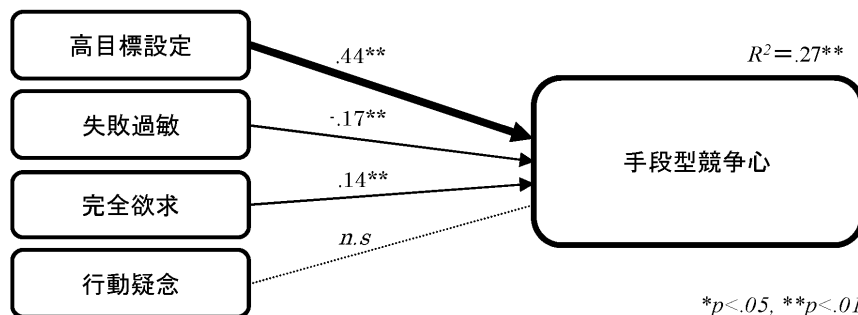


図2 負けず嫌いに影響する完全主義要因

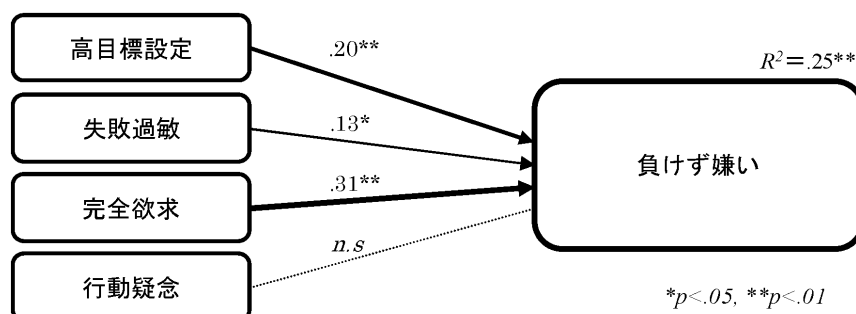
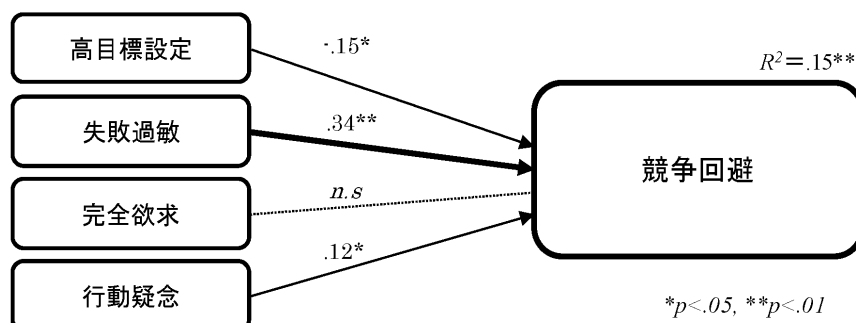


図3 競争回避に影響する完全主義要因



けず嫌いでは DP ($\beta = .31$) PS ($\beta = .20$) CM ($\beta = .13$) がそれぞれ続いた (図2)。社会的承認では PS ($\beta = .22$)、過競争心では PS ($\beta = .32$) CM ($\beta = .32$) D ($\beta = -.13$)、競争回避では CM ($\beta = .34$) PS ($\beta = -.15$) D ($\beta = .12$) がそれぞれ影響していた (図3)。

IV 考察

1. 競争心と調査対象者の属性

調査対象者の日常生活満足度や目標志向性、実力発揮度と競争心との関連について分析を行ったところ、手段型競争心や競争回避に大きな特徴が表れた。手段型競争心を志向することは、日常生活満足度や実力発揮度、目標志向度を強めることを示唆しているものと考えられた。手段型競争心は、競争を優劣だけに使うのではなく、“競争することで自分の能力が発揮される”といった自己啓発的な意識が強い競争心であり、他には他者との関係性 (例えば友情等)

を強めるためといった、競争を別の目的のために利用する意識でもある。手段型競争心の意識はライフスキルにつながる意志性として、その重要性が示唆されたと言える。

逆に日常生活の満足度や実力発揮度を低下させてしまう傾向が認められる競争心が競争回避であった。今回の分析では、競争回避得点が高くなると日常満足度が不満であったり実力発揮ができない結果であった。競争回避は、競争状況を避けたり不快に感じる意識である。競争を回避する背景として考えられることは、競争することで負けた体験や落ち込んだ体験が自身の自尊心を傷つけ劣等感を有している状態であったり、競争状況を自己啓発的な手段として使うことに意識が及んでいないことも想定される。勝敗の優劣や他者との比較といった外的基準のみに意識が向かってしまっている状態とも考えられることが示唆されるとともに、競争に取り組む際の意味づけについて、その競争に取り組む主体者に対して、適応的な競争意識を伝えていくことの重要性が示唆された。

2. 競争心と完全主義との検討

(1) 完全主義傾向における競争心について

完全主義と競争心の相関分析から、完全主義の高目標設定（PS）・完全欲求傾向（DP）は競争回避以外の競争心と正の相関が認められ、失敗過敏傾向（CM）は手段型競争心以外の競争心と正の相関が認められた。行動疑念（D）については有意な正の相関が認められるが、係数としては.13～.20と弱い関連性のため競争心との関連は弱いと考えられた。

完全主義を独立変数とし、競争心を従属変数とした分散分析では、高目標設定完全主義（PS）・完全なる欲求完全主義（DP）を高く志向する群がより強い競争心を有しているものの、例外として競争回避のみ高目標設定完全主義（PS）・完全なる欲求完全主義（DP）の志向性の程度に有意差がなく関係性が認められなかった。これは、自分に高い目標を課すことにこだわる志向性や完璧であることにこだわる欲求は競争状況を避けるといった回避性に関与しないことが示唆された。それだけ目標に強いこだわりを

持つこと、完璧を追及することで競争状況に没入するかの如くコミットしていくことが考えらる。

これとは異なる分析結果となった完全主義が、失敗過敏（CM）である。失敗過敏を強く志向する群はより強い競争心を有しているものの、例外として手段型競争心のみ失敗過敏の志向性の程度に有意差がなく、関係性が認められなかった。また、失敗過敏を高く志向する群の方が、より競技回避の志向性も高くなる傾向にあり、ミスしないことにこだわるあまりに競技状況から避けることが考えられた。手段型競争心を有することは前述のように、生活満足度や実力発揮度を高めることに寄与していることが示唆されていることを踏まえると、手段型競争心に対してもポジティブな影響を示さない失敗過敏完全主義的志向性は強めないことが望ましいと言えよう。

(2) 競争心を規定する完全主義の影響に関して

重回帰分析の結果から、自己志向的完全主義は競争心（手段型競争心・負けず嫌い・社会的承認・過競争心・競争回避）それぞれに対して異なった影響を示していることが明らかとなった。手段型競争心（図1）は高目標設定（PS）からの影響を強く受けており、高い目標に志向しそれにこだわる完全主義が競争だけに留まらない自己啓発的意識を形成していることが考えられる。負けず嫌い（図2）は完全欲求（DP）や高目標設定（PS）からの影響を受けており、完璧であることを欲する完全主義や目標設定志向性が、他者や自分に負けることを嫌う負けず嫌いの気持ちを形成していることが考えられる。負けず嫌いとスポーツの動機づけ理解についての先行研究（西田ら，2014）では競技レベル別に負けず嫌いの要因を競争心の観点から分析し、競技力の高い群は手段型競争心からの影響を受け、競技力の低い群は社会的承認・過競争心からの影響を受けていることを見出している。このことから競技水準が向上するにしたがって、手段型競争心へ変容することが想定され、本研究で取り上げている高目標設定完全主義（PS）といった目標達成にこだわりつつ、その目標や課題を徐々に達成していくこ

とで、社会的承認というような外発的に動機づけされている状態から、自分のために目標や課題に自発的に取り組む内発的動機づけ状態の手段型競争心に変容していくことが考えられる。競争回避（図3）は失敗過敏（CM）からの影響を受けており、失敗やミスを過度に気にする完全主義が強くなることから、競争状況から避けてしまう気持ちを形成していることが考えられる。完全主義と抑うつ傾向の関係についての先行研究（桜井ら、1997）において、失敗過敏（CM）の特徴について、“失敗過敏（CM）傾向を強くもつとストレスの強さに関係なく、常に抑うつや絶望感に陥りやすい状態になる。”とまとめている。つまり競争といった優劣が付きやすい状況において、負けるといった自分にとって不都合な状態になった場合、極度な落ち込み感や抑うつ感にさいなまれることが予見され、それゆえ不快な感情を誘発しないよう競争状況から回避しているものと考えられる。また競争回避を抑制するような完全主義の影響として高目標設定（PS）が認められたがその影響度はとても弱い。よって、完全主義以外の要因が競技回避に陥らない事柄に関係していることが考えられるため、別の心理要因を検討する必要がある。

完全主義のポジティブ面とネガティブ面が指摘される中、本研究から競争心へポジティブに働きかける完全主義は高目標設定（PS）・完全欲求（DP）であり、ネガティブに働きかける完全主義が失敗過敏（CM）であることが示唆された。また行動疑念（D）については競争心へ影響は若干あるがその力は小さく、完全欲求（DP）については競争心への影響度からは負けず嫌いへの関与がある以外その関与は小さい。これらのことなどから競争心と関連する主な完全主義は高目標設定（PS）と失敗過敏（CM）であることが明らかとなった。

以上のことから、競争環境下における認知行動療法的カウンセリング支援策としては、手段型競争心を高めるために高目標設定の完全主義的認知変容へ促す支援が有効であることが考えられた。また失敗過敏の完全主義が高いことは、日常生活の不満感や実力不発揮感また競争回避に繋がりやすい。それゆえ、失

敗過敏的完全主義を棄却できるような認知変容を促すカウンセリング支援が有効であることが示唆された。

今後は競争心や完全主義パーソナリティの側面が健康・不健康とどういった関係があるのか、不安や抑うつというような感情面での比較検討が必要であろう。特に手段的競争心を有して競争に取り組むことが、過剰な劣等感を助長することを防止し、自尊感情を高めることに繋がることが示唆されている(太田, 2010)。本研究において、手段的競争心は高目標設定完全主義が関与していることが明らかになった。スポーツの負けず嫌いの研究(西田ら, 2014)では競技スキルの高まりとともに目的型競争心から手段型競争心に競争心の種類が変容してきているが、その際の認知変容がどのようになされているのか。勝敗や優劣だけにこだわらず、自己の能力の研鑽といった自己啓発的な面を向上させるために競争を手段として利用するような意識を有することに必要な要因については、本研究で抽出された失敗過敏完全主義から高目標設定完全主義への認知変容に焦点を当てたプロセスモデルの検討が今後必要であろう。

参考文献

- Frost, R.O., Marten, P.A., Lahart, C., & Rosenblate, R. The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy & Research* 14,1990,449-468.
- 伊藤菜穂子 不適切な動機による完全主義が心理的不適応に及ぼす影響 心理臨床学研究 22,5,2004,542-551
- 西田保・佐々木万丈・北村勝朗・磯貝浩久・齊藤茂 負けず嫌いとはスポーツ動機づけの理解に向けて 総合保健体育科学 37,1,2014, 13-21
- 太田伸幸 競争概念の再検討—競争心の測定に関するレビュー— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学) 48,2001,301-313.
- 太田伸幸 ライバルの肯定的側面と否定的側面の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学) 50,2003,11-18.
- 太田伸幸 多面的競争心尺度作成の試み 現代教育学部紀要 2,2010,57-65.
- 桜井茂男・大谷佳子 自己に求める完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究 68,1997,179-186
- 参議院文教・科学委員会議事録 第153回国会文教科学委員会 2001, 4
- 種ヶ嶋尚志・中里弘 青年期後期における完全主義がアイデンティティ形成に与える影響 桜文論叢 82,2012,227-240

参考資料

本研究で使用した尺度項目一覧を以下に示す。

自己志向的完全主義尺度（桜井・大谷，1997）

●完全性欲求（DP）尺度

1. どんなことでも完璧にやり遂げることが私のモットーである
2. ものごとは常にうまくできていないと気がすまない
3. 中途半端な出来ではガマンできない
4. できる限り，完璧であろうと努力する
5. やるべきことは完璧にやらなければならない

●高目標設定（PS）尺度

1. いつも，周りの人より高い目標をもとうと思う
2. 何ごとにおいても最高の水準を目指している
3. 高い目標を持つほうが自分のためになると思う
4. 簡単な課題ばかり選んでいては，だめな人間になる
5. 自分の能力を最大限に引き出すような理想を持つべきである

●失敗回避（CM）尺度

1. 「失敗は成功のもと」などとは考えられない
2. ささいな失敗でも，周りの人からの評価は下がるだろう
3. 人前で失敗することなど，とんでもないことだ
4. 少しでもミスがあれば，完全に失敗したのも同然である
5. 完璧にできなければ，成功とはいわない

●行動疑念（D）尺度

1. 注意深くやった仕事でも，欠点があるような気がして心配になる
2. 何かやり残しているようで，不安になることがある
3. 納得できる仕事をするには，人一倍時間がかかる
4. 念には念を入れる方である
5. 戸締りや火のしまつなどは，何回か確かめないと不安である

多面的競争心尺度（太田，2010）

●手段型競争心尺度

1. 競争することで相手とお互い高めあうことができる
2. 競争することによって自分を強くすることができる
3. 争することによって他の人との友情を築いたり，深めたりすることがある
4. 競争するときは自分自身に目標を設定する
5. 競争を通して自分の能力を発見することができる
6. 競争することで能力以上の力が引き出せる
7. 他の人と競争するとき最善の努力を尽くす

●負けず嫌い尺度

1. 私は運動の競争で負けたとき、確実に落ち込むであろう
2. 競争相手に負けるのは悔しい
3. 私は、負けず嫌いだ
4. 私は勝ったときが一番楽しい

●社会的承認尺度

1. 社会の高い地位を目指すことは重要だと思う
2. 就職する会社は、社会で高く評価される場所を選びたい
3. 世に出て成功したいと強く願っている

●過競争心尺度

1. 勝つためだったら、どんな犠牲でも払う
2. 人より勝るためには手段を選ばない
3. 負けても潔い人というのは、単にやる気が無い人のことである
4. 注目をあびるためにはみんなに勝たなければならない

●競争回避尺度

1. 私は競争的な状況に不快感を感じる
2. 他の人との競争を意識すると、かえってその物事をする気になれない
3. 私は他の人と競争することを避けようとする

イルゼ・アイヒンガー『鏡物語』・『ベビー・チャンドラー』における「生まれ出る」こと

——ハンナ・アーレント『アウグスティヌスの愛の概念』における
「創造者」Creator と「被造者」creatura から見た解釈の試み——

真 道 杉

はじめに

2006年に出版された『サブテキスト』¹は、オーストリア人作家イルゼ・アイヒンガー（1921-2016）が生前に発表した最後の単行本である。その中の最後の1章は「ベビー・チャンドラー」²というタイトルで、テキストの最後にはハードボイルド作家として知られるレイモンド・チャンドラー（1888-1959）が赤ん坊だった頃の写真が掲載されたショート・エッセーである。『大いなる眠り』（1939）³などの推理小説で有名なこの米国の作家の作品をアイヒンガーは非常に高く評価していた。チャンドラーが「私は私の一生を無に陥る一步手前で踏みとどまって過ごしてきた」⁴と言ったように人生の深淵を常に意識した生き方をしていたことにアイヒンガーが共感することが大きかったのであろう。またチャンドラーが米国生まれではあるがアイルランド系の生まれで子供時代を英国で過ごし、ヨーロッパとアメリカの二つの視線を持って執筆活動を行ったことは、アイヒンガーとその双子の妹がウィーンとロンドンの生活を送ったこと⁵、二つの視点で世界を見ていたこととも共通する。

『サブテキスト』の元になった日刊紙の連載⁶をアイヒンガーは発作（おそらく脳梗塞）を起こして中断し、その後作品は発表されていない。本書はそれまでに掲載されたエッセーのアンソロジーとして出版されたものである。編集の

際にはこれが生前最後の出版になることが意識されていたであろう。

チャンドラーの赤ん坊の頃の写真で作品の最後を飾る⁷という趣向は、編集者である Reto Ziegler によって編集されたものと推察されるが、全作品の最後に赤ん坊の写真を配することで、アイヒンガー作品全体を総括的且つ象徴的に表すこととなった。物語の最初ではなく最後に生誕を据える構造はアイヒンガー初期の代表作の一つである「鏡物語」(1949)⁸にも通じる。

本論では、このアイヒンガー「最後」のテキストである「ベビー・チャンドラー」におけるアイヒンガーの生死感、特に「生まれ出てくること」についてそして、それと類型の構造をもった初期の短編「鏡物語」を対象とし、アイヒンガー作品において「生まれ出ること」がどのように描かれてきたのかを考察したい。また作品の思想的背景を考察するにあたり、アイヒンガーと同時代人でもあり、同じユダヤ系の思想家ハンナ・アーレント (1906-1975) の著作『聖アウグスティヌスの愛の概念』(1929)⁹とそれに対する文芸理論家ジュリア・クリステヴァ (1941-) の解釈¹⁰を考察のために援用することとする。ハンナ・アーレントをここで援用するにはいくつか理由がある。両者には大きく3つの共通点がある。まず、両者はユダヤ人あるいはユダヤ系として20世紀のドイツ語圏で生まれて、終生自分自身の中にあるユダヤ性と向き合い続けた。アーレントが書いた評伝『ラーエル・フォン・ファルンハーゲン』(1958 英語版 / 1959 ドイツ語版)¹¹とアイヒンガーの短編「ラーエルの衣装」(1976)¹²が偶然か否か同じ名前の女性を扱い、それぞれにユダヤ人女性の運命を描いているが、このような作品にも両者が扱うテーマの近似性が指摘できる。二つ目の共通点として、アーレントの師であったマーティン・ハイデッガー (1889-1976) とアイヒンガーは交友関係にあった。ワルター・キューンの考察によると交友関係は戦後に始まり、1950年代のアイヒンガー作品にはハイデッガーの存在論の影響がみとめられる。アーレントとアイヒンガーはそれぞれにハイデッガーの思想に近くで触れてそれぞれの著述にその影響を受けていたといえよう。本論ではハイデッガーの影響については論じないが、人間存在を深く考察する方向性においてアーレントとアイヒンガー両者をつなぐ共通点であることをここで指摘してお

きたい¹³。三つ目は、両者ともホロコーストを経験し、また自らのユダヤ性を強く意識しつつも、キリスト教とも深く関わっている点である。アーレントがその博士論で扱ったのは初期キリスト教の聖人アウグスティヌスである。アイヒンガーはカトリック教徒として育てられ、初期の作品からキリスト教のモチーフを随所で扱っている。このように見て行くと、両者の置かれたフィールドの近似性を見て取ることができる。そこで、本論では、アーレントの博士論文のテキストを援用しながらアイヒンガーのテキスト解釈を試みる。そこからアーレントが展開した生死観・世界観とアイヒンガーのテキストにおけるそれとを比較し、アイヒンガーテキストにおける生死観について考察してゆく。

1.1. ハンナ・アーレントの著作への文学的アプローチ

ハンナ・アーレントの著作は、千葉眞がマキャベリを引き合いに出し、「マキャベリの謎」と引っ掛けて「アーレントの謎」¹⁴と評したように、読者及び研究者たちを困惑させる要素を多く含んでいる。政治思想にとどまらず哲学、倫理学、社会学、歴史学に及び、さらには『ラーエル・ファルンハーゲン——ドイツ・ロマン派のあるユダヤ女性の伝記』においては評伝文学の分野までの広がりを見せているその幅広さ、そしてその分野横断する思想を表現するディスクールがそれぞれの学問領域を超えたところにあることもアーレントを理解する上での困難さの一つの大きな要因であろう。多次元に及ぶその論考は学問分野を超えた複合的な要素を多分に持ち、その多元性故に一学問分野からのアプローチには多くの難解さをもたらし、それゆえに常にしばしば「謎」を残しつつ読む者の前に立ちはだかる。アーレント研究は現在でも多分野における研究者が多くの論考を世に出しており、この活発な研究活動はまだ将来まで続いてゆくであろう。

その中で、ルーマニア出身でアーレントと同じユダヤ系の文学理論家であるジュリア・クリステヴァはアーレントの「仕事の哲学的な側面である言語や自己、身体や政治空間、そして生といった概念」¹⁵から解きほぐす独自のアプローチを展開している。アーレントの博士論文である『アウグスティヌスの愛

の概念』、それに続く評伝『ラーエル・ファルンハーゲン』とその後に書かれた全体主義に関する政治思想に関連する著作の間にある「断絶」は、おそらく「アーレントの謎」を深くしている大きな要因の一つであるが、それをつなぐものをクリステヴァは「ストーリーと歴史記述」¹⁶であると説明し、文学的なアプローチを用いて、アーレント前期の著作と後期著作とをつなぐものは「語る言葉に示される政治的実践である人間的な生という概念」¹⁷と説く。このアーレントの言語活動に着目した文学的なアプローチは、「アーレントの謎」に近づく一つの画期的な方策を提示し、アーレントの著作における多次元にまたがる分野における難解さの克服へつなげている。

本論で扱う、オーストリア出身のユダヤ系作家イルゼ・アイヒンガーは、その作品において、アーレントが哲学的なアプローチを試みた言語、生、自己といった問題、そして物語ることを強く意識した作品を生み出した作家である。両者は、前述の通りユダヤ系の出自をもち、そして第二次世界大戦のホロコーストを経験した点でも共通の経験的バックグラウンドを持っている。ハンナ・アーレントの『アウグスティヌスの愛の概念』は1928年に博士論文として書かれたものであり、第二次世界大戦のショアはまだ経験される以前に書かれたものであるが、イルゼ・アイヒンガーの作品は全て1945以降に発表されたものである。両者の著作を考察する上で、ホロコーストの影響については作品の成立年を踏まえて考慮されなければならない。ホロコーストの体験は両者の生死観に大きな影響を与えていることは明らかであるが、両者に共通して見られることは、戦争体験の前から、生まれてきた存在としての自分や人間について考察をしてきていることである。本論ではその点にあえて着目したい。アーレントの場合はホロコースト体験の前に書かれた『アウグスティヌスの愛の概念』において後の著作全ての基礎となる人間存在についての考察を深めている。アイヒンガーの場合は、幼年期の回想等において、彼女の二ヒリスティックな生死観は戦争体験の前からあったものであると度々言及している。この点を踏まえたうえで考察を進めてゆきたい。

本論の目的はアーレントとアイヒンガーの思想の近似性に着目しつつ、アイヒンガー文学の理解に新たな視座を持ち込み解釈の幅を広げることにある。

1.2. ハンナ・アーレントの『アウグスティヌスの愛の概念』における生死観

『アウグスティヌスの愛の概念』の第2章1節¹⁸においてアーレントは「創造者」Creatorと「被創造者」creaturaについて、そして「被創造者」の起源Ursprungとしての「創造者」について考察を展開している。「被創造者」である人間存在についての考察は後のアーレントの政治思想の元にもなってゆくが、アイヒンガーの作品世界における生死観を考察する上でも示唆に富む。

アーレントはアウグスティヌスの世界概念の中にギリシア的な世界観が受け継がれていることを指摘し、人間存在をその中の部分であると位置づける。

「存在とは、ギリシア的伝統では全体における「世界」Kosmosを表している。そしてその「世界」は自らの諸部分の可変性とは無関係に同一のものであり続ける。「世界」の各部分が存在するのは、ひとえにそれが全体を構成する部分であり、そのようなものとして全体に参加するものだからである。」¹⁹

そして、その可変性を持つ人間の現世の生は「「何処から」Woherと「何処へ」Wohinとの関係で、自らを探求する」²⁰。そして、この「二つの問いは、生の「否定性」の二側面——「いまだ…ない」nondumと「もはや…ない」iam non——について探求している」²¹という。アーレントはこの二つの否定性、つまり生まれ出てくる前の起源を表す否定性「いまだ…ない」ともう一方の否定性である死「もはや…ない」を同一のものとは見なしていない。「いまだ…ない」の否定性は、「被造物」が「無から創造された」ex nihilo facta存在である限り、たしかに「被造物」にとって過去の極限は「非存在」non esseである」²²。しかし、「被造物」が実際に存在へと呼び出され」「同時に「始源としての最高存在」から派生する」存在であるかぎり「被造物」は「自らに帰属する存在」である自らの起源に出会う²³。つまり生まれ出る前の

否定性は「一つの積極的な意味を有している」²⁴。そして、その起源に向かう「立ち返り」はアーレントの思想においては「至福の生」へと帰結する。

「至福の生」は、(中略)今持って想起される過去として、未来に展開されるべき可能性にほかならない。(中略)「至福の生」は、こうした特殊な可能な存在 *Möglichkeitsein* においてあり、すべての地上的かつ現世的なものに先立つ一つの過去から想起されることができる。その限りにおいてのみ、「至福の生」はすべての人間的努力の基盤となることができる。」²⁵

それに対して、もう一方の否定性である「死」については、「本来取り消すことのできない無として理解され」²⁶る。そして、「その無の前において生が自らを救い出すことができるのは、ひとえに「立ち返り」においてである」²⁷という。死を目の前にして人間が自らを救おうとするとき、もう一つの「まだ...ない」もう一つの無に向かって「立ち返」ろうとする。アーレントはそれを人間が持つ一つの普遍性と捉えていた。そして、その普遍的且つ必然的な「立ち返り」をアイヒンガーは作品の中で具現化している。

2. 「鏡物語」・「ベビー・チャンドラー」以前のアイヒンガー作品における生死感

2008年のインタビューで、アイヒンガーは次のようなやり取りをしている。

「私は自分の存在は全くもって不必要なものだと思っています。人生がどのようなものであったとしてもです。良い経験をして悪い経験をしてどちらにしても同じことです。私はもう子供の頃から、突然生まれ出てくることがとてつもない無理な要求だと思っていました。せめて、そのまま生まれずにいたいかどうか聞いてからにしなければならぬんじゃないでしょうか。もし聞いてくれていたら、わたしは生まれてこなかったでしょう。」²⁸

このインタビューから、アイヒンガーが持つ生死観は戦争体験以前からアイヒンガーの中にあったことがわかる。生まれてきたくなかったという一種衝撃的な発言は読者にショックを与えるだけでなく、生まれ出てくることが本人の意思とは無関係に、場合によっては意思に反して起こるのだということをこの文章は明確に表現している。自身が体験してきたこと、つまり良い人生であるかどうかということとは関係なく生まれてくることが「無理な要求」というのである。その「無理な要求」に答えることがアイヒンガーにとっては生きることであった。ここで注目したいのは、「せめて、そのまま生まれずにいたいかどうか聞いてからにしなければならないんじゃないでしょうか。」という一節である。生まれる前に生まれたいかどうかの意志の確認をしてほしいという要求の前提には、アーレントが言及した「まだ...ない」世界における自らの存在そのものを認めている世界観が必須である。「まだ」生まれてい「ない」世界の中で「生まれたいか聞いて」欲しいと思っている存在は、ここでは意思が備わった存在として理解されている。この存在への理解はまた現世で生きることだけが存在するということではないという考えを反映している。ここにはまた同時に、「創造者」への直接的で反発的な語りかけをも見て取ることができる。アーレントが指摘したギリシア的な世界観はその後のヨーロッパにおけるユダヤ、キリスト教的な世界観の中に継承された。アイヒンガーは現世以前の世界における創造者と自己の存在との関係性の中で自らの存在を規定しながらも、その絶対的な創造者や絶対的な権力に対して読者の目を開かせるような疑問を突きつける。アーレントが考察した世界観の根源へとアイヒンガーはそのディスクールを用いて読者を誘うのである。

同じインタビューでアイヒンガーは自分が生きることについても語っている。

「祖母と一緒にいた幼少期は幸せでした。わたしの人生は双子の妹がいたので、始めから難しいものでした。一人の人間としてはみてもらえないのです。私たちはその上、母ですら見間違えるくらいにそっくりだったのです。」²⁹

双子の妹がいることにより、自分が一人の独立した人間だと認めてもらえない、いなくてもよい存在であるとの意識をアイヒンガーは常に持っているという特殊な事情もここでは大きな役割を果たしている。自分自身の存在そのものが双子の妹と常に一緒に扱われる二重性、一人がいなくてももう一人がいれば自分の分身として存在してくれる。しかしその分身は自分自身とは全く別の人格を持ち別の人生を歩む存在である。この意識は前述の生まれる際の選択肢という発想へも少なからず影響を与えていると考えられる。アイヒンガー姉妹は実際の人生においても作品においても、それぞれをしばしば真逆の立場に立っていた³⁰。自分が生まれ出なくても、もう一人の妹が生まれていてくれればという側面がアイヒンガーの生死観の中に一つの要素として絡んできていることも見逃せない。

「鏡物語」と同時期に書かれた「絞首台の上の演説」(1952)³¹においては、戦争直後のアイヒンガーの生死観がよく表れている。死刑判決を受けて絞首台の上に立つ男が演説をしている間に突如として恩赦を受ける。ここにはアイヒンガーの戦争体験が暗示されている。アイヒンガーはユダヤ人の「混血児」として生まれ、ヒトラー政権下のウィーンで、ゲシュタポ本部のすぐそばの住居へ強制移住させられて生き延びた。戦争中、母方のユダヤ人の祖母や叔父叔母が強制収容所に連行され、二度と戻ってこなかった運命を間近で見ており、改宗ユダヤ人であった母親をかばいながら戦争中を過ごしたアイヒンガーは常に死と隣り合わせの生活を送っていた。そのような「死刑判決」を受け、常に「絞首台の演説」をしている状態から、戦後突如その「死刑判決」が「恩赦」となり、再び生きろと言われた。

死刑執行人がいなくなった後、男は死刑執行人に向かって叫ぶ。

「行くな、行くな、こっそりいなくなるな。免れた死のなかに、慈悲もない見せ掛けの恩赦の中に一人にしないでくれ。望んでもいない望みの中へ突き返されたのはこれで二度目だ。天は未だに俺が足元の地面を失うには重すぎると

思っている。これからも俺は石の上を歩き続けなければならないのか。俺を安堵して憩わせ、他の星へ行けないように引きつける力もないこの地面の上を。俺はこれで二度もこの世に生まれてきた。今度は誰がミルクを飲ませてくれるんだ。」³²

ここで、「死刑判決」を宣告した「国」も、そして「恩赦」を下した「国」も当然死刑判決を受けた人間の意思とは関係なく生殺与奪の権利を行使する。その暴力的な権力とナチス政権の不条理さに対する怒りがアイヒンガー文学の一つの大きなモチベーションとなっていることは明らかである。が、ここでもう一つ着目したいのは、「二度」生まれてきたというときの「一度目の生誕」についてである。「望んでもいない望み」の「望み」とはつまり生きることである。生きることをここでは「望んでいない」という。「安堵して憩」うこともない「地面」に自分はこれからも縛り付けられて生きてゆかなければならないといって男は嘆く。生まれてきた世界に対して、自分は生きることを「望んでもいない」という。これを戦後に破壊され尽くしたヨーロッパに対する絶望と解釈することもできるが、アイヒンガーの場合は、前述の通りそれだけではない。戦争体験だけではない、生きることへの絶望感を生まれながらにして持っていた上に戦争体験が重なって、「二度生まれてきた」二重性がある。この理解を前提に、「鏡物語」と「ベビー・チャンドラー」を考察してゆく。

3. 「鏡物語」

アイヒンガーの短編「鏡物語」は1949年にウィーンの日刊紙 Wiener Tageszeitung に発表され、その後1952年に47年グループで朗読をして47年グループ賞³³を受け、大いに注目された。短編集にも数度にわたり発表されている作品である。1991年までに発表された作品を8巻にまとめた作品集によると、最初の長編小説『より大きな希望』（1948）³⁴を書き終えてすぐに書き始められ、約1年半後の1949年夏に書き終えられている³⁵。

この作品が47グループ賞を受けた際、アイヒンガーはその作風がカフカに似

ているとされ、「カフカ嬢」と呼ばれたが、それに対し自分はカフカのエピソードではないと言って反論した³⁶。カフカについては、前述の2008年のインタビューで以下のように言っている。

「彼はとても真摯です。カフカは預言者でした。私は彼の作品を読むことができませんでした。『城』を読んだ後途方もなく悲しくなり、暗い気持ちになりました。私たちが支配されている権力が、政治的な権力とそして存在の権力が圧倒的な力で描かれていたからです。彼の文章がどれだけ正確であるのか、私はすぐに気づきました。」³⁷

ここで言及されているのは、カフカの文学に圧倒されたアイヒンガーの経験と、カフカの『城』に描かれている、政治的権力とこの世に人間を生み出す大きな力の二重の力によって存在させられ支配されている人間像である。人間の存在がこの二重の権力に支配されているという絶望的な状況を、アイヒンガーはカフカの文学の中に鋭く読み取っていた。カフカの作品でその力の前に崩折れてゆく主人公の救いようのない運命はアイヒンガーにとっては絶望的なものに映ったにちがいない。カフカの描くその権力の圧倒的な力が正確であればあるほど、カフカに対する畏敬の念と共にその権力の大きさもアイヒンガーにとっては脅威となったであろう。アイヒンガーはその後カフカから距離をおき、「私は彼の作品を読むことができませんでした。」と公言し続けた。そして自身の文学の中ではそのふたつの圧倒的な力に抗おうとしていた。だからこそアイヒンガーは「カフカ嬢」と呼ばれることに反論したのでであろう。その姿勢が「鏡物語」には反映されている。

クリスティーネ・イヴァノヴィッチは、「鏡物語」の作品成立の背景に、アイヒンガーのイギリス滞在中の経験があることを示唆している³⁸。その証として、アイヒンガーの以下の言葉を引用している。

「この物語は、妹と一緒にロンドンのイーストエンドにある寂れた煉瓦造りの建物の前に行ったとき、ここで墮胎手術をした後にとある女性が亡くなったという話を妹がしてくれたことがきっかけで生まれました。その女性のことはうっすらと覚えていました。この女性の残酷な運命はロンドンとウィーンの風景の中から決定付けられたという印象を受けました。グリム童話や幽霊話が風景の中から生まれるように。」³⁹

本短編は墮胎手術を受けた女性が死んで葬られるプロットと、それを鏡に映したように遡って彼女の人生をその誕生までを語り手のモノローグが語るプロットがオーバーラップするように構成されている、異色の構造をもった作品である。本作については、例えばシルベヌ・フォール・ゴットバートがアンドレ・ブルトンのシュールレアリズム論を引き合いに出してシュールレアリスム的な要素を指摘しているが、そこでは対峙する二つの対立要素がもはや認識されない世界観が描き出されているとの見解である⁴⁰。このような指摘は一つの側面からは当たっていると言えるが、自動筆記などの意識の外における製作過程の実験を行ったシュールレアリストたちの手法とアイヒンガーの著作における緻密に計算された構成は製作過程において相容れない。この作品は、むしろアーレントがアウグスティヌス論で展開したような世界観に裏打ちされた生死観を巧みな構成により浮かび上がらせようとしている。死に向かう時間軸と同時にその反対の根源 Ursprung へ立ち返る時間軸を巧みに交錯させることにより主人公の存在を現世の生とは別の次元まで及ぶ絶対的なものとして描き出そうとしている。

時間軸が交差する構造については、アネッテ・ラトマンによる先行研究において詳細な分析がなされている⁴¹。本論では、その交錯している時間軸の中でもアイヒンガーの生死観が最も顕著に表現されている生死に大きく関わる部分と鏡の反転に焦点を当てて考察してゆく。

「鏡物語」においては一人の女性が死に向かう物語と、死から自分の誕生に

向かう物語、そして墮胎によって引き起こされるもう一つの子供の死が描かれている。二重の死を時間軸に沿って描くテキストに交差する構成の中で一人の女性の死に際から生まれる瞬間までが逆の時間軸によって語られる。死んでしまった女性が病室から運び出されるシーンは次のように描かれている。

「あなたを乗せたベットが病室を出てきて、空が緑になるのが見えたら。代理司祭に弔いの祈りを捧げてもらわないで済まそうと思ったら。さあ、あなたが起きるときよ。静かに、朝の光がきらきらとよろい戸越しに差し込むと、子供がそっと目を覚ますように、気がつかれないように、看護婦に見られないように。そら急いで！」⁴²

死んだ女性が登って行く天である「空」が「緑」になるということはつまり、空が緑の生えた地面になり、天と地が逆転することを暗示している。誰にも見られずに、生き返ってゆけと語り手は女性に語りかける。主人公の女性に寄り添うように語り手は女性をその語りで導いて行く。がしかし、その運命を逆転させたのは語り手ではなく、主人公本人の言葉である。

「わたしの子供を生き返らせて！」

そんなことをこの老婆に要求した者など今までいなかった。でもあなたは要求する。鏡があなたに力を与えてくれる。染みだらけの盲目の鏡が未だかつて誰も要求しなかったことをあなたに言わせる。

「子供を生き返らせて。さもなければその黄色い花をひっくり返すわよ、あんたの目をえぐり出して、そこの窓を開け放って路地中に大声で言ってやるわ、みんなに聞こえるように、皆が知っていることを、大きな声で」

すると老婆はぎょっとする。この激しいショックの中で、盲目の鏡の中で彼女はあなたの望みをかなえてくれる。老婆は自分が何をしているのかわからないけど、盲目の鏡の中ではうまく行く。恐怖は高じて、また再び激痛が走る。けれども叫びだしそうになったとき、子守り歌が浮かんできた。眠れ良い子よ。

そしてあなたが叫びそうになったとき、鏡があなたを薄暗い階段に突き落としあなたを追い出す。鏡はあなたを走らせる。そんなに早く走らないで。』⁴³

「わたしの子供を生き返らせて！」と怒りを爆発させて墮胎手術をした老婆に要求するその意志が鏡の中で人生を反転させる原動力となって描かれている。その力が子供の命を奪った老婆に、鏡の中で命を返すという望みを叶えさせる。主人公が要求される「生き返らせて！」という叫びは、そのままナチスの強制収容所から生きて帰ってこなかったアイヒンガー自身の親族の命を「生き返らせて」という要求を暗示している。「鏡物語」の中でその望みを叶える「盲目の鏡」はアイヒンガーのテキストそのものであるとも言える。現実の時間軸の中では帰ってこない存在が、この鏡あるいはテキストの中では死と逆の時間軸の中で再び命を与えられる。鏡は「染みだらけ」で「盲目」である。鮮明な画像を映し出しはしない。目を凝らして鏡の中の像を探っていくと見えてはこない。そのように一見そうとはわからないようにアイヒンガーのテキストは戻らない存在を蘇らせる媒体として物語の鏡と同じ装置として機能しているといえる。

「「おしまいだわ」あの人たちがあなたの後ろで言う。「彼女は死んだわ。」
静かに！あの人たちには言わせておきましょう！」⁴⁴

看護婦たちが、主人公の死を確かめている間に、語り手は主人公に向かって、「静かに！」と言葉を制し、看護婦の言うがままにさせておくと諭す。生死を司りその傍にいる生きている者たちと、蘇った新たな命という存在は相いれずに別の次元の存在として描かれている。語り手は主人公に向かって、生きている者には介入せずいろと言ひ、乖離したふたつの世界の間における言葉の交流はここでは制されている。語り手の言葉は終始主人公にのみ向けられており、看護婦のいる世界からは独立している。この語り手の言葉を読む読者は語り手の世界を共有し、看護婦たちの世界を外から覗いている構図の中へ取り込まれ

る。本来看護婦たちと同じ時間軸を持つ世界に存在しているはずの読者は、この語りにより別の次元へ視座を置きアイヒンガーの描くもう一つの世界に身を置くことになる。アーレントは人間が「起源への立ち返り」により至福の生を獲得すると論じた。その「立ち返り」が「鏡物語」においては死から生誕へと遡り物語の最後に自らの誕生を体験する構成として現実世界とは別の次元を作り出すところまで立ち入って描かれている。鏡という反転の象徴的モチーフを作品の中心に据え、そこへ失った命を取り戻そうとする主人公の意志をぶつけることで、アイヒンガーは死にもう一つの生誕の次元を作り出して読者に提示している。二重の大きな力を目の当たりにしながら、カフカの作品には見られない大きな反発のエネルギーがアイヒンガーの作品の大きな原動力になっていることがわかる。

4. 「ベビー・チャンドラー」

本論で扱うもう一編は、2006年にアイヒンガーの生前最後に刊行された『サブテキスト』の最後に収められている「ベビー・チャンドラー」である。フランク・マクシェインによるレイモンド・チャンドラーの伝記を元に書き起こした短いエッセーである。前述の通り、この作品はアイヒンガー生前に刊行された本の最後の部分にあたり、その最後のページにベビードレスを着た赤ん坊のチャンドラーの写真を配する象徴的な構成をとっている。ここには、「鏡物語」にも通じるアイヒンガー晩年における生死観が色濃く反映されている。

「ベビー・チャンドラー」は次の E.M. シオラン (1911-1995)⁴⁵の引用で始まる。

「外から見れば、どんな存在も偶然である。」(E.M. シオラン)⁴⁶。

「外」とここではどこからみた「外」であろうか。あらゆる存在がある場の「外」ということと考えると、あらゆる存在が生まれ出てそしてまた去ってゆく先にある世界のことを指しているのであろう。アーレントのいう「まだ…

ない」そして「もはや...ない」世界と同じもの指していると見ることができ
る。その生の領域を超えた「外」からの視線で見ると「どんな存在も偶然であ
る」とシオランは言う。ここでシオランのいう「存在」とは「外」から見た視
点を考慮すると、生の領域にいる「存在」と捉えるのが自然であろう。生の領
域にいる存在は偶然生まれでてきてそこに存在している。その偶然によって生
まれ出た人間の運命が、その生まれた状況によって大きく左右されることをア
イヒンガーは『サブテキスト』の中の他のテキストでも幾重にも書いている。
例えば「存在の風景と天気」(*Landschaften und Wetterlagen der Existenz*)⁴⁷では
2月29日にユダヤ人としてハプスブルク帝国の東に生まれた祖母が、その生ま
れから4年に一度しか訪れない誕生日やナチスによる強制収容所送りなどをあ
らかじめ運命づけられていたことを書いている。その逃れられない生に対して、
アイヒンガーは初期の作品から大きな怒りを帯びた関心を示し、作品において
その軌跡を辿ることができる。

チャンドラーの赤ん坊の時の写真とマクシェンの評伝にあるもう一枚の写真
についてアイヒンガーは次のように書いている。

「チャンドラーの評伝に掲載されている赤ん坊の頃の写真では（フランク・マ
クシェン、ディオゲネス出版）大いなる眠りはすでに侵されている。完全にでは
ないにしても。冷たく暗い背景の前で彼（チャンドラー）は自分を待ち構えて
いるものを批判的に凝視している。彼の手は白いドレスの上に置かれ、その手
はまだいろいろはできないように見える。その隣の写真（「リラックスするレイ
モンド・チャンドラー」）には、気をしっかり持って、人形を持ち、存在の来襲
を受け入れる心構えができたように見える。」⁴⁸

「大いなる眠り」はすでに赤ん坊の頃から彼には恵まれず、そして、赤ん坊
のチャンドラーは「存在の来襲」つまり生まれ出たことを受け入れようとして
いるとアイヒンガーの目には映る。生まれ出ることを「存在の来襲」(Überfälle

der Existenz) とする理解はアイヒンガーが自分自身の存在について考えていることと合致する。前述の2008年のインタビューで「私はもう子供の頃から、突然生まれ出てくるということがとてつもない無理な要求だと思っていました。せめて、そのまま生まれずにいたいかどうか聞いてからにしなければならないんじゃないでしょうか。」と語るアイヒンガーは、「生まれずにいたいか」と意志を確認されることもなく「突然」生まれてこなければならなかった現世における「存在」を赤ん坊のチャンドラーがすでに「来襲」と認識していること見て取っている。ハードボイルド作家としてチャンドラーは数々の殺人事件を描きながら、生きる理不尽さを常に抱えて生きてきたことをアイヒンガーはこのショートエッセイで書いている。赤ん坊のチャンドラーの写真を見ながらアイヒンガーは続ける。

「こういう赤ちゃんはすぐに人形を持たされ、白いレースのついた女の子のドレスを着せられても我慢して、自分を偽装しなければならない。大人になってもそれは続くだろう。(中略)でも偽装はいつも完璧なわけではない。(中略)雨の中やあるいは造作のない、またはサルビアの溪谷での殺人も彼には起きなかった。むしろアルコールや中毒療法や手首の骨折などが彼を見舞った。ことあるごとに彼は「救急」の状態になって、役に立たない病院へ運ばれるのだった。」⁴⁹

生まれてきたことを「来襲」と思いながら生きるためには「偽装」をしなければならないというフレーズは原文では未来形で描かれており予言的なニュアンスを含む。チャンドラーの評伝からアイヒンガーはチャンドラーが恒常的に生まれて来て生きていることの苦悩を背負いつつ危機的な精神状態で生きてきたことを語り、その生き様に自分と同じ生に対する否定性や不安定さを見ていた。

一見ランダムに並べられているように見えるチャンドラーの作品、「高い窓」「湖中の女」「リトル・シスター」「ロング・グッドバイ」「プレイバック」は、

それぞれ、アイヒンガーの作品「私の住む場所」「湖の幽霊」やアイヒンガーの双子の妹、ユダヤ人同胞や家族との長い別れ、そして「鏡物語」などに見られるプレイバックを次々と想起させる。『サブテキスト』の中にも妹や家族のエピソードは繰り返し扱われており、定期的にこのコラムを読んでいる読者にとっては容易に連想できる仕掛けとなっている。チャンドラーの作品タイトルに自らの人生と作品の回想をサブテキストとして忍ばせ、チャンドラーの作品とその生涯を描きつつアイヒンガーは「生まれ出てきた」ということの残酷さを自らの問題として改めて問い直そうとしている。

このショートエッセイの最後は畳み掛けるような疑問文で終わっている。チャンドラーが運び込まれた病院の描写から最後の段落は始まる。

「僕たちの具合はどうだい？」と回診にきた担当医が怯えた患者に聞く。そう、僕たちの具合は？「僕たち」というのは誰のことを言っているのでしょうか。誰が一人の個人を役にも立たない嘘にまみれた「僕たち」にまとめたのでしょうか。「僕たち」って誰のことでしょうか？神が、シオランがいう通り、せいぜい無であるのだとしたら、この無は「僕たち」にとってどんな形をしているのでしょうか。」⁵⁰

2008年のインタビューを踏まえてこの文章を読むと、アイヒンガーが双子の姉妹と自らの存在を規定した「私たち」wir と比べて、ここで描かれる「僕たち」wir はいかにも貼り付けたような「嘘にまみれた」「僕たち」である印象を受ける。生死を司るはずの神が「無」であったとしたら、と最後まで神と人間存在についての問いは続く。そしてその問いは問いかけたまま答えを出さずに終わっている。この「役にも立たない嘘にまみれた「僕たち」」という表現の中には群衆といった人間集団への懐疑が含有されていることもここでは見落としてはならないだろう。人間が作り出した世界観、神そしてそれに司られた生死観についての根本的な大きな問いが解決されぬまま読者の手に委ねられて作品は終わる。

結論

死者を生き返らせてと叫びその叫びが死にゆく時間軸を逆転させた「鏡物語」において、再び訪れる生誕への道は若きアイヒンガーが生への希求を文学の世界で昇華させた作品である。そこで希求された生は現世の力によって奪い取られた生の奪還を目指したものであった。アイヒンガーの作品はその後も現世の生を奪われた人たちを作品の中で描くことにより、その作品自体が鏡物語の鏡のように死者を生き返らせる装置として機能する役目を果たそうとしてきた。一方で、生まれ出てくることについては、特に後年の作品やインタビューにおいては、存在するということが「意志」は関与しておらず、むしろ自分の「意志に反して」自らの存在があるという考えを強く反映させたテキストが目立つ。祖母の存在と死をも規定した「生まれ」、同じ時生まれ出ても別人格である妹。別人格である二人はしかし周りからは「私たち」と一つにまとめられる存在として生きてゆかなければならなかった特殊な状況もまたアイヒンガーの作品と存在論には大きな影響を与えている。最後に書かれた「ベビー・チャンドラー」においては、生まれでてくることが再びテーマとして取り上げられ、チャンドラーの生涯をなぞる中でアイヒンガーが問い続けた「生まれて来たこと」をどのように受け止めて生きてゆくのかという問題は、問いかけられたまま終わっている。この問いは、投げかけられたまま読んだ者の中で引き続き問い続けられることになる。根源へ立ち返ることによって、「至福の生」を獲得するとアウグスティヌスの思想を解釈した若きアーレントが見た生における「至福」はアイヒンガーの最後のテキストには見られない。「至福」を求めるとなく、醒めた目でアイヒンガーは生きることを受け止め、生まれ出ることが残酷であると規定しつつなお人間存在を見つめ続け、その根源への立ち返りを繰り返し描いたといえる。

注釈

- 1 Aichinger, Ilse : *Subtexte* (Wien, 2006) 以下 Aichinger 2006
- 2 Aichinger, Ilse: *Baby Chandler* (in: Aichinger 2006) S. 70-73.
- 3 Chandler, Raimond : *The big Sleep*. (New York 1939)
- 4 McShane, Frank: *Raymond Chandler. Eine Biografie von Frank McShane* (Zürich 2009)
マクシェイン, フランク (著), 清水俊二 (訳) 『レイモンド・チャンドラーの生涯』 (早川書房 1995) S.31.
- 5 チャンドラーの幼少期から青年期にかけては, 上述のマクシェインのチャンドラー評伝 (1995) の第1章から2章 S.29-96参照。
- 6 オーストリアの日刊紙 Die Presse に2005年1月8日から6月18日の約半年間に *Schattenspiele* というタイトルのもとで発表されたコラムをまとめたものが *Subtexte* というタイトルで2006年に出版された。
- 7 最初に当該テキストが発表された Die Presse. Spectrum (Beilage S.4) 18. Juni 2005 のコラム *Schattenspiele. Baby Chandler* では, 本文中に描写がある, ベビードレスの赤ん坊のチャンドラーの写真に並んでドレスを着て人形を手にしてソファーでくつろぐ幼いチャンドラーの写真の二枚が掲載されているが, 単行本 *Subtexte* においては, テクストの最後のページに赤ん坊のチャンドラーの写真のみが掲載されている。
- 8 Aichinger, Ilse: *Spiegelgeschichte*. (in: *Der Gefesselte*. Frankfurt a.M. 1991) S.63-64. 以下 *Der Gefesselte*
アイヒンガー, イルゼ「鏡物語」(アイヒンガー, イルゼ (著), 真道杉・田中まり (訳) 『縛られた男』 同学社 2001) S.109-127. 以下 (『縛られた男』)
- 9 Arendt, Hannah: *Der Liebesbegriff bei Augustin. Versuch einer philosophischen Interpretation*. (Hamburg 1996) 以下 Arendt 1996
ハンナ・アーレント (著), 千葉真 (訳) 『アウグスティヌスの愛の概念』 (みすず書房 2012) 以下 アーレント 2012
本稿における上記アーレンと著作については, 千葉氏の訳を使用させていただきました。
- 10 ジュリア・クリステヴァ (著), 青木隆嘉 (訳) 『ハンナ・アーレント講義——新しい世界のために』 (論創社 2015) 以下 クリステヴァ 2015
- 11 Arendt, Hannah: *Rahel Varnhagen: Lebensgeschichte einer deutschen Juedin aus der Romantik*. (München, 2018)
アーレント, ハンナ (著), 大島かおり, (訳) 『ラーエル・ファルンハーゲン——ドイツ・ロマン派のあるユダヤ女性の伝記』 (みすず書房 1999)
- 12 Aichinger, Ilse: *Rahles Kleider* (in: Aichinger, Ilse: *Schlechte Wörter*. Frankfurt a. M. 1991) S. 61-67.
- 13 Kühn, Walter: *Ein weiblicher Heidegger. Ilse Aichinger im literarisch-*

- philosophischen Leben der fünfziger Jahre.* (in: *Bereliner Hefte zur Geschichte des literarischen Lebens.* 9 (2010) S. 55-78.)
- 14 アーレント 2012, S. 263.
- 15 クリステヴァ 2015, S. 1.
- 16 同上 S. 14.
- 17 同上
- 18 Arendt 1996, S. 41-66. (邦訳 S.61-101.)
- 19 ebd., S. 50f. (同上 S.76.)
- 20 ebd., S. 59. (同上 S.90.)
- 21 ebd. (同上)
- 22 ebd. (同上)
- 23 ebd. (同上)
- 24 ebd., S. 59f. (同上 S.91.)
- 25 ebd., S. 42f. (同上 S.64.)
- 26 ebd., S. 62-63. (同上 S.95.)
- 27 ebd. (同上)
- 28 *Eine Zumutung, dieses Leben.* (in: Frankfurter Rundschau. 26.Sep. 2008, S. 22) 以下 Rundschau 2008
- 29 ebd.
- 30 Shindo, Sugi: *Zusammekirrenes Leben zusammenklirrede Werke.* (in: Wort Anker werfen. Hrsg. v. Rüdiger Görner, Christine Ivanovic und Sugi Shindo, Würzburg 2011) 参照。以下 Görner 2011
- 31 Aichinger, Ilse: *Rede unter dem Galgen.* (in: *Der Gefesselte.* 1991) S.99-105.
アイヒンガー, イルゼ: 「絞首台の上の演説」(『縛られた男』) S. 179-188.
- 32 ebd., S. 105.
同上 S. 187.
- 33 Enders, Elisabeth: *Ilse Aichinger.* (in: *Ilse Aichinger. Materialien zu Leben und Werk.* (Hrsg. von Samuel Moser. Frankfurt a.M. 1990) S. 90-96. 参照。以下 Enders 1990
- 34 Aichinger, Ilse: *Die größere Hoffnung* (Frankfurt a.M. 1991)
- 35 *Der Gefesselte*, S. 115.
- 36 Enders 1990, S.90.
- 37 Rundschau 2008
- 38 Ivanovic, Christine: *Nach England! Zur Geschichte einer Sehnsucht.* (in: Görner 2011) S. 87-101.
- 39 *Interview mit Ilse Aichinger.* (in: *Anzeiger. Die Zeitschrift für die österreichische Buchbranche* 137, 2002, Nr. 2) S. 10-13.
- 40 Faure-Godbert, Sylvaine: „Vom Ende auf das Ende hin erzählen“: *Die Poetik des*

Endes im Erzählband Der Gefesselte von Ilse Aichinger. (in: *Ilse Aichinger. Misstrauen als Engagement?* (hrsg. v. Rabenstein-Michel / Rétif, Françoise / Tunner, Erika, Würzburg 2009) S. 99-108.

- 41 Ratmann, Annette: *Spiegelungen, ein Tanz. Untersuchungen zur Prosa und Lyrik Ilse Aichingers.* (Würzburg 2001). この論文の中の3章 Im „Augenblick des Todes zur Welt” kommen – Spiegelgeschichte. S. 74-92の中で鏡物語の時間軸の構成についての詳細な分析がなされている。
- 42 *Der Gefesselte*, S. 63.
『縛られた男』 S. 111.
- 43 ebd., S. 68.
同上 S.118.
- 44 ebd., S. 74.
同上 S. 128.
- 45 E.M. シオラン：ルーマニア生まれの思想家。アイヒンガーの最晩年のテキスト（2004・2005年）にはシオランのテキストが多く引用されており，テキストの大きなインパクトを担う重要な役割を果たしている。
- 46 Aichinger 2006, S. 70.
- 47 Aichinger 2006, S. 13-16. このショートエッセイについては，拙論「イルゼ・アイヒンガー Das grüne Märchenbuch aus Linz と Landschaften und Wetterlagen der Existenz におけるシオランテキストの役割について」（『リユンコイス』52号2019）S. 59-73参照
- 48 Aichinger 2006, S. 70.
- 49 ebd., S. 71.
- 50 ebd., S. 72.

ドイツのラジオ放送における音楽番組への 第二次世界大戦勃発の影響

佐藤 英

序

ドイツ軍がポーランドに侵攻した1939年9月1日に、ドイツでラジオの番組に耳を傾けた人は多かった。ベルリン市民のギュンター・グロスマンもその一人で、朝7時に朝の音楽を聴くためにラジオのスイッチを入れたところ、ヒトラーが演説をしているのを耳にしたという¹。この回想は、この日にラジオで伝えられた番組のうちで、ヒトラーの演説が強烈な印象を生み出したことを示している。その後ドイツは6年間に及ぶ戦争と敗戦、国家の分裂という激動の時代を経験するだけに、その契機となった日にラジオで流されたヒトラーの声はドイツ人にとって消し難い記憶となったのである。しかし、この日にドイツのラジオで放送されたのはヒトラーの演説や戦争に関連した報道だけにはなかった。番組の大部分を占めていたのは音楽で、この状況は開戦後もしばらく続いていた。

開戦後のドイツのラジオ放送のプログラムについては、ドイツ連邦文書館(Bundesarchiv)に保存されているドイツ帝国放送協会関係の資料のうち、ドイツ帝国放送指導部(Reichssendeleitung)と各地方局の間で交わされていた膨大な量の交信文書を精査することで、その概要を知ることが可能である。だがこの文書は、先行研究を見る限り、これまで本格的に調査されてこなかったように見受けられる。そこで本稿は、この交信文書に含まれている音楽放送に関す

る資料を用いながら、第二次世界大戦が勃発する前夜から開戦後約1か月までの音楽番組について考察を行うものとする。今回のリサーチで特に着目したのは、ラジオ放送のプログラムがどのように計画されていたか、そのプロセスを可能な限り明らかにすることである。音楽番組がプロパガンダとして持ち得る意味について考察するための材料が得られることも期待できるからだ。

本稿では、以下の手順で検討を行う。

第1章では、1939年9月上旬にニュルンベルクで予定されていたナチス党大会の前夜祭の放送計画を取り上げる。この時はワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》(以下、《マイスタージンガー》とする)の上演が予定されており、この中継放送を巡って約1か月前から帝国放送指導部と地方局との間で頻繁にコンタクトがとられていた。最終的にこの公演は開催直前に中止と決まったため、放送も行われなかった。だが、番組編成の計画性という観点では重要な情報を示してくれるプログラムと言える。放送の現場における平時のプロセスが示されると同時に、戦争の準備が始まってくることでその影響も垣間見せるからである。第2章では、戦争開始前にポーランドの音楽について規制が始まっていたこと、また開戦当日の音楽番組の放送内容について前日までにプランができていたことを示す。ここで引用した9月1日の番組編成表は、本稿において初めて世に出るものと思われる。この資料のほか、ラジオ放送情報誌に掲載されていた、開戦が無かった場合に予定されていた番組との比較検討を行うことで、音楽番組が重視されていたという最終案の特殊性が浮かび上がることになる。第3章では、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団がゲッベルスの指示で行った放送コンサートのシリーズを取り上げる。出演者との交渉や演目の選定に関しても、様々な資料を基にその過程が示される。最終章では、以上の事例を踏まえ、この時期にラジオにおける音楽番組が果たした役割について考察する。これにより、グロースマンの回想にあるように、国家の有事を伝える指導者の声により背景と化してしまっただけに見える音楽も、プロパガンダの一環として動員されていたことが明らかになるはずである。

1. ニュルンベルクにおけるナチス党大会での《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の上演とそのラジオ中継の計画

1939年のニュルンベルクにおけるナチス党大会の予定は、この年の7月11日に新聞で発表された。期間は9月2日から11日までである²。8月に入ると、恒例となっていた前夜祭のワーグナーの《マイスタージンガー》の上演がクレメンス・クラウスの指揮で行われると告知された³。

この公演のラジオ中継に関しては、この年の8月になってからベルリンの帝国放送指導部と地方局と間でコンタクトが始まっている。そうした事例の最初期のものの一つは、同年8月9日に帝国放送ブレスラウ局から帝国放送指導部に打電された文書である。質問の内容は、《マイスタージンガー》の中継放送に必要な費用だった⁴。この2日後の8月11日にはシュトゥットガルト局⁵、さらにその翌日にはハンブルク局もこのオペラの中継放送に興味があると伝えている⁶。この時点では、帝国放送指導部でもこの番組の地方局での扱いについて方針が固まっていなかったようだ。8月12日にベルリンからブレスラウ局に別件で回答があった際、《マイスタージンガー》はドイツ放送(Deutschlandsender)のみの番組だが、地方局も自由に中継できると伝えられた⁷。ところが、8月14日に全放送局に対して送付された電信文では、このオペラの中継局の数には限りがあるため、それを予定している局はその旨を早急に報告することが求められている⁸。この情報の食い違いは、12日のブレスラウ局への回答は内々のもので、14日の全放送局への告知までに方針の変更があったことをうかがわせる。実際のところ、このベルリンからの情報の食い違いによると思われる混乱があった。8月19日、ブレスラウ局は、12日に地方局が自由に中継できると情報を得ていたためであろうが、中継費用は帝国放送指導部の負担であることの確認がほしいと伝えている⁹。ただ、この交渉では何らかの問題が起きたようで、ブレスラウ局が放送できたのは《マイスタージンガー》の第1幕だけだった¹⁰。

8月14日に全放送局宛にドイツ放送によるニュルンベルク党大会のラジオ放

送予定が伝えられた後、まずはウィーン局が9月上旬の放送予定を報告する文書で、《マイスタージンガー》全曲の放送を示唆してきた¹¹。8月15日にはケーニヒスベルク局も、休憩時間のプログラムを含めて中継放送することを報告した¹²。ライプツィヒ局は、9月の放送予定番組の報告であらためてオンエアを告げるだけでなく¹³、すでに8月8日にこの件は伝えてあったというリマインドも送っている¹⁴。8月18日、ドイツ放送は申し出のあった局に対し、ミュンヘンから当日の段取りを受け取っていないため、まだ情報を提供できないと回答した¹⁵。この後、ザールブリュッケン局からも、放送を中継したいという希望が寄せられた¹⁶。最終的に中継局は、全国放送のドイツ放送、地方局ではベルリンとケルン以外の全局、すなわちウィーン、ミュンヘン、ザールブリュッケン、ライプツィヒ、フランクフルト、ハンブルク、ベーメン、ケーニヒスベルク、シュトゥットガルト、ダンツィヒ（以上、全曲放送）、ブレスラウ（第1幕のみ）となった¹⁷。先に、番組の中継局には限りがあると伝えられたことを述べたが、最終的にほぼすべての地方局が中継を予定したことから推測するに、ナチスの重要な行事の中継放送の際に個々の放送局に競わせるように名乗りさせるということが重要だったと考えられる。このシステムが機能すれば、帝国放送指導部のイニシアチブを強化できるからである。この中継放送の実施をめぐる動向は、最終的に1940年夏に実現される地方の各局（Reichssender）の番組の統一化を目指すプロセスの一環であった可能性が指摘できる。

さて、ドイツ放送では当日の段取りが具体的に決められていった。8月17日の案では、ドイツ放送が、第1幕の後の休憩でワーグナーと《マイスタージンガー》について、作品の器楽演奏を交えながらの談話、第2幕の後の休憩でニュースとニュルンベルクからの報告をするとされていた。8月19日には追加と若干の修正があり、ドイツ放送は17時45分からオペラのあらすじ、1幕と2幕の間の休憩ではカール・ゼーレの著作からの朗読と第2幕のあらすじを放送する予定で、ミュンヘン局には第2幕と第3幕の休憩時間を担当してもらいたいとの依頼が出された。しかし、8月21日に全放送局にあてて送付された文書では、休憩中のコンテンツは最初の案に戻されている。当日のスケジュール

（第1幕：18時から19時25分，休憩：19時25分から19時52分，第2幕：19時52分から20時52分，休憩：20時52分から21時34分，第3幕：21時34分から23時34分頃）と主要キャスト（ハンス・ザックス：ルドルフ・ボッケルマン，ファイト・ポグナー：ヨーゼフ・フォン・マノヴァルダ，ジクストゥス・ベックメッサー：オイゲン・フックス，ヴァルター・フォン・シュトルツィング：セット・スヴァンホルム，エーフェ：ティアナ・レムニッツ，マグダレーナ：ルート・ベルグルンド，ダーフィット：エーリヒ・ツィンマーマン，ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団，指揮：ヴィルヘルム・フルトヴェングラー）が伝えられたのもこの文書である¹⁸。この公演で演出を担当したルドルフ・ハルトマンについては，8月21日の時点では姓のみが伝えられるにとどまったため，8月25日に正確な姓名がベルリンから各局に打電された¹⁹。

主要キャストを報告する文書に記されていたように，最終的に指揮者はクラウスではなく，フルトヴェングラーとなった。この決定には，ヒトラーやゲッベルスの意向が反映されたようだ。クラウスが《マイスタージンガー》の指揮者として公表された時，出演するオーケストラは言及されていなかった。オーケストラの件が発表されるのは8月16日の『フェルキッシャー・ベオバハター』紙においてである。ヒトラーの強い希望でウィーン・フィルの出演が決定し，それに伴いこのオーケストラが出演中のザルツブルク音楽祭の公演も日程が変更されると報じられた。この影響があったのは音楽祭終盤の公演で，9月1日の午前中にはヴェルディの《レクイエム》（当初は9月3日の予定だった），同日夜にはヴェルディの《ファルスタッフ》，9月2日と3日にはシェイクスピアの『空騒ぎ』が上演されることになり，9月3日のリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》は中止となった²⁰。見逃してはならないのは，8月16日の発表の時点で出演者としてフルトヴェングラーの名前が公表されていないということである。彼のコンサート情報は注目の的で，例えばこの年の10月に予定されていたウィーン・フィルとのドイツ国内演奏旅行も，8月24日の『フェルキッシャー・ベオバハター』において早々と発表されている²¹。ニュルンベルクの党大会というナチスの看板行事，それも前夜祭の《マイスタージンガー》にフルトヴェングラーが出演となれば大きな話題となるはずだが，8月

16日の記事に彼の名はない。この時点では、フルトヴェングラーの出演が決定していなかったと考えるのが妥当である。

戦争開始も視野に入っていたはずのこの時期にヒトラーが何を思ってウィーン・フィル出演を要求したか、その理由については伝えられていない。彼はザルツブルク音楽祭を訪問し、8月9日にはクラウスの指揮でモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》、8月14日にはカール・ベームの指揮で《後宮からの誘拐》の演奏に接している²²。この2つの公演がヒトラーに何らかの思い付きをもたらした可能性がある。これらの公演でオーケストラ・ピットに入ったのはウィーン・フィルだった。また、他ならぬこのオーケストラがこの前年のニュルンベルクの党大会に客演し、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの指揮で《マイスタージンガー》を披露して大成功を収めていた。その際にヒトラーは、このオーケストラを毎年、ニュルンベルクに連れてくるという希望を述べていたのである²³。ただし、いくつかの先行文献で指摘されているように²⁴、フルトヴェングラーとウィーン・フィルが1939年のニュルンベルクにおける党大会で《マイスタージンガー》を演奏することが既定路線として決定していたということは、事実と反しているのではないだろうか。先に見たように、当初の発表では指揮者はクラウスだったし、ウィーン・フィルの出演に関しても、もし党大会への出演が予定されていたならば、ザルツブルク音楽祭の日程もあらかじめそれを踏まえて組まれていたはずだからである。

ニュルンベルクにおける党大会へのウィーン・フィルの出演、さらにはフルトヴェングラーの出演が決まってくるのは、この年の8月にフルトヴェングラーとゲッベルスが会談したことと関係があるように思われる。ゲッベルスの日記からこの日付を特定することはできないが、フルトヴェングラーがウィーン・フィルのメンバーであるオットー・シュトラッサーに送った同年8月2日と12日付の2通の手紙から、主たる案件はこのオーケストラが自主的に指揮者を選び出すという運営制度に関するものだったことがわかる。フルトヴェングラーはウィーン・フィルの一切の演奏会の指揮から降りることを仄めかしながらゲッベルスに迫ったが、提案は却下された²⁵。その後、フルトヴェングラー

は8月17日にもゲッベルスと会う機会を得ている。このとき彼は、宣伝相の音楽部門長だった指揮者ハインツ・ドレヴェスがウィーン・フィルを指揮した件で、再び辞任をちらつかせながら異議を申し立てに来た。結局のところ、フルトヴェングラーはゲッベルスに言い負かされ、「最後に彼はひどく小さくなって」帰って行ったという²⁶。件の《マイスタージンガー》の指揮者が8月16日の『フェルキッシャー・ベオバハター』では言及されなかったものの、8月21日の放送局の情報では確定していたことから推測するに、フルトヴェングラーの出演は8月17日のゲッベルスとの会談で決まった可能性が高い。

こうした様々な交渉により、ニュルンベルクにおける党大会での《マイスタージンガー》の上演と放送が計画されたものの、8月26日にこの年の開催は中止と決まった²⁷。《マイスタージンガー》の放送についての文書が交わされていた日付を改めてみると、8月21日までに放送計画の概要がほぼ出来上がっており、この時点で不備があった演出家の名前については8月25日にベルリンの帝国放送指導部から各放送局に情報が送られている。この事実を素直にとらえれば、放送局は中止が告知される前日までこのオペラを中継するものとして準備を進めていたことになるだろう。だが、8月21日までは《マイスタージンガー》の中継を巡って連日のようにコンタクトが行われていたにもかかわらず、演出家の正確な姓名という些細な事項を各局に伝えるまでに4日も要していることに着目すると、放送関係者では党大会の開催を疑問視する向きが多く、情報発信にためらいがあったとも解せよう。

2. 開戦に向けて——シヨパンの放送禁止と9月1日の番組案の作成

ニュルンベルクにおける党大会の開催を危ぶむ要素は、8月22日に放送関係者にも伝えられていた。事の発端は、この日の午前中、国防軍のエリートがヒトラーの演説を聞くために召集されたことにあった。演説はポーランドへの侵攻に関するもので、昼休みをはさんでさらに1時間も続いた²⁸。これを受けて、放送局でもその準備が始まっている。この日の16時には、ドイツの全放送局に

宛てて、各地方局の責任者は昼夜を問わず放送局に留まって電話連絡がつくようにしていること、また、電信の業務担当者も24時間常駐することが指示された²⁹。

ポーランドへの進軍を見据えた一連の動向の中で、音楽放送に関する規制も行われた。問題となったのは、ポーランドの作曲家フレデリック・ショパンの扱いである。先の2通の電信が送付されたのとほぼ同時に、以下の文書も全放送局宛に極秘扱いで打電された。「ショパンは、ドイツの放送局の番組の中で、制約を設けてのみ考慮されるべきである。あまり強調されてはいけない。生涯を述べたり、彼のポーランド国籍を示唆することはあってはならない」というのである³⁰。同様の指示が1939年12月に帝国放送シュトゥットガルト局から送られた番組案に対しても出されているところから、ドイツでショパンの音楽の放送規制は長い期間に及んだと思われる。

帝国放送指導部からの指示としてショパンの音楽の放送禁止が伝達されたのは、その音楽のもつ性格によるところが大きいように思われる。参考にしたいのは、第二次大戦開戦の時分にコンラート・ミュラーなる人物が執筆した「ポーランドと音楽」という記事である。ここで示された見解はこうだ。「創造的な音楽家」が「乏しい」ポーランドにおいて、ショパンは「唯一傑出した個性」で、特に成功したのはマズルカやポロネーズと言ったポーランド固有の舞曲だった。ただし、ショパンの音楽にある「過度の感傷さ」は「我々ドイツ人」には「異質な」もので、「英雄的なもの」に傾倒してゆく性格が欠けている。例えば、ショパンの《ピアノ・ソナタ第2番》の〈葬送行進曲〉とワーグナーの《神々の黄昏》の〈ジークフリートの葬送行進曲〉を比較すると、ショパンの音楽には「陰鬱な悲劇性」や「慰め」はあるものの、ワーグナーとは対照的に、「人間を高める運命」を何一つ感じさせないというのだ³¹。

この記事で注目したいのは、ショパンがポーランドを象徴する音楽家という評価を受けていること、また、その音楽に運命を切り開く強い意志が欠如していることが指摘されていることである。前者については、先の放送に際しての注意にもあるように、ショパンの音楽に備わった国民主義的性格が問題である

ことは、改めて言うまでもないだろう。しかもそれは、突き詰めればナチスにとって不都合を招き得る「危険」を秘めていたのではないだろうか。この約100年前、ショパンの音楽の持つ「危険性」を敏感に感じ取ったのがローベルト・シューマンだった。1836年、シューマンはショパンの2曲のピアノ協奏曲を評した時、彼の音楽の特徴として「極めて鋭い国民性」³²を挙げた。シューマンは、1830年の11月蜂起がロシアに弾圧されて失敗し、多数のポーランド人が難民となってドイツに流れ込んでくる現実を目の当たりにするうちに、故郷を逃れたショパンに深い同情を抱き、その音楽に対してもそうした心情から積極的に評価することを試みていた³³。それだけにシューマンのショパン批評では、その音楽に秘められた無言の政治的抵抗にも言及されてくる。「北方の強大な独裁統治の君主が、ショパンの作品、それもマズルカのちょっとした旋律において、どんなに危険な敵が君主を脅かしているかを知るならば、彼はその音楽を禁じるだろう。ショパンの作品は、花々の下に沈められている大砲なのだ」と³⁴。ナチスによるポーランド侵攻より約100年前の文章とはいえ、ポーランドの自立性の喪失という点で同様の状況が生まれていたことを見逃してはならない。シューマンが言語化してみせたショパンの音楽の性格、特に压制された者に対する憐れみの念を抱かせるという側面は、武力をもってポーランドに侵攻しようとするナチスにとって、最も神経を尖らせていたことだったはずである。1939年のミュラーの論説においてショパンの「陰鬱な悲劇性」が指摘されていたことを思うと、彼の音楽が同情を招くというまさにその点において、有事の前に監視下に置かれなければならなかった理由が見えてくるのである。後者の音楽の持つ力強さは、英雄を求めるよう演出することが求められた時代の空気ゆえ問題である。後にベルリン・フィルの番組のシリーズで確認するように、戦争にのぞむ決然とした意志もこの時代の音楽の重要な表現として考えられていた節が認められる。こうした要素とショパンの音楽の感傷性が相いれなかったということなのだろう。

さて、放送関係者の間で戦争開始が間近であることは状況から容易に推測できたはずだが、実際にそれがいつになるか、さらにザルツブルク音楽祭などの

音楽行事の実施と放送の見込みがどうなっていくかについては見通しが得られなかったように思われる。ニュルンベルクにおける党大会の《マイスタージンガー》の放送に関しても、おそらく不確定要素が認められたために、各局間のコンタクトが一時的に停止したものと推測される。9月上旬まで開催が予定されていたザルツブルク音楽祭についても、公演を収録して放送に活用する方策が練られていたものの、これまでとは違う慎重さが求められるようになった。特に問題となったのは、放送が9月以降にずれ込む可能性のあるコンテンツだった。注目したいのは、8月27日と8月30日に帝国放送ミュンヘン局に出された指令である。その内容は、8月27日のモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》(クレメンス・クラウス指揮, ウィーン・フィルほか), 8月28日と8月31日のヴィレム・ヴァン・ホーフストラテン指揮, ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団によるモーツァルト・コンサート, 8月30日昼のヴィレム・メンゲルベルク指揮, ウィーン・フィルのコンサート, 同日夜のヴェーバーの《魔弾の射手》(ハンス・クナッパーツブッシュ指揮, ウィーン・フィルほか), 9月5日のロッシーニの《セビリヤの理髪師》(トゥリオ・セラフィン指揮, ウィーン・フィルほか), 9月6日のリヒャルト・シュトラウスの《町人貴族》(オーケストラ・コンサートの一部と思われる), 9月7日のエトヴィン・フィッシャーのピアノ・コンサートを録音盤(ヴァックスディスク)で2枚ずつ, 収録するというものだった³⁵。この計画が通常と異なるのは、録音盤の扱いである。当年の8月中に開催されていた放送の事例を見る限り、ザルツブルク音楽祭の様子は各放送局に送信され、必要に応じて録音盤に収録されていた。これ以前の公演ではディスクの作成部数に関してベルリンから指示は出ていない。各放送局での放送回数を見る限り、録音盤の音質が保証できる1回にとどまっていることから、各放送局で1組というのが原則であったと思われる。ちなみに、複数回の再生に耐える長期保存用の録音を作成するためには、ヴァックスディスクをレコード会社に送付してシェラックでプレスする——つまり、商業用の78回転のSPレコードと同じ素材のディスクを作成する——という工程を踏む必要があった³⁶。ところが、1939年8月末からのザルツブルク音楽祭に関しては、ミュンヘン局

には個々の催しに対して2組の録音を作成することが要求されている。このことが意味するのは、コンサートの収録は行うものの、放送の機会がいつになるかわからないため、状況に応じて様々に対処できるよう、録音盤のスペアが作成されたということである。もっとも、8月30日のメンゲルベルクのコンサートは指揮者のキャンセルにより開催されず³⁷、9月1日には音楽祭自体が「技術的な諸事情により」中止と決まったので³⁸、この収録計画の一部は実現せずに終わった。収録された音源は、《ドン・ジョヴァンニ》を例にすると、1939年11月26日の帝国放送ミュンヘン局で9時35分から放送されている³⁹。音楽祭が終わってかなり時間が経過してから、2組作成されたディスクの1組が番組で使用されたことになる（もう1組の録音の使用は、まだ確認されていない）。

開戦に向けて様々な準備が行われる中、開戦当日の番組についても検討が重ねられていた。この件については、8月31日の午後から、頻繁にコンタクトが取られるようになる。帝国放送ライプツィヒ局はこの日の16時45分に帝国放送協会の音楽部門の責任者の一人だったフリッツ・ガンスに宛てて、翌日の朝の最初の音楽番組について放送予定を報告している。それによると、朝6時から、オットー・フリッケ楽団によるヨーゼフ・ノイホイザーの〈ヴェストヴァルト行進曲〉ほか16曲の行進曲、7時10分からはゲルハルト・パルマン指揮の砲兵連隊第5中隊の演奏による軍歌の番組「国防軍は歌う」の第65回「兵士になることはなんと素晴らしいか」で〈リッペ・デトモルト〉ほか10曲を放送するとの報告があった⁴⁰。この時間の全国放送の番組は、当初、6時から「モーニングコール、天気」、6時10分からスポーツ、6時30分から8時までケーニヒスベルク局の吹奏楽演奏の中継（7時にニュースで一時中断）が予定されていた⁴¹。これらのすべてが上述の番組に変更されたのである。放送が決定した番組では、事前に収録されていた録音盤が活用されたようだ。6時からの番組では個々の曲の演奏時間が示されているし、この演奏曲目の報告に先んじて打電された文書によると、7時からの番組は録音盤に収録済みであると明言されているからである⁴²。実際のところ、後者の番組は同年8月29日の20時15分から21時に帝国放送ライプツィヒ局で放送されたものと同じの内容だった⁴³。イエルク・ク

レーメンも指摘するように、「あたかも9月1日の国防軍のポーランド侵攻がライプツィヒのラジオにおいて音楽で先取りされていたかのような」印象を与えるほど、この年の夏から帝国放送ライプツィヒ局では行進歌などの軍歌の番組が増えていた⁴⁴。こうした前段階があったからこそ、9月1日の早朝からの対応が短時間のうちに可能になったと思われる。

9月1日の全国放送の番組は、放送前日の夜には内容が決定した。8月31日の22時8分、帝国放送協会からドイツ全域の放送局に対し、ドイツ放送での放送予定を予定している番組の一覧が送信された。以下がその番組で、地方局は必要に応じてこれらの番組を中継することが許された⁴⁵。なお、20時と22時から15分ないし20分間、情報の脱落が認められるが、これはニュースの時間であったと思われる。

| | |
|-------------|---|
| 6時から8時 | ライプツィヒから 行進曲と軍歌 |
| 8時から10時 | ベルリンから 小編成のオーケストラによる演奏 |
| 10時から11時 | ケルンから ブラスによる演奏 |
| 11時から12時 | フランクフルトから 室内楽と合唱 |
| 12時から14時 | フランクフルトから 正午のコンサート |
| 14時から16時 | ベルリンから ランブール楽団の演奏 |
| 16時から18時 | ハンブルクから 午後のコンサート (アドルフ・ゼーカー指揮の大オーケストラ) |
| 18時から18時45分 | ベルリンから 歌曲とピアノ曲 |
| 18時45分から20時 | ベルリンから 吹奏楽と軍歌 |
| 20時15分から22時 | ベルリンから 帝国放送ベルリン局大管弦楽団の演奏 (ハインツカール・ヴァイゲル指揮) |
| 22時20分から23時 | ベルリンから 夜の小品 |
| 23時から1時 | ベルリンから リビショフスキ楽団の演奏 |
| 深夜1時から3時 | ベルリンから レコード放送 |

最終案の番組編成の特徴と言えるのは、定時のニュース以外、すべてが音楽になっているということである。ラジオ情報誌の予告を見ると、この日のドイツ放送の番組編成は、8時から9時は放送休止、9時から9時40分までは法定休止の時間、9時40分から体操の時間、10時から10時45分まではケーニヒスベルク局からバルト海の沿岸漁業についての報告、15時30分から16時までは女子の職業選択に関する教育番組、18時45分から19時までヴェネツィアの映画俳優展覧会の報告、19時から19時15分までニュルンベルク党大会に関する番組、21時15分から22時までは「予備役軍人の時間」など、音楽以外のコンテンツが多数含まれていたが、こういった一切が姿を消したことになる。また、音楽についても、12時からのフランクフルト局の「正午のコンサート」は、当初、ザールブリュッケン局の番組とされていた⁴⁶。朝のライプツィヒの番組と同様に、帝国放送指導部からの指示により、音楽番組の担当変更についても指示が出されていたことを物語っている。おそらく「正午のコンサート」も、文書によって詳細が確認できないとはいえ、音楽番組の個々の作品に至るまで綿密に段取りが決められていたのだろう。このような音楽をメインにした番組が編成された理由として、ニュースなどの戦争関係の情報を随時放送できるようにするための措置が指摘できる。9月1日の場合、5時48分に全放送局に宛てて、ヒトラーからの国防軍に向けての声明のスク립トが送信されている。この声明は朝6時に特別ニュースとしてラジオで放送され、7時、8時、10時にも繰り返された⁴⁷。

9月2日以降も、予定されていたドイツ放送の番組は大幅に変更された。9月1日の番組と同様に、全国放送は各放送局が担当する音楽番組の持ち寄りとなり、ニュースも随時伝えられたのである。ただし、音楽番組の内容に関しては、ラジオ週刊誌で予告されていたコンテンツがそのまま放送されることはなかったようだ。ドイツ放送の番組は放送前日まで編成が確定しないことが続いた⁴⁸、ラジオ情報誌では9月10日から16日までの間は同局の番組予定表の掲載が見送られている⁴⁹。この時期に地方局の独自性がどの程度保たれていたかについては判断が難しいが、少なくとも9月初旬は予定通りに放送できなかった

た可能性が高い。例えば、9月6日の20時15分から帝国放送ウィーン局の「イタリアの巨匠」という番組で、ザルツブルク音楽祭におけるトゥリオ・セラフィン指揮ウィーン・フィルのコンサートが録音で放送されることが、2日前と前日の『クライネ・フォルクス・ツァイトウング』で予告されている⁵⁰。しかし、この番組は放送できなかつたと考えられる。同紙では放送予定日の9月6日からからしばらくの間、番組表が掲載されておらず⁵¹、他の新聞ではこの日の放送内容は「アナウンスで告知」と記されている⁵²。当該の出演者による番組は9月25日の新聞にあらためて放送予定が掲載されていることから⁵³、この時まで延期になったのだろう。

3. ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団による特別放送シリーズ (1939年9～10月)

戦争は始まったものの、ナチスはドイツ国内での音楽や演劇の催しを通常通りに運営することを原則とした⁵⁴。先にニュルンベルク党大会の《マイスタージンガー》やザルツブルク音楽祭の9月の全公演が中止となったという事例を挙げたが、むしろこれは例外で、例えばベルリンでは9月1日にフォルクスオーパーにおいて、カール・メラウの新演出によるワーグナーの《マイスタージンガー》の公演が行われた⁵⁵。ミュンヘンのバイエルン国立歌劇場では、ミュンヘン音楽祭 (Münchner Festspiele) の一環として、9月3日にはリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》、9月5日からは「イタリア祝祭週間 (Italienische Festwoche)」と題してヴォルフ＝フェラーリの《4人の田舎者》(9月5日と8日)、プッチーニの《トスカ》(9月6日)、ヴェルディの《ドン・カルロ》が、いずれもクレメンス・クラウスの指揮によって上演された⁵⁶。一方、この時期のラジオ放送の番組に関しては、それ以前と比較して性格を変えることになった。1939年8月には、バイロイト音楽祭やザルツブルク音楽祭の放送が頻繁に行われ、クラシック音楽の第一級の演奏家による番組が連日のように放送されていた。すでに述べたように、当初の予定では9月以降もそうし

た番組が続くことになっていたが、これらは放送計画から消えた。特に9月上旬は、ドイツ放送のクラシック音楽の演奏は主に放送オーケストラが担い、スター級の演奏家も番組に起用されることはなかった。

このような状況の中で、9月11日から開始されたベルリン・フィルハーモニー管弦楽団によるラジオ番組シリーズは、ひととき目を引くものになった。これは、ゲッベルスからの要請で実施された⁵⁷。基本的なコンセプトは、「週3回、ドイツの偉大な巨匠たちの作品」を取り上げることで⁵⁸、クレメンス・クラウスの指揮による10月3日の最終回まで⁵⁹、放送回数は全部で11回を数えることになる⁶⁰。このオーケストラの新シーズンが本格化していなかったこと、また戦争開始に伴う士気高揚が目的とされたことで、頻繁に演奏が披露されたものと思われる。

この放送の全容については先行研究で示されていないため、以下に判明した限りでリストアップを試みた。演奏曲目は、各放送局に打電された文書からは第10回と第11回のみが特定可能で、ほかの9回分については、他の資料から特定できたものを記した。

第1回 9月11日 20時から21時15分 カール・ベーム指揮⁶¹

ブラームス：交響曲第1番，ベートーヴェン：《レオノーレ》序曲第3番⁶²

第2回 9月13日 20時から21時 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮⁶³

ヘンデル：合奏協奏曲 作品6-5，ベートーヴェン：交響曲第5番《運命》⁶⁴

第3回 9月15日 20時から21時 ヘルマン・アーベントロート指揮⁶⁵

第4回 9月17日 20時から21時 オイゲン・ヨッフム指揮⁶⁶

*第3回と第4回では、モーツァルト，ベートーヴェン，シューマン，ブラームスなどの作品が放送された（曲目は不明）⁶⁷。

- 第5回 9月19日 20時20分から21時20分 カール・ベーム指揮⁶⁸
曲目不明
- 第6回 9月22日 20時20分から21時20分 ヘルマン・アーベントロート指揮⁶⁹
曲目不明
- 第7回 9月24日 20時20分から21時20分 指揮者, 曲目不明⁷⁰
曲目不明
- 第8回 9月26日 21時15分から22時 ヨーゼフ・カイルベルト指揮⁷¹
ベートーヴェン: 交響曲第6番《田園》⁷²
- 第9回 9月29日 20時20分から21時15分 指揮者, 曲目不明⁷³
- 第10回 10月1日 20時50分から22時 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮
ベートーヴェン: 《エグモント》序曲, 交響曲第3番《英雄》⁷⁴
- 第11回 10月3日 21時15分から22時 クレメンス・クラウス指揮
チャイコフスキー: 交響曲第5番⁷⁵

この番組を放送したのは全国放送のドイツ放送で、地方局は必要に応じてこの番組を流した。10月1日のフルトヴェングラーのコンサートは、「帝国放送の招きによって」スロヴァキアでもオンエアされ、両者の間で「音楽文化の領域で帝国放送との緊密な関係」を築く第一歩となったという⁷⁶。

この番組の企画・運営は開戦後から始まっただけに、準備時間が短く、スケジュール管理や指揮者の確保には相当の困難があったと想像される。初回のベームとの演奏の場合、リハーサルは放送当日に2時間行われただけだった⁷⁷。先の一覧で指揮者が特定できない番組が2回あるのは、全放送局への前日の配

信時刻までに、不確定要素があり、公表できなかったためとも考えられる。最終回のクラウスとの交渉も、放送日の決定までには時間を要した。クラウスにベルリン・フィルの放送コンサートへの依頼があったのは9月19日で、この段階では9月26日の番組への出演が求められていた。だがクラウスは、ミュンヘン音楽祭の後、シュタイヤーマルクで休暇を取っており、電話での連絡もつかない状態だった。1939/40年のシーズンの開幕公演（9月24日の《タンホイザー》）までにはミュンヘンに戻ってくるとしても、シーズンの最初だけに歌劇場の運営に関する重要な案件が山積みになっていた。また、開幕公演に続けて9月28日から30日までオペラを指揮する予定もあったため、彼が提案された日にベルリンへ行くのは難しかった⁷⁸。休暇から戻ったクラウスは、ゲッベルスからの「名誉ある仕事」を引き受けるつもりはあるものの、不在中の仕事を片付けねばならないこと、また、9月26日に実施されるザルツブルク・モーツァルテウムの入学試験に責任者として立ちあわなければならないとの理由で、期日の変更を提案した。ベルリン・フィル側で考えている放送コンサートのシリーズの延長がもし可能であれば、10月3日であれば出演できると言ったのである⁷⁹。先述の一覧に示したように、クラウスは10月3日に出演したことが確認できる。このことから、このシリーズは当初は10回で企画されたものの、クラウスの都合に合わせて最後の1回が追加されたことがわかる。

ベルリン・フィルのラジオ番組シリーズは、指揮者の人選や作曲家を見ると、「ドイツ」を強く意識させるものになった。最終的に決定した指揮者は、ドイツ国内の要職にある人物で占められていた。フルトヴェングラーは1934年12月に「ヒンデミット事件」を期にドイツ国内のオーケストラで最高の格付けを得ていたベルリン・フィルの首席指揮者の地位を辞しているが、その後もこの楽団の重要な指揮者だった。本稿でも見たように、1939年のニュルンベルクの党大会においても、《マイスタージンガー》の指揮を委ねられるなど、ナチスにとって国内外へのアピールに欠くべからざる人物の一人だったのである。そのほかの指揮者については、ベームはザクセン国立歌劇場、ヨッフムはハンブルク国立歌劇場、カイルベルトはカールスルーエ国立劇場、クラウスはバイエル

ン国立歌劇場の、それぞれ音楽監督の任にあった。アーベントロートも、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の常任指揮者だった。

演奏レパートリーも、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェン、シューマン、ブラームスといった独逸系の作曲家の作品がメインで、クラウスの出演した最終回のチャイコフスキーだけが例外である。この選曲に際しては、この年の8月に締結したばかりの独ソ不可侵条約が意識されたと考えていいだろう。以下の当日の放送アナウンスにおいては、この名曲の誕生の背景にドイツとロシアの双方の文化からの貢献が言及されており、ここに当時の国際情勢の影響を認めることができるのである。「チャイコフスキーは人生の過酷さを経験しました。しかし、そうした過酷さが彼の心を支配することはできませんでした。チャイコフスキーは夢想的に感情の世界へと身を委ねていましたが、しかし、情熱的に人生の美と喜びを告白できる時にはじめて、彼は自分自身になります。この告白する力を、彼はロシアの民族音楽と熱愛するドイツの巨匠たちの手本から得ています。こうしたすべてのことが、交響曲第5番という人気のある作品で最も明確に示されるのです」⁸⁰

演奏された作品の傾向については、全体として戦時にふさわしいものが多いように見受けられる。例えば、ベートーヴェンの交響曲第5番やブラームスの交響曲第1番のように、ハ短調で曲が始まり、ハ長調で曲が終了するという、苦悩を通じての栄光という図式が成り立つような作品が含まれている⁸¹。同様のコンセプトが認められる作品としては、ベートーヴェンの《レオノーレ》序曲第3番と《エグモント》序曲、チャイコフスキーの交響曲第5番も挙げられる。戦争に向かう決然とした意志が音楽においても表現できるものかが重要だったと思われる。ベートーヴェンの交響曲第3番は、雄大な曲想というだけでなく、「英雄」という表題の持つ意味も大きかったのではないだろうか。前章において引用したミュラーの論説で、ドイツ音楽の特質として、「英雄的なもの」が指摘されていたことを思い起こしたい。この「英雄的なもの」をこの当時のドイツで体現するものといえば、総統ヒトラーである。そうしたイメージも選曲に際して勘案されたことだろう。そうすると、曲想が穏やかな

ベートーヴェンの交響曲第6番《田園》はどうだろうか。この選曲は、マイケル・H・ケーターも指摘するように、ナチスの芸術政策では士気を高めるだけでなく、国民をなだめる鎮静剤としての意味も重んじられていたことの現れと考えられる⁸²。

放送された番組は好評だった。ヴィルヘルム・マッテスは、ベルリン・フィルの番組は特筆すべき出来で、前線勤務にある人々にドイツの文化に触れる機会を作るだけでなく、国内での産業従事者にとっても息抜きや活力を得る良い時間となったと評した⁸³。『フォルクスフンク』誌の時評では、ベルリン・フィルの崇高な演奏は全国民にとって「魂と精神の滋養」で、このような最上の演奏は軍事行為と並んでドイツ人の連帯感を高めるものになるとされた⁸⁴。

4. 結びに変えて——問われる音楽の意味

本稿の結びとして、開戦時からドイツのラジオ番組において音楽番組が重要視された理由と、この時代にこのような番組が果たした役割について考察したい。

本稿の第1章で示したように、ニュルンベルクにおけるナチス党大会で上演が予定されていた《マイスタージンガー》のラジオ中継放送は、約1か月前から入念に準備されていた。本稿では紙数の都合で他の番組との比較を示すことができなかったが、実際のところは平時の通常の音楽番組についてもほぼ同様のプロセスが踏まれていた。1時間ほどの番組であったとしても、担当する局から全演奏曲目が事前に報告されていたのである。全体的な傾向として、おおむね1か月前には予定が組まれており、企画が大規模なものについては数か月前に素案が送られるというケースもあった。今回のリサーチで参照した1939年8月の帝国放送指導部と地方局の交信記録には、この年の11月に予定されていた帝国放送ウィーン局の音楽番組の放送案も含まれていた。このように見えてくると、《マイスタージンガー》の中継放送に関して中継の起点局と帝国放送指導部の間で行われた連絡は、手続きとしては通常の番組とは基本的に同じとい

うことになる。他の番組と違うところは、全国放送の番組が地方の局でも同時に中継されているということと、地方局に同時中継の申し入れが求められたことである。本稿でも述べたように、競わせるように名乗りを挙げさせることで、帝国放送指導部が各地の放送局を強力に統括するシステムがあったことを垣間見せている。

帝国放送指導部に事前に放送内容が報告されるという手続きは、ラジオの番組誌に提供する情報収集というだけでなく、コンテンツのチェックという機能もあわせ持っていた。開戦直前のショパンの作品の放送禁止の指令はそうした事例の一つで、ポーランドという国民性が音楽を通じてイメージされることが問題だった。そして、方針に逸脱した行為があった場合には、1939年12月の帝国放送シュトゥットガルト局の例が示すように、放送内容について再考するように指示も出された。また、開戦当日の朝に行進曲や軍歌の放送が実施されたことにも、やみくもに音楽を流すのではなく、帝国放送指導部によるチェック体制が機能し、その時流にふさわしい「演出」が行われていたことを示している。ベルリン・フィルの演奏曲目の作品の傾向に栄光ある勝利と英雄崇拜の志向が認められることも、時流の影響なしには考えられないことである。これらの事例は、戦争が進む中で、その場の雰囲気づくりに音楽を活用してゆくことの先例となったように思われる。例えば、独ソ戦が始まり、ドイツ軍が大敗を期した1941年に、放送用に録音されていたモーツァルトの《レクイエム》がゲッベルスによって放送が禁じられた。ヒトラーの判断のミスが音楽を通じて感じ取られること、そしてそれが国民の士気高揚にマイナスになる要素があるとされたためである⁸⁵。

ラジオが音楽放送を盛んに放送することは、ドイツ国内における音楽をめぐる言説にも大きな影響をもたらした。既に見たように、開戦の後も、コンサートやオペラの公演は、通常通りに行われていた。しかし、戦争開始という国家の有事に際して、芸術活動が行われていることに厳しい目を向ける人も少なくなかったようだ。1939年9月13日に刊行された『ジグナーレ』の冒頭では、編集主幹のリヒャルト・オーレコプフが、戦争の開始という「ドイツ国民の未来

について決定を下さなければならない重大な時」に、「音楽に考えを向けることは、我々にとってあまり重要ではないという考え」を抱く人が数多くいることに注意を向ける。しかし、次のように反論する。「けれどもまさに音楽芸術こそが、いま、倫理的で崇高な力の証明を示すのであり、全力で芸術とその理念を保持する者の働きが魂の抵抗力を保持するための義務ともなるのである」と。彼によると、音楽芸術のこうした役割に対して模範的に「文化的使命」を全うするのがラジオだという。帝国放送指導部が予定された番組をすべて変更し、「音楽と現在の出来事との関係に関連性をもたらした」ことは高く評価できるといっているのである⁸⁶。

『フォルクスフンク』に掲載された無記名の記事も、戦時における音楽とラジオが高い可能性を持つことを指摘している。その要点はこうである。戦時下においても音楽の役割は減じることはなく、むしろ行進曲などの軍楽、クラシック音楽、民謡が、それぞれの特質を生かして戦争に貢献できる。軍楽は集団の規律をもたらすとともに、戦時の突撃や死の恐怖に打ち勝つ精神を養う。クラシック音楽は、秩序、力強さ、正確さ、慎重さ、神聖なものを感じさせ、精神を豊かにしてくれる。民謡は、素朴な形で愛、戦い、苦悩、慰めをもたらす。子供のころから親しみ、人生の最後の時まで忘れることがなく、幾世代を経ても「真に崇高な連帯」を作り出す。そしてここに各々は自分たちの運命が歌われていること、さらにそれが民族の運命と分かちがたいものとなっていることを感じることになる。ラジオはこれらの素晴らしい音楽を放送してくれる。それは兵士にとっては故郷から直接的に届けられることで勇気をもたらす贈り物となる、というのだ⁸⁷。

こうした言説が、番組制作に関与していたゲッベルス率いる宣伝省の指示として出されてきたものか、あるいは上層部への忖度から言われてきたものであるか、確認することは難しい。いずれにせよ、ラジオを通じて流される音楽が戦争との関わりで意味付けられることにより、音楽の存在意義が現実的なリアリティーから捉え直される環境が出来上がったことは看過できないだろう。音楽はナチス・ドイツの崩壊まで戦争を精神的に支えるツールとして欠くべから

ざるものとなり、ラジオの音楽番組もその一役を担うものとなったのである。

*本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金・基盤研究Cの採択課題「指揮者C・クラウスとナチス・ドイツ時代のラジオ番組制作に関する実証的研究」(研究課題番号:17K02378, 研究期間は2017～2020年度の予定)による研究成果の一部である。

注

- 1 ロジャー・ムーアハウス (高儀進訳) 『戦時下のベルリン——空襲と窮乏の生活1939-45』(白水社, 2012年), 30-31頁。ムーアハウスが引用した回想録は、次のものである。Günter Grossmann: Die sieben mageren Jahre eines jungen Berliners. Erinnerungen an den Zweiten Weltkriegs. Berlin (Frieling-Verlag) 2005, S. 9. グロスマンの回想では、1939年9月1日は日曜日とされているが、正しくは金曜日である。
- 2 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 11. 7. 1939, S. 1.
- 3 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 1. 8. 1939, S. 1.
- 4 Bundesarchiv (BA). R78/428. Nagel (RS Breslau-Programmverwaltung) an DS-Programmverwaltung, 9. 8. 1939.
- 5 BA. R78/430. Werchner (RS Stuttgart) an Kiepsch (Reichssendeleitung) und DS-Sendeleitung, 11. 8. 1939.
- 6 BA. R78/431. Schleussinger (RS Hamburg) an Apitsch (Reichssendeleitung), 12. 8. 1939.
- 7 BA. R78/431. Dr. Diettrich an Röhr (RS Breslau-Sendeleitung), 12. 8. 1939.
- 8 BA. R78/432. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten und die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders, des Landessenders Danzig, des Deutschen Kurzwellensenders, 14. 8. 1939.
- 9 BA. R78/437. Hausdorf (RS Breslau-Programmverwaltung) an DS-Programmverwaltung, 19. 8. 1939.
- 10 BA. R78/438. Roehr (RS Breslau-Sendeleitung) an die Reichssendeleitung, 21. 8. 1939.
- 11 BA. R78/432. RS Wien-Sendeleitung an die Reichssendeleitung, 14. 8. 1939.
- 12 BA. R78/433. Hacht (RS Königsberg) an die Reichssendeleitung, 15. 8. 1939.
- 13 BA. R78/433. Moeller (RS Leipzig) an die Reichssendeleitung, 15. 8. 1939.
- 14 BA. R78/434. Moeller (RS Leipzig) an die Reichssendeleitung, 16. 8. 1939.
- 15 BA. R78/436. DS-Sendeleitung an die Intendanz der Reichssender Leipzig, Wien,

Frankfurt, 18. 8. 1939.

- 16 BA. R78/437. Weber (RS Saarbrücken-Sendeleitung) an die Reichssendeleitung, 19. 8. 1939.
- 17 Das Kleine Radioblatt, 6. Jahrgang (1939), Folge 36, S. 10-11.
- 18 BA. R78/437. DS-Sendeleitung an Dr. von Eyb (RS München), 19. 8. 1939; BA. R78/438. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, den Intendanten des Deutschlandsenders, und die Intendanten der Reichssenders: Frankfurt, Hamburg, Königsberg, Leipzig, München, Saarbrücken, Stuttgart, Wien, Böhmen, Breslau, des Landessenders Danzig, 21. 8. 1939. 8月17日の案は、当日の文書が残されていないため、8月21日の文書によって確認した。
- 19 BA. R78/440. Apitzsch (Reichssendeleitung) an die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders, des Landessenders Danzig (ohne die RS Köln und Berlin), 25. 8. 1939.
- 20 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 16. 8. 1939, S. 7.
- 21 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 24. 8. 1939, S. 2.
- 22 Edda Fuhrich und Gisela Prossnitz: Die Salzburger Festspiele, Bd. 1, Salzburg und Wien (Residenz Verlag) 1990, S. 260-261.
- 23 Clemens Hellsberg: Demokratie der König. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker, Zürich (Schweizer Verlaghaus) 1992, S. 464.
- 24 Fred K. Prieberg: Kraftprobe. Wilhelm Furtwängler im Dritten Reich, Wiesbaden (Brockhaus) 1986, S. 362; Herbert Haffner: Furtwängler, Berlin (Parthas Verlag) 2006, S. 273. プリーベルクは、ニュルンベルクの党大会におけるヒトラーの演説の前に、フルトヴェングラーの指揮によってグルックの《アウリスのイフィゲニア》序曲とベートーヴェンの交響曲第5番《運命》が演奏されることになったと告げるボルマンからローゼンベルク宛の文書（1939年7月25日付）に着目している。フルトヴェングラーが同年の党大会の前夜祭に上演される《マイスタージンガー》を指揮することが決まったということに関しては情報の典拠が示されていないが、この7月25日付の文書から状況を推察したものと思われる。ただし、先に本稿において示したように、同年8月1日に『フェルキッシャー・ベオバハター』において発表された《マイスタージンガー》の指揮者は、クラウスだった。
- 25 Fred K. Prieberg, a. a. O., S. 359f.; Clemens Hellsberg, a. a. O., S. 468-470. フルトヴェングラーとゲッベルスの会談は、ヘルスベルクは8月2日、プリーベルクは8月11日としている。
- 26 Josef Goebbels: Die Tagebücher. Im Auftrag des Instituts für Zeitgeschichte und mit Unterstützung des Staatlichen Archivdienstes Rußlands. Hrsg. von Elke Fröhlich, München u.a. (K.G.Saur) 1993-2008, Teil I, Bd. 7, S. 68. ドレヴェスがウィーン・フィルを指揮したことで批判されていたことは、同年8月19日のゲッベルスの日記にも記述がある。Vgl. Ebd, S. 69.

- 27 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 27. 8. 1939, S. 1.
- 28 イアン・カーショー (福永美和子訳, 石田勇治監修) 『ヒトラー 下——1936-1945 天罰』 (白水社, 2016年), 244 ~ 247頁。
- 29 BA. R78/439. Glasmeier (Reichsintendant) an alle Reichssender, 22. 8. 1939.
- 30 BA. R78/439. Raskin (Reichssendeleitung) an die Intendanten aller Reichssender, Deutschlandsender, Berlin und KWS, 22. 8. 1939.
- 31 Konrad Müller: Polen und die Musik. In: Signale für die musikalische Welt, 97. Jahrgang, Nr. 41/42 (11. Oktober 1939), S. 494.
- 32 Robert Schumann: Gesammelte Schriften über Musik und Musiker, Leipzig (Georg Wigand's Verlag) 1854, Bd. 1, S. 280.
- 33 シューマンのショパン理解については, 拙稿「革命への憧れ——ローベルト・シューマンのショパン批評「作品Ⅱ」の成立をめぐる試論——」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52輯第2分冊, 2007年2月, 157-167頁)を参照されたい。
- 34 Robert Schumann: a. a. O., Bd. 1, S. 279.
- 35 BA. R78/441. Stuckart (Reichssendeleitung) an Dr. Habersbrunner (Intendant des RS München), 27. 8. 1939; BA. R78/442. Stuckart (Reichssendeleitung) an den Intendanten des RS München, 30. 8. 1939.
- 36 一例をあげれば, 1939年8月13日にザルツブルク音楽祭で行われたクレメンス・クラウス指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のヨハン・シュトラウス・コンサートは, プレス用のヴァックディスクが作成され, ハノーファーのドイツ・グラモフォン社に送付される手筈になっていた。BA. R78/432. Koch (Deutschlandsender-Sendeleitung) an Maywald (RS Hamburg-Sendeleitung), 14. 8. 1939.
- 37 Hans Jaklitsch: Die Salzburger Festspiele Bd. 3. Verzeichnis der Werke und der Künstler 1920-1990, Salzburg und Wien (Residenz Verlag) 1991, S. 47.
- 38 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 2. 9. 1939, S. 9.
- 39 Das Kleine Blatt, 24. 11. 1939, S. 22.
- 40 BA. R78/442. Schroeter (RS Leipzig) an Ganss (Reichssendeleitung), 31. 8. 1939. この文書によると, 6時から放送されたのは以下の16曲である。Josef Neuhäuser: Westerwald-Marsch, Franz Luebbert: Helenen-Marsch, Carl Latann: Admiral Stosch-Marsch, August Reckling: Jägermarsch, Kral: Brucker Lagermarsch, Heinrich Blankenburg: Kämpfend vorwärts, Meissner: Im Gleichschritt, Hans Bund: ? (曲目不明), Meissner: Zum Städtle hinaus, Heinrich Blankenburg: Ruhm und Ehre, Georg Freundorfer: Gruss an Obersalzberg, Paul Höffer: Junges Blut, frischer Mut, Jakob Christ: Um den Lorbeer, Adolf Schneider : Durch Wolken, Wind, und Wetter, F. Schmidt-Hagen: Ins blühende Land, Hermann Schmidt: Panzerreiter-Marsch. 7時10分からの番組は, 以下のとおりである。„Die Wehrmacht singt (65) – O wie schön, Soldat zu sein.“ Ausgeführt von der 5. Batterie eines artillerie-Regimentes

(Leitung: Gerhard Pallmann). Werke: „Lippe Detmold“, „Reicht, ihr Lieben, mir die Hand“, „Jetzt müssen wir marschieren“, „Was braucht der Soldat“, „Die Vidette (durch Gebüsch und Nebelschleier)“, „Die Pacht spannt ihren Schleier“, „Ein Reiter kam geritten“, „Es ist stille Nacht“, „Auf der Heide blüht ein kleines Blümelein“, „Es ist so schön, Soldat zu sein“.

- 41 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 35 (Woche vom 27. August bis 2. September 1939).
- 42 BA. R78/442. Pfaff (RS Leipzig) an Ganss (Reichssendeleitung), 31. 8. 1939.
- 43 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 35 (Woche vom 27. August bis 2. September 1939).
- 44 Jörg Clemen: Musik am Reichssender Leipzig. In: Thomas Schinköth (hrsg.) : Musikstadt Leipzig im NS-Staat. Beiträge zu einem verdrängten Thema, Altenburg (Verlag Klaus-Jürgen Kamprad) 1997, S. 354f. この研究においては、論者の見解の裏付けとして極めて重要な開戦当日の早朝の番組には触れられていない。本稿で取り上げた1939年8月31日の文書の存在は把握していなかったと思われる。
- 45 BA. R78/442. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 31. 8. 1939.
- 46 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 35 (Woche vom 27. August bis 2. September 1939).
- 47 Hans Bausch (Hrsg.) : Rundfunk in Deutschland. Bd. 2 (Ansgar Diller: Rundfunkpolitik im Dritten Reich), München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1980, S. 300.
- 48 後述するベルリン・フィルの番組は、放送日の前日に配信された文書に記されている。
- 49 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 37 (Woche vom 10. bis 16. September 1939)
- 50 Kleine Volks-Zeitung, 4. 9. 1939, S. 6; Kleine Volks-Zeitung, 5. 9. 1939, S. 12.
- 51 『クライネ・フォルクス・ツァイトゥング』では、1939年9月6日から番組表の掲載が停止されているが、9月24日は当日の番組が紹介された。番組表の掲載が再開されるのは、1939年10月2日からである。
- 52 Neues Wiener Tagblatt, 6. 9. 1939, S. 6; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 6. 9. 1939, S. 9.
- 53 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 25. 9. 1939, S. 5.
- 54 Edda Fuhrich und Gisela Prossnitz, a. a. O., S. 266.
- 55 Fritz Stege: Berliner Musik. In: Zeitschrift für Musik. 106. Jahrgang (1939), Heft 10 (Oktober), S. 1048.
- 56 Österreichische Nationalbibliothek. Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv

- 158/1-3. Clemens Krauss: Dirigir-Daten (Manuskript). 同資料の複写に際しては、同館音楽コレクションのアンドレア・ハラント博士 (Dr. Andrea Harrandt) にご配慮をしていただいた。感謝申し上げます。
- 57 Misha Aster: „Das Reichsorchester“. Die Berliner Philharmoniker und der Nationalsozialismus, München (Siedler) 2007, S. 222.
- 58 Musik im Rundfunk. In: Zeitschrift für Musik. 106. Jahrgang (1939), Heft 10 (Oktober), S. 1080.
- 59 Musik im Rundfunk. In: Zeitschrift für Musik. 106. Jahrgang (1939), Heft 11 (November), S. 1136.
- 60 BA. R55/247. Bericht des künstlerischen Leiters über die Spielzeit 1939/40.
- 61 BA. R78/444. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 10. 9. 1939.
- 62 Misha Aster, a. a. O., S. 222.
- 63 BA. R78/445. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 12. 9. 1939.
- 64 この音源はドイツ放送アーカイブ (Deutsches Rundfunkarchiv, 以下 DRA) に残されている。これに基づく CD に以下のものがある。Wilhelm Furtwängler: Previously Unpublished Historic Recordings 1939-1944. Tahra. FURT-1014/15. (P) 1997.
- 65 BA. R78/445. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 14. 9. 1939.
- 66 BA. R78/446. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 16. 9. 1939.
- 67 Salzburger Volksblatt, 18. 9. 1939, S. 5.
- 68 BA. R78/446. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 18. 9. 1939.
- 69 BA. R78/447. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 21. 9. 1939.
- 70 BA. R78/447. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 23. 9. 1939.
- 71 BA. R78/447. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die

- Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 25. 9. 1939.
- 72 Thomas Keilberth: Joseph Keilberth. Ein Dirigentenleben im XX. Jahrhundert. Wien (Apollon Musikoffzin) 2007, S. 60.
- 73 BA. R78/448. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 27. 9. 1939.
- 74 BA. R78/448. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 27. 9. 1939.
- 75 BA. R78/449. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 2. 10. 1939; DRA. K000590227 (Archivnummer 1931494). Tschaikowsky: Sinfonie Nr. 5 e-moll, op 64. Clemens Krauss (Dirigent), Berliner Philharmoniker, 3. 10. 1939 (Aufnahmedatum). DRA の音源調査に際しては、マリオン・ギルム (Marion Gillum) 氏とクリスティアーネ・プース＝ブライル (Christiane Poos-Breir) 氏にご助力いただいた。御礼を申し上げたい。
- 76 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 29. 9. 1939, S. 5.
- 77 Misha Aster, a. a. O., S. 222.
- 78 Bayerisches Hauptstaatsarchiv (BayHStA). Intendanz der Bayerischen Staatsoper 1725. Maschat an das Berliner Philharmonisches Orchester, 20. 9. 1939. 同館の資料の閲覧と複写に際しては、ゲルハルト・フュルメッツ (Gerhard Fürmetz) 氏とマルクス・フラウエンロイター (Markus Frauenreuther) 氏にご助力を頂いた。心より御礼を申し上げる。
- 79 BayHStA. Intendanz der Bayerischen Staatsoper 1725. Clemens Krauss an das Berliner Philharmonisches Orchester, 24. 9. 1939.
- 80 この放送の様態については、注75で示した DRA の録音を参照した。この録音では、演奏の前後に、当日放送された女性アナウンサーによるコメントが収録されている。
- 81 ベートーヴェンの交響曲第5番は、戦局が悪化する最中に頻りにラジオで流された作品である。例えば、1944年2月から開始されたラジオ番組シリーズ「ドイツの音楽の不滅の巨匠」の第1回でも、《運命交響曲》として放送された。この演奏を担当したのも、フルトヴェングラー指揮するベルリン・フィルだった。
- 82 Michael H. Kater: Die mißbrauchte Muse. Musiker im Dritten Reich, München (Europa Verlag) 1998, S. 341.
- 83 Willhelm Matthes: Was wird ….. aus den Konzerten, aus dem Musikunterricht und der Unterhaltungsmusik? In: Signale für die musikalische Welt, 97. Jahrgang, Nr. 39/40 (27. September 1939), S. 477f.
- 84 Musik in dieser Zeit. In: Volksfunk, 9. Jahrgang, Folge 39 (24. September 1939), S.

11.

85 Misha Aster, a. a. O., S. 254.

86 Richard Ohlekopf: Das Musikleben geht weiter! In: Signale für die musikalische Welt, 97. Jahrgang, Nr. 37/38 (13. September 1939), S. 465.

87 Musik in dieser Zeit. In: Volksfunk, 9. Jahrgang, Folge 39 (24. September 1939), S. 4 u. 11.

フォイエルバッハのルター論

—— 初期から中期へ、その思想的転回の意味 ——

川 本 隆

本稿は、拙論「初期フォイエルバッハのルター論」(『桜文論叢』第96巻, 2018)の続編にあたり、初期との対比で中期フォイエルバッハ(1830年代末から40年代半ばまで)のルター論を解明するものである。前拙論で筆者が明らかにしたのは、おおまかには以下の三点であった。

- 1) フォイエルバッハのルター評価は生涯を通じて一貫していたわけではなく、初期の頃からそのつど批判的な問題関心をもって自らのスタンスを変えつつ、ルター評価にも変更を加えていた。
- 2) フォイエルバッハの思想形成の大きな転機を39年の「ヘーゲル哲学批判のために」に求める解釈が妥当であるとしても、その唯物論的転回という因子のみで彼の(ルター評価も含めた)思想的転回の意義を考察するにはあまりにも粗雑すぎる。
- 3) フォイエルバッハのルター解釈の推移は、彼の読解の「甘さ」や「ゆらぎ」に由来するのではなく、むしろ彼の宗教批判活動の深化の結果である。

フォイエルバッハの思想形成に関しては、拙著『初期フォイエルバッハの理性と神秘』(知泉書館, 2017)ですでに論じてきたことではあるが、上記拙論も含め、議論が主として39年以前の初期に限定されていた。本稿では、その後のフォイエルバッハのルター論がどのような推移を遂げたか、その思想的転回が当時の彼自身にどのような意味をもっていたかについて、(われわれにとっての

意味も視野に収めつつ) 検討してみたい。

多くの論者が指摘しているように、フョイエルバッハの主著『キリスト教の本質』1841は完成された著作ではなく、思想形成の上では過渡的な著作である。それは彼が自認するところでもあった。たとえば、フョイエルバッハ自身が編集した『L・フョイエルバッハ全集』¹第1巻への「序言」1846(以下、「全集版序言」と略)において、彼は、若い頃の思弁的理性にたいする強い関心が41年の『キリスト教の本質』のころにも残存し、かつ、「抽象的な理性的本質、自然の現実的感性的本質とは異なる哲学の本質」が「亡霊のごとく脳裡をさまよっていた」(GW10, S.188)と批判的に回顧している。すなわち、41年の段階では、「感性」の意味を十分にとらえ切れず、理性的本質(哲学)と感性的本質(人間学)との矛盾のなかで模索していたが、44年の『ルター論』で「ようやく哲学者を完全に『振り払い abschütteln』, 哲学者を完全に人間に吸収させた im Menschen aufgehen lassen」(ebd.)といわれている。この引用でいわれる「哲学者」は、筆者の理解では、ベーコンからヘーゲルにいたる近世の哲学者たちすべてであり、同時に、ヘーゲル哲学に感化された若きフョイエルバッハ自身も含まれている。「自伝的断片」1846における「神が私の第一の思想、理性が私の第二の思想、人間が私の第三にして最後の思想であった」(GW10, S.178)²という回顧、および、『根本命題』1843の「新しい哲学は、人間学における神学の完全な、絶対的な、矛盾のない解消 *Auflösung* である」(GW9, S.335)というテーゼをあわせて考慮すると、『ルター論』には、近世における〈神(神学)⇒理性(哲学)⇒人間(人間学)〉の必然的な歩みの〈終着点〉にして新しい人間学の〈出発点〉という二重の意味が与えられているように思われる。すなわち、44年の時点で「古い哲学」(神学の人間学化という必然的な流れの途上にあった近世から同時代の哲学の全て)が完全に清算され、それ以後は従来の「哲学」とまったく異なる「人間学」が始まるのだ、と。この『ルター論』には、『キリスト教の本質』も含め、それ以前の哲学全般を包括的に批判する内容が含まれており、彼の「感性」概念、「人間」概念のエッセンスが44年の同書に凝集していると予想される。この点で44年の『ルター論』は39年の転回につづ

く第二の節目として重要な転機をなす。ただし、この書に「『キリスト教の本質』への一寄与」という副題が付されていた点については若干、注意が必要である。というのも、この副題は44年の時点でフォイエルバッハが、『ルター論』を41年の『キリスト教の本質』の補完と位置づけていたことを示すのに対し、46年の「自伝的断片」では、『ルター論』に単なる「寄与」以上の意義を認めたと明言しているからである (vgl. GW10, S.188)。44年の『ルター論』に大幅な加筆や修正が加えられたのならともかく、二年後のフォイエルバッハはなぜ、ほぼ無修正のままで『ルター論』に〈旧哲学の解消〉という特別な意義を与えたのだろうか。まずは41年までのフォイエルバッハのルター評価を振り返っておこう。³

1. 30年代の汎神論的思弁とルター

若きフォイエルバッハがヘーゲルに師事していたころ、ヘーゲル哲学を汎神論として受容し、同時代の神学批判を展開していたことは、ヘーゲル宛『理性論』添え状1828における〈キリスト教を「絶対的宗教」として認められない〉という表明や、『理性論』におけるヤコービ的な「死の跳躍」の不要性の指摘 (vgl. GW1, S.60)、「神を認識することができない」とする同時代神学者たちへの批判 (vgl. GW1, S.138, Anm.29)、『死と不死』1830におけるブルーノ、ベーム、スピノザの賞賛 (vgl. GW1, S.463, Xenien, Nr.195.)、「全にして一、一にして全であるような場」(GW1, S.215)の指摘、「汎神論以外はすべてエゴイズム……である」(GW1, S.216)という言説などに見いだされる。「区別され明確化された諸契機を己れのうちに包括しているような一性」を「真の絶対者」とみる『理性論』の立場 (vgl. GW1, S.156, Anm.48)は、まずもってヘーゲルの絶対者観に依拠した汎神論的世界観といってよい。28年の『理性論』において、自然や感性は精神・理性の下位概念であり、克復されるべき対象とみられる傾向が強い。汎神論的愛が強調される30年の『死と不死』にしても、(自由奔放なアフォリズムのために論旨が多義的だが)40年代の唯物論的な「感性」とはまったく異なる

思弁性がある。たとえばフョイエルバッハが有神論の人格神を批判し、「神は愛なり」というテーゼにベーメ的な愛の遍在の思想を汎神論的に読み込むとき、そこで語られる「愛そのもの」とは「思惟そのもの」と一つになった最高レベルの精神にほかならない。すなわち、私という個体が愛するのでも、神という人格が愛するのでもなく、最高の思惟・精神と一つになっている「愛そのもの」が実体として遍在し現に生成している、という見識である。『理性論』に比べ、『死と不死』では愛の高揚と賛歌が目立つが、しかし、〈精神あつての自然〉という思弁精神優位の世界観は揺るぎないものとしてあった。もちろん『理性論』にみられる「自然は思惟しない」(GW1, S.22), 「諸物は総じて真の一性に達しない」(GW1, S.148, Anm.39)などの自然蔑視の叙述は『死と不死』には見当たらない。むしろ逆に「自然はそれ自身の根拠……である」(GW1, S.291)といった自然の価値を高めるかのような叙述が目立つが、やはり汎神論的な神(または精神)を前提とした議論であった。自然を「純粋な魂 *lautere Seele*」(GW1, S.211)とみなし、魂が「素のままの感性的なもの *das roh Sinnliche*」を振り捨て「思想」や「真理態」に至ると「理性、自己意識」「精神」になる(vgl. GW1, S.314)という論旨は、ヘーゲルの弁証法的発展にならった見方といってよい。

筆者のみるところ、フョイエルバッハの汎神論的な世界観は、少なくとも41年の『キリスト教の本質』初版までは続く。「哲学者を人間に吸収させた」という先の引用は、唯物論的転倒によって人間理性に還元したというだけの単純な話ではない。その内容ならば、39年の唯物論的転回をもって新しい人間学のスタートとしてよかったはずである。しかし46年のフョイエルバッハには、41年の『キリスト教の本質』の「人間」も43年の『根本命題』の「人間」も、「哲学者」の残像を払拭しきれない未完のものと映った。だからこそ、44年の『ルター論』でようやくこの問題を解消したという話になる。ただし「哲学者」「人間」といったフョイエルバッハの用語法は多義的で、にわかには彼の真意を掴みかねるところがある。かつて半田秀男が「我々は若いフョイエルバッハの『論理』のみならず『心理』をもみななければならない」⁴と忠告して

いたことは、中期フォイエルバッハの用語についてもあてはまる。加えて、彼の用語や文章は、視点の置きどころによって異なる意味に転じうる。その真意を可能なかぎり忠実にとらえるには、少なくとも、執筆時期に応じた彼のそのつどの問題意識に配慮しながら、初期と中期の用語法を仔細に比較検討することが不可欠であろう。ここでは、「哲学者」という語法の意味解明に役立つと思われる『著作家と人間』1834を取り上げ、46年の批判的回顧（「自伝的断片」）と比較してみることにする。

この『著作家と人間』は副題にもあるように諧謔心に富んだ才気あふれる作品だが、他面では、辛辣な時代批判の精神に充ちた作品といえる。この二面性は、（他の著作も含め）常に時代の神学と敵対関係にあったという彼の境遇を如実に物語っている。たとえば、30年の『死と不死』は、教会権力への痛烈な批判を含んでいたため匿名出版されたが、即座に発禁処分を受け、著者が何者であるかが詮索される事態にまで発展した。またエアランゲン大学の私講師をしていたフォイエルバッハは、『死と不死』出版の前年、敬虔主義的プロテスタント神学者ハルレスの教授資格取得論文の審査における反問者となったが、（当時としては少数派の）思弁的観念論の擁護者だったため、（多数派を占める）敬虔主義的プロテスタンティズムの教授陣と敵対せざるをえず、ものものしい「騒動」をひき起こした。これらが重なってフォイエルバッハは孤立を深め、その後、大学教授職就任の望みをすべて断ち切られるという不遇に直面するわけだが、一連の騒動を反映するかのように『著作家と人間』には、そうしたエピソードを髣髴とさせるような風刺が数多く散見される。フォイエルバッハが提出した員外教授への任用申請が最終的に拒否されるのは36年7月であり、同書はその2年前に出版された⁵。「外界に対する告訴状」⁶というラヴィドヴィッツの評言どおり、この書は時代の運命に毅然と立ちむかう不屈の精神に貫かれていた。

その批判的スタンスを支えるものとして「精神は哲学者である」(GW1, S.604)というテーゼがある。その「精神」にフォイエルバッハは自らの境遇を重ねつつ、4つの要素、すなわち①「冒険家にして比類ない放浪者」(GW1, S.584),

②「私生児」、③「浪費家」(GW1, S.586)、④「もっとも狂気じみた、もっとも熱狂的な、もっとも風変わりな、もっとも天才的な頭脳」(GW1, S.591)という性格を与えている。この書でいわれる「哲学者」は、①～④に該当する「精神」の持ち主たちであり、「精神の子である作家たち」(GW1, S.583)ともいわれ、ルキアノス、ヴォルテール、ルソー、シェイクスピア、ボッカチオ、モリエール、レッシング、トマス・アクィナス、デイドロ、デカルトなど数多くの名があげられ、ルターもそこに名を連ねていた。この「作家たち」に対立するのが、「世間 Welt」(GW1, S.582)もしくは「大衆 Haufen」(GW1, S.595)である。「精神」は「革新の意気に燃えた文筆界の青二才 ein neuerungslustiger literarischer Gelbschnabel」(GW1, S.582)であるのに対し、「世間」や「大衆」は「追想」によって眠り込まされ活動欲を失って保身にまわる、と皮肉交じりに風刺される。こうした「革新」の「精神」を讃える視点は、33年の『近世哲学史』における「懐疑」精神の評価と軌を一にしている。この書では「懐疑」にもとづく状況の改革こそ近代の幕開けとされ、哲学と神学という分野の違いがあるものの、時の改革者としてデカルトとルターがその代表とされたのだった⁷。のちにフォイエルバッハが自身を「ルター二世」と呼ぶのも、こうした改革精神に共鳴してのことであろう。「世間はちょうど酔っぱらった百姓と同じだ」(GW1, S.585)というルターの言葉に賛意を示しているところも、33～34年のフォイエルバッハがルターを好意的にみていたことを裏づける。

この流れでみると、46年の「全集版序言」でフォイエルバッハが回顧している内容、すなわち、『死と不死』と『作家と人間』の二著作が「不死性」という同じテーマを扱っていながら、前著の「汎神論的な同一性の立場」が後著では「多神論的な差異性の立場」に変わっているという指摘は、一見、妥当な自己評価であるかにみえる。ところが、この「全集版序言」の論旨には、46年の人間学の視点から過去の自分の観念論的思弁性を、払拭もしくは改変しようとした痕跡がある⁸。たしかに、『作家と人間』の「精神」「哲学者」にルターやデカルトが入るとすれば、同著の「哲学」という語を「汎神論」でくくるのは無理かもしれない。たとえそうだとした場合、ブルーノ、ベーメ、スピノ

ザを自然と精神との和解に貢献した高貴な人物たちであると讃えた30年の「汎神論的同一性」の立場を4年後に捨て去ったといいきるのは、それ以上に無理がある。

たとえば46年のフォイエルバッハは、34年の『著作家と人間』で「感性的具体的な直観法・叙述法をいたるところで採用した」(vgl. GW10, S.184)と回顧している。しかし、実際に書かれた内容は、大衆の判断基準である「感性的直観」が「判断の純粹さを曇らせる」(GW1, S.541)ものとして蔑視され、「読書」の落ちついた判断でなければ真の原因をつきとめられないとされている。また同書では、「理性 Vernunft」が「計り知れぬほど深いもの ein unergründlich tiefes, 世界でもっとも卓越した本質」(GW1, S.560)とされ、柔和で繊細でしたたかに夫を支配する「妻」(ebd.)に喩えられるのに対し、「心情 Herz」は禁断の果実のように旨く魅力的だが、「理性に対する敵意」(GW1, S.562)のあまり、不当にも理性を中傷する「妾」(GW1, S.561)にみたてられる。相手の腹の底を見透してしたたかに夫を支配する妻に理性をなぞらえるという風刺は、若きフォイエルバッハの澁刺とした諧謔心の表出として興味深いが、しかし、「全集版序言」の評価とおおよそ相容れるものではない。それどころか、スピノザを通して「純粹な明るい実体の蒼穹」がみえるという指摘や、ライプニッツの「宇宙は生物でいっばいの養魚場に似ている」、「各モナドが全宇宙を反映している」といった言説などは、フォイエルバッハがやはりこの時期も「汎神論的同一性」の枠内で思惟していたことを裏づける。

2. 『キリスト教の本質』の過渡的性格とルター

「全集版序言」のフォイエルバッハの自己評価は初期に遡れば遡るほど、塗り替えに近い修正があることに気づく⁹が、しかし、それは46年の人間学の立場からみて、過去の自分にあった耐え難い汚点を消したかったのだろうと推測される。たとえば『キリスト教の本質』第3版(1849)第9章の註で、第2版(1843)以降、自分にとって耐え難い「主観性 Subjektivität」などの哲学用語

を追放し「気難しさ *Eigenheit*」「自分らしさ *Selbstheit*」「利己心 *Ichheit*」「魂 *Seele*」「快適さ *Gemütlichkeit*」「人間性 *Menschlichkeit*」といった日常語に改めようと努めたと述べている (vgl. GW5, S.168, Fußnote 1)。もちろん、事実を単純にもみ消そうとしたわけではなく、自らの新しい立場にふさわしい用語に切り替えようと意図してのことであろう。つまり、従来の哲学的用語の抽象性に縛られていると覆い隠されてしまう「現実的人間」のありようを日常言語の文脈に連れ戻し、新しい人間学の地平で隠れた問題を明るみに出そうとしていた、ということだろう。

さてこの脈絡でいうと、46年の「全集版序言」には、44年の『ルター論』に関するいまひとつの重要な指摘として、哲学的な「感性」理解の不十分さがあった。それは、『近世哲学史』1833を著したころの自分が、経験論の父ベーコンに導かれ「経験を〈哲学の事象〉」とし、感性的存在者の実在性を認めたことを自負しつつも、「自然科学的確信」にとどまっていたと自戒するところからはじまる。そして、次のように自問自答する。

……君はいかにして感性の自然科学的実在性から感性の絶対的実在性に到達したのか？ それは、ひとが異質な存在者として感性に対立させているもの自体が、感性の抽象的本質もしくは感性の本質が理想化されたもの *das abstrakte oder idealisierte Wesen der Sinnlichkeit* にほかならないと認識することによってである。君はこの洞察を宗教の領域ではじめて獲得した。(GW10, S.188)

「感性の絶対的実在性」という語は、およそ日常語とは縁遠い哲学的な言い回しでフォイエルバッハの人間学を基礎づけるのにふさわしい呼び方なのかという疑問が残るが、おそらくこの語は『ルター論』における旧立場の清算（「哲学者」の「人間」への吸収）と深い関わりをもっている。上の引用でいわれる「異質な存在者」とは端的に言って宗教の神であり、それがたとえばキリスト教なら、異質な存在者としての〈神は、実は人間の感性の本質が理想化され

たもの〉だ、ということになろう。しかし、この内容は41年の『キリスト教の本質』で解明された「人間は宗教において自分自身の隠れた本質を対象化する」（GW5, S.75）という言説とどこが異なるのだろうか？ 41年の書では「人間の本質」すなわち「類」を構成するものとして「理性 Vernunft, 意志, 心情 Herz」があげられ、人間の類は「理性, 愛, 意志の統一体」（GW5, S.31）であるとされていた。「心情 Herz」と「愛」はほぼ同義であるから、人間の心情の本質である〈感性的愛〉が対象化され疎外されたものが神的存在者である、と41年の『キリスト教の本質』ではいわれていたのではなかったか？ そうであるとすれば44年の『ルター論』は41年の考えをたんに敷衍したものにすぎず、せいぜい「一寄与」程度の意味しかないということになってしまうはずである。しかし、実際はそうではない。議論を整理するために「感性」という語の意味を、再度、（30年代のフォイエルバッハ思想の基底にある）汎神論的「理性」と対比しつつ、検討し直してみよう。

前拙論ですでに指摘したことだが、33～34年ころのフォイエルバッハがルターに与えたポジティブな評価は、37年の『ライプニッツ論』ではネガティブな評価に変わる。後者のフォイエルバッハによると、近世初頭のフランス・イギリス・イタリアでは「外向的カトリシズム」が健在で「既存宗教の外部で自立的な哲学がはじまった」が、ドイツでは「宗教的自由」のほうが「主要事象」だったため、「宗教の解放が哲学の解放に先行」せざるをえなかった。前者の国々に比べると、ドイツでは「情意 Gemüt」にねざす（いわば内向的な）「プロテスタンティズム」の精神が優勢であり、哲学は「従属的……形式的な意義」しか認められなかったとされている（vgl. GW3, S.11f.）。興味深いのは、後者の代表者であるルターやメランヒトンの延長線上にベーメが挙げられ、その教説が（かつて神学批判の拠点であった）「汎神論」としてではなく、「哲学」とは異なる「神秘説 Mystik」として批判的に論及されている点である。これら三人のドイツ思想家たちに共通するのは「民族の宗教的性格」であり、その宗教的な「感覚 Sinn」は「現実的なもの」を「空虚なもの」に貶め、「諸物の本性の研究と探究から人間を引き離す」（GW3, S.12）とまでいわれる。「神秘説」

という語は『死と不死』1830や『近世哲学史』1833では「神秘主義Mystizismus」から区別される重要なタームで、その頃のフォイエルバッハは汎神論的境地からベーメに対し、「神秘説の内部で神秘主義からの自由を説く神秘家」という（逆説的ではあるが）高い評価を与えていた¹⁰。もちろん37年の時点でさえ、フォイエルバッハにとってベーメは神秘家たちのなかでも最大級の人であり、「自然哲学的な傾向をもっていた」といわれている。しかし、いまや自然科学の研究は「純粹に対象そのもののためにむけられる関心」や、「自然への自由で純粹な関心」にもとづいておこなわれるべきものであり、神秘説はそのような「学問」や「哲学」の関心を奪うものとされた（vgl. GW3, S.12f.）。

先の「感性の自然科学的実在性」とは、そうした自然科学の純粹な観察（感覚）によってとらえられた個体（感性的なもの）をさすのだろうか。そのようにも読めるが、注意しなければならないのは、この37年当時のフォイエルバッハの「感性」をいわゆる経験科学の「感覚与件」レベルに矮小化してはならないという点である。ベーメの神秘説に科学研究を阻む〈宗教感覚〉というマイナス因子が付されたからといって、それがただちに「汎神論」の否定に繋がるわけではない。たとえば、36年の書評で「近代哲学はベーコンとともに始まるのでも、デカルトとともに始まるのでもなく、イタリアにおいては始まる」（GW8, S.132）、あるいは「ブルーノが……感銘をもって言表した『反対の一致』という崇高な原理こそ、近代および哲学の原理である」（GW8, S.133）と指摘されるとき、明らかにデカルトに先立つイタリア自然哲学者たちの汎神論が再評価されている。哲学的「懐疑」や「区別の概念」といったデカルト固有の意義が否定されるわけではないが、デカルトに先立つブルーノの「原理」が特に見直されたのは、それが中世の停滞的な原理に対抗する近世の幕開けにふさわしい「生命の原理」が再発見されたから、とフォイエルバッハが考えるからである。37年の『ライプニッツ論』でも、「スコラ哲学はイタリア人の気質・外的自然観・美的感覚に矛盾していた」とされ、その代表的哲学者としてブルーノとカンパネラの名が挙げられている。そして、ベーコンの「存在する価値のあるものはすべて知られる価値がある」という命題や、ブルーノの「精神が住め

ないほど小さく些細なものなどない」という命題 (vgl. GW3, S.23) が、ライプニッツの本質をなす「一切を包括する汎神論的愛」, 「理性に合致した, 全人類の自己自身への愛」(GW3, S.29) として高く評価されるのである。

37年という時期は、私見では、フォイエルバッハがヘーゲルとは異なるライプニッツ解釈をしていることに気づき、(本来はないはずの) 絶対者の外部の実在性を強く意識し始める時期だが、39年の「ヘーゲル哲学批判」で、「現実的直観との直接的断絶」「感性的直観との媒介されざる断絶」(GW9, S.42) という唯物論的転回を明確におこなったあとでも汎神論的な見方は、(少なくとも) 41年の『キリスト教の本質』まで続く。最も顕著なのは初版と第2版の付録にある「理性は一切を包括するきわめて慈悲深い本質, 宇宙の自己自身への愛である」(GW5, S.479) というテーゼである。この「理性」は(人間の本質のひとつである) 類的人間の理性というより、『理性論』の「理性そのもの」や『死と不死』における実体的理性の遍在性を髣髴とさせる。人間理性を超越した、宇宙全体を貫く理性のほうが根源的であるといっているかのようである。特に初版には「君は思惟の謎めいた業 die geheimnisvolle Operation, 自己意識の秘められた本質 das geheime Wesen を探究したことはないのか。自己意識, 知性は謎のなかの謎ではないか」(GW5, S.152) という神秘的な叙述も残されている。「人間のなかにありながら個別的人間を超えている 神的三位一体は理性, 愛, 意志の統一である」(GW5, S.31) という一節は第3版(1849)まで残され、B・バウアーの批判、すなわち「『人間の本質』, 『本質』とは、およそ一般に、なにか到達しがたく、とらえがたく、触れられぬ、神聖にして超越的なもの、一つの実体ではないのか?」¹¹という批判を招来した。この事実を踏まえると、41年以降のフォイエルバッハ思想の推移は、かなり錯綜しているようにみえる。耐え難い抽象語を払拭したいのなら、「神的三位一体」の語を削除し別の言葉に置き換えても良かったはずだが、なぜ、そうしなかったのか? その答えは、〈複雑な現実〉を安易に単純化して還元しないよう宗教的表現や思弁的理性に一時的に回避するという、彼固有の宗教批判の手法に隠されているように思われる。

3. 「感性」の変容——「哲学」から「宗教」へ

37年におけるドイツ人氣質の内向性という指摘は、ベームの神秘説やルターの教説の背後に隠れている「宗教的性格」を遡源的に追究し暴露するという批判のやりかたによって得られたものである¹²。この手法は39年の「ヘーゲル哲学批判」では「発生的＝批判的哲学」の方法として確立する。すなわちこの手法は、「表象によって与えられた対象を……独断的に論証し理解するのではなく、その起源を研究する哲学であり、その対象が現実対象か、それともたんに表象……にすぎないかを疑う哲学」(GW9, S.52)とされた。「38年の『ベール論』では、「信仰の教説が理性に矛盾するという意識がルターのなかで言表されている」(GW4, S.23)と述べられ、ルターの「懷疑」の裏には信仰を基礎づける「情意」があるとして、その懷疑は「哲学」のカテゴリーから外されることになった。「思惟と心情 Herz」¹³が「哲学の土台」をなすのに対して、「情意と空想」は「宗教の土台」である (vgl. GW8, S.232)。宗教的人間が「ひたすら自分にだけ直に神的根源を請求する」ようになるとき、フォイエルバッハは「思惟は宗教の規定ではない」と述べて「情意」に批判姿勢をとるようになるわけである (vgl. GW8, S.249)。

批判の拠点は「思惟」であり、汎神論「哲学」である。38年の『ベール論』では、特に17～18世紀の自然哲学者たちが、自然を単なる「機械」としてしかみていなかったことが問題視され、「自然の内的生命」(GW4, S.44)を維持した人びととしてブルーノとスピノザが対置される。前者の人々は「自然を機械のように支配する神」の表象を抱いていたがゆえに「人類を自然から疎外したとされ (vgl. GW4, S.40)、これに対し「スピノザの実体は、理性的なもの自体」であるがゆえに「洞察」をもたない¹⁴、と讃えられる (vgl. GW4, S.44)。「発生的＝批判的哲学」の遡源的追究によって、宗教意識の根底にある「情意」が、汎神論的な「思惟」「哲学」から区別されたわけである。

しかし他方、ハインリヒ・レオとの論争を繰り広げるなか、フォイエルバッハは宗教的人間の「欲求」を追究し、(ヘーゲルの思弁的な「宗教哲学」とは対照

的に)「神の愛」に人間の「同情心」が隠れていることを解明した¹⁵。一般に神的存在者は、対象において自分を意識する。愛が本質であるなら、愛という神の本質は、人間という対象においてはじめて自分自身を意識する。「神の愛」に隠されているのは「同情 Mitleid」という本質である。神は、愛の行為を通して人間のなかに自分の「同情心」を見いだす。この認識が、啓示を与える神にあるとすれば、同じことが啓示を受ける側の人間についても妥当しなければならない。「人間は他人の悲惨に対してそそぐ愛の涙のなかではじめて、以前には不明瞭だった自分自身の本質が明らかになる」(GW8, S.252)と。この「同情」はのちに『キリスト教の本質』で「神とは人間の奥底で人間の悲惨に対してそそがれた愛の涙である」(GW5, S.221)と読み替えられ、「心情 Herz」や「情意 Gemüt」の分析に生かされていく。

これら二つの感情を厳密に区分することは困難だが、『キリスト教の本質』初版・第二版の付録でフォイエルバッハは「心情 Herz」と「情意 Gemüt」の区別を概括的に行っている。「心情」は「他者の幸いと痛みに参加するための社交的気質」をあらわし、「共感 *Mitgefühl*・同情 Mitleidとしての苦惱 Leiden」だが、「情意」は「他者を自分のために行為させる」感情、「自己感情 Selbstgefühlとしての苦惱」であり、「本質的に自己へと集中したものとして、自己自身を苦しめる心情、自分だけに携わる心情」、「秘義的な・暗い・厭世的な心情」などと規定されている。前者の「心情」が健全で、自然と一致しているのに対し、後者の「情意」は病的であり、自然と矛盾するともいわれる。37～41年の議論を概観して要約すると、

- a. 〈カトリック的外向性⇒ 汎神論哲学の「心情 Herz / 理性と愛」〉
- b. 〈プロテスタント的内向性⇒ 宗教の「情意 Gemüt / 信仰」〉

という二つの系列を指摘できよう。この系列は(やや形式的ではあるが)、a. 人間の本質との一致、b. 人間の本質との矛盾、とみると、『キリスト教の本質』の第一部と第二部の構成に対応する。さらに、先に触れたブルーノからの引用、すなわち「精神が住めないほど小さく些細なものなどない」というテーゼは、極小のものにも包括的な理性が隅々まで叡知として含まれているという理解が

フォイエルバッハにあり、少なくとも『キリスト教の本質』初版・第2版では、「物をそれがあるべき姿で叙述し、その現存在をイデーに等しいものにすべく、外的な妨害・影響・阻止を除去する」ことが理性の仕事であり、そうした「助産婦」的な理性の行為が「最高の愛の行為、神的な愛の行為」とされていた(vgl. GW5, S.478)。「理性は自然の真理態である」というテーゼや「自然は理性の光であり尺度である。……しかし同時に理性が自然の光でもある」(vgl. GW5, S.477)という言い回しを読むかぎり、やはり、41年の『キリスト教の本質』の基本的立場は「汎神論的同一性」であった。『根本命題』1843の「一切のものは感覚的に知覚できる」「解剖学者や化学者たちの目でできなくとも哲学者たちの目ならできる」(GW9, S.324)といった言明なども、単なる思い上がりではなく、『ライプニッツ論』で確認された自然のかすかな声にも耳を傾ける「繊細な感覚」と連動する汎神論的理性の境地が(41年の哲学的抽象性を払拭しようとする志向ともつれ合いながらではあるが)影を落としていると考えられる。ここでは、40年代のフォイエルバッハ思想の転回をじっくりトレースするだけのゆとりはないが、41年の『キリスト教の本質』と44年の『ルター論』の論点をいくつか比較してみることにしたい。

『死と不死』の匿名出版については先に触れたが、当時の厳しい検閲を意識して41年の『キリスト教の本質』も当初は同様の匿名出版が予定されていた。版元のヴィーガントの助言で匿名での出版は断念されるのだが、候補として上がった『汝自身を知れ』または『宗教の秘密と神学の幻想』という書名は『キリスト教の本質』を理解する上で示唆的である(vgl. GW18, S.47)。まず、後者のタイトル案には、〈素朴な民衆の「宗教」〉と〈「宗教に関する反省」としての「神学」〉との区別が反映している。この区別は、『キリスト教の本質』第一部と第二部の関係にも対応する。前者(宗教)における人間の真なる本質の肯定と、後者(神学)における虚偽・幻影の破壊という対比関係である。フォイエルバッハによれば、「宗教は人間の最初の、しかも間接的な、自己認識」(GW5, S.47)にほかならず、反省としての哲学的思弁や神学に先だつ。しかしその最初の直観に反省が加えられ、特に「人格性が強調されると、ひとは宗教

の起源を忘れてしまう」(GW5, S.59) という。つまり、宗教に反省が加えられ教義化された神学となると「虚偽や錯覚や欺瞞や矛盾や詭弁の汲んでもつきない宝庫となる」(GW5, S.360)。まことしやかな教義体系がひとたび出来あがると、ひとは神学の背後にある宗教的起源をみようとほしなくなる。ゆえに「汝自身を知れ！」が『キリスト教の本質』の「真の格言にして主題」(GW5, S.8)とされた。

ところで、41年の『キリスト教の本質』はキリスト教の古典古代からの引用が多く、クレルヴォーのベルナル、アウグスティヌス、テルトゥリアヌス、アンブロシウス、ヒエロニムスなど多数が引用されている割に、ルターが2箇所、メランヒトンは1箇所、ほかにプロテスタンティズムに関する引用があるだけというかなり偏った構成であった。ブラントホルストによれば、「歴史的、概念史的」にではなく、読者を納得させるために「問題解決の例証として必要に応じて」なされた引用だったという¹⁶から、やむをえなかったのかもしれない。しかし、内容はキリスト教全般にわたる批判だったわけだから、当然、キリスト教界からの論議を呼び込み、論争せざるをえなくなった。こういうわけで、広範な議論をしている割に、41年の初版は38年の『べール論』で語られていたルター理解とほぼ同レベルにとどまっていたように思われる。すなわち、「プロテスタンティズムは理論的な欲求よりも実践的欲求」が強く、ルターの場合は特に「信仰と理性との対立」または矛盾に陥っている (vgl. GW4, S.21-23), というものである。

その後、43年の第2版でおびただしい数の引用がルターの文献からなされることになる。ユリウス・ミュラーのような論敵に対応するためということもあっただろうが、しかし、第2版「序言」にある「思弁哲学は宗教に規定されずに宗教を規定する。……しかし私は、宗教それ自身に語らせる」(GW5, S.16) というフョイエルバッハの言は一考に値する。この方法はフョイエルバッハがかねてから哲学史的著作で行っていた方法、すなわち、当該の思想家にできるだけ多くを語らせ (叙述)、語られざる暗示的なものまで引き出し (発展)、その上で吟味の篩いにかける (批判) という方法だからである (vgl. GW3, S.4)。

フォイエルバッハは内的欲求を感じなければ、ここまで手の込んだ作業をしない。数多くの引用がルターからなされたということは、かなりの関心をもってルターを読んだということであり、『キリスト教の本質』第2版の準備期から、ルター解説は本格化したと推察される。

44年の『ルター論』冒頭にある「宗教の教えのなかでも、ルターの教えほど……人間の知性 Verstand・感覚・感情に矛盾するものはない」(GW9, S.353)というテーゼから類推してみよう。ここで問題視されている内容は、人間の欠陥と神の完全性が完全に二極にひき裂かれ、人間を採るか、神を採るか、二つに一つという「あれか、これか」の関係である。つまり、フォイエルバッハのおこなう人間学的な読解と還元は、なにかしら同じものがないと不可能なのだが、天使と悪魔のごとき相容れない分裂状態では不可能ではないか、という疑念が先行している。かつてエラスムスが『自由意志論』を著したのに対し、ルターが『奴隷意志論』をもって対抗したことは有名な話だが、ちょうどこれに相当する『キリスト教の本質』の議論があるので、そこから考えてみよう。初版「秘蹟における矛盾」の章には「宗教は人間を切り離す。神の活動は人間の自己活動が外化されたものである」(GW5, S.397)という一節がある。第2・第3版では「自己活動」云々の語句のあとに「自由意志が対象化されたもの」という文言が挿入され、「神の活動は人間の自己活動が外化されたもの、自由意志が対象化されたものである」と修正される(vgl. GW5, S.397f.)。さらに後者の版では、この箇所以下のようなフォイエルバッハの補足と引用が脚注として入る。

それゆえ、ルターが(とりわけエラスムスに対する著書のなかで)神の恩寵に比して人間の自由意志を無条件に否定したことは、ルターの知性と真理感覚に偉大な名誉を与えるものである。ルターは宗教の立場から、実に正しく次のように明言している。「『自由意志』という名は神的な称号と名であって、ひとり高貴な神的尊厳者を除いては誰もそれを使うべきでなく、また使おうとも思わないのだ。」『ルター全集』第19巻, 28頁(vgl. ebd.)

「自由意志」は神にふさわしい称号だから、その語を人間にあてはめるべきではない、というルターの『奴隷意志論』の内容を、「宗教」の立場として賞賛しているかのようにも読める。少なくとも、宗教的「情意」を「信仰」を基礎づけるものとみて「哲学」の「思惟と心情」の立場から否定的評価を与えた38年のルター観とはまったく逆である。むしろ、43年の第2版以降は、その信仰心に（賛同とは言えないが）理解を示していると考えられる。それはなぜなのか？ 一見、矛盾しているようにみえるが、フォイエルバッハの批判的アプローチの特徴を理解すれば、ここには矛盾がないという結論になる。この謎を解くためには、39年の「哲学とキリスト教」を見直す必要がある。

問題は「哲学」と「信仰」との関係である。フォイエルバッハは、39年の論評で、「たとえば、哲学が扱ったほうがよいのは、宗教的な奇跡信仰そのものではなく、たんに宗教的な奇跡信仰を理性的な信仰としても基礎づけ正当化している概念や表象にすぎない」、「哲学は……信仰そのものとはなく、信仰理論と闘う」（GW8, S.234）という。先ほど、筆者は39年のフォイエルバッハが「情意に対して批判姿勢をとる」と指摘した。それが間違いだったということではない。なぜなら彼は、「奇跡信仰が基づいている表象や概念の反駁は、信仰そのものの間接的反駁にすぎない」（GW8, S.235）ともいうからである。フォイエルバッハがおこなっている宗教批判の直接の対象は「博士たち」「学識者たち」であって、たんに信仰心の深い人々ではない。後者の人たちは、人類の幼年期に属するか、あるいは、そのような信仰心を抱かざるをえない状況があるか、いずれにせよ（止むにやまれずの）生活の必要性から信仰している誠実な人たちと解される。先のルターの引用で「宗教の立場から正しい」といわれたのは、ルターが（宗教内部とはいえ）カトリシズムから「実践的」に人々を解放したことは近世の流れからいって必然的であり、その実践の結果、「奴隷意志」の信仰心が得られることも首尾一貫していて誠実だ、という判断にもとづいている。この脈絡で、聖アントニウスも誠実さも、古代のキリスト教徒の厳格さも（間接的に反駁しつつではあるが）正しいと評価される。フォイエルバッハの宗教批判は一度、否定的に扱った内容を、処理済のものとして放擲するような

安易なものではない。39年から43年にかけての信仰心の意味変更は、一度は切り離して理解しようとした「心情」と「情意」が生活の困窮も含め自然に基礎をおいている点では同根であり、「非恣意的」なものであるかぎりは一定の距離をおきつつ容認するべきだ、という慎重な態度をわれわれに要請しているように思われる。

44年の『ルター論』で「感性の絶対的実在性」が説かれたのは、『キリスト教の本質』では自己活動の基礎としての「精神」、遍在する理性・愛を背景とする汎神論的精神が「哲学」の本質として残っていたのに対し、44年の論では、導入部で「非人間的」にみえるルターの教説のなかに、帰結におけるキリストの救済という場面で「神の人間愛の感性的確実性」が欺きえないもの、信頼されるべきものとして確証されたからといえる。『キリスト教の本質』第2版「序言」にあった「思弁哲学は宗教に規定されずに宗教を規定する」という思弁哲学の能動性・自発性は肉体にも感覚にも依存しない精神の独立性のなす業だが、初期から40年代初頭まで影を落としていたフォイエルバッハの汎神論的精神もまた、同様に、一方的に対象を決め込んで分析する危険性が隣接していたのではなかろうか。40年代のルター研究により、フォイエルバッハは新たな視点を獲得した。それは2つのテーゼに象徴的に表現されている。一つは「信仰は愛の根である」(GW9, S.393)というテーゼ。もう一つは「懷疑は憎悪の根である」(ebd.)というテーゼである。いずれも38年の『ペール論』にも、41年の『キリスト教の本質』にも、43年の『根本命題』でさえなかった見方である。30年代はおろか41年の時点から見ても、逆を突いた発想になっている。なぜなら、前者は「信仰と愛は矛盾する」、後者は「懷疑の精神は人々を神学から解放する」と考えられていたからである。しかし、こうした逆転の発想は、「宗教」の分析を抜きにしてはたどり着けない見方である。哲学は自分の反対物、「非哲学」から始めるべきだと42年の「暫定的テーゼ」は教え、それが「感覚論の原理」だともいわれる(vgl. GW9, S.254)が、フォイエルバッハの宗教批判は、自分自身が自明視している前提を何度も見直す〈不断の弁証法的活動〉といえるのではなかろうか。

結びに代えて

以上、断片的ではあるが、初期著作から44年の「ルター論」に至るまでの、フォイエルバッハの思想的転回を概観してきた。彼の思想を「感性哲学」や「人間学」の言葉で要約することは容易だが、そこに至る道のりは困難なものであった。彼の宗教批判は44年で終わるわけではない。むしろ44年に始まった。すなわち、のちの自然宗教（古代宗教）や儀礼的信仰の「発生的」解明につながる、新たな批判の礎が44年に築かれたのである。

ここで改めて、彼特有の錯綜した用語を整理し、今後の研究の行方を示唆して小論の結びに代えたい。

「感性」について。28年の『理性論』から30年代前半のフォイエルバッハは、汎神論的理性優位の「感覚」、**「感性」**理解に立っている。筆者の理解では、ヘーゲル思弁哲学を汎神論として読み込み、汎神論的理性（精神）の遍在のもとで、感覚的なもの、個別的なものをとらえる姿勢が若きフォイエルバッハの基本スタンスであった。30年代初頭では、ベームも含め、愛の神秘説が汎神論の真なる姿として賞揚されるが、それは、理性や愛が普遍的な精神（神）の「純粹活動 *purus actus*」として、宇宙全体を貫くものと考えられたからである。41年の『キリスト教の本質』初版の付録にある「宇宙の自己自身への愛」という表現はその名残りと考えられ、30年代前半までのフォイエルバッハの思想的シンボルは（ヘーゲルに倣った）「円」とみてよい。しかしその後、その汎神論的同一性の象徴たる「円環」が揺らぎ始める。それが37年の『ライプニッツ論』である。ライプニッツのモナドの「質料」に規定される「受動性」が些末なものとしてではなく「本質的」な規定として読み直されるとき、本来はあるはずのない汎神論精神の「外」なる諸物や存在者の実在性が感得される（その後、43年にシンボルは「楕円」に変わる）。ヘーゲルとは異なるモナド解釈の自覚と、ライプニッツの連続律を応用した外界を感受する「繊細な感覚」が（本論ではなく補註としてだが）肯定的に論じられ、39年「ヘーゲル哲学批判」における唯物論的転回の準備となる。

「哲学者」と「人間」について。〈感性の「自然科学的実在性」から「絶対的実在性」へ〉というフォイエルバッハの自己評価にあてはめると、〈理性的「哲学者」から感性的「人間」へ〉という図式でまとめられそうだが、初期のころ、汎神論的視点から前者にルターが算入されていたこと、自然の生命を奪うような機械論に対して最初から批判的だったことなどを加味すると、その内容理解は意外と難しい。しかし、そこに先述の「懐疑」という視点を導入するといくぶん明瞭になる。33～34年のフォイエルバッハは「懐疑」を肯定的にとらえ、その精神の担い手としてデカルトとルターを讃えながら神学批判を展開していた。ところが、37年の時点では、ルターの「懐疑」が二次的なものにすぎず、哲学的「懐疑」がまだ未成熟な「情意」的精神の段階とみなされた。このとき、ルターは「哲学者」のカテゴリーから外され、その「宗教」的意義がいったんマイナスに落ち込む。38年の『ベール論』で「信仰と理性の矛盾」として批判的に描かれたプロテスタンティズムは、41年の『キリスト教の本質』では「信仰と愛の矛盾」として転用され、疎外の因子としての「信仰」「宗教」は「理性」「哲学」に劣るものとみなされた。外交的・社交的気質としての〈理性・心情（愛）〉に対し、内向的自己感情としての〈信仰・情意〉はもっぱら否定的に論じられたわけである。

ところがこの主著の見方に更なる根本的変更が加わる。この変更こそ、旧立場の清算（「哲学者」の「人間」への吸収）を基礎づけるものとなった。すなわち、『キリスト教の本質』第2版の改訂のためのルター文献の解読作業による価値転換である。44年のルター再評価は、キリストの「和解と救済の瞬間」における「愛の確かさ」にある。もちろん、37年の『ライプニッツ論』の繊細な「感覚」論によって、人間学的な見方が登場し、「自然科学的実在性」と言われるような思惟の「外部」が経験論的に意識されはしたが、その思惟は原理的に汎神論的一元論の枠内にあった。また39年の「ヘーゲル哲学批判」では旧哲学の一元論的円環が突破され、思弁的体系的「哲学」とは異なる「発生的＝批判的哲学」の方法が説かれた。それでも、少なくとも41年までは、汎神論「哲学」にもとづく理性的「愛」の「遍在精神」が支配的だった。神学の呪縛からの解

放と考えられた「懐疑」の精神が41年の時点でも健在だったからである。こうして40年代におけるフォイエルバッハのルター研究は、自らの哲学的価値観にラディカルな反省を迫るものとなり、41年までの汎神論的哲学をもってしても解き明かせなかった、「愛の根」としての「信仰」という新しい視点を切り開いた。

「宗教」について。ルターの宗教性の再評価は、「宗教」および「信仰」というカテゴリーの「批判的容認」という研究姿勢を定着させた。初期から一貫している「神学」批判の基本的態度は変わらないし、ルターの信仰心をフォイエルバッハがそのまま肯定するわけでもない。しかし、たとえ哲学的批判としては未熟な「情意」由来の「信仰」であったとしても、宗教的または日常実践として「必要」に迫られた「信仰」であるかぎりには、「発生的」に十分な意味があり、人間学者として距離をおきつつその誠実さを認めるという立場をフォイエルバッハは採用する。39年の「哲学とキリスト教」以来、フォイエルバッハが批判的に闘わなければならなかったのは「宗教」ではなく、「信仰理論」としての「神学」や「哲学」であった。「宗教」の批判的容認という視点は、46年の「宗教の本質」で展開される、日常生活の実践における「エゴイズム容認」の立場へ通じるものであり、自然の弱者との共生・共存の基礎が開拓されたと考えられる。

研究動向に関して。わが邦におけるL・フォイエルバッハ評価は未だにマルクスからみた中途半端な唯物論者・無神論者といった定番解釈が横行しているが、海外では少しずつその歪曲された刻印を是正しようとする動きが出てきている。ルター研究にかぎってみるなら、古くはラヴィドヴィッツ (1931)、H・M・ザス (1978)¹⁷、ブランドホスルト (1981) などの研究があったが、近年では、Ch・L・フラナガン (2009)¹⁸、U・ケルン (2014)¹⁹、F・トマソーニ (2015)²⁰、H・ヴァルター (2017)²¹らの研究がある。それぞれ、フォイエルバッハのテキストを年代史的に丹念に追った研究として優れたものである。特にフラナガンの総括、すなわちフォイエルバッハの宗教批判は「神学者への特定の批難に由来するのではない」という見方や、批判対象であるルターの教説にフォイエル

バッハは「神と人との関係にかんする深遠な逆説をみた」といった指摘は、筆者の見解と重なるだけでなく、近年のルター論をめぐるフォイエルバッハ研究の傾向をも特徴づけているように思われる²²。U・ケルンやH・ヴァルターからは、フォイエルバッハのルター解釈の功績のほかに、その一面的人間解釈の指摘もあり、今後は「神—人間」関係における人間学的還元の意義が改めて問われることになるかもしれない。

他方、日本では、昨年11月に「フォイエルバッハの全体像を求めて——改めて問う、そのアクチュアリティ」という研究交流会が開催され、フォイエルバッハ思想のもつ現代的意義が一部の研究者によって模索され始めている²³。残念ながら、ルターに関する話題はその場では出なかったが、提題者の1人である石塚正英氏が「“人間のなかの神”を考える—大井学匠に何を学んできたか—」という過去の論考を最近ホームページ上でふたたび公開し、「ルターからフォイエルバッハへ」の移行はけっして越えられない「懸隔」ではないとして、フォイエルバッハの宗教論から比較宗教学や比較民俗学にいたる現代的可能性を示唆している²⁴。私の小論は、その可能性を実現するための予備作業にすぎないが、新たなフォイエルバッハの読み直しの一助になれば幸いである。

【引用文献および文献略号一覧】

L. Feuerbach: *Gesammelte Werke*, hrsg. von W. Schuffenhauer, Berlin, Akademie Verlag, 1967: GW

『理性論——一にして、普遍、無限なる理性について *De ratione, una, universali, infinita*, 1828』→『理性論』GW1

『死と不死に関する思想 *Gedanken über Tod und Unsterblichkeit*, 1830, 1847』→『死と不死』GW1（47年改版は書名が『死の思想 *Todesgedanken*』に変更されるが、中身は30年の論をもとに、章立ての組換えや文章の移動・削除・加筆など、大幅な改訂をフォイエルバッハ自身が行ったものである。）

『近世哲学史——ウェルラムのベーコンからベネディクト・スピノザまで *Geschichte der neuern Philosophie von Bacon von Verulam bis Benedikt Spinoza*, 1833』→『近世哲学史』GW2

『アベラールとエロイズまたは著作家と人間、一連の諧謔的哲学的箴言, 1834』→『著作家と人間』GW1

- 『近世哲学史——ライプニッツ哲学の叙述・発展・批判 *Geschichte der neuern Philosophie - Darstellung, Entwicklung und Kritik der Leibnizschen Philosophie*, 1837』→『ライプニッツ論』GW3
- 『ピエール・ベール——哲学史および人類史への一寄与 *Pierre Bayle, Ein Beitrag zur Geschichte der Philosophie und Menschheit*, 1838』→『ベール論』GW4
- 『キリスト教の本質 *Das Wesen des Christentums*, 1841, 1843, 1849』GW5
- 『ルターの意味での信仰の本質——『キリスト教の本質』への一寄与 *Das Wesen des Glaubens im Sinne Luthers - Ein Beitrag zum „Wesen des Christentums“*, 1844』→『ルター論』GW9
- 『わが哲学的履歴を特性描写するための諸断片 *Fragmente zur Charakteristik meines philosophischen curriculum vitae*, 1846』→「自伝的断片」GW10
- 『〔L・フォイエルバッハ全集〕第1巻への〕序言 *Vorwort [zu L. Feuerbach: Sämtliche Werke, Bd. I]*, 1846』→「全集版序言」GW10

【註】

- 1 Ludwig Feuerbach, *Sämtliche Werke*, Bd. I-X, herausgegeben von Ludwig Feuerbach, Leipzig, Otto Wigand, 1846-1866.
- 2 この引用箇所直前に、「1843-44年／『将来の哲学』』という（2行に分けられた）見出しがある。ここから筆者は、フォイエルバッハは43年から44年ころに「人間学への解消」という課題を自らに課し、従来の哲学に見切りをつけ、宗教批判の人間学的基盤を形成したのではないかと推察する。
- 3 わが邦の「ルター」に特化したフォイエルバッハ研究としては、河上睦子「フォイエルバッハにおける『ルター』」（相模女子大学紀要56A, 1993年, 91-105頁）がある。
- 4 半田秀男『理性と認識衝動——初期フォイエルバッハ研究』上巻, 溪水社, 1999年, 755頁。
- 5 Vgl. GW1. SLXIV und Georg Biederman, *Ludwig Andreas Feuerbach*, Leipzig · Jena · Berlin, Urania-Verlag, 1986, S.44f.
- 6 S. Rawidowocz, *Ludwig Feuerbachs Philosophie, Ursprung und Schicksal*, Berlin, Walter de Greuter & Co, Zweite Auflage 1964 (Erste Aufl. 1831), S.37.
- 7 拙論「初期フォイエルバッハのルター論——宗教的人間の『発生的—批判的』解読に寄せて」『桜文論叢』第96巻, 2018年, 530-31頁参照。
- 8 たとえば、フォイエルバッハは、「哲学そのもの……純粹思想が人間にとって無であり、人間に対して何もできないことを知っていた」から『死と不死』を「詩的・感性的な言語」で表したとし、しかも5章からなる大著『死と不死』のうち、結論をふくめ散文調で書かれている4章を「序言」扱いする。つまり第4章にあたる「死に対する脚韻詩 *Reimverse auf den Tod*」のみを「本文」すなわち「人間学的真理」「感覚の事象, 直接的確實性の事象」とみなそうとする。もしこれらの言明が事実だ

とすると、『理性論』におけるヘーゲルへの賛辞や「純粹思惟」の実践哲学的意義、『理性論』『死と不死』の二著に共通する汎神論の立場からの人格神論の批判など、30年までにフォイエルバッハが試みた哲学的思索のすべてが水泡に帰してしまう。

- 9 L・フォイエルバッハが自分の過去の思想形成史を塗り変えようとする弁明は、アカデミー版『全集GW』の編者によって「パウル・ヨハン・アンゼラム・フォン・フォイエルバッハとその息子たち」という題を付された1847年の小論にも認められる。その小論には、30年代半ばまでの哲学史研究が、自分の本性を抑えたネガティブな「逆行」の時期（第1期）だったと回想され、38年の『ベール論』からポジティブな批評家としての活動が「歴史的・批判的な時期」として始まり（第2期）、そして『キリスト教の本質』においてその活動は終結・完成され、「積極的または生産的な時期」（第3期）に至ったとされている。この第3期は、一切を包括する一つの原理、すなわち『「自然を基盤とする人間』という原理』から「発生的に」生み出されており、「感性的直観の真理性」に基づく同原理の叙述と展開をなし、「局地的かつ抽象的な、哲学上と宗教上の諸原理」に代わるものとまでいわれている（vgl. GW10, S.330f.）。まるで『キリスト教の本質』で自分の最終的立場が確立したかのような言説である。しかし、41年の初版にせよ、43年の第2版にせよ、「全集版序言」1846の評価に依拠するなら、44年の『ルター論』における「感性的人間」の立場に『キリスト教の本質』は至っていなかったとみるほうが順当である。47年という時期はシュティルナーとの論争を経たあとであること、『近世哲学史』『ライプニッツ論』『ベール論』の加筆・修正を含む改訂に専心した時期であること、また、『キリスト教の本質』第3版（1849）の準備期でもあること等を考慮すると、彼の積極的な宗教批判活動に有利になるよう、同書の思想的位置を高めたかたのかもしれない。
- 10 拙著『初期フォイエルバッハの理性と神秘』知泉書館、2017年（以下、『理性と神秘』と略）、第3章第1節参照。
- 11 Bruno Bauer, Charakteristik Ludwig Feuerbach. In: *Wigand's Vierteljahrschrift*, Bd. 3, 1845, S.104.
- 12 ベーメについては、拙著『理性と神秘』第2章第2節～第3章第1節を参照。
- 13 39年の「哲学とキリスト教」において「心情 Herz」が理性的「思惟」とともに「哲学」のカテゴリーに入れられていることは、34年の『作家と人間』における「理性=妻」VS「心情=妾」という古い思弁性の図式をフォイエルバッハが克服しようとしていた事情を示している。
- 14 「スピノザの実体は理性的なもの自体だから『洞察』をもたない」（GW4, S.44）という叙述は汎神論哲学の本質をつく言い回しである。「もっている」という動詞は、人間であれ神であれ人格を連想させるが、スピノザの実体は洞察をもつのではなく、実体の変容した様態として「洞察」なるものが「ある」にすぎない、という含みである。間違っても「洞察がないから思慮が足りない」などと解してはならない。
- 15 拙論「初期フォイエルバッハのルター論」538-40頁参照。
- 16 Vgl. Heinz-Hermann Brandhorst, *Lutherrezeption und bürgerliche Emanzipation*,

- Göttingen, Wandenhook & Ruprecht, 1981, S.127.
- 17 Hans-Martin Sass, *Ludwig Feuerbach, mit Selbstzeugnissen und Bilddokumenten*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch, 1978.
- 18 Christy L. Flanagan, *The Paradox of Feuerbach: Luther and Religious Naturalism*, Florida State University Libraries, 2009.
- 19 Udo Kern, *Dialektik der Vernunft bei Martin Luther*, Berlin, LIT Verlag, 2014.
- 20 Francesco Tomasoni, *Ludwig Feuerbach – Entstehung, Entwicklung und Bedeutung seines Werkes*, Münster · New York, Waxmann, 2015.
- 21 Helmut Walther, Martin Luther und Ludwig Feuerbach – Die Bedeutung des Reformators für die Philosophie von „Luther II“. In: *Aufklärung und Kritik*, 2/2017, S.249-70.
- 22 Cf. Flanagan, *a. a. O.*, pp. 191-97.
- 23 拙著「【報告】フョイエルバッハの全体像を求めて」『フョイエルバッハの会通信』第10号, 2019年3月25日, 1-7頁参照。
- 24 石塚正英「“人間のなかの神”を考える—出隆と大井正と—」『頸城野郷土資料室学術研究部研究紀要』Forum10 2017,ISSN 2432-1087, 1-5頁参照。

语言学的方法论

—— 中国语言学基础理论音等论在今后语言教学研究中的作用 ——

萬 清 華

提 要

迄今的现代汉语语法以字词为依据，不能够用于指出 1 个语言单位是怎样的，不能够用于指出语言单位的数目类型，不能够用于指出任何 1 个语言单位具有的全部成分单位及其数目类型，因而也就不能够用于指出任何 1 个句子语法单位及其成分结构是怎样的。

如果可以把归类的音声语言表达形式中存在的大小停顿（用于语言分析时称作：句切。）、轻重音、标峰重音等超音成分用于语言分析，就可以区分语言单位及其全部成分单位数目类型，其结果可以用于指出任何 1 个句子及其语法结构是怎样的。

我们把概括这一语言分析方法及其结果的方法论称作：“音等论”。

本文拟汇报中国语言学基础理论“音等论”研究结果及其在今后语言教学研究中的作用。讨论 2 方面问题：一、音等论概括语言学分析方法及其结果。扼要说明“语言单位及其全部成分单位”和“句法语汇结构及其语音结构” 2 个问题。二、音等论在今后语言教学研究中的作用。扼要说明“1 个句子及其语法结构分析”和“语音元素及统音法式音节表” 2 个问题。

这一语言学的方法论指出语言单位是句子。任何 1 个句子语言单位具有包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式。归类的音声语言表达形式中的超音成分可以用于指出文字符号表记的音声语言的表记形式表示的任何 1 个

句子语言单位及其全部成分单位。任何1个句子的语法结构是“句法语汇结构”。指出1个句子的语法结构时，句子作为语法结构单位，称作：“语法单位”。1个句子中不可再切分的“句单位”表示语法结构成分单位，称作：“句法词”，语汇单位“单语”充任“句法词”成分，称作：“语法词”。“句法词”和“语法词”可以用于指出1个句子的语法结构是包括“句法结构”和“语汇结构”的“句法语汇结构”。句法语汇结构的语法结构模型，包括：句法结构模型的“二类四等句法词”和语汇结构模型的“二类四等8品词”2个模型。分析句子的语法结构只要指出了“句法词”和“语法词”，1个句子的“句法语汇结构”就清楚了。任何1个句子的全体语法结构核心是“语音结构”。语音单位是“语元素音节”，其成分中同时具有“音元素”和“超音元素声调”的“语音元素”构成汉语语音结构的2个模型：“汉语语元素音节中语音元素结构模型”，也称作“语音元素结构图”和“汉语语元素音节结构统音法式音节表”，也称作“统音法式音节表”。朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子可以用于指出任何1个句子具有包括可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的全体语法结构。

这一语言学的方法论是中国语本身具有的方法论。如果用于基础语言教学，就可以指出区分1个句子的依据是1个语言包括各地方言方音本身具有的超音成分。音声语言表达形式中的停顿、轻重音、标峰重音、声调等等是语言具有的超音成分，标记音声语言的文字符号是语言具有的超音成分单位，依据语言具有的超音成分区分的1个句子语言单位以及包括句法部门、语汇部门、语音部门、标记部门单位的全部成分单位是语言的超音成分单位。任何时候无论过去现在将来存在和有可能存在的任何1个语言包括各地方言方音都可以用这一方法指出正确的1个句子。如果用于基础语言教学，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子就可以指出1个句子的句法词和语法词，句法语汇结构就清楚了。如果把语元素音节中的最小成分单位是同时具有音元素和超音元素声调的语音元素用于基础语音教学，就可以指出汉语拼音符号是汉语语音的标记符号，汉语拼音符号表示的基本单位是“语音元素”，可以把汉语拼音音节符号与其表示的“语元素音节”及其成分中同时具有“音元素”和“超音

元素声调”的“语音元素”区分开来。如果把“语音元素结构图”用于基础语音教学，就可以指出汉语语元素音节的“声调”是“超音元素声调”，可以把“四声字调”与语元素音节区分的“声调音节”区分开来。如果把“统音法式音节表”的“二类4音表”用于基础语音教学，只要按照“统音法式音节表”“主表”和“辅表”的4个音表的排序就可以指出汉语拼音音节符号表示的音节读音。可以用于简化基础语音教学程序。

这一语言学的方法论是中国语的分析方法及其结果。如果可以把中国语言学基础理论“音等论”用于基础语言教学，便可以作为确立以现代汉语为代表的中国国语（标准语）依据，可以简化基础语言教学程序有利于基础语言教学标准化。

这一语言学方法论的语法模型具有特定性、一般性、概括性、适用性。可以用于解答语言学基础理论研究中的语言形式、语言单位、语法部门、语法单位、句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构和全体语法结构及其关系以及其他有关方面的问题，可以化解以往语言研究、语言学基础理论研究、中国语言学基础理论研究和现代中国语语法、语汇、语音研究中无法解决的全部疑难问题，可以适用于今后的语言学基础理论研究和语言教学与研究以及其他相关联的各个领域。

中国语言学基础理论“音等论”提出了科学语言学的方法论，沿着科学语言学方向发展是历史赋予我们全体语言工作者、教育者、研究者的使命。

前 言

(一) 本研究提出的方法论

1、这一语言学的方法论称作音等论

迄今的现代汉语语法以字词为依据，不能够用于指出1个语言单位是怎样的，不能够用于指出语言单位的数目类型，不能够用于指出任何1个语言单位具有的全部成分单位及其数目类型，因而也就不能够用于指出任何1个句子语法单位及其成分结构是怎样的。

如果可以把归类的音声语言表达形式中存在的大小停顿（用于语言分析时称作：句切）、轻重音、标峰重音等超音成分用于语言分析，就可以区分语言单位及其全部成分单位数目类型，其结果可以用于指出任何1个句子及其语法结构是怎样的。

我们把概括这一语言分析方法及其结果的方法论称作：“音等论”。“音等论”最初是笔者1998年提出的。本文拟扼要汇报中国语言学基础理论“音等论”研究结果及其在今后语言教学研究中的作用。

（另参见笔者：1997年〈中国語の語音体系における語音単位〉《言語与文化論集 第4号 1997》、〈超音元素一声調〉《中国語研究 第39号 1997》、2012年〈声調描写〉《桜文論丛 第84卷 2013年2月》、2013年〈句単位〉《桜文論丛 第86卷 2014年2月》、2014年〈単語〉《桜文論丛 第89卷 2015年3月》、2015年〈語言分析方法〉《桜文論丛 第90卷 2015年10月》、2016年〈語音元素〉《桜文論丛 第92卷 2016年10月》、2017年〈語法結構〉《桜文論丛 第97卷 2018年3月》。）

2、这一语言学的方法论的研究结果

这一语言学的方法论指出语言单位是句子。任何1个句子语言单位具有包括

超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式。归类的音声语言表达形式中的超音成分可以用于指出文字符号表记的音声语言的表记形式表示的任何1个句子语言单位及其全部成分单位。

任何1个句子的语法结构是“句法语汇结构”。指出1个句子的语法结构时，句子作为语法结构单位，称作：“语法单位”。1个句子中不可再切分的“句单位”表示语法结构成分单位，称作：“句法词”，语汇单位“单语”充任“句法词”成分，称作：“语法词”。“句法词”和“语法词”可以用于指出1个句子的语法结构是包括“句法结构”和“语汇结构”的“句法语汇结构”。句法语汇结构的语法结构模型，包括：句法结构模型的“二类四等句法词”和语汇结构模型的“二类四等8品词”2个模型。分析句子的语法结构只要指出了“句法词”和“语法词”，1个句子的“句法语汇结构”就清楚了。

任何1个句子的全体语法结构核心是“语音结构”。语音单位是“语元素音节”，其成分中同时具有“音元素”和“超音元素声调”的“语音元素”构成汉语语音结构的2个模型：“汉语语元素音节中语音元素结构模型”，也称作“语音元素结构图”和“汉语语元素音节结构统音法式音节表”，也称作“统音法式音节表”。

朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子可以用于指出任何1个句子具有包括可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的全体语法结构。

3、这一语言学方法论用于语言教学

这一语言学的方法论是中国语本身具有的方法论。如果用于基础语言教学，就可以指出区分1个句子的依据是1个语言包括各地方言方音本身具有的超音成分。音声语言表达形式中的停顿、轻重音、标峰重音、声调等等是语言具有的超音成分，表记音声语言的文字符号是语言具有的超音成分单位，依据语言具有的超音成分区分的1个句子语言单位以及包括句法部门、语汇部门、语音部门、

表记部门单位的全部成分单位是语言的超音成分单位。任何时候无论过去现在将来存在和有可能存在的任何1个语言包括各地方言方音都可以用这一方法指出正确的1个句子。如果用于基础语言教学，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子就可以指出1个句子的句法词和语法词，句法语汇结构就清楚了。

如果把语元素音节中的最小成分单位是同时具有音元素和超音元素声调的语音元素用于基础语音教学，就可以指出汉语拼音符号是汉语语音的表记符号，汉语拼音符号表示的基本单位是“语音元素”，可以把汉语拼音音节符号与其表示的“语元素音节”及其成分中同时具有“音元素”和“超音元素声调”的“语音元素”区分开来。如果把“语音元素结构图”用于基础语音教学，就可以指出汉语语元素音节的“声调”是“超音元素声调”，可以把“四声字调”与语元素音节区分的“声调音节”区分开来。如果把“统音法式音节表”的“二类4音表”用于基础语音教学，只要按照“统音法式音节表”“主表”和“辅表”的4个音表的排序就可以指出汉语拼音音节符号表示的音节读音。可以用于简化基础语音教学程序。

这一语言学的方法论是中国语的分析方法及其结果。如果可以把中国语言学基础理论“音等论”用于基础语言教学，便可以作为确立以现代汉语为代表的中国国语（标准语）依据，可以简化基础语言教学程序有利于基础语言教学标准化。

4、这一语言学方法论在今后的作用

这一语言学方法论的语法模型具有特定性、一般性、概括性、适用性。“本研究分析的是从20世纪50年代中后期至今半个多世纪以来的具有代表性的现代中国语。即，具有**特定性**。由语言分析区分2个形式，指出1个句子语言单位，分析句子区分四个部门，区分语元素音节全过程，指出全体语法结构核心，到：指出句法语汇分析的任何1个句子的句法语汇结构，指出一个语言的全体语法结构是无限数量包括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在

和有可能存在的具有超音语言成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式的任何1个句子语言单位及其全部成分单位构成的可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。即，**具有一般性**。这1个分析方法及其全部结果可以概括为中国语言学基础理论研究中的超音理论：‘**音等论**’，这1个分析方法及其全部结果可以概括为语言的定义和语言形式的定义，她可以概括和表示一个语言的全体语法结构模型。即，**具有概括性**。这1个分析方法及其全部结果可以适用于今后包括其他语言研究、中国语言学基础理论研究和现代汉语语法、语汇、语音研究以及今后的现代汉语大语法研究和基础语言教学与研究。即，**具有适用性**。”（引自：笔者2017年〈语法结构〉《樱文论丛 第97卷 2018年3月》。）

这一语言学的方法论指出“语言是人类思维的表现手段。可以概括所有任何时候无论过去现在将来发生发展消亡全过程中任何存在和有可能存在的任何1个语言共同体约定俗成的思维的表现手段。语言是人类社会的产物。人类与语言共存，语言与人类社会同步发展。”“语言形式是语言分析的对象，包括音声语言表达形式和音声语言的表记形式。1个语言的语言形式是1个语言共同体约定俗成的思维表现的形式。1个音声语言表达形式是语言分析的基本单位，表示语言的基本成分单位句子。音声语言的表记形式是对音声语言的表记，表记单位是文字符号。分析语言的基本成分单位包括句法、语汇、语音、表记四个部门。”（引自：笔者2017年〈语法结构〉《樱文论丛 第97卷 2018年3月》。）可以用于解答语言学基础理论研究中的语言形式、语言单位、语法部门、语法单位、句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构和全体语法结构及其关系以及其他有关方面的问题，可以化解以往语言研究、语言学基础理论研究、中国语言学基础理论研究和现代中国语语法、语汇、语音研究中无法解决的全部疑难问题，可以适用于今后的语言学基础理论研究和语言教学与研究以及其他相关联的各个领域。

中国语言学基础理论“音等论”提出了科学语言学的方法论，沿着科学语言学方向发展是历史赋予我们全体语言工作者、教育者、研究者的使命。

(二) 本文讨论 2 方面问题

本文扼要汇报中国语言学基础理论“音等论”研究结果及其在今后语言教学研究中的作用。讨论以下 2 方面问题。

一、音等论概括语言学分析方法及其结果

- 1、语言单位及其全部成分单位
- 2、句法语汇结构及其语音结构

二、音等论在今后语言教学研究中的作用

- 1、1 个句子及其语法结构分析
- 2、语音元素及统音法式音节表

本文中若有与笔者以往其他文中不同处，以本文为准。

一、音等论概括语言学分析方法及其结果

迄今的现代汉语语法以字词为依据，不能够用于指出 1 个语言单位是怎样的，不能够用于指出语言单位的数目类型，不能够用于指出任何 1 个语言单位具有的全部成分单位及其数目类型，因而也就不能够用于指出任何 1 个句子语法单位及其成分结构是怎样的。如果可以把归类的音声语言表达形式中存在的大小停顿（用于语言分析时称作：句切。）、轻重音、标峰重音等超音成分用于语言分析，就可以区分语言单位及其全部成分单位数目类型，其结果可以用于指出任何 1 个句子及其语法结构是怎样的。

以下扼要说明语言单位及其全部成分单位和句法语汇结构及其语音结构 2 个问题。

- 1、语言单位及其全部成分单位
- 2、句法语汇结构及其语音结构

1、语言单位及其全部成分单位

任何 1 个句子语言单位具有包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式。归类的音声语言表达形式中存在的大小停顿（用于语言分析时称作：句切。）、轻重音、标峰重音等超音成分可以用于指出任何 1 个句子语言单位及其具有的包括四个部门（句法部门、语汇部门、语音部门、表记部门）全部成分单位。

（1）语言单位

语言单位是句子。1 个句子是 1 个语言单位。语言单位的成分单位是 1 个句子中不可再切分的“句单位”。

任何1个音声语言表达形式有1个音声语言的表记形式，1个音声语言的表记形式可以表示那1个音声语言表达形式以及无限数量相同或有可能非相同音声语言表达形式。归类的音声语言表达形式中存在的大小小停顿（用于语言分析时称作：句切。）、轻重音、标峰重音等超音成分可以用于指出任何1个句子语言单位具有包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式。

例如，可以指出朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”是1个句子。这1个句子具有包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式并具有无限数量的相同句。

归类的音声语言表达形式中存在的大小小停顿称作：句切。句切可以用于指出句子的数目及其成分“句单位”数目。

句切归类为二类四等。一类句切可以用于指出1个句子和2个句子的区别，二类句切可以用于指出1个句子中1个句单位和另1个句单位以及1个句子和句单位的区别。一类句切可以称作：“停”，二类句切可以称作：“顿”。四等句切分别是：属于一类句切的一等句切“停顿”、二等句切“较大停顿”和属于二类句切的三等句切“较小停顿”、四等句切“小停顿”。用2条竖线“| |”表示二类四等句切符号（基础语言教材可以用“空格”表示）。用句切符号描写句子时，句切符号写在句子及其不可再切分的“句单位”前后。

例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号描写的“| 你好 |。”可以指出这是1个句子，这1个句子前后有一等句切“停顿”，“你”和“好”前后之间没有句切，可以指出这1个句子中不可再切分的“句单位”数目为1个。

又如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号描写的“| 你好 |。| 好久不见了 |。”可以指出其前后有一等句切“停顿”，但“| 你好 |”和“| 好久不见了 |”前后之间有二等句切“较大停顿”，可以指出这是前后2个句子而不是1个句子，前者和后者分别有1个不可再切分的“句单位”。

又例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号描写的“| 有英文 |、| 中文说明 |。”可以指出这是1个句子而不是2个句子，这1个

句子前后有一等句切“停顿”，但“| 有英文 |”和“| 中文说明 |”前后之间有三等句切“较小停顿”，可以指出这1个句子中有2个不可再切分的“句单位”。

再例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”可以指出这是1个句子，这1个句子前后有一等句切“停顿”，而“| 我 |”和“| 是 |”前后之间有四等句切“小停顿”，“| 是 |”和“| 学生 |”前后之间有四等句切“小停顿”，可以指出这1个句子中有3个不可再切分的“句单位”。

句切可以用于指出句子和句单位的数目，但是，还不能够用于区分和指出句子和句单位及其成分类型。

音声语言表达形式中存在的轻重音是句单位中每1个成分具有的超音成分。轻重音可以归类为二类四等。二类，即，重音类和轻音类。四等轻重音在一般语音教学中通常称作：“重”、“中”、“弱”、“轻”。

轻重音可以用于区分句子中的语素类型。轻重音区分的语素也称作：“区别轻重音的语素”。

“区别轻重音的语素”区分为二类四等。二类，即：“重音类语素”和“轻音类语素”。四等，包括：一等，重音语素。二等，次重音语素。三等，次轻音语素。四等，轻音语素。

句子中具有重音类语素的句单位区分为重音句单位，不具有重音类语素只具有轻音类语素的句单位区分为轻音句单位。具有重音类语素的重音句单位中有1个“标峰重音”，可以用“下傍点”“.”表示标峰重音符号。重音句单位中具有“标峰重音”的重音类语素区分为“重音语素”，也称“标峰重音语素”，其他重音类语素区分为“次重音语素”。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以指出这1个句子的句单位“| 你好 |”具有2个重音类语素，区分为重音句单位，其中，具有“标峰重音”的重音类语素“你”区分为重音语素，“好”区分为次重音语素。

又如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音

符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”可以指出这1个句子有3个句单位，其中“| 我 |”和“| 学生 |”是分别具有1个重音类语素的重音句单位，这2个重音句单位分别具有的重音类语素“我”和“学生”区分为重音语素，“| 是 |”是不具有重音类语素只具有轻音类语素的句单位，区分为轻音句单位，这1个轻音句单位具有的轻音类语素“是”，区分为次轻音语素。

再如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好吗 | ？”可以指出这1个句子中重音句单位“| 你好吗 |”有3个语素，其中重音类语素的“你”区分为次重音语素，“好”区分为重音语素，轻音类语素的“吗”区分为轻音语素。

“区别轻重音的语素”可以用于区分句单位类型。

句单位可以区分为二类四等。二类，即：“重音句单位”和“轻音句单位”。四等，包括：一等，重音型句单位。二等，前重型句单位。三等，后重型句单位。四等，轻音型句单位。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”可以指出这1个句子中“| 我 |”和“| 学生 |”分别是具有1个重音语素的重音句单位，区分为重音型句单位，“| 是 |”是只具有轻音类语素（次轻音语素）的轻音句单位，区分为轻音型句单位。

又如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以指出这1个句子中“| 你好 |”是具有2个重音类语素（重音语素和次重音语素）的重音句单位，区分为前重型句单位。

再如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好吗 | ？”可以指出这1个句子中“| 你好吗 |”是具有2个重音类语素（次重音语素和重音语素）和1个轻音类语素（轻音语素）的重音句单位，区分为后重型句单位。

句单位类型可以用于指出2个句子有可能是相同汉文字标记的非相同句。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得好 |。”和“| 他 | 写得好 |。”可以指出这是2个句

子，前者和后者分别具有2个重音句单位，前者中的重音型句单位“| 他 |”和后者中的“| 他 |”为相同句单位，前者中的后重型句单位“| 写得好 |”和后者中的前重型句单位“| 写得好 |”为非相同句单位，可以用于指出相同汉文字标记的这2个句子是具有非相同句单位的非相同句。

区别轻重音的句单位可以用于区分句子类型。

句子可以区分为二类，即：“重音句”和“轻音句”。具有重音句单位的句子区分为“重音句”，只具有轻音句单位而不具有重音句单位的句子区分为“轻音句”。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”“| 你好吗 | ？”“| 我 | 是 | 学生 |。”可以指出这3个句子分别具有重音句单位，这3个句子区分为重音句。

又例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 可是 |……。”可以指出这是1个句子，这1个句子只具有轻音句单位而不具有重音句单位，这1个句子区分为轻音句。

重音句有可能具有1个或2个以上数目的句单位。可以把具有1个句单位和2个以上数目句单位的重音句区分开，又可以把只具有重音句单位的重音句和具有轻音句单位的重音句区分开。

例如，“| 你好 |。”“| 你好吗 | ？”分别是具有1个重音句单位的重音句，“| 有英文 |、| 中文说明 |。”“| 我 | 是 | 学生 |。”分别是具有2个以上数目句单位的重音句，“| 有英文 |、| 中文说明 |。”是只具有重音句单位的重音句，“| 我 | 是 | 学生 |。”是具有重音句单位和轻音句单位的重音句。

句子中的语素成分是“区别轻重音的语元素”。

语素成分的语元素可以区分为二类四等。二类，即：“重音类语元素”和“轻音类语元素”。四等，包括：一等，重音语元素。二等，次重音语元素。三等，次轻音语元素。四等，轻音语元素。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”可以指出这1个句子的重音型句单位

“| 我 |”中的重音语素“我”的成分是1个重音类语元素，区分为重音语元素，轻音型句单位“| 是 |”中的次轻音语素“是”的成分是1个轻音类语元素，区分为次轻音语元素，重音型句单位“| 学生 |”中的重音语素“学生”的成分是2个语元素，区分为重音语元素和次轻音语元素。

任何1个句子的句单位成分中的1个“区别轻重音的语元素”有1个“语元素音节”和汉文字标记。(参见：“(2) 语汇单位、(3) 语音单位、(4) 标记单位”。)

在指出1个句子的语法结构时，句子表示语法结构单位，称作：语法单位，1个句子中不可再切分的句单位表示句子的结构成分单位，称作：句法词。语汇单位“单语”充任的句法词成分单位称作：语法词。1个句子的语法结构是句法语汇结构。

(参见：“2、句法语汇结构及其语音结构”的“(1) 语法结构”。另参见笔者：2013年〈句单位〉《桜文论丛 第86卷 2014年2月》、2014年〈单语〉《桜文论丛 第89卷 2015年3月》、2015年〈语言分析方法〉《桜文论丛 第90卷 2015年10月》、2017年〈语法结构〉《桜文论丛 第97卷 2018年3月》。)

(2) 语汇单位

语汇单位是“单语”。1个“单语”是1个语汇单位。1个“单语”表示句子中的1个“语素集合体”。“单语”成分是“语元素”。

任何句子中的1个“区别轻重音的语素”具有无限数量“同类语素”。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以指出这1个句子中重音类语素的“你”和无限数量相同句中重音类语素的“你”为“同类语素”，重音类语素的“好”和无限数量相同句中重音类语素的“好”为“同类语素”。

又如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音

符号描写的“| 你好吗 | ？”可以指出这1个句子中重音类语素的“你”和无限数量相同句中重音类语素的“你”为“同类语素”，重音类语素的“好”和无限数量相同句中重音类语素的“好”为“同类语素”，轻音类语素的“吗”和无限数量相同句中轻音类语素的“吗”为“同类语素”。

又例如，“| 你好 |。”和“| 你好吗 | ？”是非相同句，这2个句子中，重音类语素“你”和“你”为“同类语素”，重音类语素“好”和“好”为“同类语素”，可以用于指出无限数量任何相同句和非相同句中重音类语素的“你”为“同类语素”，重音类语素的“好”为“同类语素”，又可以用于指出无限数量任何相同句和非相同句中的轻音类语素“吗”为“同类语素”。

“区别轻重音的语素”可以用于指出句子中的“非同类语素”。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”和“| 好久不见了 |。”这2个句子，可以用于指出前者中的重音类语素“好”和后者中的轻音类语素“好”为“非同类语素”。

又如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”和“| 是 |。”这2个句子，可以用于指出前者中的轻音类语素“是”和后者中的重音类语素“是”为“非同类语素”。

句子中1个语素的所有同类语素为1个“语素集合体”，表示语汇中的1个“单语”。1个“单语”可以用于指出任何句子中的1个语素及其所有同类语素。

“单语”可以区分为二类，即：“重音类单语”和“轻音类单语”。句子中任何1个重音类语素及其所有同类语素为1个“重音类语素集合体”，区分为语汇中的1个“重音类单语”，句子中任何1个轻音类语素及其所有同类语素为1个“轻音类语素集合体”，区分为语汇中的1个“轻音类单语”。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”可以指出这1个句子中的重音类语素“我”及其所有同类语素为1个“重音类语素集合体”，“学生”及其所有同类语素为1个“重音类语素集合体”，区分为语汇中的“重音类单语”，“重音类单语”“我”

可以用于指出任何1个句子中重音类语素“我”的所有同类语素，“重音类单语”“学生”可以用于指出任何1个句子中重音类语素“学生”的所有同类语素。这1个句子中的轻音类语素“是”及其所有同类语素为1个“轻音类语素集合体”，区分为语汇中的“轻音类单语”，“轻音类单语”“是”可以用于指出任何1个句子中轻音类语素“是”的所有同类语素。

句子中的1个语素及其所有同类语素为语汇中的“同一单语”。句子中的非同类语素为语汇中的“非同一单语”。

例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”和“| 好久不见了 |。”这2个句子，可以指出前者中的重音类语素“好”及其所有同类语素为1个“重音类语素集合体”，区分为语汇中的“重音类单语”，句子中重音类语素“好”的所有同类语素为语汇中的“同一单语”。后者中的轻音类语素“好”及其所有同类语素为1个“轻音类语素集合体”，区分为语汇中的“轻音类单语”，句子中轻音类语素“好”的所有同类语素为语汇中的“同一单语”。句子中的重音类语素“好”与轻音类语素“好”是非同类语素，即为语汇中的“非同一单语”。

单语成分是语元素。单语成分的语元素可以区分为二类四等。二类，即：“重音类语元素”和“轻音类语元素”。四等，包括：一等，重音语元素。二等，次重音语元素。三等，次轻音语元素。四等，轻音语元素。（另参见：“（1）语言单位”中的“句子中的语素成分是‘区别轻重音的语元素’。”）

重音类单语有1个标峰重音，那1个具有标峰重音的重音类语元素区分为重音语元素，此外的重音类语元素区分为次重音语元素。重音类单语成分中的重音语元素可以用附加标峰重音符号来描写。

重音类单语成分中的语元素包括重音类语元素和轻音类语元素，可以区分重音语元素、次重音语元素、次轻音语元素、轻音语元素。

例如，朗读文字符号表记的“人民”用附加标峰重音符号描写作“人₁民”，可以用于指出其表示1个重音类单语，这1个重音类单语成分中的2个重音类语

元素，“人”区分为重音语元素，“民”区分为次重音语元素。

又如，朗读文字符号标记的“别人”用附加标峰重音符号描写作“别人”，可以用于指出其表示1个重音类单语，这1个重音类单语成分中的2个语元素，“别”区分为重音语元素，“人”区分为次轻音语元素。

再如，朗读文字符号标记的“馒头”用附加标峰重音符号描写作“馒头”，可以用于指出其表示1个重音类单语，这1个重音类单语成分中的2个语元素，“馒”区分为重音语元素，“头”区分为轻音语元素。

轻音类单语成分中的轻音类语元素可以区分次轻音语元素和轻音语元素。

例如，朗读文字符号标记的轻音类单语“是”，可以用于指出这1个轻音类单语成分中的轻音类语元素数目为1个，轻音类语元素“是”区分为“次轻音语元素”。

又如，朗读文字符号标记的轻音类单语“吗”，可以用于指出这1个轻音类单语成分中的轻音类语元素数目为1个，轻音类语元素“吗”区分为“轻音语元素”。

语汇中的1个单语表示的那1个“语素集合体”可以用于指出任何句子中1个语素的所有同类语素。单语充任1个句子句法语汇结构中的句法词成分时称作：语法词。单语充任的任何1个语法词具有无限数量的1个语汇结构。

（参见：“2、句法语汇结构及其语音结构”的“（1）语法结构”。另参见笔者：2014年〈单语〉《樱文论丛 第89卷 2015年3月》、2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛 第90卷 2015年10月》、2017年〈语法结构〉《樱文论丛 第97卷 2018年3月》。）

（3）语音单位

语音单位是“语元素音节”。1个“语元素音节”是1个语音单位。1个“语元素音节”具有1次发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程。“语元素音节”成分是“调音素”及同时具有“音元素”和“超音元素声调”

的最小成分：“语音元素”。（另参见笔者：2016年〈语音元素〉《樱文论丛 第92卷 2016年10月》。）

语元素音节区分为二类四等。二类，即：“重音类语元素音节”和“轻音类语元素音节”。四等，包括：一等，重音语元素音节。二等，次重音语元素音节。三等，次轻音语元素音节。四等，轻音语元素音节。

单语成分中的每1个区别轻重音的语元素具有语元素音节。

重音类单语成分中的重音类语元素音节和轻音类语元素音节可以区分：重音语元素音节、次重音语元素音节、次轻音语元素音节、轻音语元素音节。

例如，重音类单语“人民（rénmín）”发音时可以指出其成分中“人（rén）”和“民（mín）”的语元素音节为重音类语元素音节，“人（rén）”区分为重音语元素音节，“民（mín）”区分为次重音语元素音节。

又如，重音类单语“别人（biéren）”发音时可以指出其成分中的重音类语元素音节“别（bié）”区分为重音语元素音节，轻音类语元素音节“人（ren）”区分为次轻音语元素音节。

再如，重音类单语“馒头（mántou）”发音时可以指出其成分中的重音类语元素音节“馒（mán）”区分为重音语元素音节，轻音类语元素音节“头（tou）”区分为轻音语元素音节。

轻音类单语成分中的轻音类语元素音节可以区分：次轻音语元素音节和轻音语元素音节。

例如，轻音类单语“是（shì）”发音时可以指出其成分中的轻音类语元素音节“是（shì）”区分为次轻音语元素音节。

又如，轻音类单语“吗（ma）”发音时可以指出其成分中的轻音类语元素音节“吗（ma）”区分为轻音语元素音节。

1个语元素音节具有1次发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程。

例如，“人民（rénmín）”、“别人（biéren）”、“馒头（mántou）”这3个重音类

单语发音时分别具有2次由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程，可以用于指出“人·民（rénmín）”、“别·人（biéren）”、“馒·头（mántou）”分别具有的语元素音节数目为2个。

语元素音节具有的发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程可以区分为2个类型。第一类是发音时由发音肌肉紧张增强开始至紧张高峰后到紧张减弱结束为止的全过程，第二类是发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的发音肌肉紧张增强减弱全过程。

例如，“人·民（rénmín）”、“别·人（biéren）”、“馒·头（mántou）”这3个重音类单语发音时，“人·民（rénmín）”、“别·人（biéren）”分别具有的2次发音肌肉紧张全过程可以区分为第一类，“馒·头（mántou）”的“馒（mán）”具有的1次发音肌肉紧张全过程可以区分为第一类，“馒·头（mántou）”的“头（tou）”具有的1次发音肌肉紧张全过程可以区分为第二类。

语元素音节具有的发音肌肉紧张全过程的这2个类型可以用于区分语元素音节类型。

语元素音节类型可以区分为“普通音节”和“特殊音节”二类。发音时具有由发音肌肉紧张增强开始至紧张高峰后到紧张减弱结束为止全过程的语元素音节可以区分为“普通音节”，发音时具有由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的发音肌肉紧张增强减弱全过程的语元素音节可以区分为“特殊音节”。

例如，“人·民（rénmín）”、“别·人（biéren）”和“馒·头（mántou）”的“馒（mán）”成分中的语元素音节具有发音时由发音肌肉紧张增强开始至紧张高峰后到紧张减弱结束为止的全过程，可以区分为“普通音节”，“馒·头（mántou）”的“头（tou）”成分中的语元素音节具有发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的发音肌肉紧张增强减弱全过程，可以区分为“特殊音节”。

发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程可以用于指出语元素音节成分数目类型。

重音类单语发音时，其成分中属于第一类语元素音节的普通音节具有的发音肌肉紧张全过程可以区分为3个阶段：紧张增强阶段、紧张高峰阶段、紧张减弱阶段，其成分中属于第二类语元素音节的特殊音节具有的发音肌肉紧张全过程可

以区分为1个阶段：紧张增强减弱阶段。

例如，发音时，“人民 (rénmín)”、“别人 (biéren)”和“馒头 (mántou)”的“馒 (mán)”中的普通音节具有的发音肌肉紧张全过程可以区分为3个阶段：紧张增强阶段、紧张高峰阶段、紧张减弱阶段，“馒头 (mántou)”的“头 (tou)”中的特殊音节具有的发音肌肉紧张全过程可以区分为1个阶段：紧张增强减弱阶段。

发音肌肉紧张阶段可以用于指出语元素音节的成分是“调音素”。可以指出普通音节具有3个调音素，特殊音节具有1个调音素。普通音节的紧张增强阶段的调音素区分为“前辅音性调音素”，紧张高峰阶段的调音素区分为“元音性调音素”，紧张减弱阶段的调音素区分为“后辅音性调音素”，特殊音节的紧张增强减弱阶段的调音素区分为“特殊辅音性调音素”。

例如，重音类单语“人民 (rénmín)”、“别人 (biéren)”分别具有2个语元素音节，发音时音节成分可以区分为3个调音素：紧张增强阶段的前辅音性调音素、紧张高峰阶段的元音性调音素、紧张减弱阶段的后辅音性调音素，可以指出“人民 (rénmín)”、“别人 (biéren)”成分中的语元素音节分别是具有3个调音素的普通音节。

又如，重音类单语“馒头 (mántou)”具有2个语元素音节，发音时“馒头 (mántou)”的“馒 (mán)”的音节成分可以区分为3个调音素：紧张增强阶段的前辅音性调音素、紧张高峰阶段的元音性调音素、紧张减弱阶段的后辅音性调音素，“馒头 (mántou)”的“头 (tou)”的音节成分可以区分为1个调音素：紧张增强减弱阶段的特殊辅音性调音素，可以指出“馒头 (mántou)”成分中“馒 (mán)”的语元素音节是具有3个调音素的普通音节，“头 (tou)”的语元素音节是具有1个特殊辅音性调音素的特殊音节。

语元素音节中的最小成分是“语音元素”。1个语音元素同时具有“音元素”和“超音元素声调”。发音时语元素音节具有的1次由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程中，1个语音元素包括音元素和超音元素声调具有发音肌肉紧张一定阶段。

例如，重音类单语“别人(biérén)”发音时，“别人(biérén)”的“别(bié)”紧张增强阶段的前辅音性调音素“bi”可以区分为分别具有发音肌肉紧张一定阶段的2个语音元素，可以指出“b”、“i”分别表示的具有发音肌肉紧张一定阶段的语音元素包括音元素和超音元素声调，紧张高峰阶段的元音性调音素“é”可以区分为具有发音肌肉紧张一定阶段的1个语音元素，可以指出“é”表示的具有发音肌肉紧张一定阶段的语音元素包括音元素和超音元素声调，紧张减弱阶段是“零符号表记”的后辅音性调音素，可以区分为具有发音肌肉紧张一定阶段的1个语音元素，可以指出“零符号表记”表示的具有发音肌肉紧张一定阶段的语音元素包括音元素和超音元素声调。（另参见笔者：2016年〈语音元素〉《樱文论丛 第92卷 2016年10月》。）

语元素音节由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程具有“超音元素声调”，可以用于指出发音时每1个语元素音节具有的“声调”。（另参见笔者：2016年〈语音元素〉《樱文论丛 第92卷 2016年10月》。）

语元素音节具有“超音元素声调”，可以区分“声调音节”。

声调音节区分为二类四等。二类，即：“四声类语元素音节”和“轻声类语元素音节”。四等，包括：一等，重音类语元素四声音节。二等，轻音类语元素四声音节。三等，轻音类语元素轻声音节。四等，轻音类语元素特殊轻声音节。

重音类单语成分中的重音类语元素包括重音语元素和次重音语元素具有的语元素音节区分为“重音类语元素四声音节”，也称作“重音类四声音节”，或“四声音节”。

例如，重音类单语“人民(rénmín)”发音时，其成分中重音类语元素的“人(rén)”（重音语元素）和“民(mín)”（次重音语元素）的声调音节区分为“重音类语元素四声音节”，也称作“重音类四声音节”，或“四声音节”。

重音类单语成分中的轻音类语元素区分次轻音语元素和轻音语元素。

重音类单语成分中次轻音语元素具有的语元素音节可以区分为2个类型。其中的1个类型是“轻音类语元素四声音节”，也称作“轻音类四声音节”，另1个类型是“轻音类语元素轻声音节”，也称作“轻音类轻声音节”，或“轻声音节”。

例如，重音类单语“别人(biérén)”和“客人(kèren)”发音时，二者成分中的轻音类语元素“人(ren)”区分为次轻音语元素，“人(ren)”的声调音节区分为“轻音类语元素轻声音节”，也称作“轻音类轻声音节”，或“轻声音节”。

又例如，重音类单语“大学生(dàxuéshēng)”和“学生(xuésheng)”发音时，二者成分中的轻音类语元素“生(shēng)”和“生(sheng)”区分为次轻音语元素，“生(shēng)”的声调音节区分为“轻音类语元素四声音节”，也称作“轻音类四声音节”，“生(sheng)”的声调音节区分为“轻音类语元素轻声音节”，也称作“轻音类轻声音节”，或“轻声音节”。

重音类单语成分中轻音语元素具有的语元素音节(特殊音节)区分为“轻音类语元素特殊轻声音节”，也称作“轻音类特殊轻声音节”，或“特殊轻声音节”。

例如，重音类单语“馒头(mántou)”和“桌子(zhuōzi)”发音时，二者成分中的轻音类语元素“头(tou)”和“子(zi)”区分为轻音语元素，“头(tou)”和“子(zi)”的声调音节区分为“轻音类语元素特殊轻声音节”，也称作“轻音类特殊轻声音节”，或“特殊轻声音节”。

轻音类单语成分中的轻音类语元素区分次轻音语元素和轻音语元素。

轻音类单语成分中次轻音语元素具有的语元素音节区分为“轻音类语元素四声音节”，也称作“轻音类四声音节”。

例如，轻音类单语“是(shì)”发音时，其成分的次轻音语元素“是(shì)”具有的语元素音节区分为“轻音类语元素四声音节”，也称作“轻音类四声音节”。

轻音类单语成分中轻音语元素具有的语元素音节区分为“轻音类语元素轻声音节”，也称作“轻音类轻声音节”，或“轻声音节”。

例如，轻音类单语“吗(ma)”发音时，其成分的轻音语元素“吗(ma)”具有的语元素音节区分为“轻音类语元素轻声音节”，也称作“轻音类轻声音节”，或“轻声音节”。

语音单位的语元素音节可以用于指出汉语的语音结构是由同时具有音元素和超音元素声调的语音元素构成的。语元素音节成分中同时具有音元素和超音元素声调的语音元素构成汉语语音结构的2个模型：“汉语语元素音节中语音元素结

构模型”，也称作“语音元素结构图”，和“汉语语元素音节结构统音法式音节表”，也称作“统音法式音节表”。

（参见：“2、句法语汇结构及其语音结构”的“(2) 语音结构”。另参见笔者：2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛 第90卷 2015年10月》、2016年〈语音元素〉《樱文论丛 第92卷 2016年10月》、2017年〈语法结构〉《樱文论丛 第97卷 2018年3月》。）

（4）表记单位

表记单位是文字符号。文字符号是语言的超音成分单位。

任何1个句子语言单位具有包括超音成分的声音语言表达形式和音声语言的表记形式，朗读文字符号表记的声音语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，可以指出任何1个句子语言单位及其全部成分单位。

汉文字是汉语的表记单位。汉语拼音符号是汉语语音的表记符号。

汉文字表示的基本单位是语元素。

朗读文字符号表记的声音语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的句子可以用于指出1个句子及其句单位和语素数目类型，以及可以用于指出语素成分的语元素数目类型，还可以用于指出任何句子中的1个语素具有的语素集合体表示语汇中的1个单语及其语元素数目类型，可以指出汉文字表示的基本单位是语元素。

例如，朗读文字符号表记的声音语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出这1个句子及其句单位和语素数目类型，以及可以用于指出语素成分的语元素数目类型，还可以用于指出这1个句子中“你”和“好”的语素集合体分别表示语汇中的1个单语及其语元素数目类型，可以指出汉文字表示的基本单位是语元素。（参见：“(1) 语言单位”和“(2) 语汇单位”。）

汉语拼音符号表示的基本单位是语音元素。

语元素音节中最小成分是同时具有音元素和超音元素声调的语音元素，汉语拼音音节符号可以用于指出单语成分中的语元素音节及其调音素数目类型，以及可以用于指出汉语拼音符号表示的同时具有音元素和超音元素声调的语音元素数目类型，可以指出汉语拼音符号表示的基本单位是语音元素。

例如，“人民（rénmín）”、“别人（biéren）”、“馒头（mántou）”的汉语拼音音节符号可以用于指出这3个重音类单语成分中的语元素音节及其调音素数目类型，以及可以用于指出汉语拼音符号表示的同时具有音元素和超音元素声调的语音元素数目类型，可以指出汉语拼音符号表示的基本单位是语音元素。（参见：“（3）语音单位”。）

汉文字表示的基本单位是语元素，可以组词造句以及表示无限大量不断产生的新单语用于无限数量的句子中以超能产和超高效率不断扩大发展无限数量的语汇。

（另参见笔者：2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛 第90卷 2015年10月》、2017年〈语法结构〉《樱文论丛 第97卷 2018年3月》。）

2、句法语汇结构及其语音结构

任何1个句子的语法结构是“句法语汇结构”。分析句子的语法结构只要指出了句法词和语法词，1个句子的句法语汇结构就清楚了。

任何1个句子的全体语法结构核心是“语音结构”。语音单位是语元素音节，1个语元素音节具有1次发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程。语元素音节的最小成分单位是语音元素包括音元素和超音元素声调。语音元素构成汉语语音结构的2个模型。

朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子可以用于指出任何1个句子具有包括可以区分“句法语汇结构”、“句法结构”、“语汇结构”、“语音结构”的全体语法结构。

（1）语法结构

任何 1 个句子的语法结构是“句法语汇结构”。

指出 1 个句子的语法结构时，句子作为语法结构单位称作：“语法单位”。1 个句子中不可再切分的“句单位”表示语法结构成分单位，称作：“句法词”，语汇单位“单语”充任“句法词”成分，称作：“语法词”。“句法词”和“语法词”可以用于指出 1 个句子的语法结构是包括“句法结构”和“语汇结构”的“句法语汇结构”。

例如，指出 1 个句子的句法语汇结构时，“句单位”表示“句法词”，“单语”充任“句法词”成分“语法词”，可以用于指出朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”这 1 个句子有 1 个“前重型句法词”，充任这 1 个“前重型句法词”成分的“你”和“好”为“重音类语法词”。

“句单位”表示“句法词”。句法词类型即为二类四等。二类句法词分别称作：“重音句法词”和“轻音句法词”。四等，包括：一等，重音型句法词。二等，前重型句法词。三等，后重型句法词。四等，轻音型句法词。

“单语”表示“语法词”。语法词类型区分为二类四等。二类语法词分别称作：“重音类实词”和“轻音类虚词”。四等又区分为 8 品词。即，属于重音类实词的：一等，1、名词（代词）。2、数词。二等，3、形容词。4、动词。属于轻音类虚词的：三等，5、副词。6、介词。四等，7、连词。8、助词。语法词类型也称作“二类四等 8 品词”。

重音类实词可以单独充任重音句法词成分，而不可以单独充任轻音句法词成分。

例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 我 | 是 | 学生 |。”可以用于指出这 1 个句子有 2 个重音型句法词和 1 个轻音型句法词，充任这 2 个重音型句法词“| 我 |”和“| 学生 |”成分的“我”和“学生”分别为重音类实词的“代词”和“名词”。

轻音类虚词不可以单独充任重音句法词成分。轻音类虚词的一部分可以单独

充任轻音句法词成分，一部分可以充任重音句法词中的成分。

轻音类虚词中，连词可以单独充任轻音句法词成分而不充任重音句法词中的成分，有时可以构成“轻音句”。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 可是 |……。”可以指出这1个句子是“轻音句”，有1个充任轻音句法词“| 可是 |”成分的连词“可是”构成的轻音型句法词。可以用于指出连词可以单独充任轻音句法词成分而不充任重音句法词中的成分，有时可以构成“轻音句”。

轻音类虚词中，助词可以区分为4类：1，助数词。2，态助词。3，结构助词。4，语气助词。

其中，助数词和态助词只充任重音句法词中的成分而不可以单独充任轻音句法词成分。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 一个 |。”和“| 这个 |。”可以指出二者中“| 一个 |”和“| 这个 |”的“个”是助数词充任重音句法词（重音型句法词）中的成分。可以用于指出助数词只充任重音句法词中的成分而不可以单独充任轻音句法词成分。

又例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 学了一年 | 汉语 |。”可以指出“| 学了一年 |”中的“了”是态助词充任重音句法词（后重型句法词）中的成分。可以用于指出态助词只充任重音句法词中的成分而不可以单独充任轻音句法词成分。

其中，结构助词和语气助词的一部分可以充任重音句法词中的成分，有的结构助词和语气助词可以单独充任轻音句法词成分。但结构助词充任轻音句法词成分任何时候都不构成轻音句，语气助词充任轻音句法词成分可以构成轻音句。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 春天的心 | 活在 | 春天的人 | 的 | 身体里 |。”可以指出“| 春天的心 |”和“| 春天的人 |”中“的”是结构助词充任重音句法词（分别是后重型句法词和前重型句法词）中的成分，“| 的 |”中“的”是结构助词充任轻音句法词（轻音型句法词）成分。可以用于指出结构助词“的”可以充任重音

句法词中的成分，又可以用于指出结构助词“的”也可以单独充任轻音句法词（轻音型句法词）成分，但任何时候结构助词充任轻音句法词成分都不构成“轻音句”。

又例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你·你好吗 | ？”和“| 唔 |。”可以指出前者中“吗”是疑问语气助词充任重音句法词“| 你·你好吗 |”（后重型句法词）中的成分，后者“| 唔 |。”这1个句子是“轻音句”，有1个充任轻音句法词成分的语气助词“唔”构成的轻音型句法词。可以用于指出语气助词“吗”可以充任重音句法词中的成分，又可以用于指出语气助词“唔”可以单独充任轻音句法词（轻音型句法词）成分，语气助词“唔”充任轻音句法词成分可以构成“轻音句”。

轻音类虚词中，副词只充任重音句法词中的成分而不充任轻音句法词成分。副词充任重音句法词中的成分大多在重音类实词之前，但有的副词充任重音句法词中的成分有可能在重音类实词之前或之后。

例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 很·好 |。”和“| 好·得很 |。”可以指出这2个句子中副词“很”分别充任重音句法词“| 很·好 |”（重音型句法词）和“| 好·得很 |”（重音型句法词）中的成分。可以用于指出副词只充任重音句法词中的成分，有的副词充任重音句法词中的成分有可能在重音类实词之前或之后。

副词的一部分充任重音句法词中的成分有时读作特殊强调重音。这时可以把标峰重音符号用于标示特殊强调重音，但中心语仍然是重音类实词。

例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 很·好 |。”和“| 很·好 |。”可以指出这2个句子中副词“很”分别充任重音句法词“| 很·好 |”（重音型句法词）和“| 很·好 |”（重音型句法词）中的成分，不同的是后者中副词“很”读作特殊强调重音。这时标峰重音符号可以用于标示特殊强调重音，但中心语仍然是重音类实词。可以用于指出有的副词充任重音句法词中的成分有时读作特殊强调重音。

轻音类虚词中，介词只充任重音句法词中的成分而不充任轻音句法词成分。任何1个介词充任重音句法词中的成分总是在重音类实词之前，任何时候都不读

作特殊强调重音。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 把₁门 | 关₁上 |。”可以指出这1个句子中“把”是介词充任重音句法词“| 把₁门 |”（重音型句法词）中的成分。可以用于指出任何1个介词充任重音句法词中的成分总是在重音类实词之前，任何时候都不读作特殊强调重音。

1个句子中的句法词数目类型可以用于指出句法词成分的每1个语法词及其类型，语法词类型也可以用于指出句法词结构。只要指出了句子中的句法词和语法词，1个句子的句法语汇结构就清楚了。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你₁好 |。”可以指出这1个句子的句法词类型是前重型句法词，“| 你₁好 |”可以用于指出其成分“你”和“好”的语法词类型，这1个句子中的“你”和“好”也可以用于指出代词（中心语）和形容词构成的“前重型句法词”。

又如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你₁好吗 | ？”可以指出这1个句子的句法词类型是后重型句法词，“| 你₁好吗 |”可以用于指出其成分“你”“好”和“吗”的语法词类型，这1个句子中的“你”“好”和“吗”也可以用于指出代词和形容词（中心语）及疑问语气助词构成的“后重型句法词”。

又例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 很₁好 |。”可以指出这1个句子的句法词类型是重音型句法词，“| 很₁好 |”可以用于指出其成分“很”和“好”的语法词类型，这1个句子中的“很”和“好”也可以用于指出副词和形容词构成的“重音型句法词”。

再如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 把₁门 | 关₁上 |。”可以指出这1个句子有2个重音句法词，重音型句法词“| 把₁门 |”可以用于指出其成分“把”和“门”的语法词类型，重音型句法词“| 关₁上 |”可以用于指出其成分“关”和“上”的语法词类型，这1个句子中的“把”和“门”也可以用于指出介词和名词构成的“重音型句法词”，

“关”和“上”也可以用于指出动词和态助词构成的“重音型句法词”。

任何1个句子的语法结构是包括“句法结构”和“语汇结构”的“句法语汇结构”。句法语汇结构的语法结构模型，包括：句法结构模型的“二类四等句法词”和语汇结构模型的“二类四等8品词”2个模型。分析句子的语法结构只要指出了句法词和语法词，1个句子的句法语汇结构就清楚了。

（另参见笔者：2013年〈句单位〉《樱文论丛 第86卷 2014年2月》、2014年〈单语〉《樱文论丛 第89卷 2015年3月》、2015年〈语言分析方法〉《樱文论丛 第90卷 2015年10月》、2017年〈语法结构〉《樱文论丛 第97卷 2018年3月》。）

（2）语音结构

任何1个句子的全体语法结构核心是“语音结构”。

语音单位是语元素音节，1个语元素音节具有1次发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程。语元素音节的最小成分单位是语音元素包括音元素和超音元素声调。语元素音节成分中包括同时具有音元素和超音元素声调的语音元素构成汉语语音结构的2个模型：“汉语语元素音节中语音元素结构模型”和“汉语语元素音节结构统音法式音节表”。

“汉语语元素音节中语音元素结构模型”也称作：“语音元素结构图”。

1个语元素音节具有1次发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程，其中的每1个语音元素包括同时具有音元素和超音元素声调，具有发音肌肉紧张一定阶段，并具有弧线型，单一方向有始终等等特征。（另参见笔者：2016年〈语音元素〉《樱文论丛 第92卷 2016年10月》。）

“语音元素结构图”表示汉语语元素音节中包括音元素同时具有弧线型超音元素声调的语音元素结构模型。图中的超音元素声调体系称作：“音之声”，音元

素体系中的元音体系称作：“音之元”，辅音体系包括辅音和半元音体系分别称作：“音之辅”和“音之介”。（参见：“图（1）语音元素结构图”。）

“语音元素结构图”如“图（1）”。

（另参见笔者：2016年〈语音元素〉《桜文论丛 第92卷 2016年10月》、2017年〈语法结构〉《桜文论丛 第97卷 2018年3月》。）

“汉语语元素音节结构统音法式音节表”也称作：“统音法式音节表”。

“统音法式音节表”分“主表”和“辅表”二类。包括4个音节表：“表1”、“表2”、“表3”、“表4”。

主表：“表1”包括元音前不参与介音对立的音节模型及其构成的所有音节。

辅表：“表2”、“表3”、“表4”包括元音前参与介音对立的音节模型及其构成的所有音节。

“统音法式音节表”也称作：二类4音表。

“统音法式音节表”的4个音表，元音按“a”、“e”、“i”、“u”，辅音按“部位特征”、“方式特征”、“共鸣特征”顺序排列，表中的音节模型用韵母符号表示。

“统音法式音节表”记入音节符号，表1：265个。表2：51个。表3：63个。表4：24个。此外，“n(ng)”作为1个特殊音节符号（写在“注”中。）计入，共计404个。

“统音法式音节表”如“图（2）”。

（另参见笔者：2016年〈语音元素〉《桜文论丛 第92卷 2016年10月》、2017年〈语法结构〉《桜文论丛 第97卷 2018年3月》。）

图 (1) : 语音元素结构图

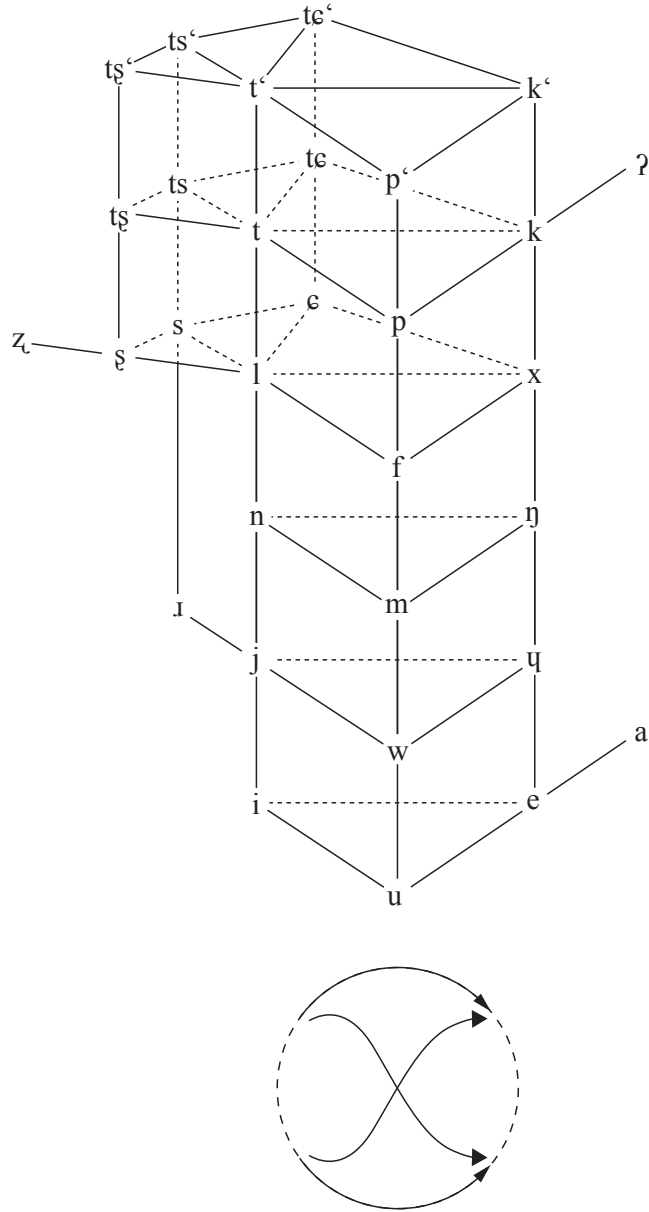


图 (1) : 语音元素结构图。表示汉语语元素音节中包括音元素同时具有弧线型超音元素声调的语音元素结构模型。图中的超音元素声调体系称作：“音之声”，音元素体系中的元音体系称作：“音之元”，辅音体系包括辅音和半元音体系分别称作：“音之辅”和“音之介”。

图(2): 统音法式音节表

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| a | | b | p | f | m | d | t | l | n | g/j | k/q | h/x | z | c | s | zh | ch | sh | r | |
| | a | ba | pa | fa | ma | da | ta | la | na | ga | ka | ha | za | ca | sa | zha | cha | sha | | |
| | | bai | pai | | mai | dai | tai | lai | nai | gai | kai | hai | zai | cai | sai | zhai | chai | shai | | |
| | | bao | pao | | mao | dao | tao | lao | nao | gao | kao | hao | zao | cao | sao | zhao | chao | shao | rao | |
| | | an | ban | fan | man | dan | tan | lan | nan | gan | kan | han | zan | can | san | zhan | chan | shan | ran | |
| | | ang | bang | pang | fang | mang | dang | tang | lang | nang | gang | kang | hang | zang | cang | sang | zhang | chang | shang | rang |
| | e/er | bo | po | fo | mo | de | te | le | ne | ge | ke | he | ze | ce | se | zhe | che | she | re | |
| | ei | bei | pei | fei | mei | dei | tou | lei | nei | gei | kei | hei | zei | cei | | zhei | | shei | | |
| | ou/o | | pou | fou | mou | dou | tou | lou | | gou | kou | hou | zou | cou | sou | zhou | chou | shou | rou | |
| | en | ben | pen | fen | men | | | | | gen | ken | hen | zen | cen | sen | zhen | chen | shen | ren | |
| eng | beng | peng | feng | meng | deng | teng | leng | | geng | keng | heng | zeng | ceng | seng | zheng | cheng | sheng | reng | | |
| yi | bi | pi | | mi | di | ti | li | ni | ji | qi | xi | zi | ci | si | zhi | chi | shi | ri | | |
| i | bin | pin | | min | | | lin | nin | jin | qin | xin | | | | | | | | | |
| ying | bing | ping | | ming | ding | ting | ling | ning | jing | qing | xing | | | | | | | | | |
| wu | bu | pu | fu | mu | du | tu | lu | nu | gu | ku | hu | zu | cu | su | zhu | chu | shu | ru | | |
| wen | | | | | dun | tun | lun | nun | gun | kun | hun | zun | cun | sun | zhun | chun | shun | run | | |
| weng | | | | | dong | tong | long | nong | gong | kong | hong | zong | cong | song | zhong | chong | | rong | | |

表1

| | | | | | | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| i | | b | p | m | d | t | l | n | j | q | x |
| | ya | | | | | | | | jia | qia | xia |
| | yao | biao | piao | miao | diao | tiao | liao | niao | jiao | qiao | xiao |
| | yan | bian | pian | mian | dian | tian | lian | nian | jian | qian | xian |
| | yang | | | | | liang | niang | jiang | qiang | xiang | |
| | ye | bie | pie | mie | die | tie | lie | nie | jie | qie | xie |
| | you | | | miu | diu | liu | niu | jiu | qiu | xiu | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |

表2

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|------|------|------|--------|--------|--------|-----|
| u | | d | t | l | n | g | k | h | z | c | s | zh | ch | sh | r |
| | wa | | | | | gua | kua | hua | | | | zhua | chua | shua | |
| | wai | | | | | guai | kuai | huai | | | | zhuai | chuai | shuai | |
| | wan | duan | tuan | luan | nuan | guan | kuan | huan | zuan | cuan | suan | zhuan | chuan | shuan | |
| | wang | | | | | guang | kuang | huang | | | | zhuang | chuang | shuang | |
| | wo | duo | tuo | luo | nuo | guo | kuo | huo | zuo | cuo | suo | zhuo | chuo | shuo | ruo |
| | wei | dui | tui | lui | nuo | gui | kui | hui | zui | cui | sui | zhui | chui | shui | rui |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | |

表3

表4

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| ü | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

注：二类4音表记入音节符号，表1：265个。表2：51个。表3：63个。表4：24个。此外，“n(ng)”作为1个特殊音节符号计入。共404个。

二、音等论在今后语言教学研究中的作用

这一语言学的方法论可以用于指出任何 1 个句子语言单位具有 2 个形式：包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式。朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以指出任何 1 个句子语言单位及其全部成分以及 1 个句子的语法结构和包括可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的全体语法结构。

这一语言学的方法论用于今后的语言教学与研究，可以解答语言学基础理论研究中的语言形式、语言单位、语法部门、语法单位、句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构和全体语法结构及其关系以及其他有关方面的问题，化解以往无法解决的全部疑难问题，有利于基础语言教学标准化。

以下扼要说明用于基础汉语教学的 1 个句子及其语法结构分析和语音元素及统音法式音节表 2 个问题。

- 1、1 个句子及其语法结构分析
- 2、语音元素及统音法式音节表

1、1 个句子及其语法结构分析

如果把 1 个句子语言单位具有 2 个形式：包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式用于基础汉语教学，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以指出任何 1 个句子及其具有的无限数量相同句，可以用于指出正确的 1 个句子和不正确的句子的区别。

如果把指出 1 个句子的语法结构用于基础汉语教学，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以指出任何 1 个句子的语法结构是“句法词”和“语法词”构成的句法语汇结构。句法语汇结构模型包括：句法结构模型的“二类四等句法词”和语汇结构模型的“二类四等

8品词”2个模型。分析句子的语法结构只要指出了“句法词”和“语法词”，1个句子的句法语汇结构就清楚了。

(1) 1个句子

如果把1个句子语言单位具有2个形式：包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的表记形式用于基础汉语教学，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以指出任何1个句子及其具有的无限数量相同句。

例如，可以指出朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”是1个句子，可以用于指出这1个句子具有的无限数量相同句。

如果把指出正确的1个句子用于基础汉语教学，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的1个句子与音声语言表达形式相一致就是正确的句子，反之，用附加句切符号和标峰重音符号描写的句子与音声语言表达形式不相一致就不能用于指出1个句子而是不正确的句子。

例如，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以用于指出这1个句子及其具有的无限数量相同句与音声语言表达形式相一致是正确的句子，反之，用附加句切符号和标峰重音符号描写的句子与音声语言表达形式不相一致就不能用于指出1个句子而是不正确的句子。

如果把相同文字有可能表记正确的2个非相同句用于基础汉语教学，朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以指出相同文字有可能表记与音声语言表达形式相一致正确的2个非相同句。

例如，可以指出朗读文字符号表记的音声语言的表记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得好 |。”和“| 他 | 写得好 |。”是2个句子。这2个句子分别是与音声语言表达形式相一致具有无限数量相同句的正确的句子，可以用于指出相同文字有可能表记正确的2个非相同句。

如果把任何1个句子的音声语言表达形式与表达的意思相一致而音声语言的

标记形式是对音声语言表达形式的标记用于基础汉语教学，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以用于指出正确的1个句子与另1个句子的区别。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”和“| 你好吗 | ？”这2个句子，可以用于指出二者的音声语言表达形式与表达的意思相一致，是正确的句子。

又如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 他 | 写得好 |。”（这1个句子的意思是：他写得很好。）和“| 他 | 写得好 |。”（这1个句子的意思是：他能写好。），可以用于指出这2个句子的音声语言表达形式与表达的意思相一致，是正确的句子。

如果用附加句切符号和标峰重音符号描写的音声语言表达形式与表达的意思不相一致，就不能指出1个句子，必然是不正确的句子。可以用于指出正确的1个句子与不正确的句子的区别。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 春天的心 | 活在 | 春天的人 | 的 | 身体里 |。”可以指出这1个句子的音声语言表达形式与表达的意思相一致，是正确的句子，但如果把句切符号或标峰重音符号写在了其他位置就不能指出1个句子，必然是不正确的句子。可以用于指出正确的1个句子与不正确的句子的区别。

如果把区分正确的1个句子用于基础汉语教学，就可以指出区分正确的1个句子的依据是任何1个语言包括各地方言方音本身具有的超音成分。音声语言表达形式中的停顿、轻重音、标峰重音、声调等等是语言具有的超音成分，标记音声语言的文字符号是语言具有的超音成分单位，依据语言具有的超音成分区分的1个句子语言单位以及包括句法部门、语汇部门、语音部门、标记部门单位的全部成分单位是语言的超音成分单位。可以用于指出，任何1个语言包括各地方言方音都可以用这一方法指出正确的1个句子。

例如，可以指出无论用标准的汉语普通话还是用汉语各地方言方音，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 春天的心 | 活在 | 春天的人 | 的 | 身体里 |。”是相同句。

那么，又可以用于指出，任何时候无论过去现在将来存在和有可能存在的任何 1 个语言包括各地方言方音都可以用这一方法指出正确的 1 个句子。

(2) 结构分析

如果把 1 个句子的语法结构用于基础汉语教学，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以指出任何 1 个句子的语法结构是“句法词”和“语法词”构成的句法语汇结构。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”可以指出这 1 个句子的语法结构是包括“句法词”“| 你好 |”及其成分“语法词”“你”“好”构成的句法语汇结构。

如果把分析 1 个句子的句法语汇结构用于基础汉语教学，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子，就可以指出 1 个句子的句法语汇结构包括“句法结构”和“语汇结构”，句法语汇结构模型包括：句法结构模型的“二类四等句法词”和语汇结构模型的“二类四等 8 品词” 2 个模型，分析句子的语法结构只要指出了“句法词”和“语法词”，1 个句子的句法语汇结构就清楚了。

例如，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写的“| 你好 |。”“| 你好吗 |？”和“| 我 | 是 | 学生 |。”可以用于指出任何 1 个句子具有包括超音成分的音声语言表达形式和音声语言的标记形式，朗读文字符号标记的音声语言的标记形式用附加句切符号和标峰重音符号描写句子可以用于指出正确的任何 1 个句子的语法结构中句法词数目类型及其成分语法词数目类型，可以用于指出任何 1 个句子的语法结构是句法语汇结构，句法语汇结构包括“句法结构”和“语汇结构”，句法结构模型包括二类四等句法词，语汇结构模型包括二类四等 8 品词，可以用于指出分析句子的语法结构只要指出了“句法词”和“语法词”，1 个句子的句法语汇结构就清楚了。

那么，又可以用于指出，任何时候无论过去现在将来存在和有可能存在的任何

1 个语言包括各地方言方音都可以用这一方法指出 1 个句子的语法结构。分析句子的语法结构只要指出了“句法词”和“语法词”，1 个句子的句法语汇结构就清楚了。

2、语音元素及统音法式音节表

如果把 1 个句子全体语法结构的核心是语音结构，语元素音节的最小成分单位是同时具有音元素和超音元素声调的语音元素用于基础语音教学，就可以指出语音元素构成汉语语音结构的 2 个模型。

（1）语音元素

如果把语元素音节中的最小成分单位是同时具有音元素和超音元素声调的语音元素用于基础语音教学，就可以指出汉语拼音符号是汉语语音的表记符号，汉语拼音符号表示的基本单位是语音元素，可以把汉语拼音音节符号与其表示的语元素音节及其成分中同时具有音元素和超音元素声调的语音元素区分开来。

例如，“中国语（zhōngguóyǔ）”发音时可以指出其成分的 3 个语元素音节中，“中（zhōng）”的元音是“u”的“同位音”，“国（guó）”的元音是“e”的“同位音”，“语（yǔ）”的元音是“i”的“同位音”。可以用于指出汉语拼音符号是汉语语音的表记符号，汉语拼音符号表示的基本单位是语音元素，可以把汉语拼音音节符号与其表示的语元素音节及其成分中同时具有音元素和超音元素声调的语音元素区分开来。

如果把“汉语语元素音节中语音元素结构模型”即“语音元素结构图”用于基础语音教学，就可以指出汉语语元素音节的“声调”是“超音元素声调”，可以把“四声字调”与语元素音节区分的“声调音节”区分开来。

例如，“中国语（zhōngguóyǔ）”发音时可以指出其成分的 3 个语元素音节分别具有 1 次发音时由发音肌肉紧张增强开始到紧张减弱结束为止的全过程，可以用于指出语元素音节的“声调”是其发音全过程中每 1 个语音元素具有的与音元素同时的“超音元素声调”。可以把“四声字调”与语元素音节区分的“声调音

节”区分开来。(参见“图(1):语音元素结构图”。)

(另参见笔者:2016年〈语音元素〉《桜文论丛 第92卷 2016年10月》、2017年〈语法结构〉《桜文论丛 第97卷 2018年3月》。)

(2) 4个音表

“汉语语元素音节结构统音法式音节表”即:“统音法式音节表”。

“统音法式音节表”包括“主表”和“辅表”的4个音表。也称作:“二类4音表”。

“统音法式音节表”于1997年作成并开始用于本班的基础语音教学,2016年略作修改。(“统音法式音节表”参见“图(2):统音法式音节表”。另参见笔者:2016年〈语音元素〉《桜文论丛 第92卷 2016年10月》。)

如果把“统音法式音节表”的“二类4音表”用于基础语音教学,只要按照“统音法式音节表”“主表”和“辅表”的排序就可以指出汉语拼音音节符号表示的音节读音。

例如,“中国语(zhōngguóyǔ)”发音时可以指出其成分的3个“语元素音节”中,“中(zhōng)”在“主表”“表1”“u”栏目中,前辅音“zh”与元音之间不参与介音,元音应是“u”的“同位音”,“国(guó)”在“辅表”“表3”“u”(/ w /)栏目中,前辅音“g”与元音之间参与介音“ / w /”,元音应是“e”的“同位音”,“语(yǔ)”在“辅表”“表4”“ü”(/ y /)栏目中,元音前是半元音(介音)“ / y /”,元音应是“i”的“同位音”。(参见“图(2):统音法式音节表”。另参见笔者:2016年〈语音元素〉《桜文论丛 第92卷 2016年10月》。)

如果把“统音法式音节表”的4个音表用于基础语音教学,必然可以简化基础语音教学程序。

例如,“统音法式音节表”区分4个音表,“主表”“表1”有4个栏目,表示包含在“天、地、人、物”中的元音:“a”、“i”、“e”、“u”,先有“天、地”中的元音:“a”、“i”,后有“人、物”中的元音:“e”、“u”,按先后交叉排序

为：“a”、“e”、“i”、“u”。“辅表”“表2”、“表3”、“表4”的栏目分别是“i”、“u”、“ü”表示元音前有半元音（介音）“/ y /”、“/ w /”、“/ ʉ /”。

又例如，“统音法式音节表”的4个音表中，“表1”的音节数为265个，“表2”的音节数为51个，“表3”的音节数为63个，“表4”的音节数为24个，此外，“n(ng)”作为1个特殊音节符号（写在“注”中。）计入，共404个。“主表”音节数约占总数的65.6%，“辅表”音节数约占总数的34.4%。（参见“图（2）：统音法式音节表”。）

（另参见笔者：2016年〈语音元素〉《樱文论丛 第92卷 2016年10月》。）

我们从1997年开始在基础语音教学中采用了“统音法式音节表”，学生可以依据“统音法式音节表”掌握汉语拼音音节符号和正确的读音，使语音教学取得事半功倍的效果。

结 语

本文汇报中国语言学基础理论“音等论”研究的结果，提出了句子语言单位及其全体语法结构和汉语语音单位及其语音结构模型。指出这一语言学的方法论可以作为确立以现代汉语为代表的中国国语（标准语）依据，有利于今后基础语言教学标准化，并可以适用于今后的语言学基础理论研究和语言教学与研究以及其他相关联的各个领域。

1、句子语言单位及其全体语法结构

中国语言学基础理论“音等论”提出了“句子”语言单位及其全部成分单位数目类型。其结果可以用于指出任何1个句子的语法结构是句法语汇结构，1个句子的全体语法结构核心是语音结构，1个句子的全体语法结构是包括可以区分句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构的超音全体语法结构。

2、汉语语音单位及其语音结构模型

中国语言学基础理论“音等论”提出了“语元素音节”语音单位及其全部成分单位数目类型。其结果可以用于指出任何1个语元素音节的语音结构是由同时具有音元素和超音元素声调的语音元素构成的。语音元素构成汉语语音结构2个模型：“汉语语元素音节中语音元素结构模型”，也称作“语音元素结构图”和“汉语语元素音节结构统音法式音节表”，也称作“统音法式音节表”。

3、有利于今后基础语言教学标准化

中国语言学基础理论“音等论”提出这一语言学的方法论可以用于指出区分1个句子的依据是1个语言包括各地方言方音本身具有的超音成分，任何时候无论过去现在将来存在和有可能存在的任何1个语言包括各地方言方音都可以用这一方法指出正确的1个句子。这一语言学的方法论可以作为确立以现代汉语为代表的中国国语（标准语）依据，有利于今后基础语言教学标准化。

4、适用于今后语言关联的各个领域

中国语言学基础理论“音等论”提出这一语言学方法论的语法模型具有特定性、一般性、概括性、适用性。可以用于解答语言学基础理论研究中的语言形式、语言单位、语法部门、语法单位、句法语汇结构、句法结构、语汇结构、语音结构和全体语法结构及其关系以及其他有关方面的问题，可以化解以往语言研究、语言学基础理论研究、中国语言学基础理论研究和现代中国语语法、语汇、语音研究中无法解决的全部疑难问题，可以适用于今后的语言学基础理论研究和语言教学与研究以及其他相关联的各个领域。

中国语言学基础理论“音等论”提出了科学语言学的方法论，沿着科学语言学方向发展是历史赋予我们全体语言工作者、教育者、研究者的使命。

2018年 春

参考文献要目：

- 张世禄 《中国音韵学史》 台湾商务印书馆1986
 高名凯，石安石 《语言学概论》 中华书局1963
 高名凯 《语言论》 中华书局1995
 服部四郎 《言語学の方法》 岩波书店1960
 市河三喜，服部四郎 《世界言語概説》 研究社1995
 岑麒祥 《语音学概论》 科学出版社1959
 谢云飞 《语音学大纲》 台湾学生书局1987
 罗常培 《普通语音学纲要》 商务印书馆1981
 罗常培 《汉语音韵学导论》 中华书局1956
 赵元任 《北京口语语法》（李荣译） 中国青年出版社1953
 赵元任 《A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE》 台湾敦煌书局1968
 徐世荣 《普通话语音知识》 文字改革出版社1980
 刘月华 潘文娣 故鞞 《实用现代汉语语法》 外语教学与研究出版社1983
 冯志伟 《现代语言学流派》 陕西人民出版社1987
 万清华 〈关于“去”与“来”动词的归类〉《中国语学》第242号 1995年
 萬清華 〈中国語の語音体系における語音単位〉《言語与文化论集》第4号 1997
 万清华 〈超音元素一声调〉《中国语研究》第39号 1997
 万清华 〈构语形态“子”的分类〉《开篇》第16号 1997
 萬清華 〈音等论〉1998年学位论文 日本国立国会图书馆藏制本
 萬清華 〈说“儿”〉《人文研究》第134集 1998年12月
 萬清華 〈动态语言学原理〉《樱文论丛》第61卷 2004年8月
 万清华 〈句切和标峰重音〉《樱文论丛》第73卷 2009年2月
 萬清華 〈说“的”〉《樱文论丛》第79卷 2011年2月
 萬清華 〈说“就”“才”〉《樱文论丛》第82卷 2012年2月
 萬清華 〈声调描写〉《樱文论丛》第84卷 2013年2月
 萬清華 〈句单位〉《樱文论丛》第86卷 2014年2月
 萬清華 〈单语〉《樱文论丛》第89卷 2015年3月
 萬清華 〈语言分析方法〉《樱文论丛》第90卷 2015年10月
 萬清華 〈语音元素〉《樱文论丛》第92卷 2016年10月
 萬清華 〈语法结构〉《樱文论丛》第97卷 2018年3月

短時間高強度運動が腹部内臓組織に与える影響

—— 12分間全力走前後の血中逸脱酵素およびクレアチニンの変化の検討 ——

深 田 喜八郎

緒言

近年、健康維持のため運動を実施する人が増加し、一部の運動愛好家は高強度の筋力トレーニングやランニングを実施している。運動は筋収縮を伴うため、運動を継続するためには筋収縮に必要なエネルギーを供給する必要がある。運動強度が上昇すると、筋収縮に必要なグルコースと酸素を供給するため交感神経機能が亢進し、アドレナリンおよびノルアドレナリンが分泌され、心拍数および1回拍出量、酸素摂取量が増加する (Terjung, 1979¹⁾)。心拍出量の増加により骨格筋血流量が増大することで、高強度運動時のエネルギー需要に応答している。しかし、骨格筋血流量が増大する一方、その他の組織への血流再配分が生じ、特に、腎臓や肝臓などの腹部内臓組織では安静時と比較して血流量が減少すると報告されている (Flamm et al., 1990²⁾)。

内臓に供給される血流量は安静時に約1,500ml/minであるのに対し、高強度運動時は約300ml/minとなり、運動強度に比例して減少するといわれている (中野, 1982³⁾)。Osada et al. (1999)⁴⁾は腹大動脈を測定することで、運動により腹部内臓への血流量が減少することを明らかにしている。さらに、ラットを対象にした実験により、脾臓、胃、腸の血流量がそれぞれ運動後に減少することが指摘され (Maeda et al., 2002⁵⁾)、馬を対象にした実験では、肝血流量の減少も認められている (Dyke et al., 1998⁶⁾)。加えて、Momen et al. (2005)⁷⁾

は、運動中、交感神経系ホルモンの影響により腎臓の血管収縮が生じ、腎血流量が減少すると述べている。したがって、運動により腹部内臓組織への血流量は減少すると考えられる。

運動が各種臓器の細胞に与える影響を検討する際、細胞内で機能する酵素や代謝産物が血中にて上昇するか否かを測定することが有効と考えられている(田村と織田, 1970⁸⁾)。特に、肝細胞に由来する酵素や腎機能に関連する代謝産物は、運動による変化を捉えやすく、腹部内臓組織への影響を検討する際に用いられることが多い(矢野ら, 1995⁹⁾; Gastmann et al., 1998¹⁰⁾)。そこで本研究では、腹部内臓組織の中でも肝臓及び腎臓に着目することとした。これまで、高強度運動が腹部内臓組織に与える影響として、肝細胞に与える影響や腎機能に与える影響を個別に検討したものは散見されるが、人を対象とし、交感神経系への影響も含めて複合的に検討したものは見当たらない。肝臓に由来する酵素、腎機能に関連する代謝産物を測定するとともに、交感神経系ホルモンを測定することで、高強度運動が腹部内臓組織に与える影響を検討することを目的とした。

対象と方法

1. 対象

被験者には事前に、研究の内容と危険性、研究への参加を辞退する事が被験者にとって不利益にならないということ、いつでも途中辞退ができるということ、研究で得た個人的データは個人が特定できないように管理をすること、を説明した。その後、文書により研究への参加の同意を得た。なお本研究は、所属機関における倫理委員会の承認を得て行われた(承認番号: 27-11)。

被験者は、大学生の男性16名とした。陸上競技(長距離)、バドミントン、野球、トライアスロン、剣道、相撲を専門種目とし、日常的に部活動で運動を行っている選手であった。被験者の身体的特徴を表1に示した。

2. 方法

2. 1. 運動負荷

被験者は事前に12分間走の経験がある選手を対象とした。実験前日に激しい運動を行うことを避けるように指示し、実験当日、各自ウォーミングアップを行った後、1周400メートルの陸上トラックにて12分間全力走を課した。走行中、被験者には1周ごとに経過時間を知らせた。陸上トラックには、100メートルごとにマーカーを置き、走行中、被験者が走行距離を把握するための指標とした。走行中は心拍計（ハートレートモニター s610i, Polar Electro, Finland）を装着し、最大心拍数を測定した。運動強度の指標とするため、走行中の最大心拍数が年齢推定最大心拍数（ $220 - \text{年齢}$, age predicted maximal heart rate ; APMHR）の何パーセントに達していたか（% APMHR）を求めた。当日の天候は曇り、気温は 7.4°C 、湿度は22%であった。

表1 被験者の身体的特徴

| | |
|-------------------------------|-----------------|
| 年齢（歳） | 20.7 ± 0.3 |
| 身長（cm） | 171.6 ± 1.4 |
| 体重（kg） | 73.5 ± 3.9 |
| BMI（ kg/m^2 ） | 25.1 ± 1.5 |

Mean \pm SE.

BMI : bodymassindex

2. 2. 採血・血液分析

ウォーミングアップ前（運動前, pre）と運動終了約5分後（運動後, post）に、肘正中皮静脈より20mLずつ採血し、以下の項目について分析を行った。

・乳酸値

運動前後に採血した血液サンプルを除蛋白液入りの容器で十分に攪拌し、室温にて5分間、3000回/分で遠心分離した。その後、血球成分と分離した上清液を冷蔵保存し乳酸の測定に用いた。測定には、乳酸オキシダーゼ酵素法（SRL Inc., Tokyo, Japan）により測定した（結果は、「mg/dL」の単位で測定された値を、換算係数である0.111を掛け、「mmol/l」に変換して示した）。

- ・アドレナリン, ノルアドレナリン

運動前後に採血した血液サンプルを Ethylenediaminetetraacetic acid disodium salt dihydrate (EDTA-2Na) 入りの容器内で攪拌混和させ, 低温 (4℃) にて15分間, 3000回 / 分で遠心分離した。その後, 血球成分と分離した血漿を冷凍保存し, アドレナリン, ノルアドレナリンの測定に用いた。測定には, High Performance Liquid Chromatography 法 (SRL Inc., Tokyo, Japan) を用いた。

- ・ Alanine transaminase (ALT), Aspartate transaminase (AST), Alkaline phosphatase (ALP), γ -glutamyltransferase (γ -GTP)

運動前後に採血した血液サンプルを薬剤無添加の容器内で攪拌混和させ, 室温にて15分間, 3000回 / 分で遠心分離した。その後, 血球成分と分離した血清を冷蔵保存し, ALT, AST, ALP, γ -GTP の測定に用いた。測定には Japan Society of Clinical Chemistry (JSCC) 標準化法 (SRL Inc., Tokyo, Japan) を用いた。

- ・クレアチニン

運動前後に採血した血液サンプルを薬剤無添加の容器内で攪拌混和させ, 室温にて15分間, 3000回 / 分で遠心分離した。その後, 血球成分と分離した血清を冷蔵保存し, クレアチニンの測定に用いた。測定には Japan Society of Clinical Chemistry (JSCC) 標準化法 (SRL Inc., Tokyo, Japan) を用いた。測定には酵素法 (SRL Inc., Tokyo, Japan) を用いた。

- ・ヘモグロビン, ヘマトクリット

運動前後に採血した血液サンプルを Ethylenediaminetetraacetic acid dipotassium salt dihydrate (EDTA-2K) 入り容器にて冷蔵保存し, 全血を用いてヘモグロビン, ヘマトクリットを求めた。ヘモグロビンは, Sodium Laurly Sulfate - Hemoglobin 法 (SRL Inc., Tokyo, Japan) を用いて測定した。ヘマトクリットは, 赤血球パルス波高値検出方式 (SRL Inc., Tokyo, Japan) を用いて測定した。ヘモグロビン, ヘマトクリットを用い, Dill and Costill (1974)¹¹⁾ の方法により血漿変化率 (plasma volume change) を求めた。血漿量の減少によ

り、血中成分の測定値は高値を示すことが報告されている（Kargotich et al., 1997¹²⁾）。したがって、全ての測定値において、血液濃縮の影響を補正して運動後の値を示した。運動後の測定値に血漿変化率を掛け、求められた数値を運動後の測定値から減じることで、血液濃縮の影響を補正した。

統計分析

測定結果は平均±標準誤差（mean ± SE.）で示した。運動前後の比較には対応のあるt検定を用いた。いずれも有意水準は5%未満とした。分析には、SPSS statistics 21.0（IBM, USA）を用いた。なお、図1から図6には、破線（-----）にて測定値の基準値を示した。

結果

表2に被験者の走行データを示した。心拍数は運動前と比較して、運動中最大心拍数が有意に高い値を示した（ $p < 0.01$ ）。血中乳酸濃度は運動前と比較して運動後、有意に上昇した（ $p < 0.01$ ）。

表2 走行データ

| | | |
|--------------|------|----------------|
| 心拍数 (bpm) | pre | 76.5 ± 2.7 |
| | peak | 193.1 ± 2.6 ** |
| APMHR (bpm) | | 199.2 ± 0.3 |
| %APMHR | | 96.9 ± 1.3 |
| 乳酸値 (mmol/L) | pre | 1.4 ± 0.1 |
| | post | 10.0 ± 0.9 ** |
| 走行距離 (m) | | 2799.3 ± 118.0 |
| 血漿変化率 (%) | | -3.8 ± 0.9 |

Mean ± SE.

APMHR：年齢推定最大心拍数 (age predicted maximal heart rate)

*：運動前後の比較 (** $p < 0.01$)

図1にアドレナリン，ノルアドレナリンの変化を示した。アドレナリンは運動前と比較して運動後，有意に上昇した（pre：46.1 ± 6.3 pg/mL，post：140.1 ± 25.6 pg/mL， $p < 0.01$ ）。ノルアドレナリンは運動前と比較して運動後，有意に上昇した（pre：257.7 ± 20.2 pg/mL，post：1093.0 ± 135.1 pg/mL， $p < 0.01$ ）。

図2にALT，ASTの変化を示した。ALTは運動前と比較して運動後，有意に上昇した（pre：25.8 ± 3.2 U/L，post：26.4 ± 3.1 U/L， $p < 0.05$ ）。ASTは運動前と比較して運動後，有意に上昇した（pre：23.3 ± 1.1 U/L，post：25.1 ± 1.3 U/L， $p < 0.01$ ）。

図3にAST/ALT比の変化を示した。AST/ALT比は運動前と比較して運動後に有意な変化はなかった（pre：1.03 ± 0.08，post：1.08 ± 0.09， $p > 0.05$ ）。

図4にALP， γ -GTPの変化を示した。ALPは運動前と比較して運動後，有意に上昇した（pre：265.1 ± 23.4 U/L，post：270.6 ± 22.6 U/L， $p < 0.05$ ）。 γ -GTPは運動前後で有意差は認められなかった（pre：31.3 ± 3.7 U/L，post：31.4 ± 3.6 U/L， $p > 0.05$ ）。

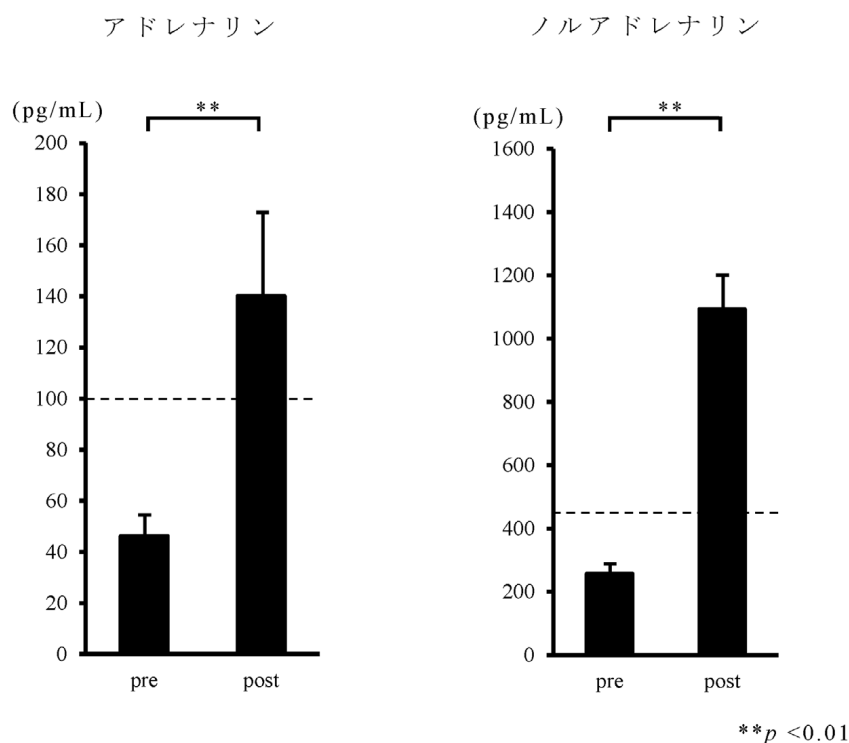


図1 アドレナリン，ノルアドレナリンの変化

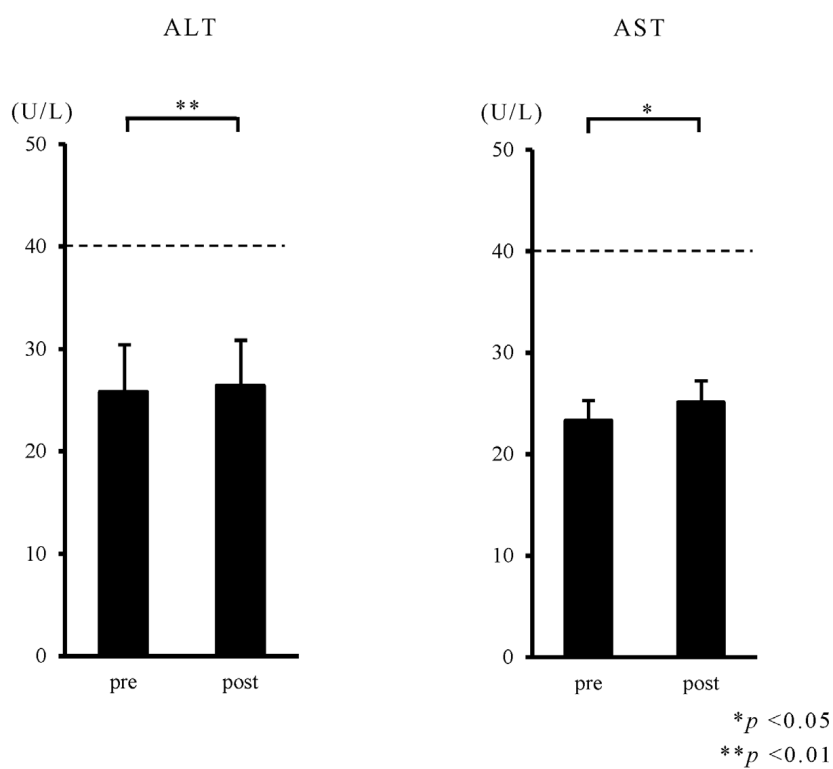


図2 ALT, AST の変化

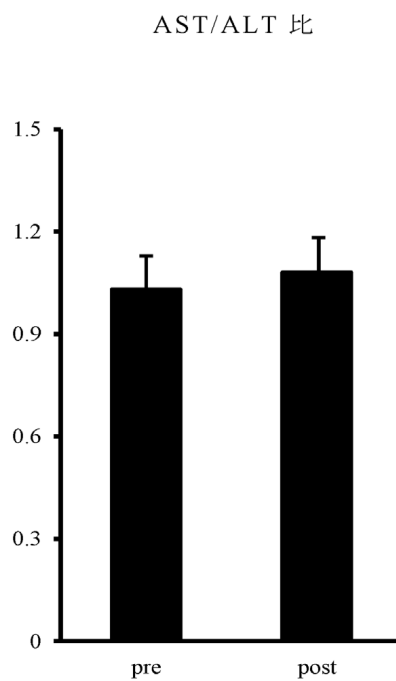


図3 AST/ALT 比の変化

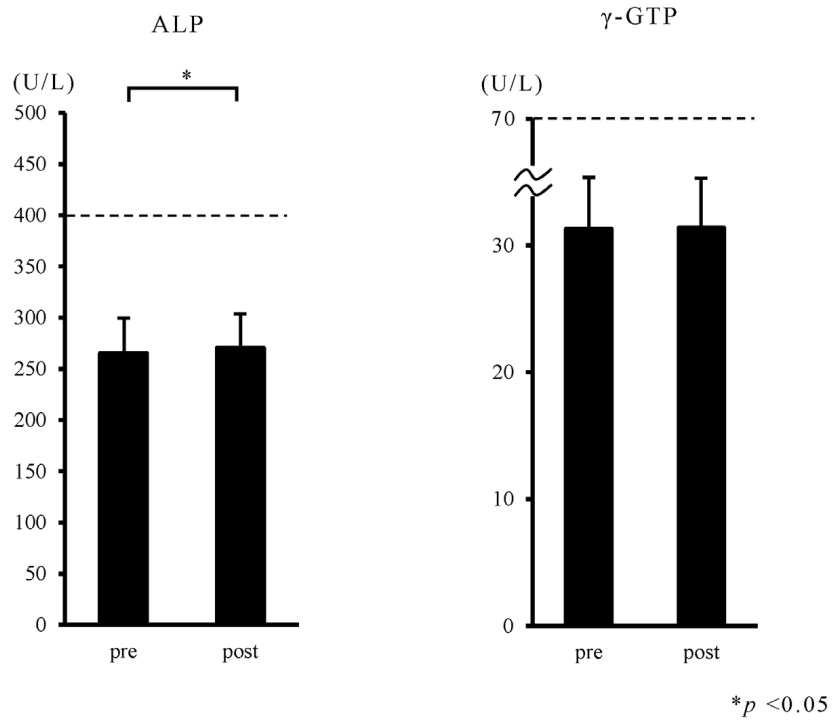
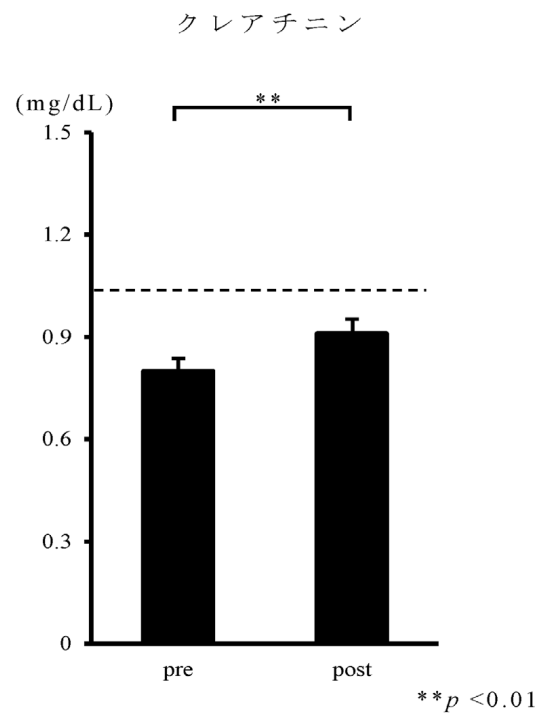
図4 ALP, γ -GTP の変化

図5 クレアチニンの変化

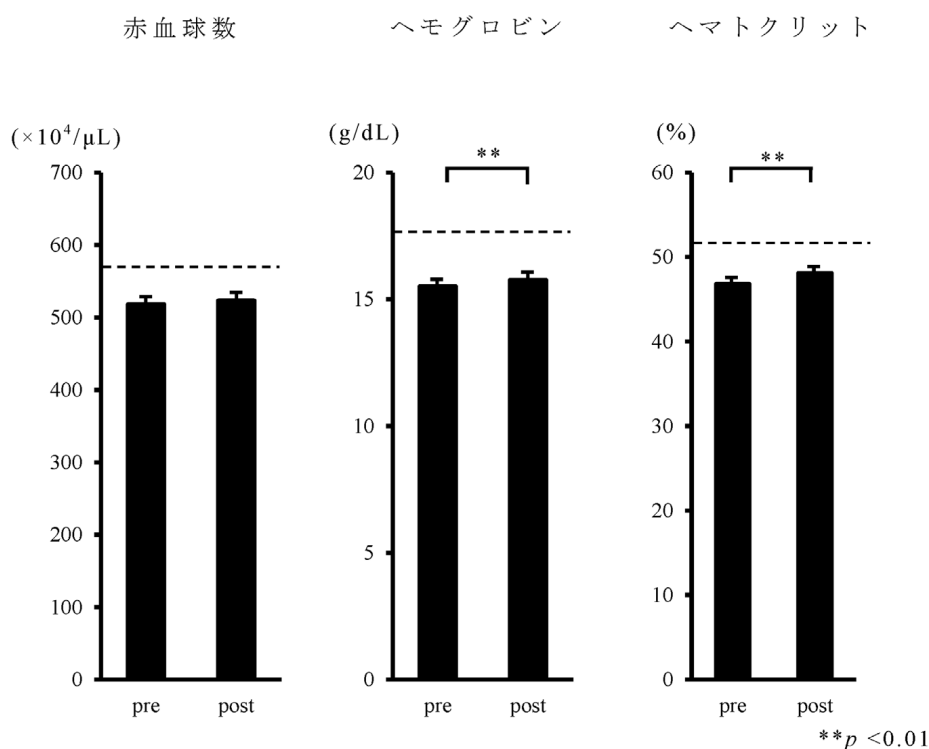


図6 赤血球数, ヘモグロビン, ヘマトクリットの変化

図5にクレアチニンの変化を示した。クレアチニンは運動前と比較して運動後、有意に上昇した (pre : 0.8 \pm 0.02 mg/dL, post : 0.9 \pm 0.03 mg/dL, $p < 0.01$)。

図6に赤血球数, ヘモグロビン, ヘマトクリットの変化を示した。赤血球数は運動前後で有意差は認められなかった (pre : 517.8 \pm 7.8 $\times 10^4/\mu\text{L}$, post : 523.0 \pm 9.2 $\times 10^4/\mu\text{L}$, $p > 0.05$)。ヘモグロビンは運動前と比較して運動後、有意に上昇した (pre : 15.5 \pm 0.2 g/dL, post : 15.7 \pm 0.2 g/dL, $p < 0.01$)。ヘマトクリットは運動前と比較して運動後、有意に上昇した (pre : 46.8 \pm 0.5 %, post : 48.1 \pm 0.6 %, $p < 0.01$)。

考察

・運動強度

運動強度を示す生理的指標として, 最大酸素摂取量 ($\text{VO}_{2\text{max}}$), エネルギー代謝率 (relative metabolic rate ; RMR), 心拍数, 乳酸値が主に用いられている

(Hill et al., 1924¹³⁾; Howley, 2001¹⁴⁾)。本研究は屋外での走運動を運動課題としたため、 VO_{2max} や RMR のように、酸素摂取量や酸素消費量の測定が必要となる指標を用いることは困難と考えられる。したがって、心拍数と乳酸値を運動強度の指標とした。

走行中の最大心拍数が年齢推定最大心拍数の何パーセントに達していたか (%APMHR) を求めると、 96.9 ± 1.3 %であった。American college of sports medicine (1998)¹⁵⁾ は、%Heart rate max (HR_{max} , 最大心拍数の実測値と運動中最大心拍数の割合) が90%以上の運動を高強度運動 (Very hard) であると報告している。本研究は、推定最大心拍数を用いているが、%APMHR より判断すると高強度運動であったと推測される。乳酸値は運動強度が高くなるにつれて上昇し、高強度運動を行うことで、乳酸蓄積開始点 (4 mmol/L) を境に急激に上昇し始めると報告されている (Hill et al., 1924¹³⁾)。本研究において、運動後の乳酸値は 10.0 ± 0.9 mmol/L となり、乳酸蓄積開始点を上まわっていた。したがって、乳酸値の検討からも、走行中、被験者には高強度の負荷がかかっていたと推測される。本研究の被験者にとって12分間全力走は高強度運動であったと考えられる。

加えて、12分間全力走により、アドレナリン及びノルアドレナリンが基準値以上に上昇した。人は気温の変化や物理的刺激など、生体外から受ける刺激に対し、生体内の恒常性を維持するための生理的機能を有している。Cannon (1914)¹⁶⁾ は、肉体的苦痛や恐怖といった刺激に対する急性反応として、交感神経の緊張に伴い、副腎髄質からアドレナリン分泌が促進されることを報告している。さらに、交感神経の緊張により、アドレナリンと類似した作用を有するノルアドレナリンが分泌され、大部分が交感神経終末より分泌されるものと考えられている (勝木, 1990¹⁷⁾)。したがって、12分間全力走により生体に高強度の肉体的負荷が生じたことで、交感神経系の緊張が惹起され、アドレナリン及びノルアドレナリンの分泌が亢進したと考えられる。走行中、交感神経系の緊張により、被験者の骨格筋血流量は増大した一方、腹部内臓組織では血流量の減少が生じていたと推測される。

・肝細胞及び腎機能に与える影響

高強度運動は血流再配分を惹起し、骨格筋の血流量を増大させる一方で、腎臓及び腹部内臓組織の血流量を減少させるといわれている (Flamm et al., 1990²⁾)。したがって、血流量の減少が認められる組織において、細胞への障害が惹起される可能性がある。骨格筋を含め、運動が各種臓器の細胞に与える影響を検討する際、細胞内で機能する酵素が血中にて上昇するか否かを測定することが有効と考えられている (田村と織田, 1970⁸⁾)。田村と織田 (1970)⁸⁾は、細胞内で機能する酵素が血中に逸脱する原因として、1) 細胞の損傷および崩壊による漏えい、2) 細胞膜の透過性亢進によるものと述べている。

ALT および AST はアミノ酸の代謝を触媒するトランスアミナーゼである。ALT は肝臓に最も多く存在しており、腎臓、心筋、骨格筋の順に分布し、AST は心筋に最も多く存在し、肝臓、骨格筋、腎臓の順に分布するといわれている (中野, 1982³⁾)。ALT および AST は肝臓疾患により高値を示すことから、肝臓疾患の有無を検査する目的で測定されている (Ozer et al., 2008¹⁸⁾)。高強度運動は ALT を上昇させることが指摘されており、動物実験の結果、一過性の高強度運動は肝門脈血流の減少を引き起こし、ALT を上昇させると述べている (矢野ら, 1995⁹⁾)。本研究において、基準値内の変化ではあるが、ALT および AST は12分間全力走により有意に上昇した。したがって、肝血流量の減少により、ALT および AST が細胞外に逸脱した可能性がある。しかし、AST は肝細胞に特異的なトランスアミナーゼではなく、Giannini et al. (2002)¹⁹⁾は、肝細胞障害の有無を検討する際、AST/ALT 比が有効であると指摘している。AST と比較し、ALT の上昇が有意であれば、AST/ALT 比は減少すると考えられるが、12分間全力走により AST/ALT 比は有意に変化しなかった。したがって、12分間全力走が肝細胞に与える影響は軽微であり、AST および ALT の上昇は、肝細胞以外にも由来すると推測される。さらに、肝・胆道系組織に由来する ALP および γ -GTP の変化を検討したところ、ALP は有意に上昇したが、基準値内の変化であり、 γ -GTP には有意な変化がなかった。したがって、12分間全力走が、肝・胆道系組織に与える影響は軽

微であったと考えられる。

クレアチニンは酵素ではないが、筋細胞内に存在するクレアチンの代謝産物として血中に排出され、腎臓で濾過され尿中に排出される。血中クレアチニン値の上昇は腎臓の機能低下を示すことから、腎機能検査を目的として測定される。Gastmann et al. (1998)¹⁰⁾は、トライアスロン実施後にクレアチニン値の上昇を報告しており、長時間に及ぶ疲労困憊運動はクレアチニン値を上昇させると述べている。Warburton et al. (2002)²⁰⁾は、高強度運動はクレアチニン値を上昇させるが、その原因が、筋細胞から排出されたものか、あるいは腎血流量低下による腎機能の低下によるものか、いずれの可能性も考えられると指摘している。本研究において、12分間全力走により、基準値内の変化であるが、クレアチニン値が有意に上昇した。腎血流量の減少により、腎機能が一時的に低下していた可能性があるが、基準値内の変化に留まることから、12分間全力走が腎臓に与える影響は軽微であったと考えられる。

上述した通り、肝細胞に由来する酵素や腎機能に関連するクレアチニンは、高強度運動により上昇することが明らかにされきた(矢野ら, 1995⁹⁾; Gastmann et al., 1998¹⁰⁾; Warburton et al., 2002²⁰⁾)。本研究では健常な若年男性に12分間全力走を課し、基準値と比較し検討した結果、一過性の高強度運動が腹部内臓組織に与える影響は軽微であることを明らかにした。

結語

若年男性を対象に、12分間全力走が交感神経系ホルモン及び血中逸脱酵素、クレアチニンに与える影響を検討し、以下のことを明らかにした。

- 1) アドレナリン及びノルアドレナリンは基準値以上に有意に上昇した。
- 2) ALT および AST, ALP, クレアチニンが基準値内で有意に上昇した。
- 3) AST/ALT 比および γ -GTP に有意な変化は無かった。

血中逸脱酵素及びクレアチニンは基準値内での上昇に留まり、短時間高強度運動が肝細胞および腎機能に与える影響は軽微であったと考えられる。

注

本論文は、日本大学学位請求論文「短時間高強度運動後の生体反応」(2016年3月学位授与)の一部に加筆修正を加えたものである。

参考文献

- 1) Terjung R (1979) Endocrine response to exercise. *Exerc Sport Sci Rev* 7: 153-180
- 2) Flamm SD, Taki J, Moore R, Lewis SF, Keech F, Maltais F, Ahmad M, Callahan R, Dragotakes S, Alpert N (1990) Redistribution of regional and organ blood volume and effect on cardiac function in relation to upright exercise intensity in healthy human subjects. *Circulation* 81(5): 1550-1559
- 3) 中野昭一 (1982) 図説・運動の仕組みと応用—運動・生理・生化学・栄養—. 医歯薬出版, 東京
- 4) Osada T, Katsumura T, Hamaoka T, Inoue S, Esaki K, Sakamoto A, Murase N, Kajiyama J, Shimomitsu T, Iwane H (1999) Reduced blood flow in abdominal viscera measured by Doppler ultrasound during one-legged knee extension. *J Appl Physiol* 86(2): 709-719
- 5) Maeda S, Miyauchi T, Iemitsu M, Tanabe T, Irukayama-Tomobe Y, Goto K, Yamaguchi I, Matsuda M (2002) Involvement of endogenous endothelin-1 in exercise-induced redistribution of tissue blood flow: an endothelin receptor antagonist reduces the redistribution. *Circulation* 106(17): 2188-2193
- 6) Dyke TM, Hubbell JA, Sams RA, Hinchcliff KW (1998) Hepatic blood flow in horses during the recuperative period from maximal exercise. *Am J Vet Res* 59(11) : 1476-1480
- 7) Momen A, Bower D, Leuenberger UA, Boehmer J, Lerner S, Alfrey EJ, Handly B, Sinoway LI (2005) Renal vascular response to static handgrip exercise: sympathetic vs. autoregulatory control. *Am J Physiol Heart Circ Physiol* 289(4): H1770-1776
- 8) 田村善蔵, 織田敏次 (1970) 血清酵素—測定法・意義・臨床—. 医学書院, 東京
- 9) 矢野里佐, 矢野博己, 木下幸文 (1995) 高強度運動が肝機能検査成績に及ぼす影響。川崎医療福祉学会誌 5(2): 133-138
- 10) Gastmann U, Dimeo F, Huonker M, Böcker J, Steinacker JM, Petersen KG,

- Wieland H, Keul J, Lehmann M (1998) Ultra-triathlon-related blood chemical and endocrinological response in nine athletes. *J Sports Med Phys Fitness* 38(1): 18-23
- 11) Dill DB, Costill DL (1974) Calculation of percentage changes in volumes of blood, plasma, and red cells in dehydration. *J Appl Physiol* 37(2): 247-248
- 12) Kargotich S, Goodman C, Keast D, Fry RW, Garcia-Webb P, Crawford PM, Morton AR (1997) Influence of exercise-induced plasma volume changes on the interpretation of biochemical data following high-intensity exercise. *Clin J Sport Med* 7(3): 185-191
- 13) Hill AV, Long CNH, Lupton H (1924) Muscular exercise, lactic acid, and the supply and utilisation of oxygen. *Proc Roy Soc Lond* 96(679): 438-475
- 14) Howley ET (2001) Type of activity: resistance, aerobic and leisure versus occupational physical activity. *Med Sci Sports Exerc* 33(6 Suppl): S364-369
- 15) American college of sports medicine (1998) The recommended quantity and quality of exercise for developing and maintaining cardiorespiratory and muscular fitness, and flexibility in healthy adults. *Med Sci Sports Exerc* 30(6): 975-991
- 16) Cannon WB (1914) The emergency function of the adrenal medulla in pain and the major emotions. *Am J Physiol* 33: 356-372
- 17) 勝木保次 (1990) 内分泌・自律神経調節の生理学。医学書院, 東京
- 18) Ozer J, Ratner M, Shaw M, Bailey W, Schomaker S (2008) The current state of serum biomarkers of hepatotoxicity. *Toxicology* 245(3): 194-205
- 19) Giannini E, Botta F, Testa E, Romagnoli P, Polegato S, Malfatti F, Fumagalli A, Chiarbonello B, Risso D, Testa R (2002) The 1-year and 3-month prognostic utility of the AST/ALT ratio and model for end-stage liver disease score in patients with viral liver cirrhosis. *Am J Gastroenterol* 97(11): 2855-2860
- 20) Warburton DE, Welsh RC, Haykowsky MJ, Taylor DA, Humen DP (2002) Biochemical changes as a result of prolonged strenuous exercise. *Br J Sports Med* 36(4): 301-303

鴨長明 『無名抄』 第二十七話の再検討

—— 勝劣の真実と長明の執筆態度 ——

茅 原 雅 之

1. はじめに

鴨長明は、六条源家の俊恵に和歌を学んだ歌人であり、後世においては『方丈記』の著者としても世に広く知られる人物である。長明は五十歳を前後に出家したとされているが、このとき長明は『新古今和歌集』撰和歌所の寄人を拝する立場にあり、『源家長日記』の記述によれば、歌会への参加を欠かすことなく、その勤めぶりもたいへん謹直であったという。出家の後、やがて日野に隠棲した長明は、随筆『方丈記』・歌論書『無名抄』・仏教説話『発心集』を著した。歌論書『無名抄』には、長明が俊恵から学んだ歌学的な事柄に加えて、自身の見聞を踏まえた和歌に関するさまざまな知識や理解のあり方など、歌学と歌論が広い範囲で記されている。

さて歌論書一般において、その執筆は客観的な立場から学術的に和歌を論じようとするものが多い。しかし

『無名抄』にあつては、長明の見聞や経験が語られていく中にあつて、自讃や回想といった長明の主観に関わる記事も数多く見られ⁽¹⁾、長明個人の視点と歌論が不可分な状態にあることが歌論書『無名抄』の一つの特徴となつている。本稿では『無名抄』の第二十七話について、従来の研究では見過ごされてきた解釈の問題点を指摘し、その事実の解明を試みるものであり、加えて第二十七話に見られる長明の執筆態度の特異性について論じるものである。

2. 『無名抄』第二十七話「貫之躬恒勝劣事」の内容

『無名抄』第二十七話は、『古今和歌集』当代歌人の中でも特に傑出した歌人とされる、貫之と躬恒の勝劣に関する話であり、長明はこれを和歌の師である俊恵からの伝聞として記述する。この話では、三条大相国（実行）と二条の帥（俊忠）⁽²⁾の間で、貫之と躬恒の歌人的優劣が論争になる。実行と俊忠はその判定を白河院に求めるが、白河院もこの問いに答えられず、白河院はこれを時の大歌人である源俊頼に尋ねるよう指示する。後日、答えを求める俊忠に対して俊頼が出した答えは、「みつねをば、なあなづらせ給そ（躬恒を、侮りなさいますな）」というものであつた。〈躬恒が勝る〉とするようなこの回答は、貫之の勝ちを主張する俊忠にとっては予想外であり、俊忠は改めて勝劣を問いたのだが、俊頼は「みつねをばあなづらせ給まじきぞ（躬恒を、侮りなざるべきでない）」として、同じように曖昧な答えを繰り返すだけであつた。これを聞いた俊忠は「おほしおほしことがら聞こえ侍りにたり。をのれが負けになりぬるにこそ（およそ、だいたいの事柄はわかりました。私が負けとなったに違いない）」

※口語訳の詳細は後述。」と語つて、論争の敗者になつたという話である。

従来の研究において、この第二十七話の内容に疑問が示されたことはない。俊頼が示した二つの回答は、何れも俊忠が理解するように（「躬恒が勝る」）この意味で解釈され、貫之優位を主張する側であった俊忠が論争の敗者となることで、文章全体の整合性にも問題はないとされてきた。しかし、二者択一の結論を、俊頼はなぜ曖昧な答えで語るのだろうか。また更には、勝劣を問いたただす俊忠に対して、俊頼はなぜ同じように曖昧な答えを繰り返すのだろうか。勝劣を明確にしない俊頼の言動に不審を指摘し、その理由を説明する先行研究はなく、第二十七話の解釈は、幾つかの疑問と文脈の不自然さを見過ごすことで、理解を曖昧にしたまま進められてきたものと言える。

本稿における考察を進めるにあたって、まずは第二十七話の内容を詳細に確認しながら、そこに潜在する問題点が何かを、具体的にすることから始めていきたい。以下に第二十七話の全文を引用する。第二十七話は、話の展開から全体を三つに区分することができる。【第一区分】は、貫之と躬恒の優劣をめぐって、その決着が俊頼に委ねられるまでの経緯を記した部分。続く【第二区分】は、貫之と躬恒の優劣をめぐる俊忠と俊頼の対話部分。そして【第三区分】は、第二十七話の語り手である俊恵の言説が記された部分である。以下に、第二十七話を使宜的にこの三つに区分した状態で引用する。（傍線は稿者による）

◎ 『無名抄』 第二十七話「貫之躬恒勝劣事」

（『鴨長明全集』 貴重本刊行会 二〇〇〇・五 底本・東京国立博物館蔵本）

【第一区分】

俊恵法師語云、三条の大相国ひゐの別当ときこえけるとき、二条の帥とふたりの人、みつね、つらゆきが

をとりまさを論ぜられけり。かたみにさまさまのことばをつくしてあらそはれけれど、さらに事きるべくもあらざりければ、帥いぶかしくおもひて、御気色とりて勝劣きらんとて、白河院に御気色給はる。仰云、われはいかでかさだめむ。としよりなどにとへかしとおほせごとありければ、ともにそのびんをまたれけるほどに、二、三日ありて、俊頼まいりたりけり。

【第二区分】

帥このことをかたり出て、はじめあらそひせめしより、院の仰のおもむきまでかたられければ、俊頼ききて、たびたびうちうなづきて、みつねをば、なあなづらせ給そといふ。帥おもひのほかにおぼえて、されば、貫之がおとり侍か。ことをきり給べきなりとせめけれど、なをなをただをなじやうに、みつねをばあなづらせ給まじきぞといひければ、おほしおほし※2ことがらきこえ侍にたり。をのれがまけになりぬるにこそとて、からきことにせられけり。

【第三区分】

まことに、みつねがよみくちふかく、おもひいれたる方は、又たぐひなき物なりとぞ。

第二十七話の内容を確認していく。まず勝劣の比較対象になる貫之3と躬恒は、共に『古今和歌集』（総歌数一一一首）の撰者として知られる。貫之の『古今和歌集』入集歌数は集中第一位の一〇二首。対する躬恒は『古今和歌集』入集六〇首にして、貫之に次ぐところの集中第二位。貫之と躬恒は、『古今和歌集』の双壁とされる歌人であった。特に貫之は、『古今和歌集』の仮名序を記した人物としても有名である。次に、この出来事の登場人物としては、俊忠・実行・白河院・俊頼の四人。このうち、第二区分にて勝劣の応答を行う俊忠と俊頼の

二人についていえば、御子左家歌人である俊忠は『千載和歌集』撰者として著名な俊成の父であり、一方の俊頼は、白河院の院宣により『金葉和歌集』を奏覧した人物である。また語り手の俊恵、記述者の長明も、第二十七話を理解する上で極めて重要な存在になる。従って第二十七話で考慮すべき人物は、都合八人である。なお勝劣の判定をめぐって、この出来事の最も中心の立場にいる俊頼は、第二十七話の語り手俊恵の父であった。また後述するように、俊頼の言動が意味することの真実を、俊恵に伝えることができたのも俊頼だけである。すなわち第二十七話は、俊頼の経験談として、俊頼から俊恵に直接伝えられた話であり、この出来事の様子を正確に記録したものであったと考えられる。この俊頼・俊恵・長明へと続く、情報伝達の様子も考慮しながら、以下に第二十七話を詳しく検証していくことにする。

まず第一区分では、実行と俊忠が、貫之・躬恒の優劣をめぐって論争となる。その判定は、白河院の指示により、俊頼へと委ねられる。この経緯が俊忠から俊頼に伝えられる様子は、第二区分の冒頭に、「帥このことをかたり出て、はじめあらそひそめしより、院の仰のおもむきまでかたられければ」として明記されている。

続く第二区分は、俊忠と俊頼の対話部分である。貫之と躬恒の優劣が問われた時の様子を、語り手の俊恵（記述者の長明）は、「俊頼ききて、たびたびうちうなづきて」と語る。俊忠の質問を受けた俊頼が深く感心している様が、接頭語を伴って強調される「うちうなづく」という動作と、これを修飾する「たびたび」の語でもって表現されている。この細かな俊頼の描写も、第二十七話の語り手が俊恵であればこそ、これが俊頼からの伝聞に基づく史実の反映であると思ないうるであろう。そしてこの感慨の上になつて俊頼が出した答えは、「みつねをば、なあなづらせ給そ（躬恒を侮りなさいますな）」という、勝劣の結果を曖昧にするような答えであった。これを「躬恒が勝る」と解釈した俊忠は、この答えを「おもひのほか」として、「されば、貫之がおとり侍か。ことをき

り給べきなり（それならば、貫之が劣っているのですか。決着をおつけになるべきです）」として、俊頼に改めて結論を問いただす。この記述から、俊忠が貫之の優位を主張する側であったことがここで示されているのであるが、俊頼の二度目の答えは、初めと同じように「みつねをばあなづらせ給まじきぞ（躬恒を侮りなさるべきでない）」と答えを曖昧に語るものであった。①俊頼の答えは何を意味しているのか。②俊頼はなぜ同じような答えを繰り返すのか。ここに潜在する二つの疑問に説明が無いまま、俊忠が「おほしおほしことがらきこえ侍にたり。をのれがまけになりぬるにこそ（およそ、だいたいの事柄はわかりました。私が負けとなったに違いない）」と語り、俊忠が負けとなった結末が示される。

そして第三区分では、語り手俊忠によって「まことに、みつねがよみくちふかく、おもひいれたる方は、又たぐひなき物なり」という躬恒称賛が語られる。ここでの冒頭部分「まことに」については、二通りの解釈が可能である。すなわち第一は、俊忠と俊頼の対話（第二区分）を総括する発語として、「（躬恒が勝るといふ決着のとおり、まことに）」の意味で理解される。〈躬恒が勝る〉という決着を踏まえて、文脈の流れを意識して読むのであれば、この解釈が強く意識されることになる。従来の解釈はこの第一の解釈である。⁽⁴⁾ また第二の解釈としては、俊頼の言説（＝躬恒を侮ることの禁止、および不適當）に対する賛同として、「（俊頼が侮れぬと言った裁定のとおり、まことに）」の意味で理解できる。もし第二の意味で解釈するならば、この躬恒称賛は俊頼に対する賛同としての発言であり、勝劣や俊忠の言動には直接関与していないことになる。

3. 第二十七話の文意が把握しにくい原因と該当部分の詳細

第二十七話の理解を困難にしている原因が、文章中に潜在する二つの疑問に関わる様子を確認してきた。すなわち、①俊頼の答えは何を意味しているのか、②俊頼はなぜ同じような答えを繰り返すのか、という二つの疑問である。また更に言えば、これら二つの疑問の前提にある違和感として、③二者択一の答えをなぜ俊頼は曖昧な言葉で語るのか、という単純ではあるが、実は極めて重要な疑問が潜在していることも見逃してはなるまい。ここでは、①②の疑問に焦点を当てながら、文章中の該当部分を詳しく検証してみたい。

① 俊頼の答え（初答・再答）についての文法的解釈。

みつねをば、な | あなづらせ給 | そ | (初答)

みつねをば | あなづらせ給 | まじきぞ | (再答)

俊頼の回答は共に、動詞〈侮る〉に、尊敬を意味する〈す〉〈給ふ〉の語が付属したものである。違いとしては、初答では、「あなづらせ給」を前後して、副詞「な」と終助詞「そ」が呼応し、〈侮りなさいますな〉という禁止の意味になるのに対して、再答では、「あなづらせ給」の後に、不適当を意味する助動詞「まじき」に、強意の助詞「ぞ」が接続して、〈侮りなさるべきでない〉の意味になっている。つまり俊頼の回答は、〈躬恒を侮ること〉の禁止または不適当であり、厳密な意味の違いはあるにせよ、二つの回答に実質的な違いは無いと考えられる。これは記述者の長明（＝語り手の俊恵）が二度目の答えを、「なをなをただをなじやうに」と記していることから首肯されよう。つまり記述者（語り手）の意識として、〈俊頼は同様の答えを繰り返した〉という認識であると考えられる。

②俊頼が同じ答えを繰り返すことについて。

記述者の長明（＝長明は語り手の俊恵と同一の視点でこれを記述している）は、俊頼の二度目の答えを「なをなをた^{※1}だをなじやうに（東京国立博物館蔵本）」と表現する。俊頼はなぜ同じように答えを繰り返したのであるか。そしてこの第二十七話の従来の読み手は、俊頼の言動をどのように解釈してきたのだろうか。この疑問を考える参考として、この箇所が生じている諸本の異同に注目してみたい。以下に主要伝本における※1部分の異同を示す。なお木下華子『鴨長明研究 表現の基層へ』⁽⁵⁾を参考に、木下氏が調査対象にした主要伝本一四本と重なるものには、木下氏が示す系統分類の区分を併せて示す。

校異※1「猶猶唯」（諸本における漢字・仮名遣いの差異は考慮しない）

- | | | | |
|------|----------------|-----|-----------------------|
| ①猶猶唯 | （東京国立博物館蔵本） | 鎌倉 | 第一類 |
| | （黒川本雅親筆） | 室町 | 第一類 |
| ②猶唯 | （天理呉氏旧蔵） | 鎌倉後 | 第二類 |
| | （東京大学付属図書館本阿波） | 江戸 | 第三類第一群 |
| ③猶 | （築瀬本応永一五年写） | 室町 | |
| | （書陵部蔵本松岡本） | | 第三類第二群 |
| | （山口県立図書館蔵本） | | 第三類第二群 ⁽⁶⁾ |
| ④唯 | （天理本応安四年写） | 室町初 | 第三類第三群 |
| | （蓬左文庫蔵本永正一三年写） | 室町後 | 第三類第三群 |
| | （静嘉堂文庫蔵本） | 江戸 | 第三類第三群 |

(内閣文庫蔵本)

江戸 第三類第三群

(書陵部蔵本齋藤本)

江戸

(群書類従本)

江戸

諸本何れも、副詞の「猶」あるいは「唯」が「同じやうに」を修飾している。「猶」は状態が〈引き続いてる様子〉を表す副詞で、一方の「唯」は〈他のものではないこと〉を表す副詞である。これらの副詞が「同じやうに」を修飾することで、再答が初答と「同じやう」であったことを強調するのであるが、その度合いは、第一類や第二類に見られるように、書写年代が古く、古態に近づくほどに強くなる傾向を示している。すなわち長明執筆時の状態は、おそらくは第一類の表記でもって、「同じやうに」を「猶／猶／唯」と殊更に強調して記されていたと推察される。つまり長明の執筆意識は、答えが「同じやうに」語られたことを極めて強く意識しているのであり、この〈同じような答え〉こそが正しく俊頼の回答であったことを記述している。しかし一方で長明(形式的には語り手の俊恵)は、答えが同じように繰り返されたことの理由を記そうとしない。そのため後の書写者らは、答えが同じように繰り返されることに意義が見いだせず、長明がこれを強調することの意図が掴めないのである。その結果、この強調が不審な表現として意識され、加えてこの表記に衍字としての危惧が働くことで、やがて強調の度合いが低くなるかたちで異同が生じていったと考えられる。⁽¹⁾

なお俊頼の再答が「なをなをただをなじやうに」なされたことを受けて語られる、俊忠の言説「おほしおほし」とがらきこえ侍にたり」にも諸本で異同が生じている。俊頼の言動に対する不審は文脈の理解を不確かなものにしており、俊忠の言説の理解をも難しくしている。

※2

校異※2 「おほしおほし」（諸本における漢字・仮名遣いの差異は考慮しない）

- | | | | |
|---------|----------------|-----|--------|
| ①おほしおほし | （東京国立博物館蔵本） | 鎌倉 | 第一類 |
| | （黒川本雅親筆） | 室町 | 第一類 |
| | （天理本応安四年写） | 室町初 | 第三類第三群 |
| | （東京大学付属図書館本阿波） | 江戸 | 第三類第一群 |
| ②おほかた | （天理呉氏旧蔵） | 鎌倉後 | 第二類 |
| ③おほやう | （築瀬本応永一五年写） | 室町 | |
| | （書陵部蔵本松岡本） | | 第三類第二群 |
| | （山口県立図書館蔵本） | | 第三類第二群 |
| | （内閣文庫蔵本） | 江戸 | 第三類第三群 |
| | （群書類従本） | 江戸 | |
| ④おなじ | （蓬左文庫蔵本永正一三年写） | 室町後 | 第三類第三群 |
| | （静嘉堂文庫蔵本） | 江戸 | 第三類第三群 |
| | （書陵部蔵本斎藤本） | 江戸 | |

おほし【凡】副 およそ、だいたい。漢文では発語といわれるもの。女流和文体にはほとんど見られない訓読語である。「(博士ノコトバ)おほし、かいもとのあるじ、甚だ非常に侍りたうぶ」〔源氏・乙女〕【角

川古語大辞典 角川書店 一九八二・六】

校異※1と同様、ここでも古写本の系統とされる第一類の伝本に表記の特異性が認められる。第一類の表記①「おほしおほし」は、このままの状態では意味が掴みにくく、衍字を疑わせる不審な表記になっている。この第一類本と表記を同じくするのは、室町初期応安四年（一三七一年）の写本である天理本応安四年写と、第一類になり近い本文であることが既に指摘される第三類第一群の東京大学付属図書館本阿波である。この「おほしおほし」が、特に古い伝本を中心とする表記である点に着目すれば、これが特に古い時代の表記の一つであることが推測される。

さて、第一類型の①「おほしおほし」が古い状態の形跡をとどめるとしても、この表現の類例を、他の文献に求めることは難しい。あえてこのままの状態で解釈するならば、副詞の「おほし」【凡】が繰り返されて強調されたものと考えるべきであろうか。俊忠の言説としては、仮に「凡おほしおほし凡事柄聞こえ侍りにたりへおよそ、だいたいの事柄はわかりました」の意味として考えておきたい。俊忠の理解が十分なものではなく、「だいたい」の状態であることを強く表したもののか。なお「おほしおほし」という表記が不審であることから、これに衍字としての危惧が働くことは、校異※1の①と同様である。そして次に、②「おほかた」③「おほやう」については、①の副詞「おほし」と意味がほぼ同じである。意味・表音の類似から副詞「おほし」との関連が窺われる。④「おなじ」については、室町後期から江戸の伝本に見られる表記であり、「なをなをただをなじやうに」という前文との整合性が意識された結果の表記と考えるべきであろうか。俊忠の言説としては、〈同じ事柄に聞こえます〉の意味となる。

第二十七話における※1と※2の異同は、俊頼が答えを同じように語ることの意図を、後の書写者らが理解を困難にしており、文意の理解が不安定であることが影響していると推測される。そして「おほしおほし」の言葉

に示されているように、実は作中に登場する俊忠もまた、後の書写者らと同じような状態にあり、俊頼が答えを繰り返すことの意図を曖昧に理解しているのである。

さて、これまで『無名抄』第二十七話の内容を詳細に確認してきた。この第二十七話は、『無名抄』内部の配列構成として、六条源家歌人の俊頼を称賛する文脈でもって語られた話である。⁽⁸⁾しかし従来の解釈に従うならば、ここに描きだされる俊頼像は、歌仙二人の勝劣を問われながら、その根拠を示すでもなく、曖昧な言葉で〈躬恒が勝っている〉とただ繰り返すだけの存在でしかない。この話における長明の執筆意図は何なのであるか。

4. 貫之と躬恒の勝劣。第二十七話の再考。

これまで第二十七話の解釈をめぐって、その問題点が何かを明らかにしてきた。以下に、これらの問題点全てを視野にいれながら、第二十七話の解釈について再考する。まずは、第二十七話で最も重要となる、貫之と躬恒の勝劣の問題から考えていきたい。俊頼は歌仙二人の勝劣について、果たしていかなる見解を示していたのだろうか。従来までの解釈からいったん離れ、勝劣の問題についてここで改めて考えてみたい。

この問題を考える上で重要なこととして、特に次の三つの点が注目される。まず第一には、その様子が「たび・打・う・な・づ・き」と描写されているように、俊頼がこの問いに深い感銘を受けていた点である。この質問に、俊頼はなぜそれほど強い感銘を受けたのであろうか。そして第二に、俊頼はなぜ二者択一の選択に、曖昧な答えを語るのであらうか。また第三として、俊忠が改めて勝劣の確認を求めたのに対し、なぜ俊頼は明確な答えを示そ

うとせず、再び曖昧な答えを語ったのであろうか。

まずこの俊頼の感銘が何に起因するかを考えるならば、それは俊忠からの質問が、『古今和歌集』当代歌人の双壁とされる〈貫之と躬恒〉の優劣を問うものであったから、と考えて良いであろう。この『古今和歌集』を表する二人の優劣が問われた時、俊頼が当然意識したであろうことの中には、『古今和歌集』序の中で語られる二人の歌仙の比較、すなわち『万葉集』最大の歌人であるところの、〈人麻呂と赤人〉の優劣論があつたことも推測は容易である。

『古今和歌集』 仮名序 「万葉集の賛美」

(新日本古典文学大系『古今和歌集』 岩波書店 一九八九・二)

古より、かく伝はる内にも、平城の御時よりぞ、広まりにける。

かの御代や、歌の心を、知ろし召したりけむ。

かの御時に、正三位、柿本人麿なむ、歌の聖なりける。

これは、君も人も、身を合せたりと言ふなるべし。

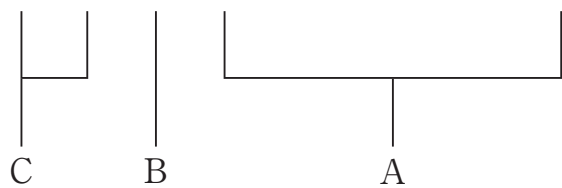
秋の夕べ、竜田河に流る、紅葉をば、帝の御目に、錦と見給ひ、

春の朝、吉野山の桜は、人麿が心には、雲かとのみなむ覚えける。

又、山の辺の赤人と言ふ人有りけり。歌に奇しく、妙なりけり。

人麿は、赤人が上に立たむ事難く、

赤人は、人麿が下に立たむ事難くなむ、ありける。



『古今和歌集』仮名序における『万葉集』賛美の記述では、平城天皇以降の御代を壽ぎながら、和歌による君臣一体の礼賛として歌聖柿本人麻呂を称え（＝A部）、またこれに付して、「歌に奇しく妙」なる者として赤人を挙げる（＝B）。そしてこの両者を双壁として並べる記述「人麿は、赤人が上に立たむ事難く、赤人は、人麿が下に立たむ事難く」（＝C部）では、上下関係を敢えて不明瞭にすることで、『万葉集』最大の歌人である両者に優劣を定めるべきではないとする立場を示す。⁽⁹⁾

さて問題となる『無名抄』第二十七話に立ち返れば、歌仙二人の勝劣について、俊頼はこの『古今和歌集』仮名序のロジックを意識しながら、俊忠に答えを返していると推察される。すなわち俊頼の回答は、『古今和歌集』仮名序と同じように、上下関係を敢えて不明瞭に語っているのであり、対照させて俊頼の回答を解釈すれば、〈貫之と躬恒は『古今和歌集』の双壁と言ふべき最も尊敬すべき歌人であり、このような歌仙二人に上下を定めるべきではない〉という解釈になる。俊頼の回答が、初答「躬恒をばな侮り給ひそ」〈下位の禁止〉、再答「躬恒をば侮らせ給ふまじきぞ」〈下位の不適當〉であることに注目するならば、俊頼の回答は、仮名序の「赤人は人麿が下に立たむ事難くなむありける」に準えた答えになっており、躬恒を赤人の立場に置きながら答えを示していたことになる。俊頼は、歌人なら誰もが知っている『古今和歌集』仮名序の優劣論をもとに、機知に富んだ方法でもって、その根拠も含めて、勝劣への見解を見事に示していたのである。

この俊頼の回答が意味することを踏まえ、第二十七話を改めて解釈するならば、これまでは不審に見えていた俊頼の言動の意図が全て明らかになる。すなわち、俊頼がなぜ二者択一の答えを曖昧に語るのかといえば、それはこの曖昧な答えこそが、〈上下を定めるべきではない〉とする俊頼の見解を、正しく語るものだったからである。この俊頼の回答の意図を理解できず、〈躬恒が上〉の意味に誤解したのが俊忠であった。⁽¹⁰⁾ 回答を聞いた俊忠

は「されば貫之が劣り侍るか。事をきり給ふべきなり」と俊頼に要求する。皮肉にもこの俊忠の要求は、〈上下を定めるべきでない〉と判じる俊頼に、改めて勝劣を求めるという矛盾する問いかけであった。論理的必然として、俊頼は俊忠が求めるような決着には応じられるはずがないのであり、初答と同じように答えを示すことで、〈歌仙二人に上下を定めるべきではない〉とする裁定の結果を改めて示したのである。筆者の長明が「なほなほただ同じやうに（第一類本）」として、〈同じ〉であることを殊更に強調していたのは、この同じような答えの繰り返しには重要な意味があり、これが俊頼の意図を表すものであることを示唆していたのである。後の『無名抄』書写者らが、この強調の意図を掴めていない様子は先に記したとおりである。

結局、俊頼の言葉を最後まで理解できなかった俊忠の言動を、長明（俊恵）は「おほしおほしことがらきこえ侍にたり。をのれがまけになりぬるにこそとて、からきことにせられけり」と記述している。ここで注意しなければならぬのは、勝劣の最終的決着を語っているのが、裁定者の俊頼ではなく、質問する側であるはずの俊忠であったという事実である。俊忠が論争の敗者となったのは、実は俊忠の思い込みによる自身の判断であること、ここでも長明は正しく記述しているのである。したがって第三区分で俊恵が語る躬恒称賛は、〈躬恒が勝る〉という勝劣の結果として語られているのではなく、〈躬恒を侮つてはならない〉とする俊頼への賛同として語られていることになる。

さて本稿では先に、『無名抄』が当時の状況を正確に記録したものであることを指摘した。この話の中で、一見して不審にも見える俊頼の言動には、全てに合理的な理由があり、歌仙二人の勝劣についても、その根拠を含めて見事に答えが示されていたのである。一方、俊頼の答えを理解できず、最後まで誤解したままであったのが俊忠であった。そしてこの俊忠が誤解をしている様子さえ、長明はこれを正しく記録しているのである。

5. 第二十七話における長明の執筆態度

これまで俊頼の言動に焦点を当てながら、第二十七話を検証してきた。従来までの解釈は、俊頼の二度にわたる回答を、俊忠の言説によって理解し、これを基点にして第二十七話全体を解釈するものであった。すなわちそれは、俊忠の理解でもってこの出来事を見ていくことであり、俊忠の理解を追体験するようにしてこの話を解釈していたことになる。しかしこの俊忠の理解では俊頼の言動の意味を把握できず、俊忠の視点から見える俊頼の人物像は、勝劣の問い掛けに何ら根拠を示すでもなく、最後までただ曖昧な答えを繰り返すだけの凡庸な存在であった。一方、本稿考察にて再考する解釈は、俊頼の回答を歌学に基づいて理解するものであり、俊頼の見解のもとに第二十七話全体を解釈するものである。この解釈は、裁定者たる俊頼の賢明さを明らかにし、己の勘違いに最後まで気がつかない俊忠の迂闊さを照らし出すことになる。つまりこの第二十七話には、まるで〈だまし絵〉のように二つの解釈が存在するのであり、一方は従来の解釈である俊忠視点からの解釈であり、又もう一方は、俊頼の見解を明らかにすることで見えてくる俊頼視点の解釈である。

さて、ここで問題となるのは、やはり長明の執筆態度であろう。第二十七話における長明は、記録者という立場に自己を限定しながら、文章中に自身の見解を記さない⁽¹⁾。更に言えば【第一区分】【第二区分】において、俊頼・俊忠もまた勝劣に関わる解説や補足を語らない。このように出来事の様子が客観的に語られていく中で、文章中に示されている俊忠の理解が、文章を読み解く手掛かりとして意識され、読み手がこれに同調し、誘導されるのは当然である。しかも【第三区分】には、あたかも裁定の結果が躬恒の勝ちであったかのように、俊忠による躬恒称賛が語られていくのであり、読み手は文脈の整合性を意識することで、勝劣の結果が躬恒の勝ちであつ

たものと錯覚することになる。しかし実際には、この俊恵の言説でさえ、だまし絵のように別の意味合いで語られていることは、先に記したとおりである。つまりこの話は、俊頼の回答を勘違いした俊忠の様子を、俊忠の視点に寄り添って描いた文章であり、加えて筆者は読み手の意識をこの俊忠の側へと巧みに導いているのである。そして俊忠自身が勘違いに気付いていないように、俊忠と理解を同じくする読み手もその勘違いに気が付かないのである。

それではこの第二十七話において、長明をこのような執筆態度へと導くものは何だったのであろうか。次にこの点について考えてみたい。この第二十七話は、父・俊頼の経験を、その息である俊恵が語ったものである。ここで俊頼が俊恵に伝えたであろう第二十七話原態を想像するならば、それは【第一区分（俊忠からの情報）】と【第二区分（俊頼自身の経験）】を併せて語るものであつたらう。そしてこの第二十七話原態の主題は、貫之・躬恒という歌仙二人の優劣論と、俊忠との会話の齟齬であつたと想像される。俊忠に対し、当意即妙の機知を試すかのようにして裁定を下した俊頼であれば、この俊恵との対話も、俊恵の力量を試すようにして、勝劣の真意を伏せて語られたのかもしれない。この俊頼の経験談は、後に第二十七話の内容でもって、俊恵から長明へと語り継がれたのであり、⁽¹²⁾長明はこれに、【第三区分（俊恵の言説）】を加えて現在の第二十七話にしたのである。このような成立過程の推測が許されるならば、長明の執筆態度は、俊頼・俊恵から受け継ぐものも大きかったと推測される。長明は、貫之と躬恒の勝劣をめぐるこのだまし絵のような話を、歌学的興味でもって、世に伝えようとしたのであろう。『無名抄』は歌道随筆としての性格を強くする歌論書であると言われる。その執筆態度は、この第二十七話に垣間見ることができるよう、学術書としての歌学や歌論に限定されず、長明自身の歌学的興味でもって、歌学と歌論を記述していこうとする態度なのである。

また、この第二十七話の執筆の動機については、『無名抄』内部の構成からも検討が必要であろう。この第二十七話は、和歌旧跡の所在地情報を列挙する話群【十八話～二十六話】に続くものであり、また俊頼称賛と基俊軽視を語る話群【二十七話～三十四話】の最初の章段でもある。和歌旧跡の話群は、各話が並立の関係で並びながら、それぞれに和歌旧跡の地理情報が記されている。その最末話にあたる第二十六話は、歌聖柿本人麻呂の墓を記事にしたものである。この人麻呂の記事は、続く第二十七話における〈人麻呂と赤人〉の優劣論を導き出す連想の手助けとしてここに配されたものと考えられる。それでは第二十七話に続く、俊頼称賛と基俊軽視を語る話群との関係はどうか。そもそも第二十七話は、貫之と躬恒という好一对の歌人の優劣論を述べたものである。『無名抄』には、好一对の歌人を比較する話群【第六十四話～第七十話】が別に存在しており、本来あるべき好一对の話群を外れて、第二十七話がここに単独で置かれていることの意味は重要である。俊頼・基俊の話群【第二十七話～第三十四話】では、六条源家の俊頼を称賛し、御子左家俊成の和歌的系譜（父俊忠・師基俊）の軽視が語られている。⁽¹³⁾ 六条源家の称賛と、御子左家俊成への否定的態度は、歌論書『無名抄』の主題に大きく関わるものである。⁽¹⁴⁾ 第二十七話に描かれる内容は、俊頼の賢明さを明らかにし、俊忠の迂闊さを対照的に描き出すものであった。すなわち俊頼称賛と俊忠軽視がこの話の主題として意識されることで、第二十七話は好一对の話群を外れ、ここに配されたのだと考えられる。

6. おわりに

『無名抄』第二十七話には、貫之と躬恒の勝劣をめぐる出来事が、俊頼の経験をもとに記されていた。この出

来事の中で、俊忠は俊頼が出した回答の意図を誤解し、結局自分の勘違いに気付かぬまま、自身を論争の敗者にしたのである。この出来事は、後に俊頼から俊恵に伝えられ、やがて俊恵から長明へと伝えられることになる。『無名抄』はこの出来事を、俊忠の目線に寄り添って記述しており、読み手は俊忠と理解を同じにすることで、俊忠と同じようにこの勘違いに気付かないのである。長明はこの出来事を、だまし絵のように記述しており、もし俊頼の見解を正しく理解して読むならば、そこには俊忠の理解とは全く別の状況が現れてくることになる。

そして最後に、歌論書『無名抄』の文学的評価についてもここで言及しておきたい。『無名抄』の歌論書としての評価は高いとは言えない。これは『無名抄』全体の問題として、歌論書としての執筆意図が掴みにくいことが大きな原因となっている。稿者はこの『無名抄』が、六条源家への尊崇の意識に根ざしつつ、歌論書としての構成と執筆意図を備えた書であることを指摘した⁽¹⁵⁾。しかし、章段個々の問題としても、『無名抄』はその文学的価値が再評価されるべき作品である。第二十七話を例にするならば、従来の評価においてこの章段は、白河院周辺のと歌交流の様子や、俊頼や俊恵が躬恒を高く評価していたということの資料になるほかは、特に注目すべき点の無い話として理解されてきた。しかし第二十七話が、貫之と躬恒の優劣論を歌学として論じる話であり、俊頼による『古今集』仮名序の理解の様子や、俊頼と俊忠の和歌問答の様子など、歌論書としての極めて高い価値を有する書であること確認してきた。そしてこの第二十七話で最も評価されるべきは、鴨長明の文筆力である。この短い文章の中で、俊頼と俊忠の対話を忠実に再現しながら、読み手の意識を巧みに誘導し、俊忠の視点で状況を再現しつつ、またその一方では俊頼の真意を踏まえた別視点での解釈すら可能にして、文章を記述してみせるのである。この第二十七話には、長明の文章力が高すぎることに、逆に後の読み手がこれを理解できないという、皮肉な現象さえ生じている。歌論書『無名抄』の価値を適正に評価すべく、個々の章段それぞれに対し

でも、改めて詳細な調査が必要になると考えられる。

〔注〕

(1) 『無名抄』の執筆に長明の主観が強く反映している様子については、松村雄二氏「『無名抄』の〈私〉性」(共立女子短期大学紀要 第一九号 一九七五・一二)に詳しい。松村氏は『無名抄』に対し、「世に容れられた追憶の書」「自讃の書」としての性格を指摘する。

(2) 「二条の帥」については、俊忠と解釈するのが通説であるが、これを長実と解釈する説も一部にある。第二十七話の語り手俊恵の父にして、またこの出来事を俊恵に伝えた人物と推測される俊頼の家集『散木奇歌集』には、「二条帥俊忠」の記述が見られることから、ここは通説どおり俊忠として解釈すべきであろう。

(3) 俊頼の歌論書『俊頼髓脳』には、貫之の和歌がその功德によって神を慰めたとする〈蟻通明神説話〉が記されている。この話では、神霊の存在たる蟻通明神の託宣によって、貫之が「和歌の道極めたる人」であることが語られる。蟻通明神説話は、『枕草子』・『大鏡』・『袋草紙』などにも収録。また清輔『袋草紙』には、公任と具平親王が、貫之と人麻呂の優劣を争う話を見ることが出来る。平安中期以降、貫之が人麻呂に比肩する歌人として評価されていたことがわかる。

(4) 第二十七話の解釈の参考として、築瀬一雄『無名抄全講』(加藤中道館 一九八〇・五)から、第二十七話の【評説】を一部抜粋にて示す。

歌人評であるが、直接に評論するやり方ではなくて、劇的構成をとって、いかにも印象的に表現している点が面白い。躬恒や貫之は、中世の歌人からは仰ぎ見るべき存在であり、しかも、それぞれの好みによって、優劣の評価がなされる訳であるが、(——中略——)「躬恒が読みくち、深く思ひいれたるかたハ、又たぐひなき物なり」と俊恵がいったという、結論だけを取りあげるのと、この話を全体として見る場合とをくらべると、その結論に至るまでのコースがいかに大切であるかがわかる。この面白さが、『無名抄』の随筆性の一つの特色である。

築瀬氏は、【第一区分】【第二区分】での歌人評が、劇的構成をとって展開する、それぞれの好みによる印象批評であるのに対し、【第三区分】における俊恵の言説が、結論だけを示したものであると指摘する。【第三区分】の言説が、【第一区分】【第二区分】の結論として語られていることを示しながら、両者における評論の質的な相違を指摘する。優劣論

の理解としては、俊頼・俊恵共に躬恒を勝れていると評価していた、という解釈である。

また高橋和彦『無名抄全解』（双文社出版 一九八七・二）の第二十七話の語注「類なき者なり」では、「俊恵が躬恒をほめた言葉である。このことから俊恵も躬恒を勝れていると考えていると受けとってよかろう」と注解する。築瀬氏同様、俊頼・俊恵共に躬恒を勝れていると考えていた、と解釈する。

先行研究において、俊頼の回答を（躬恒が勝れている）とすること以外で解釈したものは見当たらない。また俊恵の言説についても特に注視されることはなく、躬恒を高く評価していたものとして解されている。

(5) 木下華子『鴨長明研究 表現の基層へ』（勉誠出版 二〇一五・三）第一部『無名抄』第三章「伝本研究」では、主要伝本一四本を系統分類し、古写本の系統を第一類・第二類として、混淆態の本文を持つ伝本を第三類に分類する。第一類本に第二類本よりも強い古態性を認め、混淆態の本文をもつ第三類のうち、第一群に第一類本からの踏襲を指摘する。

(6) ③「猶」の表記を記す築瀬本・書陵部蔵本松岡本・山口県立図書館蔵本が、何れも弘安・正応年間奥書を有する本であり、一つの系統をなすことは、木下華子「伝本研究」〔注(5)前掲書〕に指摘されるところである。また木下氏は、書陵部蔵本松岡本・山口県立図書館蔵本の調査結果として、何れも増補系の伝本であり古態性に劣ることを指摘する。

(7) 木下華子「伝本研究」〔注(5)前掲書〕は、書写の段階で長明の執筆意図が見失われ、「書写者が文意を取れずに迷っている」ことで異同が生じていったであろう例として、第七十一話「近代歌体」に見られる「意こ」（第一類本のみ。二類・三類本は「こ、ろ」「心」「意々」「イロ」「いこ」など）の例を挙げ、第一類の古態性を示す根拠の一つとしている。

(8) 第二十七話から第三十四話までの話が、六条源家歌人の俊頼を称賛する意図をもって記された話群であることは、茅原雅之『無名抄』における〈六条源家〉尊崇の意識——『無名抄』の構成と執筆意図について——（語文 第六百六十四輯 二〇一九・六）にて詳述した。

(9) 片桐洋一『古今和歌集全評釈（上）』（講談社 一九九八・二）〈人麻呂は赤人の上に立つこと困難〉〈赤人は人麻呂の下に立つこと困難〉とするこの文（C部）について片桐氏は、〈人麻呂は赤人と同等か下〉〈赤人は人麻呂と同等か上〉ということになり、これを論理的に見れば人麻呂が赤人より低い評価になることを指摘する。しかし文章全体（ABC）の流れからこのようなことは有り得るはずがないことを指摘し、少なくとも両者同等と見るべきであろうと論じる。なお俊頼個人がC部をどのように解釈していたのかという問題については、また別の検証が必要になるであろう。

(10) 『古今和歌集』仮名序「赤人は、人麿が下に立たむ事難くなむありける」を論理的に解釈すれば、赤人は人麻呂と同等か上になる〔注(9)前掲書〕。同じ理由で、「みつねをば、なあなづらせ給そ」「みつねをばあなづらせ給まじきぞ」と

いう〈下位の禁止や不適當〉も、論理的には躬恒が貫之より上になる。俊忠の解釈は論理的解釈として見れば正しい。

(11) 第二十七話は、俊恵からの伝聞に、俊恵言説を書き加えるという構成になっている。執筆にあたっては、長明による情報の編集が行われており、第三区分の俊恵言説も、長明の編集意図によって書き加えられた情報である。長明は第二十七話の執筆者とすべき存在であるが、俊恵の伝聞を語ることで、長明は自身が第三者の記録者であるかのように振る舞う。『無名抄』における長明が、ときに〈事実の伝達者〉を装うことは、松村雄二「『無名抄』の〈私〉性」〔注(1)前掲書〕が既に指摘するところであり、稿者「『無名抄』における〈六条源家〉尊崇の意識——『無名抄』の構成と執筆意図について——」〔注(8)前掲書〕にもこれを詳述した。

(12) 第二十七話冒頭「俊恵法師語云」を信じるのであれば、【第一区分】【第二区分】は、記憶をたよりに俊恵の言説を記したものである。俊頼の真意を伏せたこの文章は、長明を試す目的で語られていたことになる。なお俊恵が長明の力量を問うべく質問を問い掛ける場面は、第四十一話「歌の半臂句」にも見ることができるといえる。

(13) 茅原論文注(8)前掲書。

(14) 茅原論文注(8)前掲書。

(15) 茅原論文注(8)前掲書。

執筆者紹介（掲載順）

| | | | | | |
|-----|----|------------------|----|-----|-----------|
| 和田 | 万紀 | 日本大学教授 | 佐藤 | 英 | 日本大学准教授 |
| 諸坂 | 成利 | 日本大学教授 | 川本 | 隆 | 日本大学非常勤講師 |
| 種ヶ嶋 | 尚志 | 日本大学准教授(スポーツ科学部) | 萬 | 清華 | 日本大学非常勤講師 |
| 北村 | 勝朗 | 日本大学教授(理工学部) | 深田 | 喜八郎 | 日本大学非常勤講師 |
| 真道 | 杉 | 日本大学准教授 | 茅原 | 雅之 | 日本大学非常勤講師 |

『桜文論叢』 執筆要領

平成16年2月10日大宮校舎委員会決定

平成17年9月29日桜文論叢編集委員会改正

平成17年9月29日施行

平成19年7月 5日改正

平成19年7月 5日施行

平成22年7月 1日改正

平成22年7月 1日施行

平成25年5月30日改正

平成25年5月30日施行

- 1 原稿は未発表の完全原稿とし，提出締切日を厳守する。他誌に投稿中でないものに限る。また，審査の迅速化のため，原稿の要旨を添付する。翻訳原稿については，必ず原著者又は原出版社の許可を得てから提出することとし，許可の確認ができる文書等も添付する。
- 2 文章は原則として常用漢字，現代仮名遣いを用いる。学術上必要な場合は，その限りではない。
- 3 原稿は，原則として，Microsoft Wordで作成し，フォントは和文では「MS明朝」，欧文では「Times New Roman」を使用し，いずれも下部にページ番号を付すこととする。注は，原則として，「挿入」メニューの文末脚注機能を使用せず，すべて尾注とする。
- 4 原稿の提出は原則として，電子メールの添付ファイルで研究事務課（kenjimu.law@nihon-u.ac.jp宛）へ送付するとともに，印刷した原稿2部を同課へ提出する。

5 原稿の長さは、表題、氏名、本文、注、引用文献を含めた上で、和文の場合 20,000 字以内、欧文の場合 10,000 語以内とする（和文は「ツール」メニューの「文字カウント」で「スペースを含めない文字数」、欧文は「単語数」でカウントする）。なお、多少の超過はやむを得ないものとする。表題と氏名は、和文表記及び欧文表記を併記する。

6 要旨は和文 600～1,000 字程度、欧文 300～500 語程度とし、A4 版 1 枚に収めるものとする。

7 校正については、初校の際の加筆、訂正はやむを得ない場合に限るものとし、再校以後の加筆、訂正は避ける。

執筆者による校正は再校までとし、初校、再校ともに入手後 1 週間程度で返却する。再校返却の際は、タイトル頁に「校了（または責了）」と明記する。

8 文献の引用について

① 横書きの場合、本文の当該箇所の右上（行間）に括弧つきの算用数字で注記番号を付し、各章等の後に引用文献等を表示する。縦書きも同様とする。

② 表示については、著書の場合、著者名、書名『 』、発行年、頁等を示し、論文の場合は、執筆者名、論文名「 」、掲載誌名、巻・号、発行年、頁等を示すことを原則とする。

以 上

機関誌編集委員会

| | | | | | |
|------|-----|-----|----|----|-----|
| 委員長 | 大岡 | 聡 | 委員 | 横溝 | えりか |
| 副委員長 | 賀来 | 健輔 | 委員 | 渡辺 | 徳夫 |
| 副委員長 | 南 | 健悟 | 委員 | 石川 | 徳幸 |
| 委員 | 江島 | 泰子 | 委員 | 岡山 | 敬二 |
| 委員 | 大久保 | 拓也 | 委員 | 加藤 | 暁子 |
| 委員 | 小野 | 美典 | 委員 | 杉本 | 竜也 |
| 委員 | 加藤 | 雅之 | 委員 | 中野 | 未和 |
| 委員 | 児玉 | 直起 | 委員 | 野村 | 雪彦 |
| 委員 | 高畑 | 英一郎 | 委員 | 松島 | 和江 |
| 委員 | 友岡 | 史仁 | 委員 | 石崎 | 文武 |
| 委員 | 水戸 | 克典 | 委員 | 田村 | |

日本大学
創設130周年記念号

桜文論叢 第100巻（非売品）

令和元年9月27日発行

発行者 小田 司

発行所 日本大学法学部
機関誌編集委員会
東京都千代田区神田三崎町2-3-1
電話 03(5275)8510番

印刷所 株式会社メデイオ
東京都千代田区神田猿楽町2-1-14 A&Xビル

ŌMON RONSŌ

Vol. 100, September 2019

Commemorative Issue for the 130th Anniversary
of the Founding of the College of Law, Nihon University

CONTENTS

— ARTICLES —

- WADA Maki*, Time Perspective and Mental Health: The Meaning of the Enriched Present for the Flow of Time. 1
- MOROSAKA Shigetoshi*, An Intertextual Study of Section 32 of Walt Whitman's "Song of Myself" 23
- TANEGASHIMA Hisashi*, *KITAMURA Katsuro*, A Study on Competitiveness and Perfectionism in Adolescence 55
- SHINDO Sugi*, Überlegungen zum Gedanken vom Geborenssein in Ilse Aichingers *Spiegelgeschichte* und *Baby Chandler*
— Versuch einer Interpretation unter dem Gesichtspunkt der Termini Creator und creatura in Hannah Arendts *Der Liebesbegriff bei Augustin* — 73
- SATO Suguru*, Der Beginn des Zweiten Weltkriegs und sein Einfluss auf die Musikprogramme im deutschen Rundfunk 95
- KAWAMOTO Takashi*, Die Lutherrezeption Ludwig Feuerbachs
— Die Bedeutung seiner Gedankenwenden bis Mitte der 1840er Jahre — 123
- WAN Qinghua*, Linguistics Methodology 149
- FUKADA Kihachiro*, The Effects of Acute Strenuous Exercise on Abdominal Tissues
— Investigation of Changes in the Serum Enzyme Leaked from Tissues and Creatinine after Running at Full Speed for 12 Minutes — 191
- KAYAHARA Masayuki*, A Study of the Section 27 of Kamo no Chomei's *Mumyoshō*: The Truth of Superiority or Inferiority, and Stance of the Author 226